
薔薇のマリア
12.夜に乱雲花々乱れ
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


「マリアちゃん、ひざまずいてぇー
……目線あわせてぇー、
見つめあってぇー、
だめっ！ 目ぇーそらしちゃ！ 我慢！
はいっ！ いぃーよぉー！
腕、ユリカちゃんの首に回してぇー、
一気に！ 抱きよせちゃって！」
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
12.夜に乱雲花々乱れ


きみのことを嫌いじゃないって
思うだけで、こんなにつらいんだ。
好きだなんて、思えない。
たまに、一人きりのときに、きみのことを
思い浮かべる。
ふっと、思い浮かぶ。
ここにいるんだ。
僕の胸の中に。
もう、いるんだ。


ほとんど不意打ちのようなものだった。
琺瑠(フォール)が執務机に両手をついて、身を乗りだしてきた。
諜報と謀略の汚泥(おでい)に身を浸していながら、
その黒曜石のごとき瞳には迷いがない。
彼女は勁(つよ)いのだ。
常に己を律しなければ、真っ直ぐ進むことさえできぬ
ヨハン・サンライズとは違う。

薔薇のマリア

12．夜に乱雲花々乱れ

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 12
Flowers at Night
Ao Jyumonji

First published 2009 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

12

CONTENTS

CONTENTS

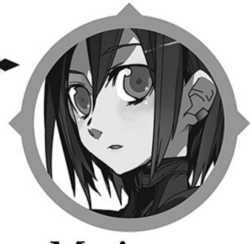
A BRAVE HEART OF REDROSE

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Lucy
ルーシー

ニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Fall
琺瑠（フォール）

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》の副長。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》の副長。



SIX?
シックス?

モデル。



Molly Lips
モリー・リップス

アサイラムの医術士。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K（シリアル・キラーズ）》の頭目。



Beatrice
ベアトリーチェ

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》に属していた。

and the others

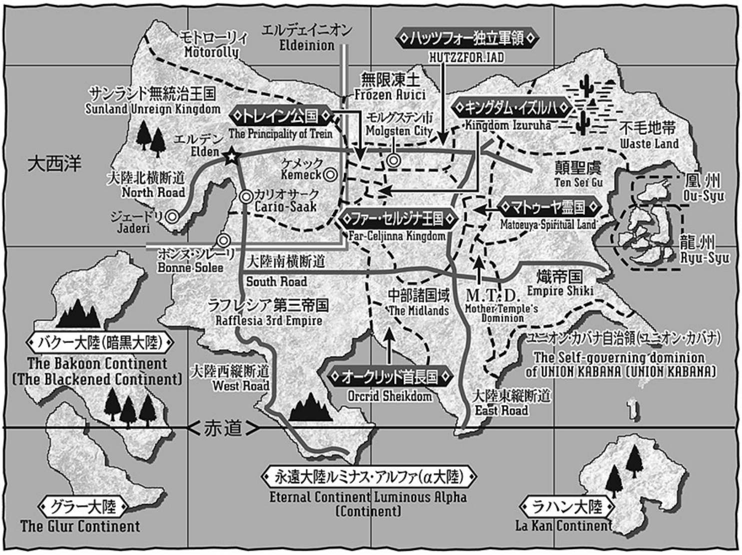
Agna Kurtiba
アーニャ・クルチバ

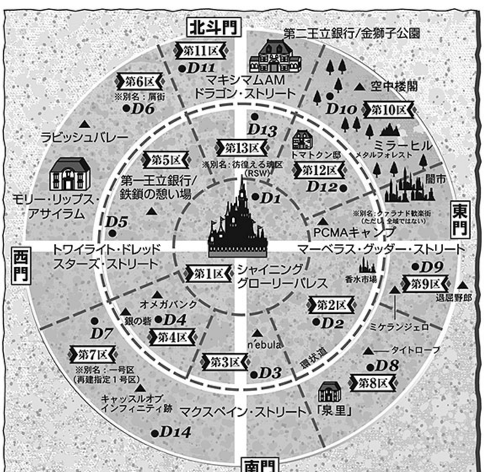
Rasa
羅叉

Annie Polyster
アニー・ポリステル

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

prologue

わたしの名前はアーニャ・クルチバ。秩序のモラル・番人キーパーズ二十七番無名隊の隊長だ。髪かみはブルネット。髪型はお下げだ。目は灰色で、年ねん齢れいは十九歳。他の隊長どころか、隊長補と比べても、群を抜ぬいて若い。

自分で言うのもなんだが、わたしは有能だ。戦せん闘とう能力ではない。わたしは身長百五十七サンチと小こ柄がらで、童顔でもあるし、さして筋肉質でもないので、花柄のワンピースでも着てそのへんをぶらついていれば、名にし負う〝銀の軍団ザ・シルバリイ〟の番人だとは誰だれも思わないだろう。この体格で油断させておいて、何か恐おそろしい秘術で敵を駆く逐ちくするといった芸当を身につけているわけでもない。戦闘者としてのわたしは並だ。危機察知能力にすぐれ、身の程ほどを知り、身の処し方を知っているので、強敵を相手にする羽目に陥おちいったとしても、どうにかして生きのびる自信はある。が、それだけだ。前二十七番無名隊隊長イーデ・ブリーズモが任務中に命を落としたあと、琺瑠フオール副長は平隊士だったわたしを隊長に抜ばつ擢てきしてくださった。琺瑠副長が何を期待してくださっているのか。わたしはよく理解している。刀折れ矢尽つきるまで戦い抜くことではない。無名隊の仕事は戦場で血を流すことではないのだ。

多種多様な情報を収集し、分ぶん析せきして、活用する。それが副長直属の無名隊の役目だ。

ぜんぶで四個隊ある無名隊は、いわば栄はえある銀の軍団の目であり耳なのだ。

わたしは自分が二十七番無名隊の隊長であることに誇ほこりを持っている。

それだけではない。最近は無上の喜びを感じてもいる。

落ちつかない気分だ。

わたしは隊長補のカロリーナ・シェルベリと肩かたを並べて、琺瑠副長の三歩後ろを歩いている。番人たちが屯とん所しよと呼び習わしている銀のシルバリイ・砦ホールド主しゆ塔とう四階の廊ろう下かはいつもどおり静せい謐ひつだ。ちなみに、琺瑠副長もカロリーナもわたしよりだいぶ上背があり、また、年長ということも

あって、二人とも成熟した女性の色いろ香かを漂ただよわせている。とくに琺瑠副長は、東部系美女の典型と評してはむしろ失礼になるだろう絶世の美女だ。その黒髪は長くまっすぐで、切れ長の目は怜れい悧りな光を宿しながらもどこか憂うれいを帯び、手足はすらりとしていて、腰こし回まわりもすっきりしているのに、胸は非常に豊かであり、尻しりにも適切なボリュームがある。同性のわたしから見ても、琺瑠副長は魅み力りよく的で官能的な女性だと思う。にもかかわらず浮ういた話はない。もっともそれは琺瑠副長だけではなく、金きん髪ぱつ碧へき眼がん、髪を短くしていて目が怖こわいカロリーナも異性とは無む縁えんだ。ＳｍＣを壊かい滅めつさせた泉セン里リ決戦以降、女性の番人も多少増えたが、団の風紀を乱しそうな者は入団を認められない。誰が認めないのか。言うまでもない。人の皮を被かぶった氷像、血が通っていないから影かげが薄うすい、その腰の物は鞘さやを払はらえば剣けんではなく抜き身の悪意と陰いん険けんがあらわれる、などと陰かげ口ぐちをたたかれている、冷れい徹てつ非情、厳格無比、鉄面皮の、ヨハン・サンライズ副長だ。

　ああ、ヨハンさま。

　思わず胸中で呟つぶやいてしまい、わたしは慌あわてて顔を手で探さぐった。顔面の筋肉が弛し緩かんしたりしていないだろうか。大だい丈じよう夫ぶだ。今のところは。

　隣となりを見ると、カロリーナがにやりと笑った。

　わたしは咳せき払ばらいをした。追い払え。忘れるのだ。これは仕事だ。琺瑠副長に伴ともなわれて、ヨハン副長に調査の報告をする。厳げん粛しゆくに遂すい行こうしなければならない。冷静になれ、アーニャ・クルチバ。そう思えば思うほど、胸の高鳴りを抑おさえられなくなる。

　ああ、ヨハンさま。

　ヨハンさま！

　ヨハンさま……！

　かつては尊敬してはいたものの、どうしても忌き避ひする気持ちをぬぐい去ることができなかった。多くの番人たちと同じだった。知らなかったからだ。

　何も知らなかった。浅せん薄ぱくなこのアーニャめを、どうか何とぞお許しください、ヨハンさま。お許しいただけないのでしたら、お仕置きしていただいても結構です。まあ、お仕置きなんて、わたしとしたことが、はしたない。バカ。バカ。何を考えているの。アーニャのバカ。

　琺瑠副長が足を止めた。

　ヨハンさまの執しつ務む室は目前だ。

　琺瑠副長はドアを叩たたいた。

「ヨハン副長。琺瑠です。例の件でお話が」

「入りたまえ」

　すぐに返事があった。いいお声だ。その声質のすばらしさにさえ、ずっと気づいていなかったのだ。

　琺瑠副長がドアを開けた。

　純血のピュアブラッド司祭プリーストの詰つめ襟えり服を一分の隙すきもなく身にまとったヨハンさまのお姿を拝見した途と端たん、わたしは卒そつ倒とうしそうになった。なんとかこらえた。

　見れば、隣のカロリーナも不自然に目を伏ふせている。顔がほのかに赤い。唇くちびるを引き結んで、鼻で呼吸をしている。その鼻息も荒あらい。

　笑いたければ笑え。

　わたしにはカロリーナを嘲あざ笑わらうことなどできない。できようはずがない。

　ＪＭＡという秘密結社がある。

　何を隠かくそう、二十七番無名隊隊長補カロリーナ・シェルベリはその会長だ。そして、副会長は二十七番無名隊隊長のわたしなのだ。

　ここで、隊長と隊長補の上下関係が逆転していることに注目してほしい。じつは、これはわざとだ。

わたしはカロリーナに会長の座を譲ゆずった。

この経けい緯いには意味がある。

カロリーナは前隊長が存命のころから隊長補だった。次の隊長は彼女であってもよかったはずなのだ。ところが、珐瑠副長はわたしを隊長に推すい薦せんして、これを総長や他の副長たちも了りよう承しようした。カロリーナは内心、面おも白しろくなかっただろう。不平不満を表面に出すような女ではないが、わたしは彼女の嫉しつ妬と心や敵意をひしひしと感じた。わたしとしては、円えん滑かつに仕事を進めるため、隊長補とは良好な関係を築く必要があった。そこで、女性隊士たちの間で密ひそかにＪＭＡ結成の話が持ちあがったとき、わたしは彼女こそ会長にとカロリーナを推おしたのだ。カロリーナは断らなかった。おそらくわたしの目もく論ろ見みを見み抜ぬいた上で、あえて提案に乗ってくれた。わたしはカロリーナを心底から信しん頼らいすることにした。カロリーナもあらためてわたしを隊長として認め、遇ぐうしてくれるようになったと思う。

ＪＭＡのおかげだ。

つまりは、何もかもヨハンさまのおかげということだ。

秘密結社ＪＭＡ。

正式名めい称しようは、ヨハン・サンライズ副長の凜り々りしい眼鏡めがね姿をそっと見守る会。

ああ――、

ヨハンさま。

今日も眼鏡姿がすてきでいらっしゃいます。

あなた以上に眼鏡が似合う殿との方がたはこの地上におりません。

否いな、この地上どころか、異界にも存在しないでしょう。

ヨハンさまの副長用執務室はいつも整然としている。余分なものは一いつ切さい置かれていない。ヨハンさまは執務机を前にして椅い子すに座っていらっしゃる。書類に目を通されていたようだ。も

ちろん、眼鏡をかけていらっしゃる。ヨハンさまは一つ息をおつきになって、ゆっくりとお首をお回しになった。ああ、その物もの憂うげな表情……！　否、表情と言えるほどの表情ではないのだ。そのかすかな、あまりにもわずかな、儚はかなくすらあるお顔つきの変化がまた、何とも言えず胸に響ひびいてやまないことに、我々ＪＭＡ会員一同は気づいていなかった。

　すべてはあの日から始まったのだ。

　ヨハンさまが眼鏡をおかけになるようになった、あの日から。

「どうしたの？」

　琺瑠副長が振ふり返ってこちらを見た。わたしは我に返った。カロリーナも同様だ。わたしたちは執務室に入らず、ドアの前で立ちつくしていた。ついついヨハンさまに見とれていたのだった。いけない。仕事は仕事だ。しっかりしなければ、ヨハンさまに軽けい蔑べつされてしまう。

「も、申し訳ありません」

　わたしとカロリーナは執務室へと足を踏ふみ入れ、ドアを閉めた。琺瑠副長が執務机に報告書の束と数冊の雑誌を置くと、ヨハンさまはまず報告書を手にとった。報告書はわたしとカロリーナが二人で作成したものだ。わたしたちの書き綴つづった文章が、ヨハンさまに読まれている。眼鏡の奥の鋭するどい眼まな差ざしは、書類よりもむしろ、わたしの胸を貫つらぬく。ヨハンさまがほんの少しだけ眉まゆをひそめられた。琺瑠副長がそっと笑った。

「誤字か脱だつ字じでもあった？」

　ヨハンさまは片方の眉を少しだけ上げて、琺瑠副長を軽く睨にらんだ。それだけだった。ヨハンさまはまた報告書に目を落とした。誤字脱字。きっとあったのだ。冷や汗あせが出た。わたしはうつむいて唇を噛かんだ。あれほど念入りに確かく認にんしたというのに、誤字脱字が残っていた。横目で見ると、カロリーナも下を向いて赤面していた。

　わたしたちＪＭＡの会員は、自らの立場をわきまえることを誓ちかっている。わたしたちにはヨハンさまを見守ることしかできない。ヨハンさまは誰だれも近づけようとしないからだ。常に他者と

自分との間に一線を引いていて、そこから出ることも、立ち入らせることもない。例外はおそらく、旧知の間あいだ柄がらである琺瑠副長だけだ。その琺瑠副長とも、職務以外では極力接せつ触しょくしないようにしている。ヨハンさまは度外れにストイックなのだ。以前は、人間らしくない、だから他人の気持ちがわからないのだ、などと思っていたものだが、今は違ちがう。利己心を捨て去り、組織に殉じゅんずるヨハンさまは立派だ。わたしたちも見習って、完かん璧ぺきな報告書を作成したつもりだった。それなのに、不備があったのだ。なんたることだ。

　ヨハンさまは右手で報告書を持ったまま、左手で机き上じょうの雑誌を開いた。その雑誌「アルトラモード」にはあらかじめ付ふ箋せんをつけてある。ヨハンさまは付箋のページに目をやって、ふむ、と低い声を出した。

「便利なものだ。この写真というものは。エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕとの交こう渉しょうは、近日中にまとまりそうだとのことだが」

「ええ」琺瑠副長は豊かな胸を持ちあげるように腕うで組ぐみをした。「撮さつ影えい機きの市し販はん開始前には、現像機もあわせて導入できそうよ」

「やはり例の絶対禁制品とやらの一つだったのだろうな」

「機術士匠合は絶対Ａ禁制品Ｃの存在自体、認めていないから、確認しようがないわ」

「最初の流出元は結局、ラフレシアなのか」

「そうみたいね」琺瑠副長はどこまでもまっすぐな黒くろ髪かみをかきあげて、すぐに腕を組みなおした。「ＥＭＵ執しつ行こう部ぶ所属の特とく殊しゅ部隊〝トラジェディー〟が動いたという情報もあるけれど、くわしいことはわからない」

「きなくさい国だ」

「皇こう帝ていの容態もよくないらしいわ」

「まだ後こう継けいが定まっていないのだったな。第一皇子の評判が芳かんばしくないとは聞いていたが、跡あと目め争あらそいにでもなったら、国が割れかねない」

「お隣となりのラフレシア第三帝国がどうなろうと、わたしたちには関係ないでしょうけれど」

「そうとも言いきれない」ヨハンさまはかすかに首を横に振った。「大きな戦いくさが起これば、難民が生まれる。海路でジェードリに。陸路でカリオサークに。一部はこのエルデンに流れつくだろう。大勢が一気に流入すれば、必ず軋あつ轢れきが生じる。その結果、何が起こるか。いずれにせよ、我々が歩む道は一つだ。なすべきことをなすのみだがね」

　そうしてヨハンさまは報告書を机上に置き、雑誌のページを指さした。

「さしあたっては、これだ」

「アーニャ」

　玹瑠副長に名を呼ばれて、わたしは正気に返った。まただ。またもやヨハンさまに見とれてしまっていたのだ。「──は、はいっ！」

「ヨハン副長に説明を」

「はい！　了りよう解かいいたしました！」

　わたしは小こ脇わきに抱かかえていた報告書を開いた。玹瑠副長がヨハンさまに渡わたしたものとほとんど同じだが、今朝方いくつか情報を入手したので、追記した箇か所しよが多少ある。わたしはちらりとヨハンさまを見た。ヨハンさまはこちらに顔を向けていた。目があった。眼鏡めがねとその奥のつめたい瞳ひとみが、わたしを映している。その事実を意識するだけで天にも昇のぼる気持ちだった。動どう悸きがする。呼吸が乱れそうだ。わたしはすぐに報告書に視線を落とした。咳せき払ばらいをして、唇くちびるを舐なめた。眩暈めまいがする。倒たおれてしまいそうだ。ヨハンさまの御ご前ぜんだ。倒れてなるものか。

　わたしは思いきって顔を上げ、ヨハンさまの視線を真っ向から受け止めた。

　ヨハンさまは、じつはもともと視力がそれほどよくなかったようだ。昔から眼鏡を所持していたという噂うわさもある。真しん偽ぎの程ほどは不明だが、最近、近視がさらに悪化して、裸ら眼がんのままでは日常生活にやや不便を感じるようになったらしい。それ

で、屯とん所しよの中では眼鏡をかけるようになったのだ。眼鏡を。

　ああ、眼鏡だ！　麗うるわしい、麗しすぎる眼鏡姿……！

　わたしは幸せです、ヨハンさま。

　幸せすぎて、怖こわいくらいです。

「クルチバ隊長」

　ヨハンさまが右手の中指で眼鏡のブリッジを押しあげた。その仕し種ぐさがまたすばらしい。すばらしきかな、この世界！　眼鏡万ばん歳ざい！　眼鏡はすべてを救う！　ＪＭＡに栄光あれ……！

「気分でも悪いのか」

「い、いいえ！」

　どうしよう。ヨハンさまに心配されてしまった。眼鏡をかけたヨハンさまに。

　膝ひざに力が入らない。目が回る。何か変だ。鼻のあたりだ。まさか、鼻水が出ているのだろうか。ヨハンさまの御前で、鼻水。恥はずかしい。このうえなく恥ずかしい。

　わたしは洟はなをすすってみた。それから、鼻の下あたりを指でぬぐった。

　ヨハンさまが見ている。凝ぎよう視ししている。ヨハンさまの眼鏡が。眼鏡とヨハンさまが。

　わたしは指先に目をやった。

　赤い。

　なぜ赤いのだろう。

　もしや、血。これは血液なのか。

　わたしはもう一度、洟をすすり、指で鼻の下をぬぐった。間違いない。

　まぎれもなく鼻血だ。くらっとした。

「アーニャ……！」

「隊長……！」

　琺瑠副長とカロリーナが支えてくれたので、座りこんでしまわずにすんだ。

　ヨハンさまがため息をおつきになった。「体調不良か。自己管理がなっていないようだ。たるんでいるのではないか」

　ああ！

　叱しかられてしまった！

　叱られて！

　なんてこと……！

　涙なみだがあふれそうで、この胸は張り裂さけてしまいそうなのに、なぜだろう。

　もっと……！

　どうか、もっと叱しつ責せきしてほしい！　きつい言葉を浴びせてほしい！　悪あく罵ばされたい！　足あし腰こしが立たなくなるまで痛つう烈れつに罵倒されたい！　そう願っている自分がいる。

　初めてだ。

　わたしは気づいてしまった。わたしの中に眠ねむっていた、もう一人のわたしに。

　ヨハンさまが目覚めさせたのだ。

　責任をとってください、ヨハンさま。わたしをもっとなぶって。いじめて。わたしをボロボロにしてください。

　言えない。言えるはずがない。ＪＭＡの誓ちかいがある。それに、もしすがりついて頼たのみこんだところで、ヨハンさまは聞き入れてくださらないだろう。この願いは絶対に、何があっても叶かなうことがないのだ。望みは絶無。わたしたちは絶望を抱いだいて

ヨハンさまの眼鏡姿を見守りつづけるしかない。

　そう思うと、身体からだの芯しんが熱くなる。たまらない。つらくて、悲しくて、苦しくて、死んでしまいたいくらいなのに、この身も心も悦よろこんでいる。

　ヨハンさま、どうかわたしを蔑さげすんでください。

　アーニャは変態です。

　とんだメスブタです。

Omenage 899 5th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区

chapter.1

ハイレベル

　そのやけに細長い建物は、一説によると数百どころか千を超こえるともいうブランド関連のスタジオやらアトリエやらファクトリーやら、エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕやら錬金Ａ士組合Ｇやらの巨きよ大だいな支部やら工場やらが所ところ狭せましと建ち並んでいる第八区の一角で、ひっそりと、窮きゅう屈くつそうに、それでもすっくとまっすぐ直立していた。

　狭せま苦くるしいエントランスの表示板で確かく認にんしたところ、この「背高TALL'のっぽN'LEAN」とかいう名の建物は七階建てで、目当てのＢＭＲという会社はその四階と五階と六階の合計三フロアをオフィスにしているらしい。

「階段は外みたいやなあ」

　半魚人の半魚手は丸めた雑誌「アルトラモード」をしっかりと握にぎっている。わりと湿しつ気けの多い時節だったりするし、指を開いたら水かきがありそうなあの手はいかにもぺたぺたしていそうなので、アルトラモードはじっとりと湿しめっていることだろう。

「ほな、行こか」半魚人が踵きびすを返した。

「しょうね」ふだんどおり女性用ナース・医術士帽キヤツプに女性用ナース医術士服・ユニ姿の、まばゆいばかりに美しく可か憐れんで気高い一輪の向日葵ひまわり、我らのユリカ・〝最強伝説〟・白雪スノーホワイトが、最強の証あかしであり象しよう徴ちようでもある極限クライマツクス九手棍ナインポールを手に、半魚人につづいた。

「ンだな」ユリカのあとを、季節感を無視しまくって厚着をしている小こ柄がらな男が、頭の後ろで両手を組んでぶらぶらとついてゆく。

「あ、あの……マリアさん」赤い眼めをした〝灰被りアツシユカバード〟のルーシーがマリアローズの腕うでをつついた。「じつはぼく、ずうっと気になってたんですけど、あれ、誰だれなんですか」

「うん。まあ……」マリアローズは軽くため息をついた。「説明すると長くなるっていうか、そうでもないかもしれないけど、べつに

説明したくないっていうか、めんどくさいっていうか。あの馬ば鹿か三号のために少しでも労力を費やすのはもったいないっていうか、いやすぎるっていうかね」

「馬鹿三号？」ルーシーはまるで女の子みたいな顔をちょっぴりしかめた。「それがあの人の名前なんですか」

「や、違ちがうっていえば違うんだけど、いいかな。べつに。それでも」

「なんか、ユリカ姉様と仲よさげなかんじですけど……」

「そぉ？　あれぇ？　そう見える？　ふーん。そうかなぁ？　気のせいじゃない？　僕は認めないけどね。認めるつもりもないしね」

　ルーシーは首をひねって視線を斜ななめ上に泳がせた。何か考えこんでいるみたいだ。やがて結論が出たらしい。ルーシーはぺちんと両手を打ちあわせた。

「訊きいてみます！　本人に！　直接、問い質ただしてみます！」

　止める間もなかった。てゆうか、止める気なんてさらさらなかったけどね。ルーシーはズッパーンとかっ飛んでいって、エントランスから出てすぐのところで馬鹿三号を呼び止めた。

「あの！　馬鹿三号さん！」

「あァン？」

　馬鹿三号の背せ丈たけは、認めたくないけれど、初めて会ったときよりもほんの少しだけのびた。ホントのホントにちょびっとだけだ。そのちょびっとが地味に大きくて、前は明らかにマリアローズより小さかったのに、ひょっとしたら今は同じくらいかもしれない。ちなみに、我らがユリカもいくらか背がのびたような気がする──と思うんだけど、とユリカに言ってみたら、しょんなことないわ、と少々せつなげな笑え顔がおで否定されてしまった。そうかなぁ？　そんなことないこともないと思うんだけど。

「ンだテメェ。イキナシ他ひ人とのこと全開で馬鹿呼ばわりかよ。いい度胸だなァ？　殺やっちまうぞコラ？」

「飛燕フエイヤン！」ユリカの怒おこった顔は、何しろ最強なだけ

に怖こわいけれど、たまに笑顔よりもきれいだったりする。「いいかげん、しょういうチンピラみたいな口の利きき方はやめなしゃい！」

「えぇー。だってよォ。こいつがオレのこと、馬鹿とか言うから」

「言い訳は聞きたくないわ！」

「わーったよォ。わァーかァーりィーまァーしィーたッ」馬鹿三号はぷうっと頬ほおを膨ふくらませて口を尖とがらせながらも、多少口調をあらためることにしたらしい。「ンで？　オレに何か用でもあンのかよ？　オレはぜんっぜんねェーんだけどな。つーか、テメェなんでユリィのことネエサマとか呼んじゃってるわけ？」

　多少あらためた──のだろうか。微び妙みようなところだけれど、あれでも馬鹿三号にしてはそこそこ努力したのかもしれない。幾いく多たの最強伝説を持つユリカには逆らえないということだ。

「え、えっと、用は……」

　ルーシーの顔が若じやつ干かん青ざめて、けっこう引きつっている。おどおどした上うわ目め遣づかいだ。それでも退ひかないのだから、馬鹿三号の言うとおり、なかなかいい度胸をしている。

　何せ、馬鹿三号は正しよう真しん正しよう銘めいのバカだけれど、ただのバカではない。小柄だし、童顔だし、風格なんて言葉とは完全に無む縁えんでも、すっと目を細めて凄すごんでみせたりすると、やっぱり独特の迫はく力りよくがある。キャッキャキャッキャ騒さわぎながら飛んだり跳はねたり駆かけまわったりしているさまは、ほとんど落ちつきのない子供みたいなのに、不思議と隙すきがない。そうでなくとも、その筋ではわりと有名だったりもするので、馬鹿三号に正面切って挑いどもうとする者はそれほど多くないだろう。よほど自分の実力に自信があるのなら勝手にすればいいけれど、そうでないのなら喧けん嘩かを吹ふっかけたりしないほうがいい。馬鹿三号はバカはバカでも喧嘩バカで、見かけによらず腕っ節はめっぽう強いのだ。

「あ、あのう……」ルーシーは息を吸って、吐はいて、うなずいた。「ユ、ユリカ姉様と、どういうご関係なのかな、と思いまして。あ、ぼくはルーシーといいます。ルーシー・アッシュカバード」

「ふーん。リュースィーねェー」馬鹿三号は唇くちびるの端はしをぺろっと舐なめた。「まァーホントは知ってっけど。テメェのことはユリィからチロッと聞いたしな」

「えっ。ユリカ姉様から……？」

「だからよォ。なんでテメェ、ユリィのこと勝手にネエサマ呼ばわりしてくれちゃってンだよ。ユリィはテメェのネーチャンかよ。違ちげェーだろォーが。あァ？」

「ち、違いますけど……それはその、親しみと敬意をこめた呼び方というか」

「だからなんでテメェ、勝手に親しみとか敬意とかこめてユリィのこと呼んでンの？　オレはさァ、そこを訊いてるわけ。わかる？」

「いや、でも、勝手にじゃなくて、ちゃんと許可をとりましたし……」

「うっそ」馬鹿三号は眉まゆを八の字にしてユリカに向きなおった。「マジで？」

「え、あ……」ユリカは目を伏ふせて顔面のそこかしこを少しずつ引きつらせた。世にも複雑な表情だった。「しょ、しょれは……まあ、しょうね。一応」

「へェー？　なァーんかさァ、やむをえねェー的な？　イヤイヤだけどしょォーがなくみたいな？　そんなカンジじゃね？」

「そ、そうなんですか!?　ユリカ姉様っ……!?」

「しょ、しょんなことはないわよ。しょんなことは……」

　ユリカは明らかに無理をしている。常つね日ひ頃ごろ、ルーシーにユリカ姉様ユリカ姉様と呼ばれるたびに、どうもしっくりこない、果たしてこれでいいのだろうか、そのうち慣れるのだろうか、そのわりにぜんぜん慣れないのはなぜだろうか、そこにはいったいどんな謎なぞが隠かくされているのだろうか、みたいなことでも考えているかのような顔をしているくらいだ。本心ではよっぽどいやなのだろう。

「そうですか。よかった」

　ルーシーはほっと息をついた。あのユリカの様子を見て胸を撫なで下ろしてしまえるところは、ある意味、ルーシーの強みかもしれない。

　あくまで、ある意味、だけどね。雰ふん囲い気きを読めないっていうか、気にしないっていうか、ただ鈍どん感かんなのか、自分に都合のいいように解かい釈しやくしているだけなのか、よくわからないけど、そういう図ずう々ずうしさっていうのはないよりあったほうがいい。ルーシー本人にとっては。周りの人間にとっては、必ずしもそうじゃない。でも、まあ、まだ若いしね。今は自分自身のことだけで手一いつ杯ぱいだろうし。そのへんはおいおい学んでいけばいいわけだから。うん。

　無理かもね。

　ああいうのは性格だし、そうそう変わらないかも。

　てことは、こっちがあわせるしかないのかな。あわせてあげないといけないのかな。そこまでしてあげる義理は、さすがにないような気もするんだけど。

「まァーユリィがそうゆーンなら、百万歩譲ゆずってソコはいいけどな」馬ば鹿か三号は人差し指で鼻の下をこすって顎あごを上げ、下目遣いでルーシーを睨にらみつけた。「リュースィー。テメェがＺＯＯに入ったっつーのは聞いたけどよォ。よォーするにユリィとはただのクランメイトってヤツだろ。無む駄だにベタベタすンじゃねェー。わァーったか？」

「べ、ベタベタしてなんかいませんよ！　それに、そんなこと、あなたみたいな人に言われる筋合いは──」

「あるンだよ、リュースィー。大アリだっつーの」

「どうしてですか！　ていうか、そのリュースィーっていうの、やめてください！」

「あ？　なんで？」

「ちょっとその、あまりよくない思い出があって、忘れてしまいたい人がいて、その人の名前が──って、そんなことはどうでもいいんですよ！」

「ほォー。そォーなん？　リュースィー、よくねェー思い出って？　何よ？　なァ、オレに話してみれって。リュースィー、遠えん慮りよすんなって、なァなァ？」

「あああぁぁっ！」ルーシーは頭を抱かかえて絶ぜつ叫きようした。「リューって言わないでください！　お願いだから、それだけはやめて……！」

「リュ～スィ～♪　キャハハハハ。リュ～スィ～♪　リュ～スィ～♪」

「歌うのもだめです！」

「やァーだねッ。リュ～スィ～♪」

「子供ですか！　子供──子供……？」ルーシーは眉をひそめて何度かまばたきをした。「あの……失礼ですが、馬鹿三号さんはおいくつなんでしょうか」

「うぇ？　オレ？　えーと、いくつだっけ」馬鹿三号は両手の指を折って数えた。「──あーっとォ……二十、四？　あれ？　違ちがうか？　五？　六？」

「二十五歳しやいでしょう」ユリカが愛らしい呆あきれ顔でため息をついた。「わたしと同い年なんだから。誕生日はわたしのちょうど一巡じゆん月げちゆ前。自分のことなのよ。しょれくらい、ちゃんと覚えておきなしゃい」

　マリアローズは、ふーん、と言いそうになって、なんとかこらえた。

　苦い。何？　この苦さ。苦すぎ。てゆうか、苦々しい。何もクソもへったくれもない。あー唾つば吐はきたい。馬鹿三号のバカ面づらに吐きかけてやりたい。我が慢まんだ、我慢。でも、ふーん。そうなんだ。ふーん。ユリカ、飛燕の誕生日なんて覚えちゃってるんだ。てゆうか、ユリカの誕生日の一巡月前って、もしかして──何か用事があるとか言って、ユリカが一人で出かけた日じゃない？　なーんかあやしいとは思ってたけど。そのことについて、サフィニアと二人でああだこうだ話したりもしたけど。まさか、もしや、あの日、飛燕と二人で？　誕生日？　バースデイですか？　ひょっとして、祝っちゃったりした……？　嘘うそ。嘘だと思いたい。ユリ

カが汚よごれる。汚れてゆく。汚けがされてしまう。飛燕。飛燕め。馬鹿三号の分際で。これはもう、そろそろジェードリの髭ひげに手紙を書くべきか。や、手紙はたまに書いてるんだけどね。飛燕のことはさすがに書けなくて。書いたら、髭がどんなふうになるか、だいたい想像つくし。髭だって、オストロス神しん殿でん再興のために日夜がんばってるわけだし。余計な心配はかけたくないっていうか。でも、その心配が余計じゃなかったら……？

「つーわけで」飛燕は親指で自分を指し示して、傲ごう然ぜんと胸を反り返らせた。「オレァ二十五歳だけど？　それがどォーしたよ、青二才」

「いえ……」さすがのルーシーも下を向いて口ごもった。「べつに、どうしたってことは。ただ、少し気になったので……」

「年上なんだからよォ。せェーぜェー敬えよな。人生の先せん輩ぱいってやつだぜ？　オレァ経験豊富だしな。かなり偉えれェーし」

「え、偉いん……ですか」

「たりめェーだろァ？　見ろよ。偉い大だいオーラ出まくりじゃねェーか。バシバシとよォ。わかんねェーのかよ」

「わ、わかりませんでした。ごめんなさい」

「ンだよ。ミョーに素す直なおじゃん」

「わからなかったのは、事実なので。それで、筋合いが大ありっていうのは……？」

「オォ。ソレだ。その理由な」飛燕はニヤリと笑った。「つーのはよォ。オレァ、ユリィの彼氏だかンな。トーゼン筋合いってヤツはありまくりなわけよ」

「かっ──」ルーシーは絶句した。

　半魚人は、おぉー、みたいな声を出して、間の抜ぬけた驚おどろき半魚面をさらしている。

　マリアローズは、殺そう、と決意した。

　やつを殺そう。始末しよう。

　ユリカが顔を真っ赤にして飛燕に詰つめよった。「──だ、だ、誰だれが彼氏よ！」

「へ？　そりゃァーやっぱ、オレだろ？」

「だ、誰の……!?」

「ユリィのに決まってンじゃん」

「ち、違うでしょう!?　わたしとあなたはお友だちでしょう!?」

「いっやァー。でも、二人っきしでデートとかしてるし？」

「お友だちなら、二人で出かけることくらいあるわ！　ねえ──」ユリカはいきなりこっちを向いた。「マリア！　しょうよね!?　しょうだと言って！　言いなしゃい！」

「え……」

　僕？　しかも、命令……？

　ユリカはすごい剣けん幕まくだ。圧あつ倒とうされた。マリアローズはついうなずいてしまった。「……う、うん。そ、そうだね」

「ほら！　マリアもしょうだって言ってるじゃない！　お友だちだって、二人だけで出かけることくらいあるんだから！」

「やァー。けどさァ」

「これ以上、変なこと言うなら、もう二度と一いつ緒しよにどこかへ行ったりしないわよ！」

「わ、わかったって。じゃァー言わねェーよ、彼氏とか。オレとユリィはァー、オトモダチですッ！　仲よしこよしのオトモダチ同士ですッ！　これでいいだろ？」

「心がこもってないわ！」ユリカは飛燕の鼻先にビッと人差し指を突つきつけた。

　呆あっ気けにとられた。

　飛燕がその指をぱくっとくわえたからだ。

「な、な、な、な……」

　ユリカの顔面から湯気が上がった━ように見えた。でも、本当に蒸気が噴ふきだしてもおかしくないような有様だった。顔だけではない。耳も、首も、手も、太ふと腿ももまで、露ろ出しゆつしている肌はだという肌、どこもかしこも真っ赤っかになっていた。

「━あ」飛燕はユリカの人差し指から口を離はなして頭を搔かいた。「悪わりィ。食っちゃった」

「く、く、く、く、食っちゃったじゃないわよ……！」

「違ちげェーんだって。わざとじゃねェーって。マジだって。なァーんかうまそォーに見えたから、ついさァ」

「わたしは食べ物じゃないんだから！」

「知ってっけど。むしろ、食べ物よりうまそォーっつーか」

「おいしいわけがないでしょう！」

「うまかったけどなァ」

「お、おいしくても、勝手に食べないで！」



「だから悪かったって。謝ってンじゃん。ホント、マジ反省してるし。オレ、ユリィには嘘うそついたことねェーだろ、一回も。なくね？」

「嘘うしよとか、しょういう問題じゃ━もう……！」ユリカはほっぺたをぱんぱんに膨ふくらましてそっぽを向いた。

　なんていうか、すっごくかわいい。あまりにもかわいすぎて、愕がく然ぜんとしてしまう。てゆうか、甘あま酸ずっぱいよ。甘酸っぱすぎだよ。うわ。身体からだが痒かゆくなってきた。もしかして、蕁じん麻ま疹しん？　やめてほしい。勘かん弁べんしてよ。ない。ないから。甘酸っぱくなんて、ぜんぜんないし。ないはず、なんだけど──、

　認めるしかないのだろうか。

　悔くやしいけれど、飛燕とじゃれあっているときのユリカは、いつにも増して愛らしい。

　本当は、認めるも認めないもない。そりゃあね。わかってるよ？　僕だって。そんな権利とか資格とかが僕にあるわけじゃないし。でも、どうも割り切れないっていうかさ。ちょっと寂さびしいっていうか。なんでその相手がよりにもよって飛燕なの？　とか思うし。やっぱり心配だし。だって、ユリカだから。大切な仲間で、大事な友だちなんだから。

　信しん頼らいなんて、ねえ。

　馬ば鹿か三号だし。

　そのバカと目があった。

　小動物みたいにつぶらな瞳ひとみだ。

　バカだけに馬鹿正直で、ユリカのことが好きで、ためらわずに近づいて、僕たちが入りこむのに躊ちゆう躇ちよしているような部分にまで踏ふみこんで、ユリカのぜんぶを平然と受け止めて、たぶん、何かあったら身を挺ていしてユリカを守る。

　そういう目をしているし、実際、ユリカをかばってくれたことだってある。

　わかってるんだけど。

「そォーいぇばよォ」

　飛燕はもう、いつのころからか、マリアローズたちに対してもやけに馴なれ馴れしい。こういうところがやなんだよね。なんか勘かん違ちがいしてるんじゃないの？　ユリカのことはとりあえず措お

いとくとしても、僕らとはクランメイトとやらでもないわけだしさ。それなのに、ふらっと現れて、よォッ、とか言って、ナニナニどっか行くん？　ンじゃァーオレもオレも、みたいについてきたりするし。

「オレらここに何しにきたん？　つーか何ここ？　何かあンの？」

　そんな基本的なことも知らなかったりするしさ。

　個人的に許せないんだよね。そういう、なんていうの？　雰ふん囲い気きとか流れとかだけで行動するような、テキトーでいいかげんなやつ。ダメなんだよね。苛いら々いらするし、疲つかれるんだよ。だって、事情を説明するのは結局、僕なわけでしょ？　僕の役回りなんでしょ……？

　なんでこんなことしなきゃいけないんだよとか思いながらも、かいつまんでパパパッと話してやったけどね。

　ルーシーが父親を捜さがしていて、ある雑誌に載のっていた写真の被ひ写しゃ体たいがどうもそれっぽくて、被写体の正体をつきとめるために、その雑誌「アルトラモード」を作った会社ＢＭＲに向かっている。

　たったそれだけのことなんだけど、半魚人あたりに任せたら、時間が三倍から五倍くらいかかるしさ。ユリカだと、いちいち飛燕にちょっかい出されて、きっと話が進まないだろうし。当事者のルーシーは、まだ気持ちが整理できてないっぽいし。

「へェー。オヤジねェー」飛燕は肩かたをすくめてみせた。
「まァ、ここまできちまったし、オレもつきあうぜ。暇ひまだしよォ」

「暇なものか」

　闇やみ夜よに地を這はって吹ふく湿しめった風のように低い声だった。

　だしぬけだった。

　そいつはいつから近くにいたのか。いったいどうやって接近してきたのか。どこから現れたのか。さっぱりわからない。

　気がつくと、背の高い男が飛燕の背後に立っていた。

　男は黒くろ髪かみを逆立てて、黒い色眼鏡サングラスをかけている。金色の龍りゅうが刺し繍しゅうされたファー付きの黒い皮革製のジャケットとパンツを身につけているその姿は、えらく目立つのに、それでいて不気味なほど周囲の景色に馴な染じんで、さながら太陽の影かげのようだ。

　男は飛燕の耳をつまんで、引っぱりあげた。

「──い……だッ！　いだだだだだッ……！」

「部会。会合。今日いくつ予定があると思っている」

「いでッ！　いでェーッつの！　耳！　もげる！　放せ、ジン……！」

「もげたらつけなおしてもらえ。ちょうどそこに腕うでのいい医術士がいるだろう」

「いや！　その前にもぐなってッ！」

「戻もどるぞ」

「わ、わーったよォ！　わーったからッ！」

「よし」

　男は飛燕の耳から手を離はなして、右手の中指で色眼鏡サングラスを押しあげた。

　黒いレンズのせいで、視線の行方ゆくえはわからない。でも、顔はマリアローズのほうを向いている。たぶん、見られている。

　そんな気がする。

　ビンビンする。

　第九区の北にある闇市をとりしきっている龍州連合は、龍州系クラン、王龍とＳ＊Ｋシリアル・キラーズの連合体だ。

　飛燕はＳ＊Ｋの頭目で、もう一方、王龍の頭目があの男だったりする。

馬鹿二号。

またの名を、荊王ジンワン。

「元気そうだな」

相変わらず無表情な男だ。声にも抑よく揚ようがないので、何を考えているのかわからない。ただ、以前とは違ちがって、どこかの馬鹿一号みたいにマリアローズをこっそり尾び行こうしたり、おかしなことをしてきたりするわけではないから、実害はなかったりする。こうして顔をあわせるのも、けっこう久しぶりだ。

何か変なことでも企たくらんでるのかな。勘ぐりすぎだろうか。でも、前科があるし。

馬鹿二号は人間の歯を抜ぬくのが好きという、おぞましい、意味不明な変態で、マリアローズも被ひ害がいにあったことがあるのだ。何だかんだあって、改心したように思えなくもないけれど、つい警けい戒かいしてしまう。

「ま、まあね。健康体ではあるけど。それなりに」

「お前が元気なら、それでいい」荊王は口くち許もとをかすかにゆるめてみせた。

寒気がして、鳥とり肌はだが立った。

な、な、何それ。その微び笑しよう。その台詞せりふ。かえって気持ち悪いんですけど。てゆうか、怖こわすぎなんですけど。

荊王は飛燕に向きなおり、軽く顎あごをしゃくってみせた。「行くぞ、飛燕」

「へいへい」飛燕は渋しぶい表情でため息をついてから、一転、満面に笑えみをたたえてユリカに手を振ふってみせた。「ンじゃァ、ユリィ、またなァー。あ、今度のアレ、忘れてねェーよな？　オレァ、ちゃんと覚えてっからよォ」

「あなたじゃないんだから、忘わしゅれるわけ──」ユリカはちらりとこっちを見て、気まずそうに咳せき払ばらいをした。「い、いいから、しゃっしゃと行きなしゃい！　お仕事があるんでしょう！　しゃよなら！」

　飛燕はキャハハハ笑いながら駆かけだした。元気なことだ。無む駄だに元気すぎて、見ているだけで疲つかれる。図らずも、歩きだす前に一いつ瞬しゅん、空を仰あおいだ荊王に共感してしまったようで、とてつもなくいやだった。

　てゆうか、今度のアレって……？

　気にはなるけど、ユリカに問い質ただすのもね。何かあるのなら、秘密にしないで話してほしいとは思う。でも、何から何まで言わなきゃいけないのかっていえば、そんなことはないだろうし。僕がこんな態度だから、ユリカとしても打ち明けづらいのかもしれないし。

「……何なんですか、あの人たち」ルーシーはちょっとおどおどした上うわ目め遣づかいでマリアローズの顔をのぞきこんできた。「あの色眼鏡サングラスの人も、お知りあいみたいですけど……？」

「知りあいはね。まあ、それなりにいるよ。もう何年もこのエルデンにいるわけだし」

「そう……ですよね」

「そうだよ。そのうちの一人ってこと。それだけ。さ、僕らも行こ」

「は、はい」

　ルーシーは納なつ得とくしていないようだけれど、抜ばつ歯しフェチのことなんてわざわざ説明したくない。する義務もないはずだ。

　マリアローズたちは外階段で背高TALL'のっぽN'LEANの四階まで上がった。建物の中に入ると、そこは金属の板が張りめぐらされた小部屋で、笑ってしまうくらいむやみやたらと頑がん丈じようそうな扉とびらKらしきものがあった。金属板に黒い塗と料りようで、ＢＭＲＢＭＲＢＭＲＢＭＲ……と書き殴なぐられているので、ここで間違いなさそうだ。

　それはいいのだが、把とつ手てがついていないこの扉らしきものは、いったいどうやって開ければいいのだろう。これか。

　扉の脇わきにレバーのようなものが設置されている。そのレバーに細い鎖くさりで吊つるされているプレートには、ご用の方は押したり引いたり上げたり下げたりしてみればいいじゃない、と書かれていた。

「ほんだら、とりあえず下げてみよか」

　半魚人がレバーを下げると、ややあって扉が開き、分厚い眼鏡めがねをかけた小こ柄がらな女性が顔を出した。来意を告げたところ、女性は了りよう解かいしてくれたのかどうなのか、少し不安になるようなうなずき方をして、ごにょごにょと何か呟つぶやいた。どうやら、ここで待っているように、みたいなことを言ったらしい。女性は扉を閉めた。

　それから十五分くらいがむなしく経過した。

　遅おそい。遅すぎる。

　もうぶちきれちゃってもいい……？

　堪かん忍にん袋ぶくろの緒おが切れる寸前でようやく扉が開いて、さっきとは別の女性が出てきた。

「あー。アタシィーに何か用？」

　ほっそい。何、あのウエスト。腕うでも、脚あしも、棒みたいだ。ボンデージなロリータファッションとでもいえばいいのか。細すぎる身体からだをさらに締しめあげるようなぴったりギチギチした淡あわいピンクと黒のドレスは、各所にフリルがあしらわれていて、どぎついながらもかわいい。ヒールの高い編み上げブーツも、拘こう束そく具めいた長手袋も、首輪も、カーリーブロンドヘアも、濃こいチークも、ボリューム過か剰じようのつけまつげも、危あやういところでバランスを保って、全体としてはよくまとまっている。そばかすまで気の利きいたアクセントになっていて、アッシュブルーの瞳ひとみは気け怠だるげで退たい廃はい的、かつ鋭するどく攻こう撃げき的だ。

「あ、お、ええ、と……」半魚人は口ごもった。

　そばかすさんはある意味、ものすごく魅み力りよく的でかっこかわいい女性だと思うけれど、おそらく男受けはあまりよくない。むしろ、普ふ通つうの男は近寄りがたく感じてしまうタイプだろう。

そばかすさん自身も、きっとそのあたりは自覚しているはずだ。わかっていて、そんなのどうでもいい、と考えている。てゆうか、そもそも違う趣味の人かも……？

　なんとなくそう感じた。

　ずばりそのとおりだったらしい。

　そばかすさんは半魚人を押しのけて、マリアローズを、それからユリカを、さらにルーシーを舐なめまわすように見つめてから、ぷるぷるした唇くちびるに人差し指をあてて目を細めた。「わぁー
お。アナタたち、すっごーいね。レベル高すぎ。４Ｐしなぁー
い？」

　ユリカとルーシーはぽかんとしている。

　ダメだ。変人っていうか、変態だ。こんなのばっかりだよ。エルデンだしね。しょうがないけどさ。そういう街だし。いちいち気にしてられない。マリアローズは軽く深呼吸をした。冷静に。できるだけ普通にいこう。うん。

「するわけないでしょ」

　ちょっと口調がきつくなってしまったかもしれない。

「えぇー」そばかすさんは口を尖とがらせた。「なんでー？　アタシィー、すっごーいテクとか道具とか持ってるよ？　世界観とか価値観とか変わっちゃうかもだよ？」

「興味ないんで。そういうのには」

「あ。お金なら払はらうけどー？」

　いくら？

　思わず訊きいてしまいそうになった。もちろん、金額の問題ではない。いくら積まれても、売り払ってしまえるものと、絶対に売ることのできないものがある。ただお金という単語に反応してしまっただけだ。違ちがう。反応してしまいそうになっただけだ。

「遊び相手が欲しいなら、クァラナドにでも行けば？　言うのもバカバカしいけど、僕らはその手の商売やってるわけじゃないから」

「そっかぁー。ざーんねん。個人的には、プロより素人しろうとのほうが好きなんだけどなー。てゆーかぁ、アタシィー、ロリでショタだからぁ、かーわいい女の子と男の子が好きなのー」

「どうでもいいよ。きみの好みなんて」

「あっ。もしかしてアナタって、けっこうＳだったりするー？　そのつめたぁーい眼まな差ざしとかモノの言い方とか、なんかぁ、かなりいーかも。アタシィー、ＳもＭもいけるのぉー」

「あっそ。よかったね。勝手に楽しんでれば」

「あはっ。放置プレイ？　いーよぉ。どーんな恰かつ好こうすればいい？　やっぱすっごーい恥はずかしい恰好がいいカナ？　どこに放置するのー？　ここ？　会社の前？　それとも路上ぉ？」

　変態そばかすさんの名前はアニー・ポリステル。クァラナド情報誌及およびファッション業界誌に加え、最近ではポルノグラフィーとかいう猥わい褻せつな写真や文章などを掲けい載さいした雑誌も刊行しているという出版社ＢＭＲの記者兼けん撮さつ影えい師で、例の記事を書いただけではなく、写真の撮影も彼女が行ったようだ。写真は新しい技術で、撮影機の市し販はんもまだ始まっていないから、基本的にはＥＭＵと直じかに交こう渉しようして購こう入にゅうしないといけないし、撮影の方法を教えてもらう必要もある。彼女はＥＭＵの研修を受けた、数少ない本物の撮影師なのだという。

　その変態そばかす撮影師さんから話を聞きだすのは本当に骨だった。会社の前でも、路上でもなく、ちゃんと喫きつ茶さ店てんに連れていってお茶だのケーキだのを奢おごり、あれこれ尋たずねたのだけれど、変態の頭の中というものはだいたい同じで、自分の欲求、欲望にほとんど支配されている。隙すきあらば、いや、隙なんかなくてもユリカやルーシーにちょっかいを出して二人を困こん惑わくさせ、マリアローズに迫せまっては撃げき退たいされて一人よがる、といった有様で、五分ですむような話に三十分以上かかった。それでもまあ、欲しい情報はなんとか手に入った。

　まず、アルトラモードに載のっていたリヴァイスとかいう新生ブランドの記事は、ほとんど先方の指定どおり作ったもので、変態そばかす撮影師のアニーにとっては納なつ得とくのいっている仕事ではないらしい。ただ、あの記事をアルトラモードに載せることで、

ＢＭＲには大金がもたらされた。ようするに、あれは完全にリヴァイスの宣伝だったのだ。アニーが言うには、アルトラモードはファッション業界にもっとも影えい響きよう力がある雑誌だから、最初の広告媒ばい体たいに選ばれたのだろう。その目的は見事に果たされて、今や業界でリヴァイスを知らない者はいない。今後は各雑誌の記者や小売店、各国の買いつけ業者などがこぞってリヴァイスに押しよせるだろう。近々商品展示会が開かい催さいされるとか、リヴァイス主催のパーティーが企き画かくされているらしいとか、噂うわさが噂を呼んで、大勢がその真しん偽ぎを確かめるために飛びまわっている。状じよう況きようからして、リヴァイス旋せん風ぷうが巻き起こることはまず間ま違ちがいない。いわば、アルトラモードがその火付け役になったわけだ。

　それから、リヴァイスの記事に使われていた写真の被ひ写しゃ体たいについては、アニー曰いわく──、

「アレはねー。あっちが連れてきたモデルだしぃー。アタシィーはねー。ぜんぜんさっぱりなんだわー。知らない人。けどぉ、どっかで見たことあるよーな？　気もするんだけどなぁー。４Ｐしてくれたら思いだすかも？」

「あの写真、首から下しか写ってなかったけど」

「４Ｐしてくれたらぁー」

「顔が写ってる写真とか、持ってたりしないの？」

「４Ｐぃー」

「この子の父親かもしれないんだよね」マリアローズは視線でルーシーを示してみせた。

　アニーは少しだけ真ま面じ目めな表情になった。「４Ｐの、パパ……？」

「や、４Ｐの、ではないけどね。てゆうか、何なんだろ、この人……」

「そぉーなんだぁー。うーん。子供がいそぉーなカンジには見えなかったけど、写真はないなぁー。ゴメンね？　撮影して、ＥＭＵで現像してもらったのはアタシィーなんだけど、ぜんぶリヴァイスに持ってかれちゃったのー。そーゆう契けい約やくになってたから」

「そう……ですか」ルーシーはがっくりと肩かたを落とした。

　そう……ですか、今日で世界も終わりですか、残念です、残念すぎてもうダメです、とでも思っていそうな顔つきだ。

　気持ちはわからなくもないけどさ。何だってそんなにぱっぱと解決するものじゃないし、この程度で落ちこんでたらきりがないよ。マリアローズとしてはそう思わなくもないけれど、アニーはルーシーの沈ちん痛つうな面おも持もちを見て胸を痛めてくれたようだ。

「あのぉー。写真はないけどぉ、絵なら描かけるよ？　アタシィー、けっこう上う手まいと思うけど。似顔絵、描こっか？」

「え！」ルーシーは跳とびあがった。「ほんとですか！」

「うん。その代わり、４ピ──」

「はしないからね。言っとくけど。はい。描いて。絵。ほら。さっさと描く」

　こうしてリヴァイスのモデルを務めた人物の似顔絵を入手することができた。

「──なんちゅうか……ゲージツやな」

「しょ、しょうね……」

「で、でも、な、なんか、この目の形とか、お父さんと似てる……ような、気も……しない、かな……ちょっと違うかもしれないですけど……」

「この絵で何か判断するのは、木を見て森を見ないようなものだと思うけどね。……うん。なんか違うね。ぜんぜん違うかもしれないけど、とにかく、あんまり参考にはならないんじゃないかな……」

　だって、なぜか目が四つあるし。口は二つで、鼻も二つだし。顎あごなんか、三つ叉またになっちゃってるし。ほっぺたに、渦うず巻まきみたいなのが描いてあるし。どう見てもふざけているとしか思えないこの絵を、だが、アニーはわりと時間をかけて、真しん剣けんに、丁てい寧ねいに仕上げたのだ。冗じよう談だんでも何でもなく、アニーは自分の画力に自信があるようで、呆あつ気けにとら

れているマリアローズたちを見て、心底から不思議そうだった。つまり、アニー・ポリステルの目には世界がこんなふうに映っているということなのだろうか。どちらにしても、アニーが描いてくれた似顔絵は、残念ながら少なくとも人間という生き物の顔には似ても似つかない絵だったので、他ほかに何か手がかりがないか、最後に訊きいてみた。

「リヴァイスの工こう房ぼうに行ってみたらぁ？　この第八区にあって、黒ビルって呼ばれてる建物なんだけどぉ、すっごーい目立つし、すぐ見っけられると思うよ？」

　それだ。

　ということで、マリアローズたちは黒ビルとやらに向かうことにした。アニーがだいたいの場所を教えてくれたし、たしかに人目を引く建物で、しかも名前どおりの外観だった。迷う要素は皆かい無むだった。

　黒ビルの見た目を一言で表せば、真っ黒い箱だ。外から見たかぎりでは、窓すらないらしい。本当にただのでっかい箱だ。それでいて、ちょっとかっこいい。鈍にぶい光こう沢たくのある外がい壁へきの重じゆう厚こうにして尖とがった質感や、浮うき彫ぼりされている幾き何か学模様みたいなものが、黒ビルを一個の作品に仕立てあげている。印象は強きよう烈れつなのだけれど、品がない。ただ、洗練されていない、というよりは、あえて気品や優ゆう雅がさといったものをとっぱらうことで、そうした価値観を否定しようとしているかのような、挑ちよう戦せん的で攻こう撃げき的な意志みたいなものを感じる。

　なんとなく、無理っぽい。門もん前ぜん払ばらいされそうだ。

　案の定だった。

　黒ビルの玄げん関かん前には、四人の屈くつ強きような男が直立不動の姿勢で立っていた。四人とも髪かみを奇き妙みような形に結ゆっていて、肌はだが浅黒くて、背が高くて、肩が盛りあがっていて、二の腕うでや腿ももやふくらはぎが驚おどろくほど太くて、方形や菱ひし形がたや三角形や直線を組みあわせた複雑な模様を顔中に刺青いれずみしている。カタリがひょこひょこ近づいていって、ヘロォー、と朗ほがらかに声をかけたら、男たちは一いつ斉せいに歯を剝むいて、シャーッと猫ねこみたいな威い嚇かくの声を発し

た。全員、総金歯だった。カタリはビクッとして一歩飛びさがったが、なんとか踏ふみとどまって食い下がった。

「あ、あんなあ、ちーっとその、訊きたいことがあるんやけども……」

「シャーッ！」「シャーッ！」「シャーッ！」「シャーッ……！」

「ヒイッ」

　カタリは尻尾しつぽを巻いて逃にげ帰ってきた。まあ、しょうがない。金歯男たちはそろって腰こしの得物に手をかけていた。あれでカタリが退ひかなければ斬きりかかってきただろう。

「なんやねん、あれ。けったいなやッつらやなあ。話くらい聞いてくれたってもええやんか。なあ」

「きみの魚語が通じなかったんじゃないの」

「それか！　いや、ちゃうちゃう。ちゃあんとな。共通語で語りかけたっちゅうねん。聞いとったやろ。お前じぶんらも」

「じゃあ、半魚人がいきなり人間の言葉を喋しやべったんで、びっくりしたのかもね」

「あー。それか！　いや、それちゃうて。ちゅうかな。もうええかげんな。そのパターンもあれやで。飽あきられとるで。主にわしにな」

「でも、カタリとしょっくりなものって、おしゃかな以外に何かあるかしら」

「いや、ユリカ、あんな？　べつにな？　わしが何に似とるとかな？　そんなん考えんでええやんか？　わしはわしやん？　それでええやん？　ダメ？　ダメかあ。そーかあ。いやあ、そうやないかとは思とったけどなあ。なーんでダメなんかのう……」

「ぼくが行ってみます」ルーシーは眉まゆをつりあげて唇くちびるを真一文字に引き結んだ。

　並々ならぬ決意をうかがわせる表情だ。こうなると、わりと何をしでかすかわからなかったりするんだよね、この子。いいんだけ

ど。や、よくはない。

　マリアローズは黒ビルを一いち瞥べつした。

　金歯男たちは腰の後ろで手を組み、横一列に並んで玄関前に立ちふさがっている。猫の子一匹ぴき通さない、たとえ用があっても近づくな、という構えだ。ルーシーが何を言っても聞く耳を持ってくれるとは思えないし、半魚人同様、追い返されるだけだろう。ルーシーが黙だまって引き下がれば、きっとそうなる。でも、たぶん、ルーシーは引き下がらない。ルーシーの性格からして、むやみに粘ねばる。そうなれば、一ひと悶もん着ちやく起きるだろう。果たして、ちょっとした揉もめ事ですむかどうか。

　ＺＯＯうちの半魚人も、見かけによらずけっこうな手て練だれだったりするし、こっちには最強のユリカがいる。その気になれば、金歯男たちをぶちのめして黒ビルに押し入ることは可能かもしれない。

　可能か、不可能か。問題はそこではない。雑誌のモデルについて尋たずねたいだけなのに、そこまでするのは明らかにやりすぎだ。事態が切せつ迫ぱくしていて、他に方法がないのならやむをえないけれど、そんな状じよう況きようでもない。何も好んで事を荒あら立だてることはないだろう。

　マリアローズはルーシーの襟えり首くびをつかんだ。「待って」

「ぐえっ」

「あ」

　ルーシーはちょうど歩きだそうとしていたところだったので、思いっきり首が絞しまる形になってしまった。

　マリアローズは慌あわてて手を離はなした。「ご、ごめん。大だい丈じよう夫ぶ？」

「痛いですよう」ルーシーは首をさすりながら振ふり返った。

　細い眉がひそめられて、赤い眼めが潤うるんでいる。女の子とみまごうばかりのかわいい顔をしているものだから、今まさに捨てられようとしていて、どうしてですか、なぜなんですか、捨てないで、お願いだから捨てないでください、みたいなかんじで必死に慈

じ悲ひを乞こうている子犬のようだ。

　こんな表情をされたら、どうにかしてやりたいとか、やっぱり思ってしまう。

　うざったいところも多々あるけど、悪気はないみたいだしね。でも、本当になんとかするつもりなら、余計に事は慎しん重ちように進めないと。

「まあ」マリアローズは軽く肩かたをすくめてみせた。「気持ちはわかるんだけどさ。あの様子だと、ただ行ってもおそらく無む駄だだと思うんだよね。出なおさない？」

　ルーシーは目を伏ふせてうなずいた。「……はい」

　両の拳こぶしがきつく握にぎりしめられている。どうしようもなく押しよせてくる感情の波を、懸けん命めいに抑おさえつけようとしているのだろう。

　お父さん、か。

　マリアローズはユリカやカタリと視線を交わして、そっとため息をついた。

　まいったなぁ。

　本当はルーシーに話しておかないといけないことがある。

　先延ばしにしているのだ。

　どうやって打ち明ければいいだろう。

　まだ迷っている。

Omenage 899 5th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

chapter.2

革命のフレーバー

「そういうことなら、今日じゃなくてもよかったのに」

　第六区〝屑くず街がい〟にあるモリー・リップス・アサイラムの責任者は二十四歳だ。

　マリアローズと初めて会ったときも二十四歳だった。

　この地にアサイラムが築きあげられたときも二十四歳だったらしい。

　エルデンでもっとも有名な医術士モリー・リップスは、おそらくずっと二十四歳だ。

　女性的な魅み力りょくに満ちあふれた悩のう殺さつ的な肉体の持ち主で、妖よう艶えんという言葉がぴったりで、若くないという意味では決してなく、二十代前半にはちょっと見えないけれど、誰だれが何と言おうと永遠の二十四歳なのだ。

「や、でも、前々から約束してたし」マリアローズは背負い袋ぶくろの中から包装された薄うすい小箱を二つとりだした。「それに、このチャンスを逃のがすと、予約の順番が回ってくるまで、またしばらくかかっちゃうもん。はい、これ。モリーとリーチェのぶん」

「あら。ずいぶんちっちゃいのねえ」

「僕もそう思ったんだけど、この大きさにもきっと意味があるんだよ。あのラクレーロさんのことだから、けちって小さくしたわけじゃないはずでしょ。これくらいがベストだって、そういう判断なんじゃないかな」

「チョコレートの革命。どんなものなのかしら」

「じつは、僕もまだ開けてないんだよね。なんていうか、すっごく楽しみにしてたから、そのぶん逆に、ちょっと怖こわいっていうか」

「期待しすぎじゃないの？」モリーは小箱を一つ、机の上に置いて、もう一つの包装紙に手をかけた。

　マリアローズは呆あっ気けにとられた。「……え？　嘘うそ？

もう開けちゃうの？」

「どうして？　ダメ？」

「ダメってことはないけど」

「気になるでしょう。一刻も早く確かめたいじゃない？」

「それはそうなんだけどさ、ほら、よくあるでしょ。ごはんでも、好きなものはあとまわしにして、とか。期待とか興奮とか、ためにためてじっくり味わってから、みたいな。ない？　そういうの」

「ないわね。好きなものは真っ先に、さっさと食べちゃう」

「うん。わかってる。そういう人だよね。モリーは」

「開けるわよ」

「ま、待って」マリアローズは胸に手をあてて首を横に振った。「心の準備が」

「いいえ。待たないわ」モリーの目がキラランッと光った。「ていうか、もう待てない」

　しなやかな指が包装紙を引き裂さくと、焦こげ茶ちゃ色の箱が姿を現した。材質は厚紙だろうか。渋しぶい金色で、ヌー・ベイル・アデフェット・ウィット、と小さく刻印してある。飾かざり気けはまったくないが、それがまたいいい。気のせいかもしれないけれど、箱まで格調高く見える。まずはその箱を眺ながめながら、中に広がっているだろう甘かん味みの大宇宙を想像してうっとりしたい。マリアローズなら間ま違ちがいなくそうする。モリーは違う。永遠の二十四歳は繊せん細さいにして寛かん大だい、なおかつ大だい胆たんだ。ああ！　もう箱の蓋ふたにその指が！　開ける？　マジで開けちゃう？　ホントのホントに開けちゃうの……？　モリーがちらっとマリアローズを見た。怖いほどに真しん剣けんな眼まな差ざしだ。行くわよ？　いいわね？　目でそう訊きいている。一応だ。あくまで念のためだ。たとえマリアローズが止めても、モリーは開けるだろう。どうせ無む駄だだ。この流れに身を任せるしかない。運ばれるしかない。もうどこまでも運んじゃってください。マリアローズはうなずいた。その直後、胸が焼けつくような痛みを覚えた。後こう悔かい。これは後悔だ。でも、遅おそい。手て遅おくれだ。

　モリーが箱を開けた。

　革命。

　それはまさしく革命だった。

　夕ゆう陽ひが射さしこむ広々としたモリー・リップスの診しん察さつ室に革命の大おお嵐あらしが吹ふき荒あれた。

　香かおりだ。これはカカオなのか。脳天を直ちよく撃げきする濃のう厚こうさだ。甘い。とろっとろに甘い。胸がいっぱいになりかけて、溺おぼれてしまいそうで、だが、息苦しくはない。もっと嗅かぎたい。この空気をいつまでも吸っていたい。せつなくてたまらない。かすかな苦味と濃密な甘さのハーモニーが、わずかな柑かん橘きつ系の爽さわやかさによって、どろどろとうねりながらも、軽かろやかに舞まっているのだ。それだけではない。この香りにはきらめきもある。幅はばがある。奥深さがある。この華はなやかさはどうだ。重厚で、なおかつどこまでも華か麗れいなのだ。香りの王様といっても過言ではない。それどころか、不足だ。帝てい王おう。皇帝。いや、これは神の領域だ。人じん智ちを超こえた芳ほう香こうだ。すべての人間にとって、この香りは初体験だろう。未知と遭そう遇ぐうした途と端たん、人は気づく。これだ。

　この香りと出会うために、自分は生まれてきた。

　今日まで生きてきてよかった。

　これこそが無上の幸福だ。

　何から何まで圧あつ倒とう的に満ち足りている。幸せすぎて、頭がぼうっとしてきた。なんだか身体からだの奥がじんじんする。変な気分だ。

「……やばいね。これ、やばい。やばすぎ。なんかもう、よくわからないけど、やばいよね。ありえないよね。ありえないのに、あるなんてね。すごいよ、ラクレーロさん。天才だよ。知ってたけど、知らなかったんだね。天才を超える天才がいるんだってこと。それがあの人なんだよ。やばいよ」

「あ……ぁ……」モリーのため息はとてつもなく色っぽかった。

　頬ほおが上気している。耳たぶまで真っ赤だ。

　モリーは箱に鼻を近づけて目をつぶり、左手で股こ間かんを押さえた。「だめ……いっちゃいそう。軽くいったかも。すごい、これ。ほんとにチョコレート……？　食べ物なの？　違うわよ、きっと。そんな次元のものじゃないわ」

「だって、革命だもん……」

「そうよね……革命……」

「食べたら、どうなっちゃうんだろ……」

「考えるだけで、もぉ……」モリーはまた熱い息を吐はいて、頭を左右に振ふった。

　その気持ちがわかってしまう自分が怖い。

　さすが、というのもおこがましい気がする。ソング・マニシュッテ・ラクレーロ。エルデンのみならず、サンランド無統治王国、いや、α大陸、いやいや、世界最高の菓か子し職人の呼び声も高い、〝砂糖のロード・オブ・君主シユガー〟、〝天上のヘブンリー・菓子王スイーツ・キング〟等々、無数の異名を持つ生ける伝説、超ちよう絶ぜつ天才の店ヌー・ベイル・アデフェット・ウィット、通つう称しようヌー・ベイルが徒歩圏けん内ないにあることを、ただただ感謝するのみだ。もっとも、ヌー・ベイルはエルデン第五区外れの飲食店街〝大食小路グラトン・アレイ〟にあるので、たしかに歩いてゆけるのだが、ぶらっと立ちよって、ぱぱっと買ってきて、というわけにはゆかない。選び抜ぬかれた秀しゆう逸いつな材料は、世界中の食材が集まるエルデンでもそう大量に手に入るものではないし、ラクレーロはとにかく手て間ま暇ひまを惜おしまない完かん璧ぺき主義者なので、その神の手が一日に作る数量にはおのずと限度がある。しかも、菓子職人の頂点に立っている暗黒大陸出身の男は客を選ぶ。その眼力は相手が甘味を愛する者か否いなかを的確に見抜いてしまうのだ。そんなわけで、ヌー・ベイルの至高、究極の菓子は、金さえ払はらえばいつでも好きなだけありつける、というものではない。とくに新製品ともなると、常に何巡月も先まで予約が埋うまっている。



　今日、マリアローズが買ってきた〝熱帯夜ルアの結晶モーナ〟はその新製品で、高名な料理評論家ギーアン・〝メガファット〟・タンブルー卿きようが「チョコレートの革命」と評した話題沸ふつ騰とうの一品だ。三巡月前に上限の三箱を予約して、今日、ようやく手に入れることができた。

「はぁ……」

「ふぅ……」

「あぁ……」

「はぁ……」

「ねぇ……」

「何……？」

「箱、閉めたほうがいいわよね……？」

「え……でも……」

「だって、このままじゃ……我が慢まんできなくなって、君のこと、襲おそっちゃうかも……」

「そっか……そうだよね……」

「閉めるわね……」

「待って、もうちょっとだけ……」

「そうね、もうちょっとだけ……」

「はぁ……」

「ふぅ……」

「あぁ……」

「はぁ……じゃ……閉めるわね……？」

「も、もう閉めちゃうの……？」

「そうよね、もうちょっと……」

「ふぅ……」

「あぁ……」

「はぁ……」

「あぁ……きりがないわ、これ……」

「そうだね……残念だけど……」

「閉めるわ」

　モリーは一気に箱の蓋ふたを閉めた。卓たく越えつした医術士らしい思いきりのよさだった。あの箱がマリアローズの手の中にあったら、おそらくもっとぐずぐずしてしまっていただろう。一箱九個入りなので、一つくらいつまもうとしたかもしれない。いや、たぶん、ぜんぶ平らげてしまったはずだ。だって、モリーでさえ涙なみだぐんでいる。断腸の思いで箱を閉めたのだ。

　マリアローズは目をつぶった。

　まだあの香かおりが残っている。

　完全に消え去るまでは、このままじっとしていよう。消えてしまってからも、少しだけ余よ韻いんにひたっていよう。それくらいは許されるはずだ。てゆうか、そうしないと、きっと何もできない。頭が働かない。

「で、でも」モリーが一つ咳せき払ばらいをし、ルアモーナの箱を机の上に置いて脚あしを組んだ。「君も大変ね。新入りくん、ちょっと変わった子なんでしょう」

「あ……うん、まあ、そうだね」

　ついついルアモーナの箱に視線をそそいでしまう。

　マリアローズはがんばりにがんばって無理やり箱から目をそらし、天てん井じようを仰あおいで首を回しながらため息をついた。「悪い子じゃないんだけど。なんていうか、ジェネレーションギャップっていうの？　そういうの、感じなくもないかな。今どきの若い子は、みたいな。そんなふうに言っちゃいたくなるんだよね。たまに、だけど」

「君だって、まだまだ若いじゃない」

「だよね。そのはずなんだけど、ルーシーを見てると、若いなーっ

てかんじがして。昔の自分と似てるとこもあるし。ただ、あれ？　とか思っちゃうこともけっこう多いんだよね。どうしてそこでそうなるの？　みたいな」

「それで、苛いら々いらしたり？」

「うーん……」マリアローズは腕うで組ぐみをした。「正直、そういうときもあるけど。でも、どっちかって言うと、戸と惑まどうことのほうが多いかな。何か注意するのでも、こういうふうに言えば、こんな反応が返ってくるとか、いまいち予想がつかないんだよね。ちょっとしたことで、ドーンと落ちこんじゃったりとか。そうかと思えば、あっさり立ちなおってたりとか」

「意外とそんなものじゃない？」モリーはくすりと笑った。「君も自覚しているでしょうけれど、今までは受け止めてもらって、受け容いれてもらう立場だったわけでしょう。仲間は全員、君より年も経験も上で、頼たより甲が斐いがあって、気のいい連中で。はっきり言って、恵めぐまれた環かん境きようだったわけじゃない」

「それはね。ほんとに実感してる。恵まれすぎてて、逆にプレッシャー感じてたりもしたけどさ。そんなのって本来、すっごく贅ぜい沢たくな悩なやみなんだよね」

「まあ、わたしは一人でがんばっていたころの君を知ってるから、正当に報むくわれただけだと思っているけれど」

「や、やめてよ。あのころは一人で勝手にいじけて、依い怙こ地じになってただけだし」

「一人で意地を張りつづけるのも、けっこう大変なものでしょう？」

　モリーにそう言われると、マリアローズとしてはうなずくしかなかった。何しろ、この法も秩ちつ序じよもない、自由の名を借りた暴ぼう虐ぎやくが幅はばを利きかせている無統治王国、その混こん沌とんの渦うずの中心に位置する首都エルデンで、モリーは誰だれよりも片意地を張って生きてきたのだ。

「今度は君の番というわけね」モリーは片手を上げ、首を傾かたむけてみせた。「これまでは上を向いていればよかった。君がもたもたしていたら、仲間が手を貸してくれて、引っぱりあげてくれた。

見上げることしかできないのも、そりゃあつらいわよ。けど、言い逃のがれができるでしょう？　結局、自分は一番下なんだからって」

「あー。それはあるかも。何かあると、そんなふうに考えて、逃にげてた気がする」マリアローズは片方の頰ほおをふくらませて、ぷう、と息を吐はいた。「そっか。そうだよね。もうその手は通用しないんだ」

「こうだから、ああだから、こいつはダメだ。ここがわからない。あそこがわからない。やっぱりこいつのことは理解できない。そんなふうに決めつけるのは簡単よ。でも、たとえば君の仲間はどう？　君のことをそんなふうに思っていたのかしらね」

「違ちがうね。きっと違う」

「だったら、身近にいいお手本がいるということじゃない」

「よすぎるんだよなぁ」

　思わず顔がゆるんでしまった。すぐに両手で頰を押さえて顔面の筋肉を引っぱりあげたけれど、モリーにはだらしない表情を見られてしまったことだろう。まるでお母さんみたいに、目を細めてやさしく微笑ほほえんじゃったりしてるし。いいけど。モリーだし。ていっても、やっぱり恥はずかしいけど。

「とりあえず、リヴァイスのモデルがルーシーのお父さんなのかどうか、それだけは確かめなきゃと思ってるんだけどね」

「そのモデルがあの男に似ているということは、もう言ったの？」

「まだ。てゆうか、ルーシーはエルデンにきたばっかだから、あれがどういうやつかも知らないしね。どうやって……どこまで説明しようか、迷ってるとこ」

「わたしはその場にいなかったし、聞いただけだからよく知らないけれど、普ふ通つうに考えれば生きているとは思えないわね」

「そうなんだけどね」マリアローズは顔をしかめた。「普通じゃないっぽいっていうか、どう考えても普通じゃないし……」

「万が一、新入りくんの父親がＳＩＸだったとしたら」モリーは脚

を組みなおして小首を傾かしげた。「状じよう況きようはなかなか複雑ね。お互たがいに知らなかったとはいっても、新入りくんにとって、ＺＯＯは親の仇かたきということになるわけでしょう。君たちだって、あの男の息むす子こと和わ気き藹あい々あい仲よくやろうなんて気持ちには、ちょっとなれないでしょうし」

「モリーだって、いい気はしないよね」

「わたしが？　どうして？」

「や、ほら、だって、アサイラムもさ。てゆうか、モリーも……」

「それはそれ、これはこれよ」モリーの笑顔は爽さわやかでさえあった。「あの件はけりがついたし、いつまでも恨うらんだり憎にくんだりしていたところで、何がどうなるわけでもないでしょう。まして、親と子は別人なのよ」

「まあ、それはそうなんだけどね」

「心情的にどうしても割り切れない、というのはわかるけれどね。わたしはそうでもないから。どのみち、どこかで断たち切ってしまわないと、終わらないでしょう。自分にそれができるのなら、やってしまう主義なのよ」

「僕は……」マリアローズは両腕で右みぎ膝ひざを抱かかえてうつむいた。「どうかな。わりと引きずっちゃうほうだし」

「どうしなければいけない、なんてことはないわ。わたしはわたしで、君は君でしょう。みんな違う。それでいいじゃない」

「でも、さ。今のところ、その可能性は低いんじゃないかと思ってるんだけど、もしルーシーの父親があれだったら──一応、心構えだけはしておいたほうがいいのかなって」

「大だい丈じよう夫ぶよ、君なら」

　迷いがいっぺんに吹ふき飛んだ、とまではゆかない。でも、モリーが言うのだから、きっとそうなのだろう。何しろ、モリーほどマリアローズのことを知っている者は他ほかにいないのだ。

　侵入者クラッカー稼か業ぎようを始めて間もないころだった。アンダーグラウンドで大おお怪け我がをして、にっちもさっちもいか

なくなり、アサイラムへと向かった。医術士の世話になりたくはなかったけれど、放ほうっておけば死んでもおかしくない傷だった。お金は惜おしかったものの、アサイラムなら良心的な価格で治ち療りようしてくれると聞いていた。アサイラムには何人もの医術士がいる。あのとき診みてくれたのがモリーでよかった。モリーだから自然に受け止めてくれたのだと思うし、そもそも初めて顔をあわせた瞬しゅん間かんに感じた言葉にはできない安あん堵ど、心にまとっていた重くて硬かたいくせに薄うすっぺらくて安っぽい鎧よろいがするりと剝はがれ落ちるような感覚、あれがなければ、マリアローズは負傷した身体からだを引きずって、アサイラムから逃げだしていたかもしれない。

「モリーと知りあってから、もう四年以上たつんだね」

「あら、まだそんなもの？　もっと大昔のような気がするわね」

「四年はそんなに短くないよ。けど、あっという間っていえば、あっという間なんだよね」

「わたしは最近、一日一日が長く感じられてしょうがないわ」モリーは肩かたをすくめて髪かみを揺ゆすった。「人手が増えたおかげもあるけれど、リーチェが有能すぎて、だいぶ仕事が減っちゃったのよ」

「モリーは今くらいでいいと思うけど。前はどう考えても忙いそがしすぎだったでしょ。身体壊こわさないのが奇き跡せきみたいなかんじだったし」

「そのぶん、リーチェがちょっと心配なのよね」

「真ま面じ目めだしなぁ、リーチェは」マリアローズは小さなため息をついた。「なんていうか、自分の限界に挑ちよう戦せんしつづけないといられない、みたいな。甘えとか妥だ協きようとか、一いつ切さい許さないよね。自分自身に対して」

「あれは一つの才能ね。医術式だって、どんどん力をつけているのよ。どんなにがんばっても、一日は二十四時間しかないわけだし、何かよっぽど特別なことでもやっているんじゃないかと思うじゃない？　訊きいてみたら、眠ねむっている間も自分の身体を隅すみ々ずみまで意識するようにしているとか、そんなことを言うの」

「……それって、寝ねてないんじゃ……」

「睡すい眠みんと食事だけはしっかりとっていると、本人は主張しているけれどね。たしかに、健康ではあるのよ。このわたしの見立てだから、間ま違ちがいないわ」

「なんか、違う領域に入っちゃってるのかな……」

「とにかく、集中力は異常ね。ずっと身体を動かしてきたせいかしら。理り屈くつ抜ぬきで人体を把は握あくしているし、そのうえ理論を学ぶことで、さらに理解が深まっている。勘かんもいいし、度胸もあるわ」

「べた褒ぼめだね」マリアローズはにやにやしてみせた。

「親馬鹿だと思う？」モリーは微び苦く笑しようを浮うかべた。

「ぜんぜん。実際、すごいなって、僕も思ってるし。リーチェはさ。誰だれかのためなら、どこまでもがんばれるんだよね。医術士は向いてるんじゃないかな」

「そうかもしれないわね」モリーは目を伏ふせてそっと息をついた。「まあ、今はまだやりたいようにやらせておくつもりだけれど、もう少し負担を軽くしてあげたいわ。そのうち何か手を打つつもり」

「……だとしたら、ルーシーの父親の件は、リーチェには絶対言わないほうがいいね。てゆうか、もちろん話す気なんてなかったけど」

「それは──」

　誰かがドアをノックした。

「噂うわさをすれば、というやつかしらね」モリーはドアのほうへと視線を投げた。「はいはい、どうぞ」

「入ります」ドア越ごしの声は、たしかにベアトリーチェのものだった。

　すぐにドアが開いて、書類の束を小こ脇わきに抱えた女性用ナース・医術士帽キヤツプに女性用ナース医術士服・ユニ姿のベアト

リーチェが診しん察さつ室に入ってきた。「ああ、やっぱりきていたんだな、マリアローズ」

「うん。覚えてた？　例のチョコレート。ヌー・ベイルのルアモーナ。買ってきたよ。きみのぶんもちゃんとあるから」

「そういえば、今日だったか」ベアトリーチェはモリーの机を一いち瞥べつして、くんくん匂においを嗅かいだ。「……何だ？　この香かおり。ほんの少しだが、やけにいい匂いがするな。なんというか、胸がいっぱいになるような。もしかして、これが？」

「え。まだする？」マリアローズも鼻から空気を吸いこんでみた。「うーん。する、かな？　微び妙みように。でも、こんなものじゃないよ。すっごいから。マジで」

「それは楽しみだ」

　微笑ほほえんだベアトリーチェの顔が、最近、やけに大人っぽく見える。精神的に成長して、モリーが言っていたように医術式の面でも長足の進歩を遂とげていることが、外見にまで滲にじみでているのだろうか。いや、それだけではないだろう。もともと顔立ちは整っていたし、深い青の瞳ひとみは澄すんでいて、美少女といえば美少女だったのだけれど、今は違う。どこからどう見ても、正しょう真しん正しょう銘めいの美人だ。

　なんでも、近ごろアサイラムを訪おとずれる患かん者じやの中には、ベアトリーチェ目当ての不届き者もけっこういるらしい。本人はいやがるだろうが、看板娘むすめというわけだ。まあ、でも、ホントにきれいだしね。出会ったころと比べたら、ほとんど別人だし。あのときはやっぱり、ちょっと男の子っぽかったから。ただ、凛りんとしてるところは変わらなくて。ただきれいなだけじゃなくて、かっこいいっていうか。

「……な、何だ」ベアトリーチェは頬ほおを赤らめて目をそらした。「そんな、じろじろ見ないといけないほど珍めずらしいものでもないだろう。頻ひん繁ぱんに会っているんだし。それとも、何か変か。わたしの顔」

「あ、ごめん。つい見とれちゃった」

「なっ、な、な、な、何だ、それは！　わけのわからないこと

を！　よせ！　そういう意味不明な──」ベアトリーチェは乱暴な手つきでモリーの机の上に書類の束を置いた。「はい、母様！　これに目を通しておいてください！　明日まででいいですから！」

「ええ」モリーはくすくす笑っている。

「もう！　二人して！」ベアトリーチェは部屋の隅すみから椅い子すを引っぱり出してきて、どんと腰こしを下ろした。「きっと二人で何かわたしの噂うわさ話ばなしでもしていたんでしょう！　そうに違いないんです！　くしゃみが出て仕方なかったんですから！」

「くしゃみ？」マリアローズはベアトリーチェの額に手をあてた。「熱は……ないっぽいね。風か邪ぜひいてない？　大だい丈じよう夫ぶ？」

「だ、大丈夫だっ！」ベアトリーチェはマリアローズの手を払はらいのけると、膝ひざに両手を押しつけてそっぽを向いた。「体調管理には気を遣つかっているんだ！　身体からだが資本だからな！　わたしも母様も、一年前よりずっと健康だし、毎日元気だ！」

「それならいいけど」

「お前こそ、大丈夫なんだろうな」

「僕？　なんで？」

「顔に疲つかれが出てるぞ」ベアトリーチェは身体をこっちへ向けて、マリアローズの顔をのぞきこんできた。「目の周りとか、あとは顎あごのあたりだな。ほんの少し、張りがない。お前は人一倍肌はだのきめが細かくて、色も白いからな。かえって目立つんだ」

「え……？　マジ？　嘘うそじゃなくて？」

「こんなことで嘘をついてどうする」

「そ、そうだよね」

「肉体的な疲ひ労ろうとはかぎらない。気持ちの問題かもしれないな。気疲れしているとか。悩なやみ事があるとか」

「あー……」

　うわ。

　鋭するどい。

　図星です。

　──と思ってしまった。

　マリアローズはモリーと視線を交かわした。モリーも少し気まずそうな顔をしていた。

「んー。まあ、そう……だね。ほら、新入りの、ルーシーって子。話したでしょ、前に。いろいろ面めん倒どうみてあげなきゃいけないし。そういうの、慣れてないからさ。それでちょっと、ストレスたまってるっていうのはあるかな」

「なるほど」ベアトリーチェは腕うで組ぐみをして、軽くうなずいた。「お前はわたしに何か隠かくそうとしているな。それはよくわかった」

　わ。

　お見事。

　そのとおりです。

　言葉を重ねてごまかすべきか。釈しやく明めいしたほうがいいだろうか。

　ベアトリーチェはマリアローズをじっと見つめている。

　ダメだ。嘘はつけない。

　だからといって、あれのことは。

「理由があるんだろう」ベアトリーチェは腕組みをほどいて、少しだけ笑った。「だったら、無理には訊きかない。いつか言えるときがきたら、話してくれ。それでいい」

「うん」

　肩かたから力が抜ぬけて、ため息が出た。

　でも、いつか、か。

　そんなときがくるのだろうか。

　もうすぎたことだ。過去の出来事ではあっても、ベアトリーチェにしてみれば、忘れることなんかできないかもしれない。それでも、できれば忘れていてほしい。思いださせたくない。むしろ、そのときなんて、永遠にこなければいい。

Omenage 899 5th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.3

子供じゃない

　家に帰ると、居間にピンパーネルとトマトクンときゅーがいた。ルーシーの姿は見あたらなかった。ほっとしてしまった自分がいて、こんなことじゃいけないと思いなおした。

　トマトクンはシャツの胸をはだけて、だらしなくソファに寝ね転ころんでいる。ピンパーネルときゅーはダイニングテーブルの椅い子すに並んで座り、仲よくお茶を飲んでいた。もう二十一時をすぎている。みんな夕食はすませたようだ。マリアローズもモリーやベアトリーチェと一いつ緒しよに外で食べてきた。今日はもともとそういう予定だったし、そのことは前もってみんなに伝えてあった。あの一件が持ちあがらなければ、なんということもない、ごく普ふ通つうの、ありふれた一日だったはずだ。

「ただいま」

「おかえりなサイ」ピンパーネルはそっと微笑ほほえんでくれた。

「くう」きゅーはいつもどおり愛らしい。

「む」トマトクンはのっそりと頭をもたげて、ぼんやりした黄玉トパーズの瞳ひとみをこっちに向けた。「おかえり。早かったな」

「モリーもリーチェも忙いそがしいし、朝が早いからね。早めに切りあげないとさ」マリアローズはトマトクンのすぐそばに腰こしを下ろした。

　テーブルの上に例の雑誌が置いてある。どうやら一応、話は伝わっているようだ。

「ルーシーは？」

「さあな」トマトクンはゆっくりと身体からだを起こして、後ろ頭をボリボリ掻かいた。「たしか、飯は一緒に食ったぞ。それから、風ふ呂ろに入るとか言ってたか。そのあとのことはわからん。俺はうとうとしてたしな。部屋にいるんじゃないか」

「外」ピンパーネルが庭のほうを指さした。「さっき出ていった。気配しまシタ」

「くう」きゅーがうなずいた。

「そっか。庭にいたんだ。帰ってきたとき、気づかなかったけど」

「聞いたぞ」トマトクンは雑誌をちらりと見た。「なんとなくだが」

「カタリとユリカ、きたんでしょ？」

「ああ。飯を食っていった」

「どこまで聞いたの？」

「雑誌に載のってる写真の男がルーシーの父親かもしれんとか、胸に６の刺青いれずみがあるとか」トマトクンは片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげて、口をへの字にひん曲げた。「カタリもユリカもはっきりとは言わなかったが、ようするに、写真の男があの腐れ外道に似てるんじゃないかってことだろう」

「ようするに、そういうことなんだけどね……」マリアローズは雑誌を手にとった。「トマトはどう思う？」

「何とも言えんな」

「写真は見たんだよね」

「ああ」

「まあ、顔が写ってないし」マリアローズは問題のページを開いた。「これだけで判断するなんて無理だよね。さすがに」

「うむ」トマトクンはマリアローズの手から雑誌をひったくって、鼻を近づけた。「べつに、においもせんしなあ」

「……や、写真だし。いくらきみの鼻が利くっていってもさ」

「そんなものか」

「そんなものじゃない？」マリアローズは一つ息をついた。「刺青がね。胸っていうのもさ。あれってたしか、左ひだり肩かただったよね」

「そうだったか？」

「そうだよ。覚えてないの？」

「むう。言われてみれば、そんな気もするな。だが──」

「だが？」

「思いだしたくもないが、やつの薄うす汚ぎたない面つらを拝んだのはあれが初めてじゃない」

「そうなんだろうなあとは思ってたけど。お互たがいに知ってるっぽかったし。でも、訊きかれたくないんでしょ」

「聞きたいか」

「気づいてる？　今のトマト、とてつもなくいやそうな顔してるよ。なんていうか……いまだかつてないくらい」

「そうか」トマトクンは雑誌をテーブルに置いて、表情を消そうとでもするかのように自分の顔を掌てのひらでゴシゴシこすった。「──まあ、そうだな。とにかく不ふ愉ゆ快かいなやつだった。少し変わったのかもしれんがな。昔は誰だれかとつるむようなやつじゃなかったんだ」

「一いつ匹ぴき狼おおかみだったってこと？」

「誰からも、どんなやつからも、毛け嫌ぎらいされてたってことさ」

「なんか、でも、ＳｍＣって、一部では妙みように人気があったよね」

「やつの下げ劣れつな品性がこの街にあってるってことなのか。それだけじゃないだろうな」トマトクンは軽く頭を振ふった。「やっぱり、やつも変わったんだろう。今から思えば、それは俺も感じた」

「最後のほうは、かなり大きくなってたからね。カリスマっていうか、そういうのがないと、あんな組織は作れないだろうし」

「刺青のことだがな」トマトクンは顎あごを撫なでながら視線を宙に泳がせた。「昔から左肩にあったってことはないと思うぞ。何しろ俺の記き憶おくだから、あてになるかどうかわからんが」

「そっか」マリアローズは眉をひそめて天てん井じようを仰あお

ぎ、ため息をついた。「ていっても、所しよ詮せん、刺青だしね」

　意外と手間がかかるらしいけれど、医術式でも刺青を消すことは可能らしい。もちろん、刺青を入れるのは簡単だ。安く、手軽にすませたいのなら、鉄てつ鎖さの憩いこい場に行けばいい。刺青を生業なりわいとする彫ほり師の露ろ店てんがいくつもある。いずれにしても、刺青は決定的な証しよう拠こにはならないということだ。

「今のところはリヴァイスに直接あたってみるしかないと思うんだけど、なんかねえ。とりつく島もないってかんじで、協力してくれそうな雰ふん囲い気きじゃなかったし。あのブランドのデザイナーとかその他の関係者は、どうもあの業界でも変わり者っていうか、一ひと癖くせも二癖もある人ばっかりみたいで、僕らの人脈じゃあ頼たよれるつてもなさそうなんだよね」

「場所はわかってるんだろう」トマトクンは悪戯いたずらっぽく笑ってみせた。「いっそ、正面突とつ破ぱしてみるか」

「それは最終手段かなぁ」

「最後の手として、考えてはいるのか」

「うーん。微び妙みよう」マリアローズは膝ひざを抱かかえこんだ。「ちょっとね。何だろ。流れっていうのかな。ルーシーがうちに入って、あれの話が出てきて。ああ、動きがありそうだなぁ、みたいな。そんな気もするんだよね。このところ、平へい穏おん無事ってほどじゃないけど、まあ、わりとそんなかんじだったでしょ」

「お前がＺＯＯうちに入ってからしばらくは、けっこう慌あわただしかったからな。あのころと比べれば、たしかにそうかもしれん」

「何もないに越こしたことはないんだけどさ」

「いざってとき、心の準備ができてないとな」

「そうだね。きみも寝ねてばっかいないで、明日から手伝って？　園長マスターなんだし」

「うむ」

　家の中ではたいていボサッとしているし、外でもボケボケしてい

るけれど、ここぞというときは誰だれよりも頼りになる。

　わかってはいるんだけど、睡すい眠みん時間多すぎなんだよね。きっと昼間もほとんど寝てたはずなのに、まだ眠ねむそうだし。

　マリアローズはソファから立ちあがって、テーブルの隅すみに置いてあった箱からティッシュペーパーを一枚抜ぬきとった。

「む？」

　トマトクンがマリアローズを見上げた。マリアローズはその目め頭がしらをティッシュペーパーで強めに、丁てい寧ねいにふいた。

「……何だ？」トマトクンは首を傾かしげた。

「目やに」マリアローズは顔を近づけて、ふいた部分をじっくりと確かめた。「うん。大だい丈じよう夫ぶ。とれた」

「そ、そうか」トマトクンは顔をそむけた。

　その頬ほおが少しだけ紅潮している。

　マリアローズは眉まゆをひそめた。「……な、何？」

「いや」

「いやって。なんか、変だし」

「何だろうな。よくわからん。ただ、ちょっと──」

「ちょっと、何？」

「照れくさかった……のか？」

「のか？　って。僕に訊かれても……」

「まあ、そんなかんじだ」トマトクンはまだ赤い顔をしかめて首筋を引っ搔かいた。「だってお前、そういうことはな。しないだろう、普ふ通つう。大の大人相手に。俺は子供じゃないんだぞ」

「き、きみが子供みたいに目やになんかつけてるからでしょ」

「大人だって目やには出る」

「そりゃそうだけど」

「とにかく、目やにくらい自分でとれるんだ」

「べつに、とれないとは思ってないってば。もうしないよ。それでいいでしょ」

「ああ」トマトクンはこっちを向いて、あー、と声をもらし、一つ咳せき払ばらいをした。「言っておくが、怒おこってるわけじゃないぞ。そうじゃなくて……何だ。つまり、びっくりしたんだ」

「うん。わかってる」マリアローズは雑誌を手にとってソファから離はなれ、丸めたティッシュペーパーを屑くず入れに捨てた。

　言われてみれば、たしかに母親が自分の子供にしてあげるようなことかもしれない。実際、でっかい子供みたいなところもあるんだけど。意外と自分一人で何でもできちゃう━ように見えて、変なとこが抜けてたりして。つい世話を焼きたくなっちゃうんだよね。余計なお世話ってやつなんだろうけど。もしかして、僕ってお節せつ介かいなのかな。てゆうか、それを言ったら、ＺＯＯうちの連中はみんなそうだと思うんだけどね。

「様子を見にいくのか」トマトクンはもうふだんどおりだった。

　マリアローズは軽く肩かたをすくめてみせた。「放ほっとくわけにもいかないでしょ」

「拾ってきたのはお前だしな」トマトクンは、ヒヒヒ、と似合わない下品な笑い方をした。

「だからさ。犬や猫ねこじゃないんだから、そういう言い方はやっぱり……」マリアローズは顔をしかめた。「でも、なんか、微妙に犬っぽいかも……」

　きゃあきゃあ騒さわぎながらまとわりついてくるルーシーの姿が思い浮うかんだ。なぜか尻尾しつぽが生えていて、その尻尾を振ふるというよりも、くるっくるくるっくる回している。三角形の耳まであった。声も、きゃあきゃあではなくキャンキャンで、あれはもう鳴き声だ。赤い眼めがうるうるしている。妙に小さいし。子犬……？

　マリアローズは頭を振って妄もう想そうを追い払はらった。

「行ってくるね」

「うむ」

「行ってらっしゃイ」

「きゅう」

　居間をあとにして外に出た。

　月がきれいな夜だ。月明かりだけではなくて、家の灯ひや、門だの塀へいの各所だのに設置されている常夜灯のおかげで、真っ暗ではない。

　ルーシーは庭だろうか。トマトクン邸ていの庭は、広大とまではゆかないにしてもけっこう広くて、身を隠かくせそうな木や茂しげみもある。ざっと見まわしたかぎりでは、それらしい人ひと影かげはないけれど、きっとどこかにいるはずだ。

「ルーシー」

　名を呼びながら庭を歩いていると、隅のほうの茂みで何か物音がした。そっちのほうへ行ってみると、いた。茂みの陰かげだ。背中を丸め、膝ひざを抱かかえて地べたに座っている。マリアローズに気づいていないということはないだろう。それなのに、顔を上げようとしない。まん丸い石にでもなろうとしているかのようだ。そうはいっても、さっきの物音はきっと、見つけてほしいというサインだったに違ちがいない。甘ったれなんだよね、結局。まだ若いし、僕にだってそういうとこがまったくないとは言えないし、責める気にはなれないけど。

　マリアローズはルーシーの隣となりに腰こしを下ろした。「何してるの？　こんなところで」

　ルーシーは首を左右に振ってみせただけで、何も言わなかった。

　しばらく黙だまっていた。

　このまま根比べをしてもいい。勝つ自信はある。でも、そんなの大人げない。

「今日はごめんね。途と中ちゅうで抜ぬけちゃって」

「……いえ」ルーシーは顔を上げかけて、また膝に押しつけた。「マリアさんと別れたあと、すぐ家に帰ってきましたし。今すぐどうにかなるようなことでもないと思うので、焦あせっても仕方ないですし。それに……」

「それに？」

「……それに……みんな、ぼくに何か隠してませんか」

「隠してるよ」

「え」ルーシーは今度こそガバッと顔を上げて目を瞠みはった。「か、隠してるんですか！」

「うん。きみだってそう感じてたんでしょ？」

「そ、そうですけど！　でも……」

「正解だよ。そのとおり。ま、僕はともかく、カタリとかユリカはそんなに得意じゃないからね。嘘うそついたり、隠し事したりするの。バレバレだったでしょ？」

「え……それは……」ルーシーは唇くちびるを引き結んで目を伏ふせ、鼻から息を吐はいた。「──なんか、ちょっとおかしいな、みたいな……そういうふうには、なんとなく」

「何を隠してると思う？」

「たぶん……ぼくのお父さんのことですよね。ていうか、ぼくのお父さんかもしれない、写真の人のことじゃないかと」

「ご名答」

「勘かん、なんですけど」ルーシーは横目でマリアローズを見た。「ひょっとして、マリアさんたちは写真の人を知ってるんじゃないですか？」

「かもしれない、だね」マリアローズは持ってきた雑誌を開こうとして、やめた。「とりあえず、今のところは」

　ルーシー・アッシュカバード。この子は決してバカじゃない。どうも調子外れなところがあって、ちょっと変だけど。

「人違いだったらいいな、と思ってる。正直ね。もしかしたらそいつかもしれないって僕らが疑ってる男とは、いろいろあったから」

「いろいろ……？」ルーシーは細い眉まゆをひそめた。

「そ。いろいろ」マリアローズは苦く笑しようした。「ほんとはね。できれば、いろいろ、だけですませときたいところなんだけど。ちゃんと説明しようとしたら、短くまとめてってわけにはいかないしね」

「それって」ルーシーはごくりと唾つばをのみこんだ。「──誰だれ……なんですか」

　やだなぁ。

　口に出すのも、けっこういやだ。

　だけれど、ずっと隠しつづけるわけにはゆかない。ルーシーにしてみれば、父親に関係しているかもしれないことなのだ。どのみち言わないといけないのなら、早いほうがいい。そんなことはわかりきっているのに、ぐずぐずしていた。

　状じよう況きようが状況なので、ユリカとカタリが行けと背中を押してくれなかったら、約束を破ってあとで謝ることにしていたかもしれない。でも、やっぱり今日、モリーに会いにいってよかった。モリーはいつだって元気と勇気をくれる。がんばっているベアトリーチェの姿を見ると、励はげみになる。

　マリアローズは一度、夜空を仰あおいでから、ルーシーを見すえた。「少し長くなっちゃうけど、いい？」

「はい」ルーシーは目をそらさずにうなずいた。

「そっか」マリアローズは一つ息をついた。「その男の名前は──」

interlude "secret party"

『あ、あ、あー。テスッ、テスッ。姿も見せずに拡声器スピーカー越ごしで突とつ然ぜん失礼。どうだい？　我わが輩はいの声、ちゃあんとクリアーに聞こえているかい？　ンンン～？　Ｆ×ＣＫ　ＯＫ？』

　歓かん声せいがあがり拍はく手しゆが沸わき起こる。すでにこのＲＯＯＭというよりＨＡＬＬは血湧わき肉躍おどる熱気と香こう気きが充じゆう満まんして野や郎ろうどものＤ×ＣＫはギンッギンッ！　女め郎ろうどものＣ×ＮＴはビッチョグチョ！　こうでなくっちゃいけねえパーティーってモンはいつだってこうでなくっちゃ！　このＨＥＡＴなWＡＶＥがわかるＣＯＯＬでＦ×ＣＫなヤツらだけが今こ宵よいこのＨＡＬＬには雁がん首くびそろえて今か今かとパーティーの開始時刻を待ち焦こがれている。

『じゃあもう一度いくよ？　ちゃあんと応こたえるんだよ愛らしい肥こえ溜だめのクソども？　準備はいいかいファッキンレディースア～ンドジェントルメ～ン？』

　ＹＥＡＨ！　ＹＥＡＨ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＡＹ！　ＹＥＡＨ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＡＹ！　ＹＥＡＨ……！

『Ｆ×ＣＫ　ＯＫ……!?』

　Ｆ×ＣＫ！　Ｆ×ＣＫ！　Ｆ×ＣＫ！　Ｆ×ＣＫ！　Ｆ×ＣＫ！　Ｆ×ＣＫ……！

『誰だい!?　誰が我輩にＦ×ＣＫしてほしい!?　この我輩の気高く熱いフィストで！　そのスウィートなＣ×ＮＴやＡＮ×Ｌが派手にぶっ壊こわれるまでＦ×ＣＫしてほしい脳のう髄ずい崩ほう壊かいしたクソッタレはいったい誰だ……!?』

　俺だ！　私よ！　こっちだ！　こっちにくれ！　俺に！　私に！　Ｆ×ＣＫ　ＭＥ！　ＫＩＬＬ　ＭＥ！　ＬＯＶＥ　ＭＥ！　ＦＵＵＵＵＵＵ×Ｋ　ＭＥＥＥＥＥＥＥ……！

『よォォォォォ～し。いぃ～い返事だ、グッボーイ、グッグゥール、かわいい雄おす犬いぬども、愛いとしい雌めす豚ぶたども。我輩もだァァァァ～いぶそそり立ってきたよ。臍へそに突つき刺さ

さっちまいそうさ』

　どこぞの雌豚が叫さけんだ。

　殺して！

　突き刺して！

『誰だい？　我輩の悪魔の塔デビルズタワーに串くし刺ざしにされちまいたい愚おろかな雌豚は……？』

　あたしよ！

『身の程ほど知らずだねえ？』

　お願い！

　我が慢まんできないの！

『ウェイ、ウェイ、ウェイト。待つんだハニー。まだ我輩、諸君の前に姿を現してさえいないじゃないか？』

　声だけでイッちゃいそうよ！

『ダメだよベイベェー。まだ我慢するんだ。我輩にもプランってものがある。だって、せっかくのパーティーだろう？　お集まりいただいた全員に心ゆくまで楽しんでほしい。それが我輩の願いなんだ。そこで、まずは我輩に一曲歌わせてくれ。なぁに、ほんの余興だよ。前ぜん戯ぎみたいなモンさ。お許しいただけるかな、セクスィーキュートパイ？』

　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ……！

『Ｆ×ＣＫ　ＯＫ』

　彼はマイクロフォンの代わりにギターを引っつかんで舞ぶ台たい袖そでの椅い子すから立ちあがり緞どん帳ちようを上げるよう手首と指でＬＯＶＥのシグナルを送った。

　緞帳が上がりはじめるとＨＡＬＬはＭＡＤでＣＲＡＺＹな拍手と歓声と嬌きよう声せいが渦うず巻まくＨＯＴなスィアターと化し

た。

　彼は舞台袖から舞台の中央めがけてゆったりと大おお股またで歩いた。

　狂きよう喜きと快楽の阿あ鼻び叫きよう喚かんの只ただ中なかにあっても彼はただ一人沈ちん着ちやく冷静でいられるそれこそが真のＳＴＡＲたる資格であり証あかしなのだ。

　頭は極地の氷ひよう塊かいよりもＣＯＯＯＯＯＯＯＯＯＬＤでありつつもこの胸は魂たましいは灼しやく熱ねつの太陽よりもＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＴでなければならぬ。心臓の奥の奥でひっそりこっそりと眠ねむっているＬＯＶＥなＦＩＲＥをふたたびメラメラ燃えたたせなければならない。

　今日は炎えん上じよう記念日だ。

　メモリアルデイ。

　歴史にしっかと刻みつけるために彼は歌うだろう。

　さあ舞台の中央はもうすぐそこだ。

　彼の独どく擅せん場じようとなるべきスィアターは照明を落としてその瞬しゆん間かんを待ち望んでいる。

　舞台の中央。

　センター。

　中心。

　彼は世界のど真ん中にいる。

　ギターのストラップを肩かたにかけて彼はおもむろに手をあげる。

　いざ！

　カモォン！

　シグナル！

我輩に光を！

いつだって光は闇やみを引き立てる。

光は闇のためにこそ存在するその真実を真理を世に知らしめるためにスポットライトが彼を照らした。

スィアターは熱い熱い熱すぎる熱気そのものといった風ふ情ぜいのあるうねりのような静せい寂じゃくに押しつつまれている。

彼は世界のど真ん中にひとりきりで立ちつくしてうつむいている。

この圧あつ倒とう的で絶対的な孤こ独どくを何ものかに理解してもらおうなんざ我輩これっぽっちも思ってやしない。理解どころか感じてほしいとも願っちゃいない。

かつて我輩を毒どく蟲むしと罵ののしった者たちよ。我輩を溝どぶ鼠ねずみ以下の汚けがれた生物であると蔑さげすんだ者たちよ。我輩を足あし蹴げにした者たちよ。我輩を踏ふみにじった者たちよ。

貴様らは腹ァ抱かかえて我輩を嘲あざ笑わらうだけ嘲笑って嘲笑いまくって涙なみだすら流して胸を張って生きそして死んでった。

貴様らは当時そのモーメント我輩より上等であったかもしれないが結局くたばるしか能がない糞くそ以下の糞であった。

貴様ら糞の生がまったくの無む駄だであったとは我輩ちっとも思わない。貴様ら糞の死し骸がいもあとにつづく動植物の養分にはいくらかの足しにはなったであろう。我輩その事実までを否定するものではない。

だが糞は死んだ！

死んだ！

死んでった！

くたばりやがった！

生き残っているのは我輩である！

我輩とほんの一ひと握にぎりの者たちだけが地上に足そく跡せきを残し今もこの世界にこうして己おのが両足で立っているのである！

そうして手に入れたのは圧倒的で絶対的な孤独であった！

たえがたき餓うえであった！

こらえがたき渇かわきであった！

ゆえに我輩、愛を欲ほつする。

勝利と孤独の果てに、ただ愛を。

「我輩のラヴソングを聴きいてくれ。ひょっとしたらつまらないかもしれないが、ベタかもしれないが、我輩の本当の気持ちを、わかってくれなくたっていい、ただ聴いてくれ。どうしようもない、ちんけなラヴソングを」

この指がギターをかき鳴らす。

アルペッジョなんて気の利きいたことはしない。やることといったらひたすらジャンジャラジャカジャカ鳴らすだけだしコード進行はいたってシンプルだ。

さあて行こうか。

歌いだしはかすれる寸前の高くて細い声だ。

はっきりしない雨の向こうで　君の傘かさだけ待っていた

何ど処こにいても君の事だけ想おもっていると　腐くさった台詞せりふ　吐はいたのは　不安だったから

霧きり雨さめだと　傘持とうかと　迷ってしまうから　激しい雨よ

降れよ　もっと降ってくれ　土ど砂しゃ降りになる程ほどに　重く　身体からだ　濡ぬらす程に



君の姿　見分けられぬ　雨の所せ為いに　誤ご魔ま化かそうと

傘の色は覚えてるから　雨がもっと降ればいいと

（間奏）

　音を掻かき消す雨の中で　君の傘だけ探してた

　この世の中で君の事だけ見つけだしたと　溺おぼれた台詞　吐いたのは　自信なかったから

　雨の中だと　君の顔も　よく見えないから　激しい雨よ

　降れよ　もっと降ってくれ　土砂降りになる程に　心の渇き　湿しめらす程に

　君の姿　見分けられぬ　雨の所為に　誤魔化そうと

　君の姿　覚えてるなら　雨がもっと降ってもいいと

　君の姿　見分けられれば　雨の中で君を見分け

　雨の中で君を抱だけば　こんな渇きも消えるだろうと

（『Heavy Rain』　作詞・我輩／作曲・我輩／編曲・我輩）

　弦げんをつま弾びく手を止めるとスィアターは雨上がりの夜空のごとく澄すみきったせつなさに息をひそめていた。

　彼は彼の彼による彼のためのスィアターをゆったりと見まわして首を傾かしげた。

「どうしたんだい、暴れん坊ぼうのエレファンツ、愛あい嬌きようたっぷりのライオネス？　嗚あ呼あ、そうだねえ、我輩のラヴソングがよくなかった。パーティーの前座として、前ぜん戯ぎとして、ふさわしいメリーメリィーソングじゃなかった。そういうことだろう、虚こ仮け威おどしのチープでピュアな愛いとし子たち……？」

誰だれかが叫さけんだ。

ＮＯ……！

その誰かさんは高々とあげた両手をひどく音楽的なリズムで打ちあわせた。

アフロで虹にじ色いろの色眼鏡サングラスをかけている妙みようになまっちろいその男の名を彼は知っている。ゲフリー・ピーチマン。元モン・ローのデザイナーで悪徳再生リヴァイスの理念に共鳴して新進気き鋭えいの若手として積みあげてきたキャリアのすべてを捨てて彼の許もとへと馳はせ参じた愛すべきうっかり者だ。ピーチマンはロックを知っていてパンクへと至ろうとしている。百ひやく戦せん錬れん磨まのくせして好きなあの子の前では童どう貞ていみたいにもじもじしやがるシャイな野心家だ。

最前列の席に陣じんどっている蛍けい光こうグリーンのラヴリィなヘアとリップをした顔面に数十本の細い針を埋うめこんでいる男であったことも女であったこともあるスウィートでファンキーな人物もホットピンクの瞳ひとみを輝かがやかせて拍はく手しゅしだした。

彼とも彼女とも言いがたいリチャード・〝ディック〟・コックのすべすべした肌はだは恋こいを予感させるラベンダー色だ。かつてM□S□R（手しゅ淫いんせよ、ねじこめ、犯やれ）のメインデザイナーだったリチャードは今やリヴァイスに集つどった愚ぐ劣れつでファナティックな天才鈍どん才さい大おお馬ば鹿か者たちの上にその偉い大だいなビジュアルアーティストとしての才能と卑ひ屈くつで傲ごう岸がんで高潔な精神性を武器に君臨している。

リチャードの右脇わきに控ひかえている伊だ達て男中の伊達男は元ガルベル・ダのリードデザイナーだったデメトリオ・アルベルティーニで四十四歳男おとこ盛ざかりのくっきり割れたその顎あごから放散されているフェロモンは日がな一日性技のことしか考えていない小こ悪あく魔ま娘むすめどもを根こそぎメロメロにしてしまう。女は犯やり倒たおすのが男はぶちのめすのが趣しゅ味みのデメトリオ通つう称しようデメちゃんは〝十二人殺し〟の異名を持つがこれはもちろん今までの殺害人数がたった十二人ぽっちであるという意味ではなく一夜で十二人ほど血祭りにあげたことがあるのだ。正確には十五分間で十二人。武ぶ闘とう派はといえばリチャードの左脇で醜しゆう悪あくなほどに堂々とした筋骨隆りゆう々りゆうた

る体たい軀くを誇ほこらしげにさらしている間ま抜ぬけ野や郎ろうはどうかといったらこれが笑えるほどの見かけ倒しだったりする。

　元フェチ・バルのデザイナーだったマスター・オニオンは無む駄だにマッチョなゲイでしかもドＭだ。あの形なりで乙女おとめトークが炸さく裂れつしまくるので仲間内では〝玉たま葱ねぎ姫ひめ〟呼ばわりされていて当の姫ときたらそれがすげえ屈くつ辱じよく的でやたらと嬉うれしくてたまらないらしい。

　スィアターの拍手は最初さざなみだった。

　やがて大波となった。

「Ｆ×ＣＫ　ＯＫ」

　彼は片手をあげた。

　拍手が止やんだ。

「どうやら気に入ってもらえたようだねえ。我わが輩はい、ちょっぴり安心したよ。何しろ、こうして人前に立つのも久しぶりだ。さしもの我輩も多少緊きん張ちよう気味なのさ。ほォーら。見てくれ。そそり立っているだろう、我輩の悪魔の塔デビルズタワー」

　彼がいろいろな意味でデインジャルォスきわまりない己おのれの股こ間かんを指さすと雌めすどもが歓かん喜きの声をあげ雄おすどもがどよめき一部の雄は声を裏返らせて身をよじった。彼は嗤わらった。

「大だい丈じよう夫ぶさ。心配は無用だ。我が盟友リチャードに言われたがねえ。暫ざん時じ見ぬうちに一寸ちよつと若返ったのではないかしらと。あるいはそう見えるかもしれないが、悪魔の塔デビルズタワーのサイズは変わっちゃいない。しかも我輩の腰こしつきは前にも増してシャープになった！」

　彼は鋭するどく腰を前後に振ふってみせた。

　スィアターが沸わいた。

「よりサヴィッジに……！」

　彼は荒あら々あらしく腰をグラインドさせた。

スィアターは沸ふつ騰とうした。

「諸君！」彼はギターを舞ぶ台たいに叩たたきつけて木こっ端ぱ微み塵じんに打ち砕くだいた。「ご覧のとおりだ！　我輩はここにいる！　悪徳再生リヴアイスのために！　我輩は帰ってきた……！」

スィアターはほとんど爆ばく発はつした。

彼の唾だ棄きすべきかわいらしい愛すべき豚ぶたどもが舞台に押しよせてくる。

誰よりも先に舞台に駆かけあがって彼に飛びついてきたのはリチャードがデザインした陰いん部ぶ隠かくしに角が生えてやがるたまらなく淫いん猥わいで背徳的な女性用ナース医術士服・ユニを身につけた甘いキャンディーみたいなボブカットのコケティッシュな一人の女だった。

彼女は一いつ瞬しゅんで医術士服を脱ぬぎ捨てて彼に抱きつくなり唇くちびるを寄せて舌を突つき入れてきてあふあふ喘あえぎながら深く激しく情熱的なキッスをしつつ彼の下半身を覆おおっているぴったりしたパンツをえらく器用に下ろしてしまった。

彼女はイレーネ。医術士にして弩ど級きゅうのサディストでかつマゾヒスト。彼は彼女のＨＯＴなＣ×ＮＴをまさぐってとっくに準備が整っていることを知り少しだけ嗤った。彼は一気に一息にどこまでも深く深くその深しん奥おうまで彼女に突き入れた。

「ヒイィッ」

「イレーネ。我が妻よ。どうだい、我輩の悪魔の塔デビルズタワーは」

「ああ。あああ。いい。いいぃ。死ぬ。死んでしまいます、ご主人様。もっと。もっと奥までください、ご主人様」

「相変わらず貪どん欲よくだねえ、イレーネ。これ以上かい。ここよりも奥に欲しいというのかい」

「そう。ああ。そうよ。あああ。お願い、ご主人様。ああ。殺して。わたくしをその悪魔の塔デビルズタワーで殺してしまって。お願い、ご主人様」

「よぉし、いいだろう、壊こわしてやる、殺してやるよ、マイディアァー、Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕ□Ｈｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」

　数かぎりなくいる妻のうちの一人であるイレーネ・リルレルコルデと立ったままＦ×ＣＫしている彼の脚あしに大勢が絡からみついてきて息を荒あららげ舌を這はわせ腰を振り振り中には我が慢まんできずそのへんのやつとＦ×ＣＫしはじめる慌あわて者もいたりしてかぎりなくファニーファニーファニー。彼は腰を動かしながらシャウトした。

「さあ！　さあ！　さあ！　パーティーだ！　パーティーだ！　パーティーだ……！　今こ宵よいはどうかぞんぶんに楽しんでってくれたまえ！　やりたいことはぜんぶやれ！　出したい液はすべて出すんだよ！　しぼりとれ！　飲み干すんだ！　そうして我輩とともに宣言しよう、高らかに！　リヴァイス！　リヴァイスッ！　リヴァァァァァァァァーイスッ！　この街にこの国にこの星に悪徳という名の愛を取り戻もどすんだ！　愛をこの手に！　Ａａａａａ□Ｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ□Ｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａ□Ｋｕｈｉｈｙａ□Ｈａｈａｈａｈａｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

Omenage 899 5th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.3+ (continued)

迷いあう堂々巡り

「……ＳＩＸ……ＳｍＣ……」

　ルーシーは地面に目を落として、唇の端はしを嚙かんだり、手を握にぎったり開いたりしている。本当は耳をふさぎたい。もういやだ。これ以上、聞きたくない。でも、最後までなんとか我慢した。マリアローズの長い話がようやく終わった。そうか。そういうことだったのか。呆ぼう然ぜんとするしかない。そんな様子だ。

　気持ちはわかる、なんて、簡単には言えないけれど、想像することくらいはできる。浮うき沈しずみが激しいわりに、妙みようにあっさりしているところもあって、深刻なのかそうでもないのか、いまいちよくわからなかったりするものの、けっこう真ま面じ目めな子だ。こんなことを聞かされて平気なわけがない。

　何しろ、自分の父親に違ちがいない、とルーシーが主張している雑誌のモデルは、あのＳＩＸかもしれないのだ。

　ＺＯＯはかつてＳＩＸ率いる加虐的Ｓ殺戮ｍ愛好会Ｃと戦った。一言でいえば、いろいろあって秩ちつ序じよの番人に加勢した、ということになる。そのいろいろから細かい事情をとりのぞけば、トマトクンの旧友、秩序の番人の先代総長〝太たい陽よう鬼き〟デニス・サンライズが、一号区会戦でＳＩＸの罠わなにはまって無残な死に方をした。その仇あだ討うちのために、ＺＯＯは泉セン里リ決戦に参加した。ＳＩＸをしとめたのはトマトクンなのだ。

　もし、本当にＳＩＸがルーシーの父親だとしたら──、

　ルーシーにとって、ＺＯＯの園長マスタートマトクンは親の仇かたきだ。何も知らずに、仇きゆう敵てきのクランに入ってしまったということになるのだ。

「で、でも」ルーシーはぎこちなく笑った。「そ、その……ＳＩＸっていう人、死んじゃったんですよね？」

「死んだはず、なんだけどね」マリアローズはため息をついた。「あれは普ふ通つうじゃないから。たとえば、首を斬きり落とされても死ななかったりとか」

「く、首をっ⁉」

「どうして死なないのか、とか、そういうことは訊きかないでね。そのへんは僕にもわからないし。とにかく、そんなこともあったりしたしさ。それに、じつはずっと引っかかってることがあって──」

　あのときマリアローズは、重傷を負って意識を失いかけていた。おかげではっきりと覚えているわけではないのだが、あとで皆みなに尋たずねて、記き憶おくが間違っていないことだけは確かく認にんした。

「ちょっといやな話かもしれないけど、トマトはＳＩＸを倒たおしたとき、身体からだをバラバラにしたんだ。それから、サフィニアに魔ま術じゆつで死体を燃やせって。ところが、ＳＩＸの手下にジェイって男がいるんだけど、そいつがさ──」

　ジェイ。

　まがまがしい鷲わし鼻ばなと不ふ吉きつな立ち姿が印象に残っている。

　あの男はおそらく、ピンパーネルと同じラハン大陸出身の元アッサシンだ。ピンパーネルが教えてくれたところによると、非常に稀まれなケースではあるものの、似たような背恰かつ好こうの者を一いつ緒しよに訓練し、容姿を整形して二人一組で運用することがあるらしい。互たがいに入れ替かわりながら、ふだんは一人が表に出て、もう一人は裏方に徹てつし、いざというときは二人で攪かく乱らんしつつ目的を遂とげるというわけだ。

　ジェイの片割れはピンパーネルがしとめた。でも、ジェイはもう一人いた。どこかで野垂れ死んでいなければ、今もどこかで生きているだろう。

「どうも左ひだり腕うでらしいんだけど、ＳＩＸの死体の一部を持って逃にげたんだ」

「左腕……ですか？」ルーシーは、それがどうしたんですか、とでも言いたげだ。

「そう」マリアローズは雑誌を開いた。「あと、これは僕だけかもしれないけど、もう一つ気になることがあって」

　例のページには折り目をつけてあった。上半身裸はだかの男が逆立ちをして〝悪徳再生Revice〟の看板になっている、とでも言えば

いいだろうか。もっとも、実際に逆立ちをしているわけではないだろう。たぶん、写真自体を逆さまにしているだけだと思うが、男の身体にペンキか何かで描えがかれた絵のような文字はちゃんと読むことができる。

　Revice

　悪徳再生

　いや、Reviceではない。R9viceだ。

　男の胸のちょうど真ん中に位置している９をひっくり返せば、つまり、もとどおりにすれば、６になる。

「ＳＩＸの左ひだり肩かたには、６の刺青いれずみがあったんだ」

「でも、写真の人は胸ですよね」ルーシーは雑誌を一いち瞥べつして眉み間けんに縦たて皺じわを刻んだ。「言ったと思いますけど、ぼくのお父さんは刺青なんかしてなかったです。少なくとも、胸の真ん中には。けど、単なる刺青じゃないですか」

「本当に刺青なのかな」

「え？」

「ジェイが持ち去ったのは、左肩付きっていう言い方はどうかと思うけど、ＳＩＸの左腕なんだ。なんで左腕だったのかな。僕がジェイなら──」マリアローズは眉まゆをひそめた。「首を持ってく。だって、ＳＩＸは首を切られても死ななかったんだし」

「……あの」ルーシーの顔が引きつっている。「正直、マリアさんが何を考えてるのか、何を言おうとしてるのか、ぼくにはさっぱり……」

「ごめん」マリアローズは頭を振ふった。「僕もまだ整理がついてないんだよね。根こん拠きょがあるわけじゃないし。思いつきみたいなもので。ただ、気になってさ」

「それ、ぼくのお父さんに関係あるんですかね」ルーシーはうつむいて芝しばをむしった。「なんか、実感がわかないです。ＳＩＸっていう人がぼくのお父さんだとは、どうしても思えないですよ。だって、ぼくのお父さんなんですよ？　もしぼくのお父さんがＳＩ

Ｘって人だとしたら、ぼくはその人の子供なんですよ……？」声が震ふるえた。「ぼく、首を切られても死なないんですかね？　父親がそんなに悪い人だとしたら、ぼくも悪い人になっちゃうんですかね？」

「きみときみの父親は別の人間だよ」

「人間じゃないとしたら？」

　ルーシーはこちらに顔を向けた。

　笑え顔がおだった。

　なんだか恐おそろしくて仕方なくて、破れかぶれだ、こうなったらもう笑うしかない。他ほかにどうしようもない。崩くずれかけて、危あやういところで維い持じしているけれど、今にも砕くだけ散ってしまいそうだ。そんな笑顔だった。

「首を切られて生きてるなんて、ありえないでしょう。そんなの人間じゃないですよ。人間じゃない、別の何かの子供は、やっぱり人間じゃないはずですよね。お母さんは人間だったけど、お父さんは人間じゃなかったら……」ルーシーは唇くちびるを強く嚙かんだ。「どうなるのかな。わからないけど……」

「たとえ人間じゃなくても」

　ちょっとためらってしまった。

　変なことを思いだしてしまったからだ。

　いまだに後こう悔かいしている。なんであんなことを言ってしまったのか。

　やめればよかった。でも、仕方なかった。緊きん急きゅう事態だったのだ。それで、やむをえず、心にもないことを。

　本当に、少しも、ぜんぜん、ちっとも、これっぽっちも、まったく思っていない。どんな姿でも、とか、正体が犬でも猫ねこでも、とか、異界生物フリークスでも、大ゴ脂ツ羽キ蟲ーでも、とか、それこそありえないから！　首をぶった斬ぎられて生きてる人間よりずっとありえないんで！　ああ、もう、やだ。なかったことにしたい。記憶から抹まつ消しようしたい。でも、僕だけが忘れても。聞

かれてたし。てゆうか、相手がいたし。や、だけど、ほら、嫌きらいにならないとしか言ってないしね？　それだけだし。セーフだよね？　セーフ。てゆうか、それ以上の気持ちはぜんっぜん、少っしも、まったく、まるで、ゼロだし、ゼロ。むしろ、マイナスっていうか。トマトの家に引っ越こしてから、顔をあわせる機会が減ったけど、激減したけど、平気だし。平気なんてものじゃないし。快適なくらいだし。てゆうか、あいつが悪いんだよ。あいつが。なんでこう、普ふ通つうの友だちみたいにできないのかな？　すぐに好きとか愛してるとかそういうことばっかり言うし。そんなの求めてないし、いらないし、恥はずかしいし、迷めい惑わくだし、うざいだけなんだよね。面と向かって、やめてって何回言ってもやめようとしないしさ。あそこまでいったら、もういやがらせじゃない？　てゆうか、おかしいんだよ。昼飯時ランチタイムだって、かなり有名なクランなわけだし。その頭領マスターなんだからさ。体面とか、体てい裁さいとか、プライドとか、いろいろあるでしょ？　そのへん考えないとさ。僕が心配するようなことじゃないけど、や、そうでもなかったりするんだよね。実際問題、昼飯時ランチタイムの人たちと出くわしたりすると、けっこうやばいし。もう。マジで。怖こわいから。ホントに。ベティなんて、ある意味、まだマシなほうでさ。とくに女性陣じんとか、ほんっとにやばいから。いつか殺されるんじゃないかってくらい。刺し客かくを送ってきそうってより、自ら刺客となって暗殺しにきそうっていうか。それもあって、もうトマトの家以外では暮らせそうにないっていうか。

　僕のせいじゃないのに。僕は悪くないのに。絶対、悪くないのに。

　あいつが悪い。ぜんぶ、あいつが。あいつが厚かましいから、図ずう々ずうしいから、恥はじ知しらずだから、変態だから。

　てゆうか、落ちつこう。冷静になろう。あいつのことなんか思いだしてる場合じゃないから。思いだしたくもないし。そんな状じょう況きようじゃないから。

　ルーシーがすがるような眼まな差ざしでこっちを見ている。思いっきり、見まくっている。

　マリアローズは、こほん、と咳せき払ばらいをして言いなおした。

「たとえ、人間じゃなくても、きみはきみ──」そうして手をのば

し、ルーシーの背中を軽く叩たたいてやろうとした。「……れ？」

　手が止まっている。止められたのだ。

　何かが、何者かの手が、マリアローズの手首を握にぎっている。

　てゆうか、手の甲こうになんか、いやぁーな感かん触しよくが。

　見ると、その何者かが跪ひざまずいてマリアローズの手の甲に頬ほおずりをしていた。

「ムフッ」

「──じゃないだろ！」マリアローズは慌あわてて手を引っこめた。

　なんで、どうしてこいつがここに、いつの間に。

　やつはシュタッと立ちあがってマリアローズの手から雑誌をかっさらい、問題のページを見て柳りゆう眉びをひそめた。「なるほどネ」

「……や……なるほど、じゃなくてさ……」マリアローズは額を押さえた。

「え……」ルーシーはやつを見上げて、あんぐりと口を開けた。

　うん。わかるよ。そりゃあ驚おどろくよね。いきなりだし。唐とう突とつなんだよ。いっつもいっつも。気配とかぜんぜん感じないし。だいたい、いつからそこにいたわけ？　怖いんだってば。そういうの。もっとはっきり言えば、きもいよ。マジできもい。きもすぎなんだよ。けど、もうさ。口に出すのもめんどくさくて。だって、何回も、何回も、何回も、何回も何回も何回も何回も何回も、数えきれないほど言ってるわけだし。言ってもやめないし。てことは、いくら言っても無む駄だだってことでしょ？　ようするに、あれだよね？　バカにつける薬はないってことだよね？　そういうことでしょ？　さすが元祖だよね？　馬ば鹿か一号の異名は伊だ達てじゃないってことだよね……？

「事情はだいたい理解したヨ」馬鹿一号は雑誌を閉じてうなずいた。「ようするに、この写真の人物が灰被りアツシユカバードクンの父親かもしれない。だが、同時に、あのＳＩＸなんじゃないかという疑いもある。こういうことだネ？」

「は、はい」

　ルーシーが迂う闊かつにも首を縦に振ふってくれちゃったりするもんだから、馬鹿一号がつけあがるんじゃないか。なんでわかんないかなあ、馬鹿一号対策としては無視するっていうのが一番有効だっていうのに、あんまりそういう余計なことばっかりしてくれると、今度から馬鹿四号って呼んじゃうよ？　いいの？

「フム」馬鹿一号は雑誌をルーシーに向かって放ほうり、腕うで組ぐみをして顎あごをつまんだ。「ＳＩＸは野菜野や郎ろうにしとめられたとばかり思っていたんだけどネ。このボクが直接手を下すまでもない。ボクとは関かかわりのないところで見るにたえない死に様をさらし、なおかつボクはその死に対して一いつ顧こだにしない。そんなボクにとって無価値な死こそがあの下げ衆すにはふさわしい。そう思っていたんだが、生きながらえているのだとしたら話は別サ」

「……あの」ルーシーはおそるおそるといったかんじで馬鹿一号に訊きいた。「アジアンさんも、ご存じなんですか。その……ＳＩＸっていう人を」

「まあネ」

　馬鹿一号は忌いまわしい二つ名を連想させてやまない絶対零れい度どの笑えみを浮うかべた。

　虐殺人形カーネイジドール。

　彼をそんなおぞましい名で呼ぶべきではない。彼は殺さつ戮りくのためだけに生みだされた心や魂たましいを持たぬ自動人形オートドールでは決してないからだ。

　そんなことはわかっていても、そのあまりにつめたい、手をのばしてふれるどころか、近づくことすら叶かなわない、どこまでもつめたすぎる微び笑しようを目にした者は、まず第一に己おのれの死を覚かく悟ごするだろう。命の儚はかなさに思いを致いたし、辞世の歌をひねろうとして、その時間すら与あたえられることはないのだと慌てふためく。命いのち乞ごいをしても無駄だ。我が死はもはや確定事じ項こうだ。そうして悟さとるのだ。自分の目の前にいる彼こそが、あの虐殺人形カーネイジドールだということを。それは彼にこそふさわしく、彼以外の何ものにも似つかわしくない、彼の

ためだけに生みだされた異名なのだということを。

　わかってて、やってるのかな。

　だったら、やめたほうがいい。わかってなくても、やっぱりやめたほうがいい。

　そんな笑顔よりもっと、ずっと、何百倍も、何万倍もきみに似合うすてきな笑い方を、きみはちゃんと知ってるんだから。

　友だちなら、きみにそう言ってあげることだってできるのに。

「それで？」アジアンは首を傾かたむけてみせた。「写真の男を捜さがしているが、まだ見つかっていないといったところなのかい？」

「あ、はい」ルーシーは下を向いて雑誌をぎゅっと抱だいた。「リヴァイスっていう……ブランド、というんですか。そこの、モデル……？　みたいな、そういう人らしいんですけど」

　なんだか要領をえない説明がつづきそうだ。しょうがないけどね。あれやこれやの用語一つとっても、ルーシーにはまだちんぷんかんぷんだろうしさ。でも、この調子だと、一分ですむ話が一時間も二時間もかかってしまいそうだ。こんなことで苛いら々いらしたくない。

　マリアローズはため息をついた。「かいつまんで言うとね──」

　かくかくしかじか。

　はい、説明終しゆう了りよう。

　所要時間は予定どおり一分足らずだった。

「フッ」アジアンは前まえ髪がみを指先で払はらった。「さすがはボクのマリア。古今無む双そうの素す晴ばらしい解説だったヨ。流りゆう暢ちようにして切れ味鋭するどい弁舌の隅すみ々ずみに至るまで比類なく美しい。まさに美の展覧会。だが、その絢けん爛らん豪ごう華かな展覧会はどうか、ボクだけが入場可能な、ボクのためだけに開かい催さいされる秘密の催もよおし物であってほしい。そんなふうに願ってしまうのは、ほんの少し贅ぜい沢たくかな？　でも、ボクを許しておくれ、ボクのマリア、どうしてもこの滾たぎる

思いを止められないんだ、スウィートハート」

「言いたいことはいろいろあるんだけど、とりあえず僕はきみのじゃないから」

「そんなふうにちょっぴり照れ屋なところも、むろんキミの魅み力りよくの一つだということは言うまでもないヨ、マイスウィーテスト」

「人語を解しないところは、きみの数かぎりなくある欠点のうちの一つだよね」

「究極の愛は言葉の裏側に隠かくされた真実を探さぐりあてる能力を人に授さずけるものサ」

「じゃあ、きみが究極の愛だと思ってるそれって、たぶん違ちがうんじゃない？　きみにそういう能力が備わってるとはとうてい思えないし」

「ああ！　ボクには聞こえる！　キミの心の声が！　ボクを罵ののしりながらも、ボクを求めてやまない、その熱い気持ちが……！」

「幻げん聴ちようだよ」

「わかっているサ、神秘のミステリア薔薇スローズ、ボクに任せてくれたまえ」

「は……？」

「このボクが──」アジアンは口をつぐんだ。

　唐とう突とつだった。

　その姿が掻かき消えた。

　いなくなってしまった。

　違う。

　そんなわけがない。移動したのだ。どこへ……？

　マリアローズはあたりを見まわそうとした。その前に何かが降ってきた。一いつ瞬しゆん前までアジアンがいた場所だ。

彼は金こん色じきに輝かがやく毛をまとっていた。ふだんは新雪のごとき純白の被ひ毛もうが、攻こう撃げきモードに入ると、きらきらと黄こ金がね色に輝きだすのだ。目も爛らん々らんと光って、牙きばを剝むき、爪つめをにゅいっと突つきだした野性的な姿は、さすがにちょっと恐おそろしいけれど、見慣れると怖コワかわいい。

それにしても、どこか猫ネコ科の肉にく食しよく獣じゆうのようでもあり、熊くまのごとき獰どう猛もうきわまりない猛獣のようでもある彼は、異界生物フリークスなのか、それともこの世界のどこかで種を残している生き物なのか。マリアローズは知らない。興味はあるけれど、是ぜが非ひでも知りたいとまでは思っていない。べつに知っていても知らなくても変わらない。彼は同居人、人ではないとしても人同然で、仲間で、言葉を交かわすことはできなくても心は通じている、友だちだ。今日はなんか、ちょっと遅おそかったけどね。それでも、きてくれた。

きゅーは地面に着地するなり、すぐに跳とんだ。当然、きゅーが向かう先には、我が家に無断で入りこんできた不届き者がいる。ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

「ムッ……！」

不届きな馬ば鹿か一号はきゅーの強きよう烈れつな右フックをまともに食くらった。ように見えた。いや。マリアローズは舌打ちをした。あたっていない。残像か。馬鹿一号はもう五メーテルばかりもきゅーから離はなれたところにいる。無む駄だに速い。でも、きゅーだって。

「がんばって、きゅー！」

「くう！」

きゅーは愛らしく一声鳴いて、さらに馬鹿一号を追った。ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨ……！

「──な、なぜマリア、ボクじゃなく彼を応おう援えん……ヌアッ！」

　勝手に動どう揺ようしたらしい。馬鹿一号はきゅーのかっ飛び回し蹴げりをよけられなかった。かろうじて腕うでで防ぼう御ぎよして、踏ふんばりきれずにドーンと吹ふっ飛ばされて、地面に倒たおれこむことはなかったけれど、そこにきゅーが襲おそいかかっていった。ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

「──くっ！　だんだん手て強ごわくなって……！」

　馬鹿一号が飛びさがって、きゅーは突進し、ダブルのフックと前蹴りを立てつづけに繰くりだして、これを紙かみ一ひと重えでかわした馬鹿一号はついに反はん撃げきに転じた。きゅーに足あし払ばらいをかけようとしたのだ。きゅーはちゃんと読んでいた。ジャンプしてシャーッ！　もう少しで嚙かみつかれるところだった馬鹿一号は、転がって、転がりまくって逃のがれ、飛び起きてきゅーのパンチをタンタンタンッと手で捌さばいた。

「フフッ！　しかし！　すでにキミの攻撃は見切ったヨ……！　残念ながら、キミのパンチは身体からだの構造上、軌き道どうがワンパターンなのサ！」

　それはどうかな、とばかりにきゅーは一吼ほえして、左のフック！

「ほらネ！」

　右のアッパーカット！

「──ムッ!?」

　間を置かずに左のフック、さらにはグンッとのびていってガードの隙すき間まを突く驚きよう異い的な右のストレートを披ひ露ろうした。

「な──」

　きゅーを見くびるからだ。

　馬鹿一号の下した顎あごだった。

　きゅーのストレートが炸さく裂れつした。「ガッ……！」

　馬鹿一号は三メーテルか四メーテルほども宙を背泳ぎして、地面に叩たたきつけられる寸前だった。猫みたいにくるんっと回転して、音もなく着地した。

　唇くちびるの端はしに血がにじんでいる。

　馬鹿一号は右手の親指でその血をぬぐった。

　薄うす青あお色の瞳ひとみが燃えている。

　氷の両眼に宿る炎ほのおは、だが、どこまでもつめたい。

「やるじゃないか」

「くう……」

　きゅーも何か感じたのだろう。すぐには距きょ離りをつめようとせず、両手両足を地面につけて背を丸め、いつでも飛びだせそうな姿勢で様子をうかがう構えだ。

「本当に」馬鹿一号は笑えみを浮うかべた。「キミは優ゆう秀しゅうな見張りだヨ。このうえなく、ネ。キミがいてくれるおかげで、ボクは──」

　降りそそぐ月明かりが、そのかすかな笑顔をひっそりと包みこんでいた。

　あいつ、なんで、あんなにやさしい顔で。

「ボクのマリアに近づくこともできやしない。まったく、ひどい話サ」

　アジアンは夜空を振ふり仰あおいだ。

　緊きん迫ぱくした空気がふっとゆるんだ。

　その瞬しゅん間かんだった。

　アジアンは繰り返し後方に宙返りして遠ざかってゆき、塀へいの上に跳び乗った。きゅーが駆かけだそうとして、思いとどまったようだ。きっと察したのだろう。追いかける必要はない。今夜のアジアンはもう、放ほうっておいても去るだろう。執しゅう念ねん深く

て、粘ねん着ちゃく質しつで、しつこくて、あきらめが悪くて、邪じゃ魔まくさくて、うざくて、変態なのに、どういうわけか退ひき際ぎわだけはいいのだ。本気を出せば、きゅーを出し抜ぬくことだってできるはずなのに、そうしない。バカなやつ。だから、馬鹿一号なんだよ。

「マリア」アジアンは胸に手をあてた。「この件についてはボクに任せておいてくれ」

「……この件？」

「雑誌の写真にうつっている人物の件サ」

「へ？　なんで？　え？　どうしてそういうことになるの？　バカだから……？」

「フッ……」馬鹿一号は額を押さえて頭を振ってみせた。「他ほかならぬマリア、マリアマリアマリア、愛いとしいキミの頼たのみだ。聞き入れないわけにはいかない。なぜならキミはそう、ボクのすべてなんだからネ」

「や、てゆうか、何も頼んでないし……」

「とにかく、この件はボクに一任してくれてかまわない。なあに。ちょっとした愛の証あかしだと思ってくれたまえ。もちろん、礼など不要だヨ。どうしても礼をしたいというのなら、そうだネ、一度だけでいい、愛している、と、ボクの目を見て、真心をこめて、そっと囁ささやいてほしい」

「しないよ？　するわけないでしょ？」

「それじゃあ、マリア！　明日の夜には何か報告できると思うヨ！　そのときまで、優秀すぎる見張りに、どうか言いふくめておいてくれ！　ボクは決して敵じゃないとネ！」

「きゅー。あれ、敵だから。未来永えい劫ごう。何があっても」

「くう」

「はにかみ屋のキミに、そのうち愛をこめて百万本の薔ば薇らを贈おくろう！」

「絶対やめて。迷めい惑わくだから」

「さあ、そろそろボクは行くとするヨ！　また明日！　極限愛ラヴ・マツクス……！」

　アジアンは塀の向こうへと消えた。

　やっと消えてくれた。

　マリアローズは肺の中の空気をぜんぶ吐はきだした。それでも足りない気がしたけれど、出すものがなければどうしようもない。やむをえず、思いっきり息を吸って、また吐いた。

　きゅーに肩かたを抱だかれた。

「ありがと」

「くう」

　きゅーは、気にするな、とでも言わんばかりに首を左右に振ってみせた。すでにその被毛はふだんの純白に戻もどっている。マリアローズはきゅーの胸に顔をすりつけた。

「何なんですか、あれ……」ルーシーはまだ塀のほうを見ている。「ていうか、この件は任せてくれって、どういう……？」

「さあね」

　本当は、思いあたることがないわけではない。ただ、そこまでルーシーに話すとなったら、そうとう手間だし、話していいものかどうか。

「まあ、ＳＩＸとはあいつもいろいろあったし、どうするつもりなのか知らないけど、調べるなり何なりするっていうなら、勝手にやらせとけばいいんじゃないの」

「マリアさんが、そう言うなら……」ルーシーはちらりとこっちに視線を投げて、すぐ地面に目を落とした。「いいんですけど。ぼくとしては、べつに」

「ああ見えて、腕うでは立つしね」

「それは、わかります。なんか、見ただけで。只ただ者ものじゃないっていうか。あの」

「なに？」

「……いえ」ルーシーは短くため息をついた。「何でもないです」

「そ」

　マリアローズはきゅーの顎の下をこするように撫なでた。きゅーは目を細めて気持ちよさそうにしている。

　ほんと、めんどくさいんだよね。いろんなことがあって。ありすぎて。どう受け止めればいいのかなんて、見当もつかないし。友だちになれたらいいのにって、思うけど。でも、それだって難しい。きっと、あいつもそうなんじゃないかって、そんな気がしなくもない。

　どっちへ進めばいいのか。それとも、戻ったほうがいいのか。わからなくて、同じ場所をぐるぐる回って、気がつけば何も変わらなくて、それでいいんじゃないかって思ったりして、だけどやっぱり、ずっとこのままっていうのも妙みようなかんじだし、はっきりさせないと。はっきりさせるって、どうやって？　考えてみて、やめて、考えたくなくて、それでも考えちゃって、いやになって。

　距離はそのままで、気持ちが行ったり来たりしている間に、時間だけが流れて、たとえばいつか取り返しのつかないことになっても、それはそれでしょうがない。

　そんなふうに、僕は受け容いれられるだろうか。

Omenage 899 5th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

chapter.4

副長の執務室

「──ということは、ベラドリアで目もく撃げきされた男はほぼ間ま違ちがいないということか」ヨハン・サンライズは右手の中指で眼鏡めがねの位置を直し、資料の束で執務机の端はしを軽く叩たたいた。

「はい。私の調査によれば、どうもそのようです」

　机の向こうで直立不動の姿勢を維い持じしているハインツ・クルエルフォートは、癖くせの強い銀ぎん髪ぱつを肩までのばしている。エメラルドグリーンの瞳ひとみに宿る光が古いため池のように濁にごっていて、いかにも女に好かれそうな容色は、人を欺あざむく仮面のようにうさんくさい。

「証言はいくらでも集められそうですが、これ以上は不要でしょう」

「珐瑠フオール副長の手の者からも、似たような報告がいくつもあがっている」

「我が二十五番無名隊も三件、これとは別に確かく認にん作業を進めている案件があります」

「いい。君の隊は手を引け。珐瑠副長麾き下かの二十六番、二十七番無名隊に引き継ついでもらう。資料をまとめて提出してくれ。明朝までだ」

「朝まで、ですか」クルエルフォートは唇くちびるの端を皮肉っぽくゆがめた。

「不服かね」

「いいえ。とんでもない」

「君の隊は通常の監かん視し任務に戻れ。龍州連合。昼飯時ランチタイム。一いつ時ときとはいえ、ＳｍＣと手を結んで悪を為なした連中の跳ちよう梁りよう跋ばつ扈こを赦ゆるす気はない。今はおとなしくしているが、奴やつらは必ず尻尾しつぽを出す。そのときを見み逃のがしてはならない」

「私見ですが、副長」

「何だ」

「僭せん越えつながら、私は龍州連合、昼飯時、両クランの有害性について若じやつ干かん疑問を持ちはじめております」

「ほう」ヨハンは椅い子すの背もたれに身体からだを預けて手を組んだ。「つづきを」

「はい」クルエルフォートは微笑ほほえんでうなずいた。「短期間で闇やみ市いちをとりしきるクランとして成長を遂とげた龍州連合は、龍州人のみならず、エルデンで生まれ育った貧しい若者たちの受け皿の一つとなりつつあります。彼らの報復行こう為いは過激で、ときに横暴に見えますが、龍州人特有の筋を通す気質の影えい響きようか、むやみやたらと対立組織を暴力的な手段で壊かい滅めつさせることはしていません。最近ではとくに懐かい柔じゆう策を選ぶことが多く、利益の公平な分配者として評価を高めていることから、彼らと敵対するよりも協調路線をとろうとする者が増えています」

「私がその程度のことを知らないとでも？」

「いいえ」クルエルフォートは顔色を変えない。「昼飯時に関しては、もともと武ぶ闘とう路線のクランではありません。彼らがＳｍＣに与くみしたのも、頭領マスターをふくめた構成員が昵じつ懇こんにしている飲食店の安全を脅おびやかされかねなかったことから、いわば不ふ可か侵しん同盟とでもいうべき協定を結んだことで、その関係が始まりました」

「ミケランジェロだな。君もたまに行っている店なのだろう」

「何度か。クァラナドは私の庭のようなものですから」

「君の弟もあの街で店を持っているくらいだしな」

「雇やとわれ店長です」

　ミカエル・クルエルフォートがかぶっている仮面は、多少つついたくらいでひび割れるような安物ではない。ただ、揺ゆらがなければ揺らがぬほど、それが所しよ詮せん、仮面でしかないことは一いち目もく瞭りよう然ぜんとなる。

「不出来な弟でお恥はずかしいかぎりですが」

「たとえ血を分けた弟が取るに足らぬ下げ衆すであったとしても、君の能力や功績には疑問を差し挟はさむ余地などないと私は考えている。話の腰こしを折ってすまなかった。つづけてくれ」

「はい」クルエルフォートは常の呼吸にしてはいささか大きすぎる息をついた。「現在の昼飯時は、不用意にふれさえしなければ何ものも傷つけない、いわば取とり扱あつかい注ちゅう意いの刃は物もののごときものです。報復以外の理由で彼らが動くことはまずないでしょう。もとより彼らはそのようなクランだったのだと思われます。ＳｍＣに従ったのは、他ほかに手段がなかったからでしょう。彼かのクランは非戦せん闘とう員も多く抱かかえているため、その命が、言ってみれば人ひと質じちにとられていたのではないかと推測できます」

「つまり、龍州連合にしても、昼飯時にしても、こちらから仕し掛かけなければ何も起こらない。下手に刺し激げきしないほうが、我らの義にとっては有益なのではないか。クルエルフォート隊長、君の見解をまとめると、こういうことになる。そう理解してもかまわないか」

「そのとおりです、ヨハン・サンライズ副長」

「私も同感だ」

「は？」

　一いつ瞬しゅん、クルエルフォートの仮面がずれた。

　ヨハンは笑わなかった。おれは笑うことなど忘れてしまった。二度と笑うことはない。あのときまでは、ひょっとしたらそんな感情もどこかにくすぶっていたり、眠ねむっていたりしたかもしれないが、もう捨ててしまった。

「当然のことだが、クルエルフォート隊長、私も人間だ」

「それは……」

　またた。眉まゆがひそめられ、瞳がかすかに揺れている。

　ヨハンはどこからか湧わいて出た失望を嚙かみしめることもなく胃の腑ふに流しこんだ。

　君は仮面をつけていろ、ハインツ・クルエルフォート。それが君の価値だ。それができぬのなら、おれの手足である二十五番無名隊隊長の椅子に君を座らせておくことはできない。

　クルエルフォートは仮面をつけなおした。「むろんです、副長」

　それでいい。

「先にも言ったとおり、たとえどのような事情があろうと、それが一時にすぎぬとしても、我が団から先代を奪うばったＳｍＣに己おのれの選せん択たくとして手を貸した者たちが、いまだのうのうと生きながらえている。私はこれを認めない。赦す気はない。龍州連合や昼飯時が武力を行使する際の動機は、主に報復だと君は言ったな」

「はい」

「この件については私も同じだ」ヨハンは軽く首を曲げた。「私は報復のために龍州連合と昼飯時を君に監視させている。彼らが我らの義を貫つらぬく道にとっていくばくかでも障害になりうると判断したら、即そつ刻こく除く。我が団の総力をもって。総長は反対なさらないだろう。琺瑠副長とシュナイデル副長もおそらく賛成してくれる。隊士たちも拒こばむことはなかろう。私はそのときを待っているのだ。少々回りくどいかもしれないが、これが私の復ふく讐しゆうだ」

「諒りよう解かいいたしました」

「ならばいい」

「副長」

「何かね」

「ご存じないでしょうが」

　かぶっていた仮面がゆがんだわけでも、自ら仮面を脱ぬいで素す顔がおをさらしたわけでもない。

「私は心底からあなたを敬愛しております」

　クルエルフォートはただ別の仮面をかぶったのだ。

　きっと酒場で商売女をたぶらかすときに使う、出来の悪い仮面だろう。

「あなたにお仕えすることができて、私は幸せだ。先ほどのお言葉を耳にして、これまで以上に、もっと好きになりましたよ。あなたのことが」

「ありがたいことだ」

「それから、もう一つ」クルエルフォートは濁にごった目を細めて唇くちびるの端はしを舌で舐なめた。「前々から思っていたのですが、眼鏡めがねがよくお似合いです」

　思わず眼鏡に手がのびかけて、寸前のところで自制した。

　退出を命じるべきではない。今すぐには。

　ヨハンは腐くさり水をたたえた古い泉のごときクルエルフォートの瞳ひとみを凝ぎよう視しした。この男は嗜し虐ぎやく趣しゆ味みを持ち、交際している女を痛めつけてしばしば負傷させている。傲ごう岸がん不ふ遜そんにして狷けん介かいで、団内の評判も悪い。有能だが扱あつかいづらく、飼かい馴ならそうとすれば嚙みついてくる。我が団の腹黒陰いん険けん副長は懐ふところ刀がたなまでも煮にても焼いても食えない。そんな陰かげ口ぐちをたたかれていることは、ヨハンも承知している。なるほど、そのとおりかもしれない。

　少々疲つかれているのか。嫌いや味み、皮肉の一つでも言ってやろうと頭をひねっているのだが、何も浮うかんでこない。

　ドアが鳴った。

「ヨハン副長。琺瑠です」

「ああ」ヨハンは眼鏡を押しあげて目め頭がしらを揉もんだ。

　自じ嘲ちようするしかなかった。おれは動どう揺ようしている。くだらぬ。何を動揺することがある。

「入りたまえ」

「はい」

　ドアが開くと同時に、クルエルフォートが会え釈しやくした。
「それでは副長、私はこれで」

「ご苦労だった」

「明朝、資料を提出します」

　背を向ける寸前、クルエルフォートはたしかに薄うす笑わらいを浮かべていた。それなのに、どういうわけか、たいして腹は立っていない。

　クルエルフォートとすれ違ちがって、琺瑠が執しつ務む室に入ってきた。

　ドアが閉まり、静せい寂じやくが訪おとずれ、我知らず眼鏡を外して執務机の上に置いたこの身の戸と惑まどいを、嗤わらいたくば嗤え。

「用件は」

「さらに五件、目もく撃げき情報をつかんだわ」琺瑠は執務机の上に資料の束を置いた。

「そうか」ヨハンはその資料に一いち瞥べつをくれただけで、手にはとらなかった。「クルエルフォート隊長も四件。そのうちの一件はほぼ確実だそうだ。彼の隊は別件に専念させたいから、手を引かせて君に引き継ついでもらうつもりだが、問題ないか」

「それはいいけど。まだ龍州連合と昼飯時を追わせるつもりなの？」

「君も知っているだろうが、私は執しゆう念ねん深い男だ」

「闇やみ市いちを牛ぎゆう耳じっている龍州連合はともかく、昼飯時は監かん視し対象から外すべきだと思うわ」

「理由を聞かせてもらえるかな」

「彼らは自ら好んで波風を立てるクランではないでしょう。それに、ＺＯＯとも繋つながりがあるのよ。例の偉大なるセブン・ソウルズ七つの魂・マジエステイに関する一連の騒そう動どうについては、詳しよう細さいは不明だけど、昼飯時の構成員が行方ゆくえ不

明になって、その捜そう索さくにＺＯＯが協力したという話だわ」

「龍州連合の荊王ジンワンと飛燕フエイヤンも関かかわっていたらしいがね」

「ＺＯＯのトマトクンは、先代の旧友でいらしたのでしょう」

「あくまで、先代の、だ」ヨハンは人差し指で机を叩たたこうとして、やめた。「泉セン里リ決戦で我が団に手を貸してくれたのも、先代との友ゆう誼ぎがあったればこそで、あの方にしてみればもはや義理は果たしたといったところだろう」

「ヨハン。あなただって、彼との間には」

「関係ない」ヨハンは軽く首を横に振ふった。「あの方もそう考えておられるのではないかな。さもなくば、龍州連合や昼飯時の奴やつ儕ばらと行動をともにすることなどすまい。あの方はただ先代の、旧ふるき友の仇あだ討うちをなさっただけだ」

「二代目襲しゆう名めい式の立会人よ」

「あの方はもう忘れておられるだろう。そういう御ご仁じんだ」

「もし」珐瑠は目をすぼめた。「わたしたちが昼飯時と真っ向から対立して、潰つぶしあいを演じるような事態になったら、ＺＯＯはどう動くでしょうね」

「我らに義があり、筋が通ってさえいれば、あの方は動かぬ」

「わたしが知っているかぎり、昼飯時の頭領とＺＯＯのマリアローズは、浅からぬ仲なのではないかと思われる節があるけど」

「あの小生意気な赤毛か」ヨハンは鼻先で笑った。「男なのか女なのか知らないが、いつの間にかＺＯＯに加入していたかと思えば、あの虐殺人形カーネイジドールだけでなく、アサイラムのモリー・リップスとも親交があるらしい。あれは厄やつ介かいというより不可解だ」

「でも、あの子、すっごくかわいいわ」

　珐瑠の目が一いつ瞬しゆん、きらきらと輝かがやいた。

　悪い癖くせだ。見なかったことにした。

　琺瑠は小さく咳せき払ばらいをした。「──私見ではあるけど、ＺＯＯが中立の立場をとるかといえば微び妙みようだわ。少なくとも、こちらにはつかない。ただ、昼飯時につく可能性はある。それに、龍州連合が昼飯時と手を組んで、わたしたちを潰そうとするかもしれない。その他の悪党クランが勝手に追つい随ずいすることだって考えられる。そうなったら、泥どろ沼ぬまに嵌はまることになるわよ」

「龍州連合にせよ、昼飯時にせよ、付け入る隙すきはある。いずれも盤ばん石じやくな組織ではない。ようは、純じゆん粋すいな戦せん闘とう集団ではないということだ。彼らを壊かい滅めつさせる必要はない。大きな、もしくは小さくとも的確な打撃を加えれば、自おのずと崩ほう壊かいする。彼らには拠よって立つ義がないからだ」

「ヨハン。あなたが彼らを付け狙ねらっているのは、わたしたちの義を貫つらぬくためなの？」

「考えてもみたまえ、琺瑠副長」ヨハンはこれ見よがしにため息をついてみせた。「たとえば、我が団の誰だれかが囚とらわれて、その解放を条件に無む辜この民たみを殺せと要求されたとする。我々は従うかね」

「いいえ」

「昼飯時は違ちがう。彼らは実際そうした。泉里を襲おそい、我が団の隊士を幾いく人にんも殺しただろう？　彼らは悪だ。控ひかえめに言っても、かぎりなく悪に近い。悪即そく斬ざん。総長の口くち癖ぐせではないか。本来、彼らはただちに除かれるべきなのだ」

「だったら、なぜそうしないの？」

「我が団が日輪のごとく輝くためには、義の上に大義が必要だからだ」

　この身一つであれば、どれほど汚よごれてもかまわない。返り血の泥でい濘ねいで泳ぎ、いつか溺おぼれる羽目になろうとも、おれは復ふく讐しゆうを果たすだろう。だが、養ち父ちが打ち立てた秩ちつ序じよの番人の義に泥どろを塗ぬるわけにはゆかないのだ。

「万ばん人にんとは言わぬ。多くの者が納なつ得とくし、共感する理由が、大義がなくば、我らの義は地に堕おちる。琺瑠副長。君とて、先代の名を汚けがしたくはなかろう」

「ヨハン」琺瑠はなぜか苦しそうに眉まゆをひそめた。

「何だ」この胸の軋きしみなど気のせいに違いない。

「一人で背し負よいこまないで」

「何を──」

　言うかと思えば。

　ヨハンは深々と息を吸い、吐はきださずに止めた。

　ややあって、少しずつ、静かに、ゆるやかに吐いて、眼鏡めがねを手にとった。

「昼飯時と龍州連合については、今すぐどうこうという問題ではない。差し迫せまった案件がある現時点では、監視を継けい続ぞくする以外に手を打つ気はないのでね。懸け念ねんするには及およばない。それに、例の案件にも関わりがあってのことだ。何しろ、彼らとの間には因いん縁ねんがある。その目的がどうであれ、何らかの接せつ触しよくがあってもおかしくはなかろう」

「彼らは結局、あの男を裏切ったのよ。連れん携けいして動くことはないと思うわ」

「予断は禁物だ、琺瑠副長」ヨハンは眼鏡をかけた。「もしあれが本当にあの男なのだとしたら、常識的な推測は通用しない」

「そうね」

「リヴァイス、か。何を企たくらんでいるのやら」

「とくにM□S□RとガルベルＬ・ダはＳｍＣとも関係が深かったブランドだし、あからさまにあやしくはあるけど。そういえば、明るく楽しいクァラナドを作る会のリンダ・H□エログローニャと密会したらしいという、新しい報告があったわ」

「エログローニャが会うとなると、よほどの重要人物だな」

「確かく認にんはとれていないけどね。難しいかもしれないわ。何しろ、あのエログローニャだから」

「気になる点があるとすれば」

「派手に動きすぎている」

「わざと、か」

「宣伝かもしれないわよ」琺瑠は気安く微笑ほほえんだ。

「何を宣伝するというんだ」つられて、つい声こわ音ねがゆるんでしまう己おのれの迂う闊かつさが憎にくい。

「リヴァイス」

「商売のためだとでも？」

「金かね儲もうけが目的かどうかはわからないわ」琺瑠はわずかに肩かたをすくめた。「でも、あのブランドには明確な思想があるでしょう。その名のとおり、悪徳再生、という。ＳｍＣだって、一時は彼らのスタイルがこの街の一部で流行したのよ」

「それがあの男の目的だとでもいうのかね」

「少なくとも、ＳｍＣの目的はそこにあったのかもしれない。この案件が持ちあがってから、クルチバ隊長以下二十七番無名隊にＳｍＣに関する資料を分ぶん析せきさせて、再評価させたの。その結果、そういう意見が出てきて」

「クルチバ隊長。見かけによらず、彼女は使えそうだな」

「ええ。とても優ゆう秀しゅうな子だわ。もうちょっと身だしなみに気を遣つかってくれると、なおいいのだけど──」琺瑠はヨハンの視線に気づき、はっとしたように表情を引き締しめた。「頭が切れるだけじゃなくて、年ねん齢れいも経験も上の隊士たちをよくまとめているわ」

「調整力もあるということか。稀け有うな人材だ。大切に育ててやらねばならんな」

「あの子に聞かせてあげたいわ、その言葉」琺瑠は悪戯いたずらっ

ぽい笑みを浮うかべた。

「何だ、それは」錯さつ覚かくしそうになる愚おろかな我が身を呪のろえ。

「あなたのファンみたいなのよ」

「ファン……？」

「けっこういるらしいわ。彼女たちの気持ちも、ちょっとわかるけど」珐瑠は髪かみをかきあげて、耳にかけた。「眼鏡がとてもよく似合っていると評判みたいよ、ヨハン副長」

「何を馬ば鹿かな」

　またそれか。

　ヨハンは眼鏡を外そうとして思いとどまり、頭かぶりを振ふった。「くだらん」

「わたしがこんな話をしたからといって、眼鏡をやめたりしないでね」

「やめるわけがなかろう。必要があるから使っている」

「それはよかったわ。彼女たちに恨うらまれずにすむもの。ねえ、ヨハン」

　ほとんど不意打ちのようなものだった。

　珐瑠が執しつ務む机に両手をついて、身を乗りだしてきた。

　諜ちよう報ほうと謀ぼう略りやくの汚お泥でいに身を浸ひたしていながら、その黒曜石のごとき瞳ひとみには迷いがない。

　彼女は勁つよいのだ。

　常に己を律しなければ、真っ直すぐ進むことさえできぬヨハン・サンライズとは違ちがう。

　この身にはサンライズの名すら重い。重荷を背負って歩くだけの度量がおれにはないのだ。それゆえに、鉄面皮の冷血副長を演じる以外にない。おれは開きなおることもできぬ弱虫だ。それでも、亡

なき養父の愛刀を、その片割れを、名めい匠しようダグラス・トゥースの手になる「月げつ明みよう」を受け継ついだからには、捨てることなどできはしない。

　月明はあなたが持ちなさい。

　あの日、おれにそう言ったのは君だ、琺瑠。

　目をそらすことはできなかった。

「疲つかれているんじゃない？」

「余計なお世話だ」

「そう言われると思った」

「君こそ少し休みたまえ。ろくに寝ねていないのだろう」

「最近、独り寝が寂さびしくて」

「一人でなければ眠ねむれない私には理解できぬ心境だな」ヨハンは右手の中指で眼鏡めがねの位置を直した。「適当な相手を探せばよかろう。君ならば引く手あまたなのではないか」

「それ」琺瑠はかすかに眉まゆをひそめた。「本気で言っている？」

「むろんだ」

　心底から願っているとも。たとえ何者であろうと、誰だれかの腕うでに抱だかれて君が安らかに眠ることができるのならば、それでいい。

　おれはもう精せいーいつ杯ぱいだ。養ち父ちの遺志と銀の軍団を抱かかえて、その重みに耐たえかねている。君がおれに月明を持たせたのだ。責めることはしない。わかってくれとも言わない。ただ、おれにはこれ以上、何も求めないでほしい。おれも求めないから。

「そう」琺瑠は小さなため息をついて、身をひるがえした。「でも、どのみちしばらくはゆっくり眠れそうにないわ」

「ああ」

　求めてなどいないはずなのに、内心で胸を撫なで下ろしている己おのれはいっそ憐あわれだ。

　ヨハンは天てん井じょうを仰あおいで瞑めい目もくした。「──そうだな」

Omenage 899 5th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区

chapter.5

再生と再会と

　彼は何も黒という色を好んでいるわけではない。たしかに彼は黒を基調とした装しよう束ぞくを身にまとっているが、それは彼の意志によって選ばれたものではないのだ。

　彼を画布として絵を描えがきたがる酔すい狂きような者がいて、彼はほんの気まぐれからその者にこれを許した。

　今にして思えば、彼はその絵を見たかったのかもしれない。

　彼は彼自身を知らなかった。彼は虚うつろであり、彼の周りにいる者たちが彼を凝ぎよう視ししなければ、彼を望まなければ、彼を規定しなければ、彼は何ものでもなかった。彼は所しよ詮せん、人形である、人形でしかないという現実を受け容いれざるをえなかった。彼は己を知らなかった。彼を画布として描かれた絵を目にすれば、あるいは己を知ることができるのではないか、その手がかりをえることくらいはできるのではないか。おそらくは彼の中にそんな欲望が芽生え、その結果として、一人の物好きに身をゆだねて採寸させ、絵を描かせたのだろう。

　死体、とも渾あだ名なされているほど寡か黙もくな〝ジグズレヴ〟という名の奇き矯きような男は、物心がついたころから不ふ眠みんに苦しめられ、永遠の眠り、自らの死を強く願い求めながら、誰よりも何よりもそれを恐おそれている。ジグズレヴが言葉少なに彼に語ったことは、それがほとんどすべてと言ってもいい。

　生きる死体は黒という色で彼を表現した。

　彼は生きる死体の絵を通して、闇やみの中にいる存在としての自分を認にん識しきした。

　この闇は、だが、無ではないのだ。

　ジグズレヴは黒を駆く使しして、虚きよ無むではない闇を次々と描いてみせた。闇の深度を。闇の表情を。闇の情念を。闇に溺おぼれもがく者の叫さけびを。そして、闇に射さす一筋の光を。

　彼は虚ろではない。

　人形などではない。

お前さんは人形なんかじゃない。

在りし日にそう言ってくれた友とは、なぜかまた会えるような気がしている。

友と酒を酌くみ交かわす日がいつか必ず訪おとずれるのではないかと。

「クラニィ。ボクはもう悲しくない。リリアも、ジョゼも、ユーリィも、元気にやっているヨ。彼女たちは命に代えてもボクらが守る。昼飯時ランチタイムが。お節せつ介かいなキミのことだ。きっと気がかりだろうけど、みんなそれなりに楽しくやっているから、キミは大好きな酒でも飲んでいればいいサ。浴びるほどネ」

黒ビル。

ああ──、

ボクはこの建物が嫌きらいだ。反へ吐どが出る。

ジグズレヴのように黒を、闇を、突つき詰つめ、解かい釈しやくして、それに己の欲望や想念を映し、昇しよう華かさせて、ある一つのものを、どうしても生みだすしかない切せつ迫ぱく感をもって表現しているのではない。もったいをつけているだけだ。ここにあるのは形だけだ。形けい骸がいだ。黒のイメージを利用して、浅せん薄ぱくな自意識をひけらかそうとしているだけだ。醜みにくい。醜しゆう悪あくだ。俗悪で、ちんけだ。虚きよ栄えいでしかない。

張りぼてと大差ない黒ビルの屋上に彼はいる。

彼の黒くろ髪かみをなぶる夜風は湿しめり気を帯びて、星一つまたたかぬ空は今にも泣きだしそうだ。

目を閉じて、耳を澄すましてみた。

第八区。クァラナド歓かん楽らく街がいとは別の意味で眠ねむることのない街だ。所ところ狭せましと乱立している機術工場の一部は昼夜の別なく稼か働どうしつづける。遠くで、近くで、何かがこすれあい、打ち鍛きたえられ、断たち切られる音が絶えることはない。彼の知覚はそれらの物音を慎しん重ちように選別し、除外して、もはや音ではない、何かを聞きとろうとした。ボクには聞こえるはずだ。ここにあの男がいるのだとしたら、ボクにはきっとわか

る。感じるはずだ。あの男の邪じや悪あくな鼓こ動どうを。気配を。隠かくれているのか。ボクから逃にげようというのか。賢けん明めいかもしれない。狡こう猾かつなキサマのことだ。わかっているだろう？　そう──、

　ＳＩＸ、ボクはキサマを捜さがしにきたんじゃない。

　キサマが灰被りの父親だろうと何だろうと、かまうものか。どうでもいいことだ。

　クラニィ。

　ボクはもう悲しくない。

　だからといって、ボクから、ボクらからキミを奪うばった薄うす汚ぎたない外げ道どうが意い地じ汚きたなく命を繫つなぎ、性しよう懲こりもなくボクらの街に舞まい戻もどったのだとしたら、そんなことを許す気はさらさらない。ボクは認めない。当然の権利として否定する。

　黒ビルの屋上は平らだ。何の構造物もない。彼は壁かべ伝いにここまで登ってきたのだが、さて、これからどうするか。

　屋上を見み渡わたした。

　隅すみのほうだ。正方形のかすかな溝みぞがある。

　近づいてしゃがみ、溝を指でなぞってみた。溝に囲まれた正方形の部分を押しても、びくともしない。おそらく開閉できるようになっている。これは屋内と屋上とを繫ぐ扉とびらだが、ロックされている。鍵かぎを持っていても、屋内からでないと開けることができない仕組みだろう。

「ボクには無意味だ」

　彼は右手の手て袋ぶくろを外した。

　右の掌てのひらを扉にあてて、彼女の名をそっと呼んだ。

　アルカーディア。

　そうして、命じた。

破は壊かいしろ。

やさしく、

丹たん念ねんに、

静かに、

愛する者の髪を撫なで梳すくように、壊こわせ。

このボクのために。

彼女は従った。

一いつ瞬しゆんの出来事だった。彼の右手は幾いく本ほんもの黒い管と化して広がった。たいして音も立てなかった。管はまるでもぐりこむように、むしろ染しみこむように、次々と扉の縁へりに突き刺さった。たやすく貫つらぬいて、向こう側へと達した。彼女は彼に逆らわない。無む駄だに荒あらぶることもない。彼女は彼に服従している。

彼は立ちあがった。

黒い管が扉を持ちあげた。

彼は彼女に、扉を慎重に下ろすように命じた。彼女は言うとおりにした。

もういい、アルカーディア。

胸のうちでそう告げると、黒い管は寄り集まって人間の手のような様相を呈ていした。人間の手そのものに擬ぎ態たいを完かん了りようするまで、さしたる時間はかからなかった。

彼は手袋をつけなおして屋内へと侵しん入にゆうした。

そこは黒ビルの最上階と屋上の間にある屋根裏で、通常なら屋上に配置されるような設備や導管などがひしめいていた。あちこちに半永久灯が設置されているが、それらを点灯させる必要はない。彼には明かりなど不要だ。彼は闇やみに慣れている。たとえ見なくても、わずかな匂においや空気の揺ゆれや音が彼にさまざまなことを教えてくれる。

彼は暗闇を泳いで、屋根裏の一角に最上階への入口を見つけた。床ゆかに扉がある。今度は手荒な真ま似ねをしなくても開けられそうだ。

扉を開けると、その向こうは最上階の廊ろう下かだった。かなり天てん井じようが高い。明かりはついているものの、だいぶ光量が抑おさえられている。少しだけ緑色がかった水色の照明だ。人の気配はどうか。足音も、息づかいも、聞こえない。少なくとも、近くには誰だれもいないようだ。

彼は音もなく廊下に降りたった。

廊下はまっすぐのびていて、突つきあたりが丁てい字じになっている。両方ともだ。つまり、Ｈの横棒にあたる廊下に彼はいる。縦棒の長さは、ここからではわからない。高さ約四・五メーテル、幅はばも四メーテル以上あるだろう。広々とした廊下だ。向かって右側の壁には四つ、左側には一つ、ドアがある。左側のドアは両開きで、やけに大きい。

彼の目はその大きな扉に引きよせられた。

歩きだそうとした。

右側のドアが開いた。四つあるうちの手前から二番目のドアだった。

彼は瞬しゆん間かん的に加速した。ドアを開けて、一人の男が出てきた。男。性別はおそらく男だろう。ただ、人間ではない。青い肌はだ。黒い毛もう髪はつ。黄色い眼め。ぴたっとした派手で悪あく趣しゆ味みな黒っぽい服を着ているが、隠しようがないあの逞たくましい体たい軀く。鬼人オーガか。いや、それにしては小さすぎる。しかし、人間ではない。背せ丈たけは二メーテルないくらいだろう。筋骨隆りゆう々りゆうとしているが、人間の域を遥はるかに超こえているとは言えない。そうではなくて、違うのだ。骨格。筋肉の付き方。やつは人間ではない。種が違う。それでいて、どこか人間の匂いがする。そうか。

やつは黄色い瞳ひとみに彼を映した。

その瞬間、彼はもうそこにはいなかった。

やつの頭上にいた。

彼はやつが開けたドアを飛び越こえて着地した。

「ヌァグ……？」

やつは呻うめくような声を出してドアを閉めた。彼の姿を捜さがそうとしたのだろう。振ふり返ろうとした。させなかった。

彼は泣き叫さけぶ短たん剣けんを抜ぬいてやつの背後に忍しのびよった。左手でやつの顎あごをつかんで仰あお向むかせた。右手の短剣で喉のど頸くびを掻かっ斬きると、裂さけ目から空気が、しゅう、と吐はきだされた。間かん髪はつを容いれずに、首と後頭部の境目に短剣を埋うめこんだ。やつはほとんど瞬間的に絶命した。

彼は力だけでなくすべてを失ったやつの亡なき骸がらをそっと床に座らせて、その背を壁かべにもたれさせた。

つぶさに観察した。

やはり鬼人オーガではない。鬼人オーガといえば、額や顎に角状の突とつ起きがあり、尖とがった耳と鋭するどい牙きば、色とりどりの分厚い皮ひ膚ふと硬かたそうな体毛を持っている。身の丈たけは二・五メーテルから三メーテル。鋼はがねの束のごとき筋肉の上には、ごってりと皮下脂し肪ぼうがのっている。こいつは違う。余分な贅ぜい肉にくをすべて削そぎ落としたような、よく引き締しまっていて、均整がとれている身体からだつきだ。それに、角がない。耳の尖り方も控ひかえめだし、歯にしても、犬歯がやや大きいくらいで、門歯は人間並みだ。顔つきも、肌の色をどうにかすれば、人間に見えないこともないだろう。

一説によると、鬼人オーガは悪あく魔まと人間の混血だという。

こいつはおそらく、鬼人オーガと人間の混血だ。

半鬼人ハーフオーガ、というわけか。

いかに吹ふき溜だまりの国の中心、人種の坩る堝つぼ、混こん沌とんのエルデンといえども、人外がそのへんをうろついていれば人目を引く。必ず人の噂うわさにのぼるはずだ。鬼人オーガに似たやつを見かけた、などという話はついぞ聞いたことがない。それが、ここにいる。黒ビル。リヴァイスとかいう新興ブランドの拠きょ点てんに。

　彼は半鬼人ハーフオーガが出てきたドアに目をやった。

　それから、両開きの大きなドアを見た。

　目が離はなせなかった。

　まるで何かが彼を呼んでいるかのようだ。

　いいだろう。

　心のままにボクは歌おう。

　ボクは人形なんかではなくて、このボクにも心があるということを教えてくれた友に捧ささげる詩うたを、即そつ興きようの旋せん律りつにのせて、声をかぎりにボクは歌おう。

　彼は大きなドアに近づいていった。

　何か聞こえる。

　小さな音だ。

　ドアの向こうからだ。

　声。

　女の声か。

　彼はドアの把とつ手てに手をかけた。

　一気に開けた。

　中に入って、後ろ手でドアを閉めた。

　そこは大きな部屋だった。ホールと呼ぶべきかもしれない。広い。幅、奥行きともに三十メーテルほどもあるのではないか。奥行きのほうがいくらか長い。長方形だ。両側面の壁は光こう沢たくのある黒い布のカーテンで覆おおわれている。そこかしこにテーブルやらソファやらが配置されているが、人ひと影かげはない。

　奥に舞ぶ台たいがある。

　そこだけに照明があたっていた。

　真っ白い、強きよう烈れつな光だった。

　舞台に全ぜん裸らの男が寝ねそべっている。

　その上にやはり裸形の女がまたがって、自らの乳ち房ぶさを揉もみしだきながら、激しく腰こしを回転させていた。

「Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　いい！　すご、すごい、こ、こわ、壊こわれ、壊れちゃう、Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈｈｈｈｈ！　Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　ボブカットの女は自分の行こう為いに没ぼつ頭とうしているようだ。彼には見向きもしない。ひょっとしたら、気づいてさえいないのかもしれないが、女の下で低く笑っている男はどうだろう。

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕ……Ｋｕ□Ｋｕ□Ｋｕ□Ｋｕ□Ｋｕ……」

「Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈｈｈ！　Ａｈ！　Ａｈ！　Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！」

「Ｋｕ□Ｋｅ□Ｋｅ□Ｋｅ……Ｋｕ□Ｋｕ□Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕｋｕ……」

「だめ、もう、だめ、Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

「Ｈａａａａ□Ｈａ□Ｈａ□Ｈａ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａ」

「いっ、いっ、いっ、あっ、いいいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」

　女は白目を剝むいて汗あせまみれの肢し体たいをひとしきり痙けい攣れんさせると、精せい根こん尽つき果てたように男の胸に倒たおれこもうとした。男はそれを許さなかった。左手で女の首をわしづかみにした。

「イレーネ。イレーネ。イレェェェェェネＥＥＥＥＥＥＥ。悪い子だイレーネ。一人で勝手にイクんじゃないよ、ちゃんと我わが輩はいを楽しませなきゃダメじゃないか、スウィートキャンディー。そ

うだろう、マイワイフ？」

「あがっ。あがっ。あがっ」

「イレーネ。お前は少し調子に乗りすぎだよ。我輩に言わせれば、お前は何か勘かん違ちがいしてるよ。我輩が最近ちょっとかわいがってやってるからって、つけあがるのはよくないよ」

「んがっ。んがっ。んがっ」

「お前みたいに股またのゆるい身の程ほど知らずでＦ×ＣＫな雌犬ビツチにはお仕置きが必要だねえ」

　男は右手の人差し指と親指を女の左目にねじこんだ。それと同時に左手の力をゆるめたようだ。女は絶ぜつ叫きょうした。

「あぎいっ！　あぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃ……！」

「ンンー」男は女の眼球を抉えぐりだすことはせずに、ぐりぐり動かした。「いい声だ」

「ひぎいいいいいい！　ぎいい！　ぎいいいいいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃ……！」

「もっと鳴け！　鳴くんだ、イレーネ！」

「あいいい！　あいいいああっ！　あいいいいいいいい！」

「違うだろう、イレーネＥＥＥＥＥＥ！　お前は雌犬だろう！」

「あいいい！　ぎゃ、ぎゃん！　ぎゃん！　ぎゃん！　ぎゃあぁぁぁぁぁん！」

「Ｈｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａ！　そうだよ！　それでいい！　ほぉら、もっとだ！」

「ぎゃん！　ぎゃん！　ぎゃんっ！」

「いい子だ、イレーネ！　我輩が、お前のご主人様が、もったいなくもご褒ほう美びをやろう！」

　男は女の眼がん窩かから右手の指を引き抜ぬくなり、今度は右目

に突つき入れた。すぐに抜いた。

「いぎいいいいいやああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　それだけでは終わらなかった。男は上半身を起こして猛もう然ぜんと噛かみついた。女の乳房だ。簡単に噛みちぎった。あふれだした血液で男の顔が、とくに口の周りが赤く染まった。男は咀そ嚼しやくしようとして、顔をしかめた。

「Ｍｕ□Ｇｕｈａ……！」赤くて白くて黄色いかたまりが男の口から吐はきだされた。「まじいィィィ！　なァァァァんだこれェッ！　ぜんっぜんうまくねえ！　うまさの欠片かけらもありゃしねえ……！　阿あ呆ほうッ！　イレーネ、てめえ！　我輩にこんなもの食わせやがって……！」男は立ちあがりながら左手一本で女を持ちあげた。「畜ちく生しようにも劣おとる馬ば鹿か女め！　我輩のフィストを食くらえ！」そうして腹部を殴なぐりつけた。「こうだ！」もう一発殴った。「くぅぉだ！」さらに二発、三発。「こうだ、くぅぉだ、くぅぉだッ！」あげくの果てに股こ間かんを蹴けりあげた。「Ｄｕ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　女はその勢いで一メーテルほど跳はねあげられ、床ゆかにぐしゃっと落ちた。身体中を痙攣させている。泡あわを吹ふいているが、どうにか生きてはいるようだ。虫の息なのに、女は笑っている。

「う……ぷぷぷ……ぷぷ……うぷぷぷ……ぷぷ……うぷぷぷぷぷ……きききき……きひひひひ……ちしししし……ちしししし……」

「Ｈｉ□Ｈｙａ」男は屈かがんで女の髪かみの毛を引っつかみ、額に口づけをした。「ンンー。かわいいやつだよ、イレーネ。よかっただろう？　お前はこうされるのが好きなんだろう？　愛してやまぬ我輩にズタボロにされて生死の境をさまよいながら絶望の淵ふちで自問自答する長ァーい長ァーい時間がたまらないんだろう？　自分は本当に愛しているのか？　果たしてこれは愛なのか……？　お前は答えを見つけるだろう、イレーネ。これは愛だよ。まぎれもなく真実の愛だ。イレーネ。お前の愛は本物だよ。我輩もお前を愛しているよ。そりゃあそうさ。愛してなかったら、誰だれがこんなことをするもんかい？　お前が望むなら、我輩はイレーネ、お前を食

べてやったっていいんだよ。髪の毛一本までおいしくいただいてやるよ。愛してなかったら、誰がそんなことをするもんかい？　そうだろう、イレーネ？」

「あ、あい、あい、あい、あい、あい、あいいいああいいあいあいあいあいあい」

「ああ、イレーネ、よすんだ、イレーネ、無理をしちゃいけない、さあ、イレーネ、治すんだ。忘れたのかい？　お前は医術士だよ。治すんだ。自分で治すんだ。痛いだろうけど、痛いうちに治すんだ。痛くなくなったらお終しまいさ。その先には死が待っている。死んだら我輩はお前を食べてしまうよ。それも悪くないかもしれないが、まだ早いと思うだろう？　我輩とお前はもっと愛しあえるはずだろう？　だから、さあ、急げ、治すんだ、イレーネ」

「あーい、あーい、あい」

　女は血ち反へ吐どを吐きながら小刻みに首を縦に振ふった。どう見ても瀕ひん死しだ。女は医術士らしいが、自分自身に医術式を施ほどこすことができる状態だとはとても思えない。

「いい子だ」

　男はそれまでとは打って変わって、姫ひめ君ぎみを扱あつかうような手つきで女を舞ぶ台たいに寝ねかせた。そうして死にかけ女の髪を撫なで、口づけをして、その耳みみ許もとで、愛してai-いるよlav-u、と囁ささやいた。女は血の涙なみだを流しながら笑った。う、うぷぷ、あい、あいして、あいし、てる、あいしてる、うぷぷ。

「──さて」男は立ちあがってこちらに向きなおった。「久しぶりlon-taimだねえ-no'see、アジアン。こんなに早くお前と再会することになるなんて予想外だよ。世情に通じているとはとてもとても言えやしないお前が、まさかここを嗅かぎつけるなんてねえ。しかし、どれくらいぶりなのかな。他ひ人とよりちょォーっとばかし長生きしてる我わが輩はいにとってはまばたきほどの時間でしかなかったはずなのに、やたらと長かった、とォーっても長かった、糞垂れフアツキン長かったように感じるよ。なァーにしろ我輩、腕うで一本になっちまったからねえ。さすがの我輩も、もとどおりになるのは少々大変だった。大変だったんだよ、アジアン」

「少し面おも変がわりしたネ」彼は両眼をすぼめて唇くちびるの端はしに笑えみを浮うかべた。「以前より痩やせたみたいだ。ちゃんと食べているのかい」

「心配してくれるのかい。ありがたいねえ。だが、我輩は相変わらず健けん啖たん家かさ。よく食べて、よく飲み──」男は腰こしを突きだした。「よく犯やって！」さらに拳こぶしを突きあげた。「殺やって！　殺りまくる！　それが我輩の健康の秘ひ訣けつだよ。長生きしたいのなら、我が慢まんなんてしないことだ。己おのれの欲望に忠実になることだ。愛に餓うえたら、愛を求めることだ。愛を手に入れることだ。アジアン、愛だよ、愛。愛こそすべてなのさ」

「それが」彼は顎あごをしゃくって死にかけ女を示した。「キミの愛の形かい」

「こういう愛もある」男は肩かたをすくめた。「愛に禁忌タブーはないんだよ。我輩みたいに素す直なおで純じゅん朴ぼくな男はねえ、アジアン。胸むねーいつ杯ぱいの愛を抑おさえつけることなんかできやしない。どこまでも走るんだ。突っ走るのさ。目的地は？　この果てには何があるのか？　そんなことは考えない。愛が我輩を突き動かす。進め、進め、進むんだ、とね」

「キミは妄もう言げんしか吐かない」彼は一歩前に踏ふみだした。「どれも無意味な言葉ばかりだ。ボクはキミを理解できないんじゃない。その必要性を感じない。どうせ痴しれ言を垂れ流すこともできなくなる。間もなくキミは、その常じよう軌きを逸いつした傍はた迷めい惑わくな歩みを止めるだろう」

「お前が止めようというのかい、アジアン」

「そうサ、ＳＩＸ」

　閉じこめていた、封ふうじこめていたものが、いっぺんにあふれだした。

　ああ、目がくらむ。臓ぞう腑ふが、脳が、急激に熱されて沸ふつ騰とうしてしまいそうだ。

　ボクはもう悲しくない。そう言い聞かせた。何度も、何度も、何度も。在りし日の友を思い、思い、思い、いくら思っても思い足りず、いっそ高い場所から身を投げて地面に叩たたきつけて木っ端ぱ

微み塵じんに粉ふん砕さいして、行き場のないこの思いごと打ち砕くだいてしまえたらどれだけ楽だろう。そんなことを考えながら暗い夜を一人ですごして、救いの朝を待った。幾いくたびも、幾たびも、幾たびも、数えきれぬほど。太陽の光はただまばゆいだけで、何も溶とかしてくれず、救いのときは訪おとずれなかった。救われることなどないと悟さとらざるをえなかった。

　なるほど、ボクは前を向いている。友の代わりに、リリアを、ジョゼを、ユーリィを守ってゆこう。そうする以外にないからだ。他ほかに手段がない。後ろを向けば、キミと酒を酌くみ交わしたとりもどせない日々が蘇よみがえってきてボクの胸はたやすく引き裂さかれてしまうし、右を向いても、左を向いても、キミの姿はそこにはない。上を向けば、ボクに一いち縷るの望みさえ、かすかな救いさえ与あたえてくれない太陽が、泰たい然ぜん自じ若じやくと微笑ほほえんでいる。

　友がいなくなったというのに！

　かけがえのないボクの友が消え去ってしまったというのに！

　世界は、ほら、こうしてつつがなく回っているんだ……！

　憎にくたらしい太陽が身を隠かくせば、いやみたらしく星々がきらめいて、千年前も千年後も変わらずああやって高みからボクらを嘲あざ笑わらっているのだろうという愚ぐにもつかない想念がボクをとらえて離はなさない。ボクは前を向くしかない。前を見すえているしかない。前だけを。

　クラニィ、ボクはなぜか、キミとまた会えるような気がしている。どうしてだと思う？

　会いたいからだ。会いたいヨ、クラニィ。キミに会いたい。キミを失ったとは思いたくない。キミは生きている。ボクの中に。リリアの中に。仲間たちの中に。ジョゼやユーリィにはキミの面おも影かげがある。キミは生きている。滅ほろびることはない。やがてジョゼやユーリィが誰かと結ばれて子を産めば、彼らの、彼女らの中にキミの血が流れる。たとえキミのことを知っていた者がキミを忘れても、ボクらがみんな死んでしまっても、キミは死なない。キミが生きていた証あかしが完全に消え去ることはない。

　そう信じたいんだ。信じずにはいられないんだ。耐たえられない

んだ。

　この傷もいつか癒いえるだろうと思っていた。この痛みはだんだんとやわらいでゆくだろうと。そう願っていた。とんでもないことだった。

　この傷は、この痛みは、日増しに深まって、強まって、ボクの中で暴れ狂くるった。ボクはだから、前を向いて、前だけを向いて、傷の上に少しずつ包帯を巻いて、重ねて、次々と重ねて、見えないようにして、閉じこめることにした。封じこめることにした。

　クラニィ、キミはきっとボクの肩を抱だいてくれるだろう。

　そうさ、アジアン。そうやって人ってやつはな。ちょっとずつ大人になっていくんだ。どうしたって、何も失わずに生きていくなんてできっこない。失うのは、誰だれだってつらい。だからって、いつまでもめそめそしてたら、お前さんたちが今、手の中に握にぎりしめてるものまで落としちまいかねない。お前さんたちには、今と、少し先の未来が与えられてる。過去を捨てることはできんだろうが、大事なのはやっぱり今日と明日だ。昨日を、俺のことを忘れろとは言わん。だがな。絶対に間ま違ちがえるな。昨日のために、今日と明日を無む駄だにするな。

　わかってるサ、クラニィ。わかってる。キミの言いそうなことなんて、だいたい見当がつくんだ。

　キミの言うとおりだ。ボクは少しだけ大人になったのかもしれない。ならなきゃいけなかったんだヨ。そうする以外、他にすべがなかった。ボクは我慢していたんだ。やむをえず。でも、無理だ。

　もう不可能だ。ボクはもう自分をごまかすことができない。この目に映るものはＳＩＸ。陶とう磁じ器きのように白くてなめらかな肌はだ。肩かた幅はばが広くてやけに腰が締しまっている体形は前と同じだ。鬼おに火びのごとき禍まが々まがしい輝かがやきを宿した双そう眼がんも。肩にかかるまっすぐな漆しつ黒こくの髪かみも。顔立ちもそう変わってやしない。ただ、少し背が低くなった。全体的に細くなったが、痩やせたというよりも若返ったように見える。左ひだり肩かたに「６」。左肩。どうでもいい。そんなことは。関係ない。ボクにはわかる。

　あれはＳＩＸだ。

　間違いない。

　ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。

　空想の中でキサマを何度血祭りにあげたことか。どれだけの後こう悔かいがボクを蝕むしばんでボクの心を破は砕さいしかけたことか。キサマが邪じや悪あくだということはわかっていた。キサマが害意しか持っていないことも感じていた。キサマが愛と呼ぶそれは憎ぞう悪おでしかない、憎しみを、恨うらみを、愛と呼んで正当化して、欲ほつしたものを手中に収めて、踏みにじって、壊こわして、そうして確かめているんだろう？　大おお袈げ裟さに、身を、言葉を飾かざって、自分を大きく見せて、自分は何ものをえても満ち足りない、飽あき足らない、そういうふりをしていないと、大物然としていないと、不安なんだろう？　自分はこんなにも狂っている、自分の愛は狂っている、常識外れで、特とく殊しゆで、特別で、そういう自分を演出することで、周りを振ふりまわすことで、自分の存在を確かなものにしたいんだろう？　輝いて、注目されて、恐おそれられ、ちやほやされたいんだろう？

　ボクにはわかる。

　今のボクには。

　ＳＩＸ、キサマは、いや、キミは、狂ってなんかいない。狂きよう気きとは無む縁えんの常人だ。その心は。身体からだはどうか知らないが、キミはちっぽけだ。キミは必死で人の道を踏ふみ外そうとしている憐あわれな凡ぼん夫ぷだ。たとえキミの正体が化物だろうと、キミの野望はどこまでもくだらない。キミは他ひ人との命と気持ちをもてあそんで操あやつろうとする。その手管は卑ひ劣れつだし、逆らいがたいが、どれもこれも俗ぞく手しゆだ。誰でも考えつくことだ。腹立たしいヨ。本当に。頭にくる。腹が立って仕方ない。ボクはそんなキミに、とるにたらない俗物に、大切な、大切な、あまりにも大切な、おそらくどれだけ願っても二度とえることは叶かなわないだろう友を、親友を奪うばわれた。妻は夫を失い、娘むすめたちは父親を失い、友は友を失った。ボクが迂う闊かつだったせいで。ボクが未熟だったせいで。ボクが惰だ弱じやくだったせいで。ボクのせいで。

　殺すべきだったんだ。始末するべきだった。その存在を知った瞬しゆん間かんに抹まつ殺さつするべきだった。千切りにしてみじん

切りにして焼きつくして二度と蘇よみがえってこられないように灰をばらまいてしまうべきだった。ボクにはできたはずだ。方法はあった。恐れずに、怯ひるまずに、ルヴィー・ブルーム、あの男がボクに植えつけたおぞましいものたちを、ボクがしっかりと屈くつ服ぷくさせて、決してあらがわせずに、しっかりと手た綱づなを締めて、その力を自在に使いこなすことができていれば、造作もなかったはずだ。そう、今のボクのように。

　駆かけだして左手を前に突つきだした。

「ジャシュギシュ」

　彼の左ひだり腕うではまたたく間に膨ふくれあがって黒い鱗うろこに覆おおわれた。すぐに腕とはとても呼びえない姿へと為なり変わった。それは竜りゅうというよりも巨きょ大だいな蛇へびのようだ。その名はジャシュギシュ。かつて闇やみ色の鱗を持つ蜥蜴とかげ人の絶対王がいたらしい。絶対王は自らの名を冠かんした精せい鋭えい部隊を率いて魔ま導どう王たちと凄せい絶ぜつな戦いを繰くりひろげ、最後には〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーに捕とらえられて処しょ刑けいされたという。その名もジャシュギシュだ。彼の左腕に憑ひょう依いしているジャシュギシュと蜥蜴人の絶対王との間にどんな関係があるのか。彼は知らない。わかっていることはただ一つだ。彼はジャシュギシュを支配している。少しでも気を抜ぬけば、ジャシュギシュは彼を喰くらい、我がものにしようとするだろうが、決して油断などするものか。ジャシュギシュ。キミの餌えさはボクじゃない。ほら、あそこにいる。

「喰らえ……！」

　ジャシュギシュは傲惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡と吼ほえながら首をのばしてＳＩＸに襲おそいかかった。

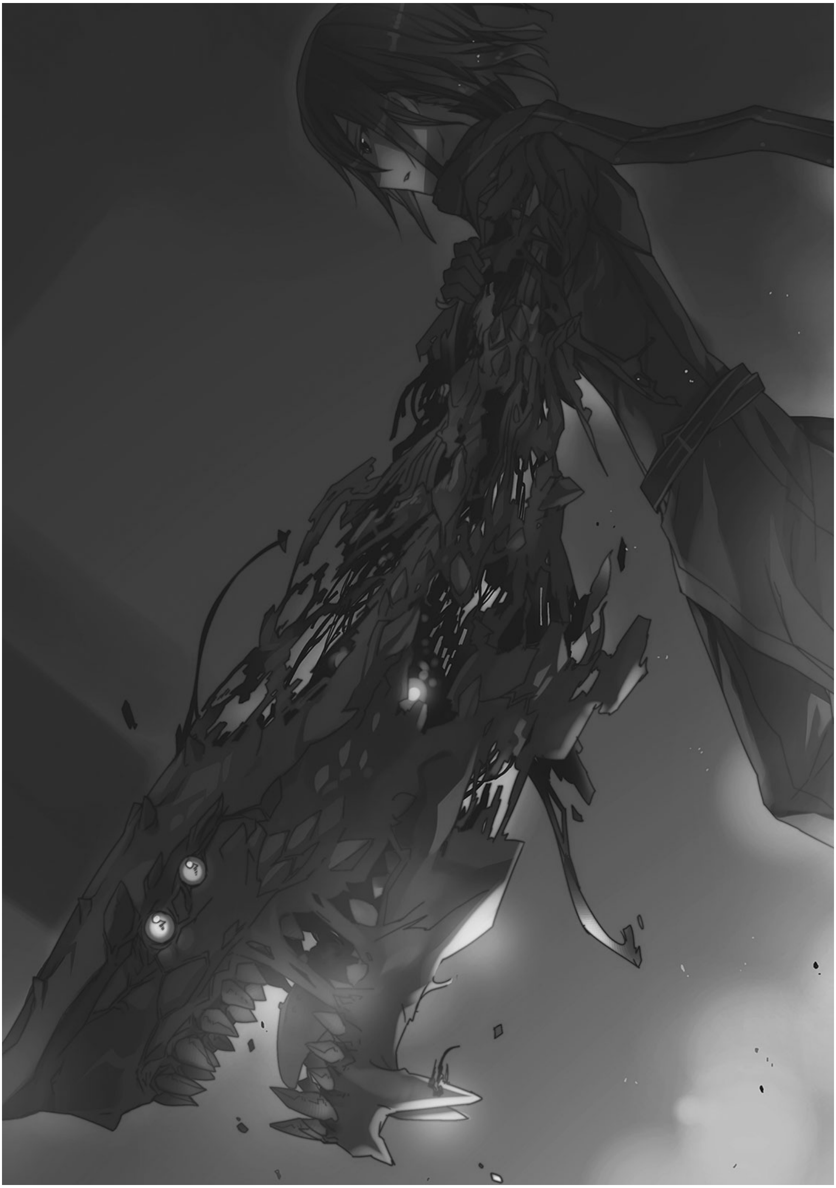
　ＳＩＸは横に跳とんだ。かわそうとしたのだろうが、甘い。

　ジャシュギシュは嚙かみちぎっていた。

　ＳＩＸの右腕だ。

「□□Ｈｙｙｙｙｙｙｙ」ＳＩＸは左手で肩口を押さえて、さらに跳ちよう躍やくした。「すげえ！　アジアン！　想像以上だよ！

なんてサヴィッジなんだ！　お前はu-化物だmonstar……！」



「キミに言われたくはないネ！」彼は冷れい笑しようしてジャシュギシュをけしかけた。「まだ喰い足りないだろう……！　行け！」
傲惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡怨。ジャシュギシュはＳＩＸを追う。ＳＩＸは逃にげ

る。「Ｈｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」笑いながら逃げる。左へ。左のほうへ。ＳＩＸの逃げ足は速い。まるで大ゴ脂ツ羽キ蟲ーだ。ジャシュギシュがガッチガチ上うわ顎あごと下顎を噛みあわせるたびに、ＳＩＸはするりするりと逃のがれた。彼は足を速めた。いくらすばしっこかろうと、しぶとかろうと、ジャシュギシュからは、彼からは逃れられない。逃がさない。「Ｆｕ□Ｈｙｙｙｙｙｙｙ」間もなく笑い声に余よ裕ゆうがなくなった。ＳＩＸを壁かべに追いこんだ。壁は黒い布のカーテンに覆われている。ＳＩＸはカーテンを背にして顔を引きつらせた。「──ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オォォォォォォォォウウウウウウウウ……!?」

　ジャシュギシュが猛もう然ぜんとＳＩＸに突っこんでいった。

「なァーんて、ね……？」血の口紅を塗ぬりたくったＳＩＸの唇くちびるが笑う形にゆがんだ。「──セクスィー忍にん法ぽう……」

　ジャシュギシュはその凶きよう猛もうな顎あぎとでＳＩＸをとらえた。

　いや。

　かぶりついたように見えただけだった。

　それはＳＩＸではない。

　残像だ。

「ＳＨＡＤＯＷ！　ＲＵＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮヌッ……！」

　本物のＳＩＸは一いつ瞬しゆんにして二メーテルほど右方向に移動していた。彼の動体視力をもってすれば、その動きを追うことも十分可能だったが、ジャシュギシュは彼そのものではない。巨きよ体たいゆえに、小回りがきかないという面もやはりある。ジャシュギシュは勢いあまってカーテンにぶつかっていって、その向こうの壁を突き破った。割れ、砕くだけ散る音がした。硝子ガラス？　強化硝子か……？　それが何だ。どうでもいいことだ。

「──アルカーディア……！」

　彼は右手をＳＩＸのほうに向けて彼女を呼び覚ました。彼の右手

は一瞬でほどけた。無数の黒い管となって、それらが濁だく流りゆうと化して、ＳＩＸに押しよせていった。「Ｈｙ□Ｈｙａａａａａａａａｈｈｈｈｈ」ＳＩＸは馬ば鹿か笑いしながら両足で踏ふん張って、握にぎり固めた左の拳こぶしをぐるぐる振ふりまわした。「──グラァーマラス忍法……」

　何がニンポウだ。

　ふざけた生き物だ。

　でたらめだ。

　悪ふざけがすぎる。

　猛回転するＳＩＸの左腕から火花がバチバチバッチバチ放散された。青白い火花と細かい火か炎えんだ。それらが渾こん然ぜん一体となって炎ほのおと雷かみなりの輪と化した。

「ＴＨＵＮＤＥＲ！　ＢＵＲＮＮＮＮ！　ＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＵＴッッッッ……！」

　炎と雷の輪は次々と黒い管を弾はじき飛ばした。あるいは発火させた。忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌。アルカーディアが苛いら立だっている。虚こ仮けにされたジャシュギシュも腹に据すえかねているようだ。彼は舌打ちをした。彼らの感情が昂たかぶれば昂ぶるほど制せい御ぎよしづらくなる。引きずられそうになる。彼らはもともと、ルヴィー・ブルームの憑ひよう依い魔ま術じゆつによって彼の身体からだに植えつけられたものたちだが、彼の中に深く、深く、どこまでも深く、わかちがたいほど深く食いこんでいるのだ。今ならまだ、彼らはおとなしく言うことを聞く。やむをえない。彼は鋭するどく命じた。戻れ。アルカーディアとジャシュギシュはたちまちのうちに彼の右腕と左腕に擬ぎ態たいした。その間も彼は止まっていなかった。ＳＩＸめがけて突とつ進しんした。ＳＩＸは左腕を振りまわすこともやめて、彼を迎むかえ撃うつ気なのか。胸を張って仁に王おう立ちしている。

「我わが輩はいは前の我輩じゃあないんだよ、アァァジアァン」ＳＩＸは舌先で唇を舐なめまわしながら、腰こしをグググッと前に突つきだした。「あらゆる意味でパゥワァァァアァァァァァァァァァァァップしちまってるのさ……！」

　彼は目を瞠みはった。何を。いったい何を。

　ＳＩＸは左手で豪ごう快かいに己おのれの一物を握りしめた。というか、醜みにくい。醜しゅう悪あくきわまりない。なんというか、別の生き物だ。生き物というよりもホースみたいだ。

「ダァァンディー忍法奥おう義ぎッ──」

　その見るにたえないホースの先から、何かが噴ふん出しゅつした。

　水。

　違ちがう。

　もっと、遥はるかに超最低ＳＵＣＫな液体だ。

「ＷＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＴＥＲァァァァァッ！　ＨＥＡＶＥＮヌッ！　ＧＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＬＤオオオオオオオオオォォォォ……！」

「──くっ……！」

　下品。なんたる、下品。低てい劣れつすぎる。口くち惜おしいが、彼は足を止めた。のみならず、下がった。下がるしかなかった。ＳＩＸは腰をぶんぶん振りながら放水しつつ前進してくる。冗じよう談だんではない。あんなものを浴びせられてたまるものか。汚けがらわしい。それに、いくらＳＩＸといえども無尽蔵ではないだろう。こんなことを考えるのも馬ば鹿か馬ば鹿かしいが、ほどなく出し尽つくすはずだ。本当にくだらないが、案の定だった。そのときは間もなくやってきた。

「ヌゥッ……!?」ＳＩＸはブルッと上半身を震ふるわせてホースを振った。「Ｈａ□Ｈａｈａｈａｈａｈａａａａａａ！　すっきりしちまったああああァァァァッ……!?」

「ＳＩＸ……！」

　彼は反転して泣き叫さけぶ短たん剣けんを抜ぬいた。今度こそしとめる。まず動けないように身体をバラバラにして、細切れにして、それから二度と蘇よみがえることができないように処分してやる。彼は飛ぶようにＳＩＸめがけて駆かけた。ＳＩＸは膝ひざを高

く上げて床ゆかを蹴けった。右足と左足で二度、立てつづけに蹴りつけた。その勢いで跳とんだ。セクスィー忍法〝影走りSHADOW RUN〟とやらの、それが正体だ。ＳＩＸは影走りを駆く使しして左へ。彼も当然、左へ。後方でドアが開く音がした。彼は振り返らなかった。気配は感じた。誰だれか入ってきた。声も聞こえた。「──我が主マイ・ロード……！」知っている声だった。聞きたくもない声だ。断末魔以外は。彼はだが、無視した。頭の中から追い払はらった。そのつもりだったが、気にしてしまったのかもしれない。ＳＩＸはもう左の壁かべに達しようとしている。ダメだ。間に合わない。このままでは。彼は泣き叫ぶ短剣を投げつけた。ＳＩＸはニヤリと笑いながら身をよじって短剣をかわした。短剣はカーテンを貫つらぬいた。硝子ガラスの砕ける音がした。彼は右手を突きだして彼女の名を呼んだ。

「アルカーディア……！」

　右みぎ腕うでがほどけて数十本、それ以上の黒い管と化してＳＩＸを猛もう襲しゅうした。わずかに遅おそかった。届かなかった。その前にＳＩＸはカーテンに突っこんだ。

「Ｇｗａ□Ｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａｈａａａａａｈｈｈｈ……！」

　アルカーディアがカーテンに無数の穴をあけて、その向こうの壁を突き抜けた。壁はやはり色のついた強化硝子だった。大きな穴があいている。さっきジャシュギシュが破は壊かいした。それであいた穴だ。ＳＩＸの姿はなかった。穴の向こうだ。逃にげられた。

　彼はアルカーディアを右腕に擬態させて振り向いた。あの不快な鷲わし鼻ばな。不ふ愉ゆ快かいな灰色の目。同じ色の頭とう髪はつ。やけに派手な服を着ている。笑えるほどてんで似合っていないが、ＳＩＸの飼い犬にはむしろふさわしいのかもしれない。ジェイは腰を落として両手を振りかぶった。その指と指の間には悪あく趣しゅ味みな釘ネイルが挟はさんである。優ゆう雅がさの欠片かけらもない。それがやつの得物だ。ジェイはいかにも酷こく薄はくそうな薄うすい唇くちびるを舐めた。

「アジアン……！」

　釘ネイルが飛んできた。ぜんぶで八本。再会を祝して、というわけか。迷めい惑わくなことこのうえない。彼は強化硝子の穴へと身

を躍おどらせた。ジェイ。キミはあとまわしだ。あとで相手をしてやる。今はやつだ。落下しながら標的の姿を捜さがした。下にはいない。どこへ行った。ＳＩＸ。ボクはキサマを殺す。クラニィ、もしかしたらキミは望まないかもしれないが、友の仇かたきをとろうとして何が悪い。文句があるなら、出てきてくれ。ボクに直接、言ってくれ。できないくせに。わかってるサ。だから、勝手にやらせてもらう。

　誰にも邪じや魔まはさせない。

　ボクは従う。

　自分自身の意志に。

Omenage 899 5th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.6

青くとぼけた空の下で

「──と、いうわけでネ……！」

　アジアンはきゅーが繰くりだした左のジャブ、左のフック、右のストレートの三連打を紙かみ一ひと重えの差でかわすなり、スッと後退した。距きょ離りをとろうとしたのだろう。きゅーはさせなかった。体勢を低くしてグッと詰つめより、Ｓｈ！　Ｓｈ！　Ｓｈ……！　アジアンは「ヨ！　ハッ！　フッ……！」とよけたが、さっきよりも動作に無む駄だがあった。余よ裕ゆうがあるわけではたぶんない。逆だろう。その証しよう拠こに、アジアンはとうとう反はん撃げきに転じた。といっても、手加減してはいるのだろうけれど、きゅーめがけて右のミドルキック、ローキック、ハイキック。きゅーはミドルを左腕で払い、ローを左の脛すねで受け、ハイキックはしゃがんで回かい避ひした。そこから身体からだを丸めてアジアンに体当たりを仕し掛かけた。

「黒ビルには……！」

　アジアンはきゅーを飛び越こえた。

　今日はよく晴れていて、風もなく、あたたかい。

　昼前の太陽は青空から微笑ほほえみかけるように輝かがやいている。

　マリアローズはルーシー、ピンパーネルと一いつ緒しよにトマトクン邸ていの庭で芝しば生ふに座って、ひなたぼっこがてら、きゅーに声せい援えんを送っている。ちなみに、トマトクンは起きてきて朝食をとったあと、居間のソファで寝ねてしまった。今もまだ眠ねむっているだろう。

「たしかに……！」

　アジアンが着地するころにはもう、きゅーは方向転てん換かんしていた。

　きゅーはダダンッと両足で間を置かずに地面を蹴った。その勢いで跳んだ。ルーシーが、わあっ、と声をもらした。マリアローズもびっくりした。なんというか、速い、というよりも、距離をまたいだ、もしくは、距離を飛び越えたように見えたからだ。これはひょっとしていけるんじゃないの……？

　きゅーの爪つめがアジアンをとらえた。

　いや、その寸前だった。

「──ムッ……！」

　アジアンの姿が掻かき消えた。

　こっちは何をしたのか、どうやって動いたのか、さっぱりわからない。

　上だ。

　消えて、その一いつ瞬しゆん後、空中に現れた。高さは二メーテル以上だ。

「キミもその技わざを……⁉」

　その技って？

　何を言っているのやらさっぱりだけれど、とにかくアジアンはきゅーの頭上にいる。

　きゅーはすぐに気づいて、右のハイキックで撃うち落とそうとした。ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

　アジアンは迎むかえ撃った。「──ハァッ……！」

　きゅーの右足とアジアンの右足が激げき突とつした。

　マリアローズは拳こぶしを握にぎりしめた。

　これはきゅーのほうが有利だ。身体の重さだけではない。きゅーは地面に足をついている。アジアンは宙にいるのだ。

　果たせるかな、きゅーが押し勝った。

　足を刈かられる恰かつ好こうになったアジアンは、地面に叩たたきつけられた。そうかと思ったら、生意気なことに、ちゃんと両手をついていた。

　アジアンはすぐに起きあがり、きゅーのジャブ、フック、スト

レートのコンビネーションを、ひょい、ひょい、ひょい、とかわして、ちらりとこっちを見た。「──で、ボクはどこまで話したっけ!?」

「ほとんど何も聞いてないような気がするけどね」

「ムゥッ……！　じゃあ、最初から……！」

　アジアンはのけぞってきゅーのアッパーカットをよけ、ジャブとストレートをタンタンッと腕うでで払はらった。それから手刀を作ってみせた。突つくぞ、と見せかけておいて、サッとしゃがんできゅーに足払いをかけた。きゅーはまんまと引っかかってしまった。転てん倒とうした際に、ぎゅう、という、なんだかやたらとかわいい声が出た。転び方も、ふにゃっ、というかんじで、ちょっとユーモラスで愛らしかった。アジアンも虚きよを衝つかれたらしい。追撃するどころか腰こしが引けた。きゅーはその隙すきを見み逃のがさなかった。すぐさま跳はね起きて大口を開けた。その顔がん貌ぼうは完全に野や獣じゆうのそれだ。ふだんはとってもキュートなだけに、落差が大きい。しかも、大変なことにマリアローズは気づいた。今まできゅーの毛は白かった。黄こ金がね色に輝きだしたのはこの瞬しゆん間かんだった。本気モードだ。ずっと抑おさえていたのだ。ＧＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

「──くっ……！」

　アジアンときゅーがもつれあった。その先はマリアローズの目ではとらえられなかった。とにかく、ものすごい速度で互たがいに攻せめて守ってまた攻めて守っている。らしい、としか言えない。ほとんど見えない。

　マリアローズはふと横を向いた。

　ピンパーネルがしきりとうなずいていた。その口くち許もとにはひそやかな笑みが浮うかんでいる。

「特訓の成果デス」

「……特訓とか、してたんだ？」

「はイ」

「いつの間に……」

「秘密でシタ」

「あの！」ルーシーが食いつくようにピンパーネルに迫せまっていった。「ぼくもしてほしいんですけど！　特訓！　よければ、ですけど！」

「は、はイ……」ピンパーネルは首を縦に振ふりながらも目をそらした。「そのウチ」

「絶対ですよ！　約束ですからね！」

「い、いつカ」

「それ、ごまかそうとしてません!?」

「いエ……」

「お願いします、ピンプさん！　ぼく、強くなりたいんです！　みんなの足を引っぱりたくないですし、できれば――」ルーシーはちらっとマリアローズを見て頰ほおを染めた。「だ、誰だれかを、守りたいですし！　そのための力が欲しいんです！」

「でワ」ピンパーネルはかすかに目許をゆるめて小さく息を吐はいた。「今夜から」

「やったぁっ……！」ルーシーは座ったままの体勢で跳とびあがって、何度も土下座した。「ありがとうございますっ！　これからは師し匠しようって呼びます！　あ、お師匠さまのほうがいいですよね!?　お師匠さま！」

「そ、それワ……」

「ダメですか……!?」ルーシーは見開いた赤い眼めを潤うるませて、がっくり肩かたを落とした。「そっか……ダメなんだ……なんか、弟で子しと師匠って、かっこいいなあと思って、あこがれてたんですけど……そっか……ダメなんだ……」

　ピンパーネルは開きかけた口を閉じて、首を横にぷるぷる振った。その判断は正しい。マリアローズは力強くうなずいた。思わず、じゃあいいよって言っちゃいそうになるけどね。それがルー

シーの手ってわけじゃないだろうし、自覚はたぶん、ないんだろうけど、つけあがるといけないから、そこはもうキッパリ断っとかないと。線引きはしないとね。何でもかんでも、目をうるうるさせて頼たのめばどうにかなるとか、そんなふうに勘かん違ちがいさせちゃったら、本人のためにもよくないし。僕らにとっても迷めい惑わくだし。てゆうか、あのー、何？　さっきの、誰かを守りたいとか、そんなこと言ったときに、僕のほう、ちらっと見たよね？　いらないんだけど。そういうのは。守ってほしいとか思ってないし。自分の身は自分で守るし。そのために、やるべきことはやってるつもりだしさ。僕のことは放ほっといてくれない……？　そういうわけにもいかないか。仲間だし、ね。ルーシーがＺＯＯに入るきっかけを作ったのは、他ほかの誰でもなくて、この僕だし……。

　マリアローズが自じ業ごう自得の泥どろ沼ぬまにどっぷり浸つかっている間も、きゅーとアジアンは熾し烈れつな攻こう防ぼうを繰くりひろげまくっていた。

　それにしても、きゅー、すごい。すごすぎ。あのアジアンと互ご角かくに渡わたりあうなんて。や、互角とは言えないかもしれないけど。アジアンは全力を出しきってるわけじゃないし。

　ただ、アジアンはちょっと楽しそうだ。

　速すぎて、目で追うだけでやっとだけど、なんていうか、身のこなしに躍やく動どう感があるっていうか。生き生きしてるっていうか。あいつって、そういうタイプじゃないから。パパッと動いてみせても、妙みように気合いが入ってないように見えるんだよね。余よ裕ゆうぶっこいて、上から目線で、まあこんなものだろうネ、キミでは所しよ詮せんボクには勝てないヨ、みたいなこと思っていそうな、ある意味、かなーり嫌いや味みな態度で。

　今は、でも、力をセーブしているなりに、手を抜ぬいていない、矛む盾じゆんしているけれど、そんなふうに見える。きゅーの体術が、それくらい高いレベルにあるということだろう。あいつって、ほんっとにバカだし。結局、けっこう好きなんだよね。戦うのが。何がおもしろいのか知らないけど。

「マリアさん」

「へ？」

　ルーシーに名を呼ばれて、我に返った。我に返る？　や、べつにぼうっとしてたわけじゃないけど。そのはずだけど。

「な、何？　どうかした？」

「いえ……」ルーシーは軽く首を振って唇くちびるの端はしをきゅうっと嚙かんだ。「なんだか、すごく、その……やさしい顔をしていたので」

「は？　だ、誰が？　僕？　なんで？」

「さあ……ぼくはマリアさんじゃないので、わからないですけど。ていうか、だから訊きいたんですけど」

「き、気のせいじゃないの？」マリアローズは両手でほっぺたを挟はさむようにして、ごしごし擦こすった。「目の錯さつ覚かくだよ、きっと。光の反射とか屈くつ折せつとか、なんかそういうので、偶ぐう然ぜんそんなふうに見えただけなんじゃないかな」

「そう……なんですかね」

「た、たぶんね」

「ふうん……」ルーシーは大きなため息をついた。

　あー、なんかもう、めんどくさい。なんで僕が弁解したりごまかしたりしなきゃならないわけ？　てゆうか、やさしい顔とかしてないし。するわけないし。してたんだとしたら、きゅーの雄ゆう姿しがあんまりにも勇ましすぎて微笑ほほえましいもんだから、おそらくそのせいだし。そう。そうだよ。それだよ、それ。きゅーも楽しそうだしね。やっぱりこう、身体からだを動かすのとか、必要なんだろうね。ストレス解消にもなったりするし。運動にしては、
ちょっと激しすぎるような気もするけど。

「──やるネ……！」

　ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ……！

　アジアンときゅーは何十度目か、もしかしたらそれ以上の衝しよう突とつ、激突の果てに、申しあわせたように飛び離はなれた。

「認めざるをえないヨ！　キミは強い！　好敵手とはキミのことサ！　気づいているだろうが、ボクは本気を出してはいない！　でも、それはキミも同じだネ？」

「きゅう！」

「フッ！」アジアンは前まえ髪がみを指先で払はらった。「お互たがいすべてを出しきろうなんて野や暮ぼなことは言わないヨ！　少なくとも、ボクとキミだけはわかっているはずサ！　そんなことをしなくても、これはもはや遊びじゃない！　真しん剣けん勝負だ！」

「くう！」

「さあ、そろそろ決着をつけよう……！」

「きゅううぅ……！」

　二人の距きょ離りは約五メーテルだ。両者の力を考えれば、あってなきがごとしだろう。一いつ瞬しゅんでゼロになる。

　マリアローズは歯を食いしばって拳こぶしを握にぎりしめた。二人ともすさまじい気き迫はくだ。張りつめた空気が今にも破は裂れつしてしまいそうだ。

　強きょう烈れつな気には、温度や形としてとらえられるイメージが自おのずと備わる。アジアンはどこまでも鋭するどい絶対零れい度どの刃やいばで、きゅーは火の粉を撒まき散らす炎ほのおの渦うずといったところだろうか。対照的だけれど、拮きつ抗こうしている。現時点では。

　ぶつかりあったら、いったいどうなるのか。何が起こるのか。

　勝負はたぶん、一瞬で決する。

　そのときはいつ訪おとずれるのだろう。

　決定権を持っているのはお互いだけだ。

　マリアローズたち部外者は固かた唾ずをのんで見ていることしかできない。

　ルーシーが、すぅっ、と息を吸いこんだ。

　果たして、そのかすかな音がきっかけになったのか、どうか。

　アジアンときゅーは同時に動きだした。その瞬間まばたきをしたら、きっとその間にすべてが終わっていただろう。

　アジアンの右手の人差し指と中指はきゅーの右目の直前で静止していた。

　きゅーは両手でアジアンの頭部を左右から挟んで潰つぶす寸前だった。

　まるで彫ちよう像ぞうと化したかのようだった。

　二人はしばらくの間、その姿勢を保ったまま微び動どうだにしなかった。

「フッ……」先にアジアンが表情をゆるめた。「堪たん能のうさせてもらったヨ」

　そうして右手をひっこめ、すっと身を退ひいて、きゅーに背中を向けた。

「きゅう」

　隙すきあり。

　おそらくきゅーはそう言ったのだと思う。

　きゅーはアジアンの後頭部を軽く引っぱたいた。その程度の叩たたき方だった。そう見えたけれど、きゅーは力が強い。ぼごんっ、というかんじの、けっこういい音がした。

「□□おっ」

　アジアンは前のめりに勢いよく芝しば生ふに倒たおれこんだ。顔面からだった。裏返しの大の字になって、手足をぴくぴくさせている。

　きゅーがこっちを見て首を傾かしげた。「きゅう……？」

　ちょっと悲しそうな、困こん惑わくしているような表情だ。

　きゅーは人間の言葉がだいたいわかるけれど、複雑な表現だと理解するのに若じやっ干かん手間取ることもある。堪能させてもらったヨ、か。あれは少し難しかったかもしれない。相あい討うちのようだから、今日のところはこれまでにしておいて、また勝負しよう、ということを、もっとはっきり言えばよかったのだ。

　つまり、アジアンのせいだ。アジアンが悪い。一方的に。きゅーは完全なる被ひ害がい者しやだ。

　マリアローズはきゅーに笑いかけてあげた。「大だい丈じよう夫ぶ、大丈夫。それくらいで死んだりしないから」

「くう」きゅーはほっとしたようにうなずいてから指をくわえて、ぴくぴくしているアジアンを見下ろした。「きゅう……」

「あー。いいんじゃない？　今回はきゅーの勝ちってことで。かっこつけて油断したそいつが悪いんだし。まあ、だいたいさ。最後まで気を抜ぬかなかったほうが勝ったりするんだよ。勝負って」

「きゅう？」きゅーは自分を指さした。

「そうそう。きゅーの勝ち」

「おめでとうございますっ、きゅーさん！」

「おめでトウ」

　ルーシーが激しく、ピンパーネルが慎つつしみ深く拍はく手しゆすると、きゅーも満まん更ざらでもない様子だった。もちろんマリアローズも手を叩いた。しかし、大丈夫なのかな、あいつ。や、大丈夫に決まってるけど。いくらきゅーの力が強くたって、一発ぶん殴なぐられたくらいでどうにかなっちゃうようなタマじゃないし。むしろ、身体からだつきからは想像できないくらい、そうとうタフだし。それなのに、なんでまだぴくぴくしてるのかって話なんだけ

ど。絶対、わざとだよね。演技でしょ。完かん璧ぺきに。何のために……？

　少々、いや、かなり唐とう突とつの感は否いなめなかった。

「さテ」ピンパーネルがすっくと立ちあがって、静かな砂色の瞳ひとみでルーシーときゅーを順々に見た。「行きまショウ」

「くう」きゅーはこくんと首を縦に振ふった。

「え？　どこにですか？」ルーシーは不思議そうだ。

「ちょ、ちょっと？　ピンパーネル？」マリアローズも呆あつ気けにとられて目をぱちくりさせた。

　ピンパーネルは微び笑しようともいえないようなほのかな笑えみを口くち許もとに浮うかべた。な、何？　何だよ、その意味ありげな視線。目つき。マリアローズは訊きこうとした。問い質ただすべきだ。できなかった。なぜか何も言えなかった。

「えーと」ルーシーはピンパーネルとマリアローズを交こう互ごに見た。「あの……えっと、それで、行くって……どこへ、ですか？」

「来テ」ピンパーネルはルーシーの襟えり首くびをつかんだ。

「わっ、ピ、ピンプさん!?　いきなり何をっ……!?」

　ルーシーはとっさに抵てい抗こうしようとしたみたいだけれど、無む駄だだった。ピンパーネルは軽々とルーシーを持ちあげた。ルーシーはそれでも自分の足で立とうとしなかったので、ピンパーネルに引きずってゆかれる形になった。

「い、痛っ、く、苦しいですよ、ピンプさん！　首が、絞しまって……！　ぐうっ！」

「平気。死なないdeath」

「へ、平気じゃないですって！　あ、歩きますから！　自分で！」

「でワ・そうしてくだサイ」ピンパーネルは手を離はなした。

振り返ってマリアローズを見たルーシーの肩かたを、きゅーが押した。「きゅう」

いかにも渋しぶ々しぶといったかんじだった。ルーシーはピンパーネル、きゅーと一いつ緒しよに家のほうへと歩いていった。マリアローズはしょんぼりしたルーシーの後ろ姿を呆ぼう然ぜんと見送っていた。やがて見えなくなって、二人きりになった。二人きり、とか——そんなんじゃないっていうか、や、二人きりっていえばたしかにそうなんだけど、たいしたことじゃないし、てゆうか、ピンパーネルってば、いったい何のつもりなんだよ。ほんと、なんでこんなことするわけ？　意味わかんないんだけど？　やめてくれない……？

まあ、そのピンパーネルはもういないわけだけどさ。家に入っちゃったし。この広々とした庭には僕とあいつしかいなくて。僕も家に戻もどろうかな。でも、黒ビルの話を聞かないといけないし。深夜、黒ビルに侵しん入にゅうしたってところまでしか、まだ聞いてないし。

マリアローズはおそるおそるアジアンに近づいていった。頭のすぐそばで立ちどまり、しゃがみかけて、ためらった。

しばらくの間、アジアンの後頭部を見下ろしていた。

アジアンは裏返しの大の字のままだ。身動き一つしない。

何度もしゃがもうとして、そのたびに思いなおした。

ため息をついてしまい、唇くちびるを噛かんだ。

気になって、あたりを見まわした。

誰だれもいない。どこかに隠かくれてのぞいたりもしていない、と思う。おそらく。

しょうがないなぁ。

何がしょうがないのか、よくわからないけど。

しゃがんで、手をのばせばふれられる距きょ離りまで近づくと、なぜか胸の鼓こ動どうが高まった。ちょっとだけだ。や、てゆうか、そんなわけないし。ただ心臓の調子が悪いだけかもしれない。

それはそれで、やなかんじだけど。意識すればするほど動どう悸きが激しくなる。あーもう何これ？　どうしちゃったんだよ、僕。頭を抱かかえて、髪かみの毛を引っかきまわしたい。どうにかこらえた。顔、あっつい。だんだん腹が立ってきた。おかしいよ、こんなの。変でしょ、だって。

　僕は、さわりたい、と思ってる。

　少しでいいから、ふれたい。

　こらえてる。

　我が慢まん、しなきゃ。

　それなのに、勝手に動いてる。

　右手が。

　抑おさえられない。

　人差し指で、アジアンの頭をつついた。

「バーカ」

　声が震ふるえてしまいそうで、怖こわかった。すごく、怖かった。

　放ほうっておいたら、僕はきっと、アジアンの髪の毛をつまんで、指に絡からめて、引っぱろうとする。そんなこと、したくない。しちゃいけない。

「失神とか、気絶とか……してないくせに。するわけないのにさ。あのくらいで」

　アジアンの頭がぴくりとした。

　マリアローズは手を引っこめて、自分の膝ひざを両りよう腕うででできつく抱だいた。

「何やってるんだよ」

「……ごめん」

くぐもった声だった。

アジアンはまだ地面に顔を押しつけている。

マリアローズは空を見上げた。

息苦しくてたまらなかったからだ。

力が抜ぬけて、腰こしが落ちて、マリアローズは芝しば生ふに座った。

草をむしろうとして、やめた。

目をつぶって、開けると、アジアンが顔を上げていた。

薄うすい青の瞳ひとみはどの季節の空よりも澄すんでいる。臆おく病びようなくせに、なんでそんなふうにまっすぐ僕を見るんだろう。求めているくせに、どうして近づいてこないんだろう。わかってる。僕が望んでいないからだ。

なりゆきで何度か抱きしめて、抱きしめられた。息が止まるほど、強く、強く、力いっぱい身を寄せあったこともある。離れたくないと思ったことさえ。錯さつ覚かくだったに違ちがいない。だって、こんなに怖い。恐おそろしくてたまらない。ただ指先でふれることさえ躊ちゆう躇ちよしてしまう。この距離は埋うめないほうがいい。できることなら、もっと離れて、二度と会わないほうがいい。そう考えると、心がかき乱される。無残に、千々に砕くだけ散ってしまいそうになる。

きみのことを嫌きらいじゃないって思うだけで、こんなにつらいんだ。

好きだなんて、思えない。

たまに、一人きりのときに、きみのことを思い浮うかべる。ふっと、思い浮かぶ。

ここにいるんだ。

僕の胸の中に。

もう、いるんだ。

なんだか、それだけでいいような気もするんだ。

僕はきっと、たとえこれっきりだとしても、きみのことを忘れたりしない。だから、それだけでいいような気がする。

五日、六日、ときには十日くらい、きみと顔をあわせない日々がある。僕はなんともないんだ。きみに会いたいなんて、思わない。思ったりしない。自分にそう言い聞かせる。だって、もしかしたら、きみは僕のことなんかどうでもよくなったのかもしれないし。だから会いにこないのかもしれないし。それならそれでいい。そのほうがいいんだ。僕は何もしてあげられないし。僕には無理だし。きみだって本当はわかってるんじゃないかって思うし。いつかあきらめるんじゃないかって。そのうち目が覚めるんじゃないかって。だけど、きみは現れる。僕の前に。そのたびにほっとしたりなんか、してない。絶対、してない。

臆病なのは、僕のほうなのかもしれない。

ぐずぐずしているうちに時間は流れる。

ひどいのかな。

こんな態度はひどいよね。

わかってる。噓うそだ。わかってない。

きみが何を考えてるのか、僕にはさっぱりわからないよ。

なんで僕に愛想を尽つかさないんだよ。なんで僕をさらっていかないんだよ。なんで僕を突つき放さないんだよ。なんで僕を抱きすくめようとしないんだよ。曖あい昧まいな距きょ離り感かんで、べつに心ここ地ちいいわけでもないのに、なんとなくお互たがい妥だ協きょうしあってる。

「黒ビルで、何があったの」

「ああ……」アジアンはゆっくりと起きあがって、芝生の上であぐらをかき、少し上体をそらして両手を地面についた。

一度うつむいてから、マリアローズを見た。

もう平気だ。

　マリアローズは平然とアジアンの視線を受け止めた。

　アジアンはちょっとだけ笑った。

　ほんの少し、寂さびしそうに。

　だけどそれでいて、安あん堵どしたように。

「ボクは黒ビルに侵しん入にゅうした。最上階に、ホールというのかな。広い部屋があって──」アジアンはそっと息を吐はいて目を細めた。「いたヨ。あの男はたしかにいた」

「そっか」

　半分予想していた。本当にそうだろうか。いずれにせよ、マリアローズは驚おどろいてはいなかった。こうならなければいい。そんな願いほどたいてい叶かなわないものだ。いいことなんてそうそうありはしない。だからこそ幸運はいつだって貴重なのだろう。

「はっきり見たんだよね」

「話もした」

「じゃあ、隠かくれて姿を見たとか、そういうのじゃなくて、ばっちり会ったってこと？」

「そう──」アジアンは唇くちびるの端はしをかすかにゆがめた。「キミに隠し立てはしない。正直に言うヨ。ボクはあれを殺すつもりだった」

「え」

「個人的に、恨うらみがないわけでもなくてネ」

「それって」

　胸に何か刺ささった。

　太くて、鋭するどい、杭くいのようなものが。

　こんなときこそ逃にげだすべきだ。

　それなのに、なぜか踏ふみだしてしまう。

　見たくない、聞きたくもないのに、目を閉じることも、耳をふさぐこともできない。

「クラニィの……ことで？」

　アジアンは口を少し開いた。声は出なかった。唇の合間からのぞいた歯は嚙かみあわされたままだった。

　アジアンは息を吸って、吐いた。

　視線が揺ゆれた。

「きっとクラニィは望まないだろうけどネ」

　しぼりだしたような声だった。

「復ふく讐しゆうなんて意味がない。何も生みださない。もっと有意義に時間を使えと、クラニィなら言うだろう。ボクの気持ちの問題サ。それが一番重要だったんだ。だから、誰だれにも言わなかったヨ。仲間にもネ。もし──」アジアンは片かた膝ひざを立てて両りよう腕うでで抱かかえこんだ。「もし、あの男が生きていたら。ボクは最初から決めていた。この手で、自分一人で片を付けるつもりだった。申し訳ないけど、灰被りアッシユカバードクンのことなんてこれっぽっちも考えてやしなかったヨ。あの男が誰の父親だろうと、そんなこと、ボクにはどうでもよかった。ボクはあの男を始末するつもりだった。そのあとのことなんて、本当にどうでもよかったんだ」

「やれなかったんだね」

「すまない、マリア」

「なんで謝るんだよ」

　顎あごが震ふるえそうになった。

　わざとため息をついて、ごまかそうとした。

「どうして、きみが僕に謝るんだよ」

　アジアンはわずかに眉まゆをひそめて、じっとマリアローズを見つめていた。

やがて手をのばしてこようとした。

僕は拒こばまなかったのに。

今なら払はらいのけたりしなかったのに。

アジアンは結局、膝を抱えなおして下を向き、深呼吸をした。
「右腕一本、食いちぎってやっただけでネ」

そんな皮肉っぽい、自じ嘲ちようげな笑えみなんて見たくない。そんな笑い方はしなくていい。

僕にだって、それくらいのことは言ってあげられるはずなのに。

できなかった。

「逃げられたヨ」アジアンはわずかに眉をひそめて首を傾かたむけた。「前よりすばしっこくなったみたいだ。それから、おかしな技わざを使っていた。あの男のことだから、何かトリックがあるのかもしれないけどネ。見た目も変わっていたな。少し若返っていた」

「若返って……？」

「ボクも他ひ人とのことは言えないけど、あれは普ふ通つうじゃない。死んだはずなのに、こうして舞まい戻もどってきたんだからネ。何があっても不思議じゃない」

「間ま違ちがいないんだよね」マリアローズは軽く頭かぶりを振ふった。「べつに、疑ってるわけじゃないんだけどさ。僕は一応、最さい期ごの瞬しゅん間かんを見たから。かろうじて、だけど」

「そういえば」アジアンは斜ななめ下に視線を投げた。「あったヨ。左ひだり肩かたに」

「あったって、何が？」

「ボクは必ずしも刺青いれずみとは思っていないけど、例の──」

「６？」



「そう」

「そっか。え？　待って」マリアローズは首をひねった。「左肩？　胸じゃなくて？」

「ああ。左肩だった」

「胸には？」

「なかったネ」

「じゃあ、雑誌のモデルは別人だってこと？　でも、ＳＩＸは黒ビルにいて──あれ……？」

　もともと６の刺青だか刻印だかはＳＩＸは左肩にあったわけで、アジアンがそれを見たというのだから、矛む盾じゅんはしない。ルーシーが父親に違いないと言ったのはリヴァイスのモデルだ。リヴァイスのモデルの胸には６の刺青ないし刻印があって、体形もなんとなくＳＩＸっぽかった。その人物がＳＩＸに似た別人だとしたら、ルーシーの父親はＳＩＸではないということになるので、めでたしめでたし、だ。でも、ＳＩＸはリヴァイスの黒ビルにいた。

　アジアンは肩をすくめてみせた。「まだ裏がありそうだネ」

「なーんか、めんどくさいことになりそうな予感が……」マリアローズは苦く笑しようした。「もうなりかけてるけどね。ま、いつものことではあるんだけど」

「ＺＯＯキミたちはなぜかトラブルに巻きこまれやすいみたいだ」アジアンはからかうように唇くちびるの片かた端はしをつりあげた。

「まったく──」

　こんなふうに、いつでも気軽に、なにげなく喋しやべることができればいいのに。

　どうしてできないんだろう。

　誰だれか教えてくれないかな。

　すっとぼけた青空が、ちょっとだけ憎にくらしかった。

「なんでなんだか」

Omenage 899 5th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区

chapter.7

どこにも行かないで

　めずらしくアジアンは立つ鳥跡あとを濁にごさずとばかりにおとなしく立ち去った。個人的に動いてみるつもりのようだから、何かわかったら教えてくれるだろう。そのあと、昼ご飯にあわせてトマトクン邸ていを訪おとずれたユリカ、サフィニアを加えて、マリアローズ、トマトクン、ピンパーネル、ルーシーの六人で第八区へ向かった。他ほかにあてがあるわけでもないので、黒ビルの様子を見に行ってみることにしたのだが、到とう着ちやくしてまず驚おどろいた。

「む」トマトクンは目の上に手でひさしを作って黒ビルの上のほうを見た。「アジアンのやつ、だいぶ派手にやったみたいだな」

「そう……ですね……」

　サフィニアはトマトクンの隣となりにいる。本当はぴったり寄り添そいたいところだろうし、そうしたところでトマトクンは泰たい然ぜんと構えているだろうけれど、さすがにそこまで大だい胆たんにはなれないようだ。

　ちなみに、ここにくるまでの間にざっと説明したので、アジアンからもたらされた情報をふくめた事の次し第だいは、みんなわかっている。ただ、今日の昼食にはカタリもくることになっていたのに、姿を見せなかった。よくあることっていえば、ホントによくありまくることなんだけど、あの半魚人、どこで何をしてるんだか。

「ビル……壊こわれています、ね……というか、なんだか……ひとけがないような……」

　サフィニアの言うとおりだ。

　黒ビルは一夜のうちに様変わりしていた。

　まず、最上階の壁かべだ。そんなふうには見えなかったけれど、外がい壁へきの少なくとも一部は、どうやら硝子ガラス、おそらく色つきの分厚い強化硝子製らしい。それが割れて、穴があいている。その破は片へんがビルの前に散らばっていて、掃そう除じくらいしようよ、と言おうにも、相手がいない。昨日は玄げん関かん前に四人の屈くつ強きような男が立っていたのに、今日は無人だ。

　ユリカが可か憐れんに首を傾かしげてみせた。「お休やしゆみな

のかしら」

　とにかくかわいいので、つい、うん、そうだよ、絶対そうに違いないよ、と力強く同意してしまいたくなる。

「確かめてみればいいんじゃないか」トマトクンはだるそうに首を左右に曲げた。「見たかんじだと、簡単に入れそうだしな」

「またそうやって、強ごう引いんな……」マリアローズは眉まゆをひそめた。

「じゃあ、やめるか？」トマトクンは片方の眉を大おお仰ぎように つりあげた。

「ううん」マリアローズは笑え顔がおで首を横に振ふった。「やって」

「や、やるんですか」

　ルーシーがすかさずツッコんできた。アジアン情報を聞いて以来、うっとうしいほど沈しずみこんでいたのに、しっかりツッコミを入れてくるなんて、なかなか侮あなどれない。ちょっとだけ見なおした。

　我らがＺＯＯは常にツッコミ要員が不足している。

　基本的にボケだらけなのだ。

「よし」トマトクンはニヤリと笑った。「ついてこい、ピンプ」

「はイ」

　砂色の元アッサシンを引き連れた我らが園長マスターは、黒ビルの玄関を目指してのっそりのっそり歩いていった。背が高いから一歩がでかいし、実際はそれほど足の運びが遅おそいわけではないのだけれど、やけに動作がゆったりしているように見える。悠ゆう然ぜんとしていて、ときに唐とう突とつだ。トマトクンは玄関の手前で背中の琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣を抜ぬいて、いきなり強化硝子製の扉とびらに斬きりつけた。岩をも砕くだくのではなく叩たたき斬ってしまう斬ざん撃げきだ。強化硝子製の扉もスカッと斜ななめに斬れた。トマトクンは斬れた扉を、ふんっ、と蹴けりつけた。じつに簡単だった。扉は粉々に割れ砕くだけて、扉

としての役割を果たせなくなった。

「ピンプ」トマトクンはピンパーネルを一いち瞥べつし、顎あごを振って中を示してみせた。「ざっとでいい。見てきてくれ」

　ピンパーネルは無言で一つうなずいて、黒ビルに駆かけこんでいった。

　黒ビルは相変わらず静かな、あまりにも静かなたたずまいを見せつけている。

　トマトクンがこっちを向いて手招きしてみせた。念のためにピンパーネルを偵てい察さつに出したけれど、危険はなさそうだ。それがトマトクンの判断なのだろう。我らが園長マスターの危機察知能力は野や獣じゅう並みなので、かなりあてになる。マリアローズはユリカ、サフィニア、ルーシーと目を見み交かわして、一応、用心は怠おこたらず、慎しん重ちように黒ビルへと近づいていった。ピンパーネルは二分か三分で戻もどってきた。

「ふぬけノ殻からでシタ」

　真顔だった。

　どうやらピンパーネルは、冗じよう談だんで言ったわけではないらしい。

　もぬけとふぬけ。

　似てはいる。

　一字違ちがいだし。

　ひょっとして、何かに引っかけたのだろうか。何に……？

　マリアローズは救いを求めてユリカを見た。ユリカは眉をひそめて上に目線を向けていた。サフィニアも何やら考えこんでいる。深刻な顔だ。トマトクンはぼんやりしている。気にもしていないのだろう。細かいっていえば、細かいことだしね。たいしたことじゃないし。ここは流しておいたほうが……？

「あのう」ルーシーは申し訳なさそうな表情で、けれども、ずばっと指し摘てきした。「それを言うなら、ふぬけの殻じゃなくて、も

ぬけの殻じゃないでしょうか」

「もぬ……」ピンパーネルは口ごもって言いなおした。「もぬけノ・殻？」

「だと、思うんですけど」

「もぬけ……」ピンパーネルは目を伏ふせて、それだけではとうてい足りない、とでもいうようにうつむいた。

　その顔が一いつ瞬しゆんにして真っ赤に染まった。耳や首まで赤くなった。

　ピンパーネルは手で口を押さえた。そうする前に唇くちびるを嚙かみしめるところを、マリアローズは目もく撃げきしてしまった。

　ルーシー。ルーシー・アッシュカバード。なんてことするんだよ。ちょっとした勘かん違ちがいっていうか、覚え間違いにすぎないのに。ピンパーネルも、このごろ少し共通語が上達してきて、積極的にいろんな表現を使おうとしてるんだからさ。がんばってるんだから、もっとこう、言い回しっていうか、方法、タイミングとか、あるでしょ。考えようよ、そこは。

　でも──、

　か……、

　かわいい。

　恥はずかしがっているピンパーネルなんて、そうそう見られない。ピンパーネルには悪いけど。かわいそうなんだけど。ごめんなさいってかんじだけど。胸がときめいちゃったかも。

「もぬけノ殻」ピンパーネルは口を押さえたまま一つうなずいた。「覚えマス。教えてくれてありがトウ」

「どういたしましてっ！」ルーシーは満面に笑みをたたえて頭を下げた。「ぼく、小さいころから本を読むのが好きだったので、言葉とかはけっこう知ってるんです！　何でも聞いてくださいね！」

「はイ……」

「で、どうしよっか……ね？」マリアローズは皆みなを見まわした。

　強ごう引いんに話題を変えようとしたせいだろうか。

　語ご尾びが変になってしまった。

「うーむ」トマトクンは大剣で肩かたをぽんぽん叩きながら顎を撫なでた。「どうしたもんかな」

「きみ、考えてるふりしてるだけで、何も考えてないでしょ」

「そんなことはないぞ。俺なりに考えてはいるんだが、何も思いつかないんだ」

「偉えらそうに言わないでよ、そんなこと」

「あ、あの……」サフィニアが慌あわてて口を挟はさんできた。「あ、アジアン……さん、からの情報は、他ほかには何も……？」

「逃にげられてからも、だいぶ捜さがしまわったらしいんだけどね。手がかり一つ見つけられなかったみたい」

「昔から逃げ足だけはやたらと速いやつだったしな」

「ここはリヴァイスしゆのビルなのよね。人がいなくなったということは、ブランド自体も消えてしまったのかしら」

「それはないんじゃない？　雑誌なんかで宣伝しまくってたわけだし。なんていうか、一大プロジェクトだよね。黒ビルに侵しん入にゆうされて、ＳＩＸの姿を見られたからって、ブランドまで畳たたんじゃうとは思えないけど」

「だが――」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて鼻から息を吐はいた。「やつが間違いなくここにいたって事実は、意外と重要かもしれんぞ。ん……？　何だ、マリア。その顔は。何か驚おどろくようなことでもあったのか」

「や、ほんとに考えてたんだなぁって」

「俺だって、たまには頭を働かせることくらいあるぞ。お前はいったい、俺のことを何だと思ってるんだ」

「園長マスターでしょ？　ＺＯＯ僕らの。暇ひまがあれば寝ねてばっかりいる」

「うむ。この前、自分が一日にどれくらい寝てるのか、ちょっと計ってみたんだがな。十六時間くらいだった」

「猫ねこレベルだよ、それ」

「猫は……」サフィニアは頰ほおを赤らめてもじもじした。「いい、ですよね……猫……好きです、わたし……」

「俺は犬派だな。なんとなくだが」

　サフィニアはがっくりと肩を落とした。「……そ……そ、そう……ですか……」

「わたしは猫も犬も、どっちとも好しゆきだわ」

「あ……わたしも、じつは……そうです……！」サフィニアはがんばった。

「ワタシ・きゅーがいいデス」

「ぼ、ぼくは！　鳥とかが！　空を飛べる生き物って、なんか、よくないですか!?」

「それでトマト、意外と重要って？」

　べつに意図したわけではないけれど、ルーシーを無視するような形になってしまった。

　見れば、ルーシーは傷ついたような顔をして、目をうるうるさせている。あ、謝らないからね？　いちいちそんなことしてたら、きりがないし。めんどくさいし。腫はれ物にさわるような扱あつかいをするのは、なんか違うような気がするし。

「ああ」トマトクンは大たい剣けんを背中に戻もどして首を左右に曲げた。「アジアンはやつに恨うらみがあるみたいだが、それは何もあいつにかぎらんだろう。あの腐くされ外げ道どうが生きていたら、仕返ししてやらんと気がすまん。そう思ってる連中はごろごろしてるんじゃないのか」

「そっか」マリアローズは顎あごをつまんだ。「考えてみれば、そうだよね。僕だってあの超最低ＳＵＣＫ野や郎ろうがしたことは絶対、許せないし。たとえば、秩ちつ序じよの番人なんかは……」

「連中にとっては、親の仇みたいなものだろうからな。もし、ＳＩＸが──」トマトクンは臭くさい匂においでも嗅かいだように鼻に皺しわを寄せた。「やつが生きてるってことがはっきりしたら、血ち眼まなこになって殺そうとするはずだ」

「大おお騒さわぎになるよね。ＳＩＸが堂々と姿を見せたりしたら。それで、雑誌のモデルをしたときも、あえて顔を出さなかったのかな」

「でも……刺青いれずみの位置が……違ちがうんでしょう……？」

「写真のことはよく知らないけど」ユリカは腕うで組ぐみをして小首を傾かしげた。「刺青いれじゆみはお化け粧しようか何かで隠かくしぇるんじゃない？　逆に、何かで６の字を書いて、刺青いれじゆみみたいに見しぇることだってできると思うわ。ＳＩＸは実じつ際しやいいたんだし、あのモデルはやっぱりＳＩＸだって考えるべきなんじゃないかしら」

「そうなんだけどね……」マリアローズは拳こぶしで額をこつこつ叩たたいた。「なんか気になるんだよ。引っかかるっていうか。このややこしさに何の意味もないとは、ちょっと思えないんだよね」

「はあぁぁ……」

　大きなため息だった。ルーシーだ。意識しているのかどうかはわからないけれど、注意を引きたかったのだろう。気にかけてもらいたい。自分のことを考えてほしい。そういう気持ちは理解できる。母親を亡くして、父親に会うために故郷をあとにして、長い一人旅の果てに、混こん沌とんとしたエルデンへ。そこでようやく仲間ができた。しかも全員、自分より年上だ。甘えたいだろう。やさしくしてほしい。いけない。ダメだ。でも、なかなか抑よく制せいがきかない。そんな自分に気づいてしまうと、今度は情けなさで泣きたくなってくる。寝る前にふと、そのときのことを思いだし、胸を掻かきむしりながら叫さけびたくなって、声を殺すために顔を枕まくらに押しつけるのだ。そんな夜がマリアローズにもあった。

「ちょっと……ていうか、だいぶ、不思議な気分です」ルーシーは

投げやりで苦い笑えみを浮うかべた。「皆みなさんが話してるのって、ぼくのお父さんのことかもしれないんですよね。だけど、ぜんぜんそうは思えないんです。だって、ぼくが知っているお父さんは、おっきくて、たくましくて、やさしくて……」赤い眼めが涙なみだぐんだ。「お母さんを愛していて、ぼくのことも愛してくれて、たまにしか会えませんでしたけど、いつだって会いたくて、恋こいしくて、会えたときは嬉うれしくて、幸せで……仕返しとか、仇かたきとか、殺すとか、そういう言葉とはどうしても結びつかないんです」

「まだ決まったわけじゃないわ」ユリカはルーシーの背中にそっと手をあてた。「今はしょれしか言えないけど、元気を出して、ルーシー」

「はい、ユリカ姉様」ルーシーは弱々しくユリカに微笑ほほえみかけた。

　マリアローズはサフィニアと視線を交かわして、どちらからともなくほっと息をついた。

　まだ決まったわけじゃない。

　この状じよう況きようだと、本当にそれしか言えない。だからこそ、とても言えない。せいぜい気休め程度にしかならないからだ。

　ユリカだって、そんなことはわかっているだろう。それでもあえて、その言葉を口に出して励はげます勇気がユリカにはある。つらくても、苦しくても、いや、つらいからこそ、苦しいときだからこそ、向日葵ひまわりのように笑ってみせる強さが。それが心の強さに支えられた本物のやさしさならば、見せかけではないことが必ず伝わるはずだ。

「ま、きみは一人じゃないんだし」マリアローズはルーシーの肩かたをぽんと叩いた。「僕たちがいるんだからさ」

「マリアさん……」

　でもさ。

　お願いだから、その目はやめて。

　そういう、なんていうの？　やばかったです、死ぬ寸前だったか

もしれません、間かん一いつ髪ぱつでした、助かりました、救われちゃいました、ありがとうございます、ありがとう、みたいなことでも思っていそうな目は。大おお袈げ裟さすぎるし。なんかもう、身体からだ中がむず痒がゆくなってきて、いたたまれなくなってくるしさ。かといって、目をそらすわけにもいかなかったりするし。

「とりあえず」トマトクンは後ろ頭をボリボリ掻いた。「いつまでもここにいたって仕方ないだろうな」

「そうだね」マリアローズはさりげなく顔をそむけて、軽く首を回した。「でも、正直、何か動きがないと、手の打ちようがないかも……」

「そういえば……」サフィニアはどこか遠くのほうを見やった。「カタリさんは……どうしたんでしょうか……」

「たぶん・回遊してマス」

「そっか。魚だけに」

「はイ」ピンパーネルは斜ななめ下を向いてぼそりと呟つぶやいた。「ウケなかった……」

　ギャグだったんだ。

　マリアローズは咳せき払ばらいをしそうになって、危あやういところでこらえた。余計なお世話かも知れないけど、もうちょっと修しゆ行ぎようが必要かな……？　そのうち、半魚人の決まりきった半魚ネタよりはずっとおもしろいギャグを連発するようになりそうだけどね。ていっても、人間未満と比べてもむなしいだけだし、やたらと笑いをとりまくるピンパーネルっていうのも、なんだか。あんまりそういう方向には進んでほしくないっていうか。や、ピンパーネルがどうしてもそっちに行きたいっていうなら、反対はしないけどさ。応おう援えんするけど。できれば、違う方向性がいいかなあ、とか、思わなくもなかったり。

　いずれにしても、ここでじっとしていたってしょうがない。マリアローズたちはいったん第二王立銀行内にある動物園事務所へ行くことにして、環かん状じよう通どおりに出た。

　遥はるか遠くから、何か生き物のような、生き物未満のようなものが砂すな煙けむりを立てて駆かけてくることにはすぐに気づいた

けれど、見なかったことにした。

「ずおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぃ……！」

　変な奇き声せいというか怪かい音おんがそこらじゅうに轟とどろきわたっても、聞こえない、聞こえてなんかいない、と自分に言い聞かせた。

「あの……」ルーシーが生き物未満を指さした。「なんか、きますけど」

「幻まぼろしでも見てるんじゃない？」

「錯さつ覚かく……ですね……」

「しょうね」

「間ま違ちがいないデス」

「うむ」トマトクンは眠ねむそうに目を細めてあくびを噛かみ殺した。「目が覚めてても、夢ってのはたまに見るもんだからな」

「や、それはきみだけだと思うけどね」

「じいいいいいやああああああああうううううううれええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ……！」

「そうなのか？」

「そうだよ。てゆうか、また眠いの？」

「何もないときは、昼ひる寝ねしてる時間帯だからな」

「ぜえええええおおおおおおおおええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぃ……！」

「でも……」ルーシーは目をこすって首をひねった。「はっきり見えるし、しっかり聞こえるんですけど……」

「ぞおおおおおらあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……！」

　生物未満は勢いあまってマリアローズたちの横を通りすぎていった。

　そのままどこか遥はるか彼方かなたの星までかっ飛んでいってしまえばよかったのに、なんとか停止することには成功したようだ。

「はあっ！　はあっ！　はあっ！　はあっ！　があはっ！　ぐへっ！　ぶおほっ……！」

「……なんか、かなり苦しそうですよ？」ルーシーはマリアローズの袖そでを引っぱった。

　やむをえず振ふり返ると、半魚人は両りよう膝ひざに手を置いて激しく咳せきこんでいた。半魚顔は真っ赤で、鼻水が垂れているし、涙なみだも出ている。見苦しいことこのうえない。ため息が出たというよりも、ため息しか出てこなかった。

「──で、何？　どうしたの？　てゆうか、何やってたわけ？」

「お、おう、ぼへっ、そ、それや、ぐひっ、そ、おげっ、ど、どはっ、れ、れぼっ、や、やぐひっ、ぶしぇみっ……」

「それ、何語？　魚語はだいぶ聞かされたんで、何言ってるのかは理解できないにしても聞き覚えくらいはあるんだよね。でも、今のはぜんっぜんわかんない」

「あ、あだっ、で、でぼっ、つ、つらっ、ぎふっ、な、なびっ、じべっ、だはっ……」

「行こっか」マリアローズは皆みなを見まわした。

「ま、待えぇぇぇぇい……！」半魚人以下生物未満の正体不明物体は声を張りあげて右手を突つきだした。「待たんかぁぁぁい！　ちょっと待ってくれ！　い、息が整うまでな、待ってくれたってもええやろ！　そんくらいしてもな、バチはあたらんはずやで！　た、たぶん！」

「たぶん、なんだ」

「あたらんと思う！　少なくとも、あたってほしくはない！　わしとしては！」

「それで、トマトの家にこないで、何してたの？」

「よくぞ訊きいてくれよった！」カタリはずずずっと洟はなを啜すすった。

「これ、ちゅかって」ユリカがカタリめがけて白い布を投げつけた。

「おおうっ！」カタリは無む駄だに跳とびあがって布をキャッチした。「すまんのう！　サンキューや！」そうして洟をかみ、半魚顔をふいてしまってから、その順番にちょっと後こう悔かいしたようだけれど、すぐにどうでもよくなったらしい。「──これにてッ！　スッキリ爽そう快かいッ！　男ぶりも十倍増しっちゅうとこやろ！　ほんだら今以上にモテモテになってまうやんか！　大変やで、どないせえっちゅうんや！　げへへへへーっ！　おぉーっとユリカ、これはあれやからな！　ちゃあんと洗って返すからなっ！」

「いらないわ」ユリカはなんだか悲しそうな表情で首を横に振った。

「なんや、くれるんかい？　せやったらもらっとくわ！　おおきに！　ほんで、わしが何しとったかっちゅうことやけども、環状通ぐーるぐる走りまわっとった……！」

「回遊……」ピンパーネルがぽつりと呟つぶやいた。

「ほんとにしてたんだ……」マリアローズはげんなりした。

「ふぇ？」カタリはぽかんとしている。

「いったい……その……何のために……」サフィニアも疲つかれきった顔をしていた。「走りまわったり……していたんですか……」

「それや！」カタリは人差し指をビッとサフィニアに突きつけて、片方の半魚眼をつぶってみせた。「よくぞ訊いてくれよったぁぁっ……！」

「もういいよ、それは」マリアローズは辟へき易えきして耳の後ろを掻かいた。「二回目でしょ。聞き飽あきたから」

「だはははははっ！　ゆわれてみたら、たしかにせやな！」カタリは

急に真顔になって、こほん、と咳せき払ばらいをしてみせた。「――じつはのう。情報をな。ゲットしてもうたんや」

「情報……？」ルーシーが赤い眼めを見開いて身を乗りだした。

「せや」カタリはうなずいた。「聞きたいか？　聞きたいやろ？」

「き、聞きたいです」ルーシーは生なま唾つばをのみこんだ。

「そら聞きたいわなあ。ふひひっ。そらそうやで。ふっふふーん」

「もったいぶらないで、しゃっしゃと言いなしゃい」こういうときのユリカは怖こわい。

「へい……」カタリが逆らえるはずもなかった。「あんな。わしが超ちよう絶ぜつ的な人脈を駆く使しして聞きつけたところによると、近々、リヴァイス主しゆ催さいのどでかいパーティーがあるらしいねん」

「パーティーって……」マリアローズは眉まゆをひそめた。「どういう種類の？」

「披露宴レセプシヲンと銘めい打うって、なんや業界の関係者とかごっそり集めてな。ブランド設立についての発表会、みたいな趣しゆ旨しでやるらしいわ。当然――」カタリはニヤッと魚笑いした。「ショーも行われるみたいやで」

「てことは」マリアローズはサフィニアと目を見あわせた。

「……リヴァイスの服を着た、モデルが……ランウェイを歩いたり……？」

「ランウェイ……？」ユリカは難しい顔をして首をひねった。

「ああ……ファッションショーでは、モデルの人たちが、長いステージの上を、歩いたり……ポーズをとったりするんです。ランウェイというのは、そのステージのことで……」

「ふうん……」ユリカは、なんでそんなことをするのかさっぱりわからない、とでも言いたげに口を尖とがらせた。

「ちょ、ちょっと待ってください！」ルーシーはカタリにつかみか

かるというよりもしがみついた。「じゃ、じゃあ、あのモデルの人も、そのショーっていうのには出るかもしれないってことですかね!?　雑誌の……！」

「お、おお」カタリはなぜか半魚顔をかすかに赤らめた。「ま、まあな。そうやないかと、わしは踏ふんどるんやけども。ちゅうのも、ブランドにはだいたい、フラッグモデルとか、コンセプトモデルとか、キャンペーンモデルとか呼ばれる象しよう徴ちよう的なモデルがおるもんなんや。リヴァイスの場合、どう考えたってもあの雑誌に載のっとった男がそれやろ。披露宴レセプシヲンのショーに出てこおへんほうが不自然や」

「だったら、その披露宴レセプシヲンに行けば、あの人に会えるかもしれないんですね!?」

「絶対、とはな。さすがにそこまでは言いきられへんけども」

「可能性はあるんですよね!?」

「せ、せやな。わしはそう思とるけども」

「だけど」マリアローズは一同を順々に見て、軽く肩かたをすくめた。「僕たち、関係者じゃないよ……？」

「むう」トマトクンは片方の眉をつりあげて低く唸うなったけれど、頭の中はきっと真っ白にかぎりなく近いだろう。

「かんけ・イシャ……」ピンパーネルは何やら思い悩なやんでいる様子だ。

　まさか、ダジャレとか考えてるわけじゃないよね。

　そんなことはない、と思いたい。なんだかピンパーネルがどんどん遠くへ行ってしまうような気がする。引き戻もどしたほうがいいのかもしれない。今ならきっと、まだ間に合うはずだ。

Omenage 899 5th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区

chapter.8

ひれ伏す魔法

「あっはっ。あーん。すっごくいいぃー。もうやっばぁーい。かぁーわいい。いいよー。そのカオ。はぁーい。そのままそのまま。目線こっちー。あぁーん。やばすぎ。じゃぁーあー、後ろ向いて？　そぉーそ。で、首だけこっちに。はぁーい。いいよぉー。最高っ！　それっ！　そのぉー、ちょっとだるぅーいカンジでぇー、うん、それ！　いただくねぇー？　あぁぁーん。いいっ。いっちゃうっ。はいっ。次ぃーはぁー……」

　仕方なかった。

　他ほかに方法を思いつかなかったのだ。

　たしかにマリアローズは、かわいい服だの装身具だの小物だのが好きだ。きりがないから、必要なもの以外は買わないことにしている。エルデンにはその手の店がひしめいている地区があって、見て歩くだけで楽しい。楽しすぎる。あれもこれも欲しくなるけれど、我が慢まんする。必死で、ときには歯を食いしばってこらえないといけない。それくらい好きだ。大好きだ。

　以前、一度、是ぜ非ひとも我がブランドのモデルに、と誘さそわれたときは、時し化けに遭あった小こ舟ぶねのように心が揺ゆれた。揺れまくった。断腸の思いで断った。

　何かきっかけがあったら、そっちの道に足を踏み入れていたかもしれない。侵入者クラツカーなんかやるよりは、ずっと自分にあっているのではないか。正直、そう思わないでもないけれど、所しよ詮せん、自分とは縁えんがない世界だ。キラキラした宝石箱を遠くから眺ながめていることくらいしか、自分にはできない。

　当然、そっち方面の人間とは接点がなかった。服屋の店員とか、そういうレベルじゃダメだろうし。関係者っていったら、デザイナーとか、その助手とか、ブランドの工こう房ぼうで働いてる人とか、その周辺で仕事をしてる人とかってことになるだろうし。そうなると誰だれもいなかった。思い浮うかばなかった。ただ一人をのぞいて。

　細すぎる身体からだをボンデージなロリータ風のドレスでさらにギッチギチに締しめあげて、ハイヒールの編み上げブーツやら長なが手て袋ぶくろやら首輪やらが似合いすぎているカーリーブロンド

ヘアの変態そばかすさんは、鼻息が荒あらいなんてものではなくて、その目はうるみまくって充じゆう血けつしまくっている。

　最新の写真撮さつ影えい機きを手に、被ひ写しや体たいよりも激しく動きまわりながら、アニー・ポリステルは興奮しまくっているのだ。大興奮だ。

「えっとー、座って？　うん、そっ。でぇー、足をねぇー、開いてぇー……開いてぇー……それ！　あぁーんいいっ、恥はずかしいんでしょぉー？　その恥ずかしそうなカオが最高っ！」

　背高TALL'のっぽN'LEANの六階にある写真撮影専用ステューディオで、現在、アニーの犠ぎ牲せいになっているのは、ルーシー・アッシュカバードだ。

　なんていうか、独特の雰ふん囲い気きなんだよね、このステューディオって。狭せま苦くるしいというほどではないけれど、決して広々としてはいない。窓などは一いつ切さいないので、閉へい塞そく感がある。入った瞬しゆん間かん、ちょっと息が苦しくなって不安になったくらいだ。ところが、撮影の準備が進んで、投光器から強きよう烈れつな光が放たれた途と端たん、印象が一変した。白い壁かべで仕切られ、光によって演出された小さな別世界、とでも言えばいいのか。どこか現実離ばなれしているのだ。その別世界に足を踏ふみ入れた自分自身も、いつもの自分とは何か違ちがう存在であるかのような錯さつ覚かくに襲おそわれる。

　第一の餌え食じきとしてアニーに指名されたルーシーも、最初はおどおどびくびくしていたのに、撮影が始まって時間がたつごとにどんどん様子が変わっていった。今はもう、恥じらいながらもアニーの要求に応こたえて、そのことに喜びさえ感じているようだ。

　ちなみにルーシーは、女の子が着るようなキャミソールとペチコートにブラウスとミニフレアスカートをあわせて、ロングでタイトなブーツを履はいている。もちろん、アニーがコーディネートした。

　仕方なかった。

　マリアローズたちを関係者としてリヴァイスの披露宴レセプシヲンに連れていってほしい。他に伝つ手てがないので、出版社ＢＭＲを訪ねてアニー・ポリステルに頼たのんでみたら、提示された条件

がこれだったのだ。



　つまり、撮影の練習台になること。その際の服装はアニーが選ぶ。

　また３Ｐだの４Ｐだの５Ｐだのと言いだすのだろうと予想してい

たし、そうなったらあきらめるしかなかったので、正直、ほっとした。それくらいなら、まあ、いっか。アニーが倉庫から持ってきた服はどれもこれもかわいかったし、ユリカやサフィニアにはとても似合いそうだった。自分も着ないといけない。そう考えるといやな汗あせが出てきたりもしたけれど、ルーシーはわりと楽しそうにポーズをとったり笑え顔がおを作ったりしているし、やってみたらそんなに苦にならないのかもしれない。

　しっかし、どっからどう見たって女の子だよね。まるっきり。

「はぁーい、じゃあぁー、後ろ向いてぇー、スカートめくってぇー、ちょっとだけ！　ちょっとでいーからぁー、うんっ！　そっ！　最高っ！　はいっ、笑ってー、いたずらっぽいカンジでー、はいっ！」

　てゆうか、そういう要求にまで応じるのはどうかと思うんだけど。

「──よぉーし、いいよぉー。いいの撮とれたかもー。ありがとぉー。次ぃー、銀ぎん髪ぱつの子ねっ。えぇーっとぉー、サフィニアちゃんだっけー？」

「あ……」サフィニアはうつむいてカクカクうなずいた。「……は、はい……」

　ステューディオにはアニーと二人の撮影助手がいて、ルーシーがいて、ユリカ、マリアローズ、サフィニアがいて、あとはトマトクンとピンパーネルとカタリも隅すみっこのほうに押しこまれている。

　サフィニアはトマトクンをちらっと見てから、胸のあたりをぎゅっと両手で押さえた。

　アニーがサフィニアのために選んだ服は、合成皮革のパンツと同じ素材の胸むな元もとが大だい胆たんに開いたジャケットだ。しかも、アニーの指示によって、ジャケットの下は何も身につけていない。素す肌はだだ。やや奇き抜ばつなヘアスタイルにされて、メイクも施ほどこされているので、ふだんとは別人に見えるけれど、サフィニアは脚あしがきれいだし、細くてスタイルがいい。こういう恰かつ好こうをしても見み栄ばえがする。堂々としていれば、かなりかっこいいはずだ。

　サフィニアの性格では、ちょっと無理か。

「いやぁー」ルーシーが脇わきに控ひかえているマリアローズたちのほうへ戻もどってきた。「なんか、汗かいちゃいました」

「お疲つかれ。かわいかったよ」マリアローズの笑顔は少々引きつっていることだろう。

「そ、そうですかぁ……？」ルーシーは気づいていないようで、あからさまに照れている。

「楽ししょうではあったわね」ユリカはげっそりしている。

「サフィニアちゃぁーん。早くぅー」

「う……あ……」サフィニアのため息は震ふるえていた。「……は、はい……わかり、ました……今、行きます……」

「がんばって」マリアローズはサフィニアの背中を押しながら声をひそめた。「どうせなら、トマトを惚ほれさせてやるくらいの気持ちで」

「む、無理……そんなの……」

「いけるって。自信持って。サフィニアは美人なんだから」

「も、もう……そうやって、からかって……」

「からかってなんかないよ。本気だってば。さ、行ってきて」

「……う、うん……」サフィニアは観念したように首を縦に振ふって、頼たよりない足どりで撮影スペースへと向かった。

　天才魔ま術じゆつ士のサフィニアが変態そばかすアニーの魔法にかかるまで、たいした時間はかからなかった。

「だぁーめっ！　そのカオ！　そんなカオしちゃいやぁぁーっ！　なんでー？　サフィニアちゃんすっごいチョーめちゃくちゃかわいいのに、なぁーんでそんな暗ぁーいカオするのー？　ちゃんとこっち見て！　あっ、すごっ、それ！　今のいいっ！　この角度、最高！　そっ！　何も考えなくていいから！　ただアタシィーがいるとこ見て！　見て！　こっち！　あっ！　それ！　いいっ！　サ

フィニアちゃん、やばいよぉーっ！　そこに立ってるだけでいいんだもん！　それだけで！　生まれてきてくれてありがとぉー！　足、一歩だけ右に――そおっ！　それ！　手をねー、胸のとこに――そおっ！　下向いてぇ……目はこっち！　はいっ！　ちょっとだけ、胸のとこ開いてみよっかぁー、ほんっとにちょっとでいいからぁー、もう少し！　あと一サンチ！　きたぁぁぁっ……！　やばっ、アタシィー、泣いちゃったかも！　感動しちゃってー、もぉー、だって、きれいすぎて、美しすぎて……」

　あながち、というか、ぜんぜんお世辞ではないのが怖こわい。

　実際、サフィニアはきれいだった。もともと美人ではあるのだけれど、控えめな性格のせいか、今までどこかに隠かくされていた魅み力りよくが発はつ掘くつされて、サフィニアはまったく別種の美女へと生まれ変わったかのようだった。

　またたく間にそんなことを成し遂とげてしまったアニーは、きっと才能豊かな撮さつ影えい師なのだろう。でも、やっぱり変態だ。

「はぁーい、終しゆ了りよぉー、最高でしたぁー！　ほんっとチョーありがとぉー！　さぁー、次ぃーはぁー、赤い髪かみのマリアちゃーん、いってみよっかぁー」アニーはマリアローズのほうを見て、眉まゆを吊つりあげた。「――って、マリアちゃんてばぁー、なんで着き替がえてないのー⁉」

「え……や、だって、さ……」マリアローズはそっぽを向いた。「あれはちょっと。なんていうか、できれば着たくないっていうか。その……いろいろあって。てゆうか、その呼び方、やめてくれない……？」

「マリアちゃぁーん？」

「きもいんだよね。はっきり言って。むかつくんだよ。僕、女の子じゃないし。あの恰好もさ。女の子向けっていうか、専用でしょ。明らかに」

「でもぉー」アニーはルーシーを指さした。

「ルーシーは特とく殊しゆなんだよ！　ふだんからスカートとか穿はいてるし！」

「と、特殊……」ルーシーはガックーンと肩かたを落とした。「そ

う……なんですかね、ぼく……そんなに……」

　マリアローズは怯ひるまなかった。「一いつ般ぱん的じゃないよ！　少なくとも！」

「マリア……！」戻ってきたサフィニアがマリアローズの両りよう肩かたに手を置いた。「勇気を出して、やってみたら……けっこう楽しいから……！」

「洗脳されちゃってる⁉　サフィニアが、サフィニアじゃない……⁉」

「恐おしよるべし、ね……」ユリカがぶるっと肩を震わせた。

「マぁーリアちゃぁーん」アニーはブーツのヒールで床ゆかをカツンカツン叩たたいた。「早くぅー、着替えてきてー」

「だから、やだって……」

「ふぅーん。披露宴レセプシヨンに行けなくてもいーならぁー、べつにそれでもいぃーけどねー？」

「うっ」

「ルーシーちゃんとサフィニアちゃんはぁー、チョーノリノリで協力してくれたのになぁー。ぜんぶ水の泡あわぁー？　みたいなー？」

「マリア……」サフィニアは翡ひ翠すい色の瞳ひとみでじっとマリアローズを見つめている。

「マリアさん」ルーシーはちょっと恨うらめしそうな目つきだ。

「どうしてもいやなら、無理しなくてもいいのよ」やっぱりユリカはやさしい。

　トマトクンやカタリ、ピンパーネルは完全に観客モードだ。騒さわぐとアニーが怒おこって機材を投げつけるので、存在自体がやかましいカタリもどうにかおとなしくしている。

「はぁーやぁーくぅー。はぁーやぁーくぅー」

「……わかったよ！」

　マリアローズは半分泣きそうになりながら腹を決めてステューディオを飛びだし、隣となりの更こう衣い室へと駆かけこんだ。

　ぱぱっと脱ぬいで、脱いで、脱いで──ささっと着て、着て、着て──はい、いいんでしょ、これで？　文句ないよね？

　一応、鏡に自分の姿を映してみた。

　鏡を叩き割りたくなった。

　割ろうか、割るまいか。

　真しん剣けんに考えていると、誰だれかが更衣室のドアをノックした。

　返事をする前にドアが開いた。

「マぁーリアちゃぁーん？　着替え終わったー？」

「……こういうときは、そういうこと確かめてから入ろうね？」

「あぁーん。堅かたいこと言わないでー」アニーはひとしきり身をよじってから、マリアローズに向かって何か差しだしてきた。「はいっ。これっ」

「え……何これ、ウィッグ？」

「そっ。あとはぁー。ヘッドドレス！　アタシィーがぁー、つけたげるねー？」

「や、いいよ。僕が自分で……」

「いぃーからいぃーからぁー。ちょっとそこの椅い子すに座ってー」

　マリアローズはむしろ無理やり椅子に座らされて、ウィッグとヘッドドレスをつけられた。抵てい抗こうしたかったけれど、どうにも身体からだに力が入らなかった。なんていうか、情けない。何やってんだろ、僕。こんな恰かつ好こうさせられて。服自体はかわいいけど。見るぶんにはいいんだけど。着たくなかった。着ちゃい

けなかった。もうやだ。こんな姿、あいつには絶対、見られたくない。写真はあとでなんとかして処分しないと。証しよう拠こを残さないようにしないと。

「でぇーきぃーたっ。きゃはっ」アニーは両手を組みあわせて、その場でぴょんぴょん飛び跳はねた。「すっげーよー、マリアちゃーん。やばいやばすぎマジすっげーわぁー。予想以上だよぉー。今まで会ったどぉーんなモデルよりもかっわいいー。オーラとか出まくりだよー。別格かも？　もぉーなんか、神の領域入っちゃってるかも……？」

「……そんなこと言われても、嬉うれしくもなんともないんだけど」

「なぁーんでー？」

「あたりまえでしょ。僕は女の子じゃないんだからさ」

「かぁーんけぇーないじゃーん。美しいものは美しいんだよぉー。あのねー、人間はねー、ほんっとに美しいものにはぁー、無条件で感動して、ひれ伏ふすものなんだよぉー？　アタシィーはぁー、だからこの仕事やってるのー。完全な美の奴ど隷れいになりたくてー」

「美の奴隷、ね……」

「ア・ナ・タの奴隷になってもいいカナ？　なぁーんてぇー」

「募ぼ集しゆうしてないから。そういうのは」

「ざぁーんねん」

「しっかし……」マリアローズはもう一度、鏡を見た。「誰だよ、これ……」

　言うまでもない。自分だ。わかっている。否定しても無む駄だだ。この手の服は本当に着たくなかったんだけど。いろいろ思いだしちゃうし。もうずいぶん前のことではあるんだけどさ。後こう悔かいしてるわけじゃない。あの出来事があって、決断して、今の自分がある。何か一つでも違ちがっていたら、ここにはいなかった。悔くいてはいない。本当に。でも、ひどかったかなあ、とかね。やっぱり、思うし。どうしてるかなあ、とか、考えちゃうことも、

たまにだけど、あることはあるし。思い返すと、恥はずかしさと申し訳なさで胸が締しめつけられる。カリオサークの魔術師マギヴィンセント。元気だといい。そんなふうに願う資格なんて、僕にはないんだ。

「いーでしょお？」アニーはマリアローズの肩かたに顎あごをのせて鏡の中でにんまり笑った。「このメイド服。てゆーかぁ、本物のメイドにはとても着せらんないけどねー？　メイド服テイストのオートクチュール！　アイヴィー・ギャッヴァっていう若いデザイナーがいるんだけどぉー、その人の作品なのー。全体のシルエットとか生き地じとか配色とかだけじゃなくてー、細かいとこが凝こってるんだよねぇー。ぱっと見だけじゃわかりづらいんだけどぉー、神は細部に宿るっていうじゃん？　そういうの大事なんだよねー。そこをおろそかにするとぉー、結局しょぼく見えたりするしぃー。大物でもケッコーいるんだよねぇー。コンセプトはたしかにすっごいけど、仕事はもぉー雑で、名前がでっかいから評価されちゃったりするんだけどそれってなんか違うんじゃないのみたいなぁー」

「たしかに、いいものっぽいね」

　どこからどう見てもメイド服なのだが、ゴージャスで、それでいて華か美びにすぎず、可か憐れんにしてどこかストイック、繊せん細さいにして大だい胆たんだ。サフィニアあたりが着れば、さぞかし素す敵てきだろう。ルーシーでもいい。あの子なら喜びそうだし。

「じゃあぁー」アニーはやたらとぷるっぷるした唇くちびるに人差し指をあてて目を細めた。「行こっかぁー？」

「……ダメ？　行かなきゃ」

「だめぇー」

「どうしても？」

「どぉーしても！」

「そ……」マリアローズは椅子から立ちあがった。「わかったよ」

　かくなるうえは、明鏡止水の心境というか無む我がの境地で撮さつ影えいに臨のぞんでさくっと終わることをひたすら期待なんかしていたら無我とは程ほど遠とおいような気もしないではないけれ

ど、とにかく頭の中をからっぽにして、何事にも動じないようにして、この試練をどうにかこうにか乗りきるしかない。

　更こう衣い室をあとにしてステューディオに足を踏ふみ入れると、どよめきが起こった。

　きっと気のせいだ。

　気のせいではないとしても、無視、無視、無視。

　マリアローズは心の目と耳を閉とざし、撮影スペースへと移動してアニーの指示を待った。アニーは最初からテンションが高かった。それはもう、ものすごく高かった。マリアローズは己おのれの心臓を氷のかたまりに変えて、アニーの熱気を遮しゃ断だんしようとした。ポーズの要求には変な動作でなければ応じた。表情への注文は一いつ切さい聞き入れなかった。アニーに臍へそを曲げられてしまうのではないか。ちょっと心配だったけれど、杞き憂ゆうだった。マリアローズが鋼はがねの無表情できびきびと身体からだを動かすたびに、アニーの頬ほおはどんどん上気していった。たまに股こ間かんを押さえて変な声をもらした。忘れていた。アニー・ポリステルは変態なのだ。たしか、ＳもＭもいけると言っていた。マリアローズは命令に従いながら、同時に拒きょ否ひしてもいるわけだから、アニーにとっては二重においしいのかもしれない。変態そばかすさんを喜ばせているなんて腹立たしいものの、にこっと笑ったりびっくりしたような顔をしたりしなくてもいいのなら、楽といえば楽だ。卑ひ猥わいな姿勢を求められた場合は聞こえないふりをした。アニーはかえって嬉しそうだったので、めでたしめでたし、だ。

　嘘うそだ。大嘘だ。どこがめでたいのか。何がめでたいものか。ちっともめでたくなんかない。変態きもい明日までに死んじゃえばいいのに。

「はぁー……」アニーは疲つかれ果てたように撮影機を下ろして床ゆかに座りこんだ。「すっごいのいっぱい撮とれたよぉー。永久保存決定だよぉー」

　させるものか。絶対にどうにかして処分してやる。

「じゃぁー次はぁー……」

　でも、ようやくだ。やっと終わった。マリアローズはそっと息をついた。撮影スペースから離はなれようとしたら、アニーが叫さけんだ。

「ユリカちゃーん！　マリアちゃんと一いつ緒しよにぃー！」

「へっ？」マリアローズは目を瞠みはった。

「わたし？」ユリカは自分を指さした。

「はぁーやぁーくぅー。はぁーやぁーくぅー」アニーは手招きした。

「一緒にって――でも……」ユリカは下を向いて眉まゆをひそめた。「一人きりよりは、マリアと一緒のほうがまだ……」

　罠わなだよ、ユリカ。絶対、罠に違いないって。や、そりゃあ僕もね？　ユリカを一人でアニーの前に立たせるよりは、そばについててあげるほうが安心は安心なんだけどさ。何しろユリカだし、大だい丈じよう夫ぶだとは思うけど、万が一ってこともあるし。サフィニアがあの調子だったしね。けど、あの変態そばかす、きっと何か企たくらんでるから。そういう顔してるもん。

　あー……でも――、

　ユリカってば、かわいいなぁ。

　わかってたけど。わかってるけど。なんていうか、粗あららしきものが一つもないんだよね。顔の造作にしても、体形にしても、肌はだにしても、何もかもが。

　撮影スペースで投光器の光をまともに浴びたユリカに見とれない者がもしいたら、そいつはおそらく、人間じゃない。

　ユリカのコーディネートはシンプルだ。白いドレスを着て、頭には花飾かざりをつけている。アニーの選せん択たくは正しい。それだけで十分だ。他ほかには何もいらない。

　今のユリカの前では、どんな言葉も陳ちん腐ぷになってしまいそうだけれど、あえて表現するとしたら、森しん羅ら万ばん象しように祝福されている世界でたった一人の少女、とでもいおうか。

「どうしたの、マリア？」ユリカは小首を傾かしげた。「もしかして、ぼうっとしてる？」

「え……うん、ちょっとね。てゆうか、だいぶね」

「わたし、変でしょう」ユリカは目を伏ふせて胸むな元もとと腰こしのあたりを押さえた。「こういうの、あんまり着たことがないから」

「変？　や、それはないよ」マリアローズは首をぶんぶん横に振ふった。「ないない。ありえないって。すっごく似合ってる」

「しょうかしら……？」

「そこは疑いを差し挟はさむ余地なんてないと思うけどね」マリアローズは仲間たちを視線で示してみせた。「ほら」

　ユリカはちらっと仲間たちを見て、すぐにうつむいてしまった。顔が赤い。恥はずかしいのだろう。気持ちはわかる。

　だって、サフィニアやカタリはともかく、ピンパーネルやトマトクンまで無言でユリカに熱い視線をそそいでいた。ルーシーにいたっては涙なみだぐんでいる。

「……ユリカ姉様……ぼく、生まれてきてよかったです……」

「それじゃあぁー、そろそろ始めよっかー？」アニーはぷるっぷるした唇くちびるをちろりと舐なめて撮さつ影えい機きを構えた。「──まずはぁー、マリアちゃん、ユリカちゃんの後ろにぃ……そっ、そこ、でぇー、両手でユリカちゃんをー、それそれ！　いぃーよぉー、はいっ！」

「はっ……」マリアローズは我に返った。

　ついアニーの指示どおりに動いてしまった。てゆうか、今のユリカを前にしたら──無理だよ。我が慢まんできるわけないってば。何、この気持ち？　すっごい、なんていうか、いとおしいんだけど。抱だきしめたいんだけど。もっとぎゅっとしたいんだけど。

「あぁーん！　だめっ！　マリアちゃん！　そんなカオしないっ！　でれっとしないで！　表情は作らなくていーから！　そっ！　マリアちゃん、ちょっと屈かがんでぇー……ユリカちゃん

にほっぺた寄せてぇー、目線は斜ななめ下で！　あっ！　今のいいっ！　せつなそうなカンジで！　最高！　ちゅーしちゃう？　いーよぉー。えー、しないのぉー？　いーけどぉー、じゃあぁー、ぎりぎりのとこで！　ふれるかふれないかの！　あぁーん、やばすぎ！　次はぁー、向かいあってぇー、そっ！　マリアちゃん、ひざまずいてぇー……目線あわせてぇー、見つめあってぇー、だめっ！　目ぇーそらしちゃ！　我慢！　はいっ！　いぃーよぉー！　腕うで、ユリカちゃんの首に回してぇー、一気に！　抱きよせちゃって！　がばっと！　きたぁぁぁぁっ……！　はぁはぁはぁ、次ぃー！　ユリカちゃん、マリアちゃんの胸に……そっ！　それ！　きゃあああぁぁぁぁ……！　よすぎ！　もうだめっ！　最高！　しゅごいしゅごいしゅごいのぉー。ああぁぁーん、それも！　それも！　どれもこれも！　にゃああぁぁーん……！」

　最後のほうはもう、アニーは何か別の生き物と化していた。アニーだけではない。

　やっちゃった。

　そんなつもりはこれっぽっちもなかったのに、ほとんど言われるがままだった。

　言い訳するわけではないけれど、アニーはめちゃくちゃ的確に突ついてきた。何を突いてきたのかというと、欲望、欲求だ。ユリカにこんなことをしてしまいたい、あんなことをしちゃいたい。ふっとマリアローズの脳のう裏りをよぎるそうした願望とアニーの指示とが不思議なくらい一いつ致ちしていた。そこからアニーは一歩、二歩進めてきた。まあ、それくらいならいいかな。うっかりマリアローズがそう思ってしまう、絶ぜつ妙みようなタイミングだった。いや、アニーもたしかにすごかったけれど、それ以上にユリカだ。

「意外と楽しかったわね」ユリカはマリアローズの腕の中で笑ってみせた。「二度は経験したくないけど、一回きりならしょんなに悪くないかもしれないわ」

「そ、そだね」マリアローズは生なま唾つばをのみこみかけて、慌あわててこらえた。「こういうのも、まあ、一回だけなら」

　本音を言えば、何度でもってかんじなんだけど。いやいや。どうしちゃったの、僕？　てゆうか、いつまでユリカをだっこしてるわけ？　放さないと。離はなれないと。離れられなくなっちゃ

う……？　ダメダメダメ。何考えてるんだよ。違ちがう違う違う。そんなわけないってば。

　マリアローズはユリカを放して、ほっと胸を撫なで下ろした。大丈夫だ。たぶん。名残なごり惜おしくてたまらないような気もするけれど、そんな気がするだけだろう。きっと。

「でも」ユリカは後ろで手を組み、上うわ目め遣づかいでマリアローズを見て、すぐ足あし許もとに視線を落とした。「マリアって、本当にきれいなのね。いちゅもはしょんなにじろじろ見たりしないから、とくにしょういうことは考えないけど」

「え……」マリアローズは自分の顔面から噴ふきだした炎ほのおのすさまじい熱を感じて、卒そつ倒とうしそうになった。

　ユリカの頬ほおにほんのりと赤みがさしている。

　や──、

　やめてよ。

　なんか、その──変な気分っていっても、そういう意味じゃないけど、どういう意味なのかな、よくわかんないけど、なんて言ったらいいのか、とにかく複雑きわまりない心境になっちゃうから。もうなっちゃってるけど。くらくらするし。どきどきしまくってるし。すごいんだけど。すごすぎるんだけど。動どう悸きが。死んじゃいそうだよ？　ユリカの顔とかまともに見られないかんじだよ……？

　ルーシーがつかつかと歩いてきて、マリアローズとユリカの手を握にぎった。

　とんでもなく熱い眼まな差ざしだった。

「あの……お二人とも、とっても、い、色っぽかったです……！」

「嬉うれしくないっ」マリアローズはルーシーの手を振りほどいた。

「しょ、しょうかしら……？」ユリカは照れている。

　まあ、ユリカも女の子だしね。あたりまえだけど。てゆうか、表現は悪いかもしれないけどさ。ついつい言葉が汚きたなくなっちゃ

うんだけど、最近、色気づいてるっていうか。そういう部分もあったりするし。やっぱり気になるのかな。女性的な魅み力りよく、みたいな。いいけど。や、よくないよ？　相手がね。よりにもよって、あの小こ猿ざるだからさ。あーもう、むかむかしてきた。おかげで、妙みような精神状態からは脱だつ出しゆつできたけど。

　マリアローズはため息をついた。

　やっと終わった。

　とうとうやりとげた。

　アニーは熱に浮うかされているような顔で撮影機を抱きしめて床ゆかに寝ねそべり、さかんに右みぎ脚あしと左脚をこすりあわせている。何やってるわけ、この人。そこは追つい及きゆうしないでおくことにした。

「これで僕らを関係者として披露宴レセプシヲンに連れてってくれるんだよね？」

「……えぇー？　あぁー……うん……」アニーはのっそりと身体からだを起こした。「もちろんだよぉー。アタシィーはぁー、約束は破らないことにしてるのー。そぉーいうのって人として大事でしょー？」

「それならいいけど」マリアローズはウィッグを外そうとして頭に手をのばした。「我慢した甲か斐いは一応、あったってことかな」

「終わりのほうはぁー、ユリカちゃんとラヴラヴだったくせにー。にしししし」

「ただきみの言うとおりにポーズとってただけだろ」

「そぉーは見えなかったなぁー。まぁーいぃーケド」アニーはもう一度、にしししし、と笑って肩かたをすくめてみせた。「約束どおり、マリアちゃんとユリカちゃんとサフィニアちゃんとルーシーくんは、アタシィーがちゃぁーんと連れてってあげるよぉー」

「そ」マリアローズは腕うで組ぐみをして首をひねった。「……あれ？　僕らだけ？　トマトとかカタリとかピンパーネルは？」

「だって、写真撮とってないしー？」

「や……でも、僕らが撮さつ影えいの練習台になるのが条件だって」

「アタシィー、ロリでショタでぇー、あと、かわいい子とかきれいな子とかは全ぜん般ぱん的に好きだけどぉー、それ以外の男にはまぁーったく興味ナイッ」

「興味はなくてもいいんだけど……披露宴レセプシヲンには連れてってくれないとさ」

「イ・ヤ」アニーはアッシュブルーの瞳ひとみにやけに剣けん呑のんな輝かがやきをたたえた。「アタシィー、やらないって決めたことは絶対、やらない。犯やられても、拷ごう問もんされても、殺されても、やりたくないことはしないの。そう決めてるの。これがアタシィーの生き方なの。わかってくれなくてもいいケド、何があっても変えるつもりはないよ？」

　ダメだ。

　アニーは本気だ。何だよ、それ。くだらない。いいかげんにしてよ。そんなことを言っても無む駄だだ。アニーは決して聞き入れない。目つきでわかる。アニーは自分の生き方に命をかけているのだ。身体を張って我がを通そうとしている。

　このエルデンで、それがどれだけ危険なことか。わかっていないはずはない。なんとなく気にくわないから、たったそれだけの理由で通りすがりに撲ぼく殺さつされかねない。そういう街だ。それでもアニー・ポリステルは、死の瞬しゆん間かんまで自分であろうとしている。それが何よりも大切なのだと思い定めている。こういう人はてこでも動かない。

「わかったよ」マリアローズはうなずいて、ウィッグを外す代わりに頭を掻かいた。

　しょうがない。あきらめるしかないだろう。それに、正直、アニーのような自分の生き様を貫つらぬこうとしている人は嫌きらいではない。とりあえず、マリアローズたちだけ披露宴レセプシヲンに潜せん入にゆうして、トマトクンたちは近くで待機していてもらうしかないか。

「……あ」

　そっか。思いついた。思いついちゃった。方法。というよりも、伝つ手てか。そうだ。ある。活用できるのかどうか、わからないけれど、ないわけでもない。マリアローズは顔をしかめた。ない──わけでもないんだけど、ね……。

Omenage 899 5th revolution 27th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

chapter.9

犬

「我が主マイ・ロードは何をお考えなのか」

　声を出して呟つぶやいたことに気づいて、彼はわずかに顔をしかめた。

　愚ぐにもつかない催もよおし物の用意はすでに整っている。

　会場には彼以外の人ひと影かげはない。

　彼は一人、舞ぶ台たいの端はしに腰こしを下ろし、片かた膝ひざを立てている。

「俺の仕事ではない」

　いい。

　声を出したところで、聞く者は誰だれもいない。

「なぜ我が主マイ・ロードは俺にこんなことをさせる」

　しかも、采さい配はいの余地などなかった。指図どおり、定められたとおりに人を動かしただけだ。やむをえない。催し物の準備など、彼向きの仕事ではないからだ。

「俺はアッサシンだ」彼はかすかに首を横に振ふった。「──アッサシンだった」

　ラハン大陸で、人を殺すための道具として、彼は生まれ、そして養成された。物心がつくころには、彼にとって破は壊かいと殺害は食事と同程度の習慣だった。

　彼には初めから相棒がいた。彼と同じ顔をしていて、背せ恰かっ好こうも同じだった。成長の過程で差が生じると、すぐに矯正された。彼と相棒は一心同体だった。二人一組で数多くの任務をこなした。

　次し第だいに彼らは窮きゅう屈くつになってきた。殺すことも破壊することも彼らは好きだったが、自由は与あたえられなかった。殺すべき相手はいつも決まっていた。殺してはならない相手も決められた。彼と相棒は、彼らの育ての親であり、いつも彼らに任務を

言い渡わたすダクナとイヴェンを殺すことに決めた。二人は同じ顔をしていて、背恰好も同じだった。彼らを育て、彼らに釘ネイルの技わざを仕込んだのは二人だったが、すでに彼らの力量は二人のそれを上回っていた。

　彼らは二人を殺して自由を手に入れた。

　そう思った。

　違ちがった。

　ダクナとイヴェンには大勢の子供がいた。いわば彼らの兄弟たちだ。兄弟たちは彼らを追い、付け狙ねらった。彼らはそのたびに兄弟たちを殺した。いくら始末してもきりがなかった。兄弟たちは彼らより出来が悪かったが、数は遥はるかに多かった。彼らは逃にげることにした。海を渡って、殺して、奪うばって、生きた。生きるための殺しや破壊は不思議と退たい屈くつだった。

　彼らは退屈に倦うんで、王が住まう城に侵しん入にゅうして宝物を盗ぬすみだしたり、大商人の館やかたに押し入って火を点つけたりした。武勇の誉ほまれが高い大将に夜よ討うちをかけて、その生首をさらしものにしたこともあった。

　ダクナとイヴェンは、α大陸出身の海かい賊ぞくで、ラハン大陸北ほく端たんに橋きよう頭とう堡ほを築きつつあったゴウゴリット・キルファによく雇やとわれていて、その関係から彼らは共通語を習得していた。彼らは共通語で語りあったものだ。

「くだらんな」

「ああ。くだらん」

「しかし、俺は自由だ」

「俺も自由だ」

「自由もつまらんな」

「自由もつまらん」

「ダクナとイヴェンに課される任務は不自由だった」

「不自由だったな」

「だが、与えられた枠わくの中でどうするかは俺の自由だった」

「俺の自由だったな」

「くだらん」

「ああ。くだらんな」

　そんなとき、俺たちは我が主マイ・ロードに出会った。やけに体格のいい男だと思った。追い剝はぎ目的で襲おそった。手て強ごわければいいと願った。我が主マイ・ロードはしぶとかった。二人一組だが、一人で二人分の動きをしているように見せかけて、相手を惑わく乱らんするのが俺たちの常じよう套とう手段だった。我が主マイ・ロードには通じなかった。すぐに二人いるとばれた。俺たちは二人がかりで我が主マイ・ロードを殺そうとした。殺した。その手て応ごたえはあったのに、我が主マイ・ロードは息絶えなかった。

「そんなことじゃあねえ。あいにく俺は死なないのさ」

「わからんな」

「ああ。わからん」

「こいつは何だ」

「何だ、こいつは」

「俺かい……？」我が主マイ・ロードは血ち反へ吐どを撒まき散らしながら、高らかに笑った。「俺はねえ。支ロ配ー者ドさ。冗じよう談だんなんかじゃない。大おお袈げ裟さでもない。俺はこのとおり、俺という生命体を支配してる。なあ、お前たち、強い強いお前たち、お前たちはたしかに強いがねえ。じゃあ、お前たち自身の精神を、肉体を、完全に支配してると言えるかい？　言えやしないだろう？　それはとても難しいことなんだよ。簡単なようでいて、宇宙を統すべるのと同じくらい難しいことなのさ。俺はそいつを成し遂とげたんだよ。わかるかい、ファニーフェイスども？　無理かもしれないねえ。お前たちはどうも、そんなに頭がよくなさそうだからねえ。この俺の高こう尚しような思想を、真理を理解するのはちょっと無理かもねえ。だが、お前たちは今、それを知りたいと

思っているんじゃないのかい？　そいつはねえ。俺に言わせれば、正しい欲求だよ。お前たちは今、じつに正しい欲望を抱いだいてるのさ。俺が満たしてやってもいいんだよ？　俺のものにしてやろう。お前たちが望むなら、なんて、甘っちょろいことを、支ロ配ー者ドたる俺が言うとでも？　そんなわきゃあないだろう？　俺は支ロ配ー者ドなんだよ？　だから、俺はお前たちに命じるんだ。さあ、俺のものになれ！　俺に仕えるんだ！　それがお前たちにとって一番の幸福だってことに、いいかげん気づくんだよ！　そうしたら、俺はお前たちを愛してやろう……！」

　俺たちはどう見ても瀕ひん死しの我が主マイ・ロードを見下ろしながら圧あつ倒とうされていた。

　支ロ配ー者ド。

　たしかにそうだ。

　あの瞬しゅん間かんから、ＳＩＸことＳ．Ｉ．Ｘという生命体は俺たちの主になった。

「俺は間違ったのか」

　答えはない。

　彼は一人だからだ。

　もう一人の彼は死んだ。

　一人になったとき、彼は重い枷かせを外されたかのように感じた。

　我が主マイ・ロードの左ひだり腕うでを胸に抱いて、彼は一人、笑えみさえ浮うかべた。

　これで俺だけのものだ。

「お前も同じ気持ちだったはずだ」

　答えはない。

　当然だ。

「お前はもういない。俺は一人だ」

　独ひとり占じめできるはずだった。

「犬は俺だけでいい」

　なぜだ、我が主マイ・ロード。

　どうして俺に溝どぶさらいのような仕事を言いつける。

「狡こう兎と死して走そう狗く烹にらる、か」

　顚聖虞テンセイグだか熾シキ帝てい国こくだかにそんな言葉があるという。獲え物ものの兎うさぎが死ねば、それを追う猟りよう犬けんは不用となり、煮にて食われる。利用価値がある間はいいように使い、用済みになれば捨てる、という意味だろう。

　俺は用済みなのか。

　新しい手下どもを集めるために東とう奔ほん西せい走そうしたのも俺だ。

　俺は何のために。

　むろん、我が主マイ・ロードのためだ。

　我が主マイ・ロードはご存じのはずだ。俺がどれだけ我が主マイ・ロードに尽つくしてきたか。片割れまで犠ぎ牲せいにした。それは、だが、俺の望みでもあった。

　俺一人でいい。

　もう一人の俺よ。お前もそう思っていただろう。何かが違ちがっていれば、俺が死んでいた。お前が一人で我が主マイ・ロードにお仕えしていたはずだ。そうして、お前も同じ目に遭あっていただろう。

「なぜだ。なぜ我が主マイ・ロードは俺をおそばに置いてくださらない」

　俺は我が主マイ・ロードのものだ。

　我が主マイ・ロードはそうおっしゃったはずだ。

「なぜだ」

　答えはない。

　俺は一人だ。

Omenage 899 5th revolution 27th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

chapter.10

彼女の純真

　アサイラムの仕事をすませても、ベアトリーチェの一日は終わらない。むしろ、まだまだこれからだ。

　時間が足りないとは思わないことにしている。そんなことを考えている暇ひまがあったら、なすべきこと、やりたいことに精を出せばいい。

　欲ほつすればきりがないのだ。他ほかの人たちと同じように、ベアトリーチェには一日につき二十四時間がちゃんと与あたえられている。誰だれもが皆みな、同じ時間を生きているのだ。不平を言うなど愚おろかなことだろう。

　雨さえ降っていなければ、ベアトリーチェは身体からだを動かしやすい服に着き替がえ、愛刀と水すい筒とうを携たずさえてアサイラムの中庭に出る。

　今日は友人が買ってきてくれたヌー・ベイルのチョコレートも持った。鍛たん錬れんのあとに、自分へのご褒ほう美びとして一つだけ食べるつもりだ。

　秩ちつ序じよの番人にいたころだったら、自分自身に報ほう酬しゆうを与えるような真ま似ねは絶対にしなかっただろう。何があろうと、決して自らを甘やかしてはいけないと思っていた。自分は一本のかぼそい糸で、常にぴんと張らせておかないといけない。そうすれば、ただの糸であっても、一グラハム程度の重みであれば、なんとか支えることができる。微び々びたるものだが、倦うまず弛たゆまず努力しつづければ、二グラハム、三グラハムと、耐えうる重さも次し第だいに増えてゆくだろう。緩ゆるめてしまったら、一巻の終わりだ。あのころはそんなふうに考えていた。

　今は少し違う。

　敬愛する母様を、モリー・リップスをそばで見ているうちに、だんだんと考え方が変化してきた。

　モリー・リップス・アサイラムの創設者であり、代表であり、きわめて有能な一医術士であり、子供たちの母でもあるモリー・リップスにも、欠点がないわけではない。というか、欠点だらけだ。忙いそがしいと、すぐに身の回りのことをなおざりにするし、シャ

ワーを浴びても、裸はだかのまま眠ねむってしまったりするし、反対に、医術士服を脱ぬがずに寝ねてしまうこともよくある。放ほうっておくと、食生活もさんざんなことになるし、飲酒すればたいてい泥でい酔すいする。煙草たばこも、身体によくないと言われているから、禁きん煙えんしてほしいと願っても、絶対にやめようとしない。昔は男おとこ癖ぐせも悪かった。

それでも、モリー・リップスは大勢に慕したわれ、尊敬されている。

人としては、たしかにだらしないところがある。でも、それだけではないからだ。

締しめるところはきっちり締める。ゆるめるときはゆるめる。多た忙ぼうをきわめる身だ。肉体的な疲ひ労ろうだけではない。精神的にはもっときついはずだ。ずっと張りつめていたら、とても保もたない。めりはりが必要なのだ。

それに、モリー・リップスの屈くつ託たくのない笑え顔がおや、ときには度を過ぎることもある悪ふざけは、周囲の者たちをなごませる。たまに、まるで子供のように、面めん倒どうだとか、これはいやだとか、そんな理由で仕事を放ほうりだそうとして、結局、きっちりこなしてみせるのだけれど、そういう姿を見ていると、気が楽になるのだ。

この世に完かん璧ぺきな人間はいない。不完全な自分でも、最善をつくせばそれでいいのだ。

自分だけではない。他人のことも肯こう定ていできるようになる。誰にでも長所と短所があるのだ。悪いところに目がいきがちだけれど、できるだけ許容して、美点を評価したほうがいい。

ベアトリーチェはしっかりと柔じゆう軟なん体操をしてから、中庭の芝しば生ふの上に正座して、そっと目をつぶった。

腹を膨ふくらませて息を大きく吸いこみ、ゆっくりとへこませながら吐はきだす。

呼吸が十分に深まると、身体の隅すみ々ずみにまで意識が行き渡わたる。

受け容いれる。

認める。

許す。

わたしはここにいてもいいんだ。

その瞬しゅん間かん、ベアトリーチェは透きとおる。血管が、神経が、筋肉が、骨が、内臓が、表皮が、脳まではっきりと視みえる。すべての流れが手にとるようにわかる。

ベアトリーチェは愛刀を引っつかんで立ちあがった。

目はつぶったままだ。

鞘さやから抜ぬいて、放った。

引いて、上段の構えに移行し、振ふりおろして返した。

そこから撥はねあげ、一瞬、止めて、身体を開きながら薙ないだ。

止めずに斜ななめに斬きりあげ、手て許もとに引きよせて、突ついた。

飛びさがって、のけぞった。

今、ベアトリーチェの目の前に敵がいる。

その敵とは己おのれだ。

こうして相あい対たいすると、自分自身がもっとよく見える。

こう斬れば、こうよける。そこからこう反はん撃げきがくる。かわす。その先を読んで、こうくる。受け流す。速く。もっと速く。

ベアトリーチェは透きとおっているので、どこがどんなふうに、どこまで動くのか、どれくらいの速度が限界なのか、わからないことなど何もない。限界を超こえることはできないが、近づけることはできる。繰くり返しているうちに、限界が少しずつ、本当に少しずつだが、遠ざかってゆく。

やがてベアトリーチェは気づく。ここだ。

　ここを少しだけこうすれば、もっと速く動かせる。

　歩くのをやめて、駆かける。

　助走をつけて、跳とぶ。

　ついには、飛ひ翔しようする。

　わたしにはそれができる。

　その手前で立ちどまった。

　ベアトリーチェは青眼の構えをとって呼吸を整えた。

　鞘を拾って愛刀を収め、正座した。

　目を開けて、中庭を見まわすと、案の定だった。隅すみのほうの東あずま屋やに人ひと影かげがあった。長なが椅い子すに腰こしかけているのではない。柱の陰かげに立ってこちらを見ている。二人だ。一人はピンク色の髪かみの毛が足首に届くほど長い。もう一人は黒髪を短めにしている。

「どうしたんだ、ピノア。それに、友花ユウファア」

「べつに」

　いつも友花の保護者然として、そのそばから離はなれようとしなかった黒髪のピノアも、十四歳になってから医術士の修しゆ行ぎようを始めた。アサイラムで働きだしたのは半年くらい前だ。まだ雑用係だけれど、文句を言いながらもさぼらず、手を抜かない。時間があけば友花の様子を見にいって、夜はこうして一いつ緒しよにいるのだ。

「ただ見てただけ。悪い？」

「悪くはない」ベアトリーチェは苦く笑しようした。「こっちへきたらどうだ」

「友花」ピノアは手をつないでいる友花の顔をのぞきこんだ。「どうする？　行く？」

　友花はこっくりとうなずいた。

　モリー・リップスの見立てによると、魔ま術じゆつ士養成の過程で薬物を過か剰じように投とう与よされ、その副作用で体毛や瞳ひとみが変色してしまっただけでなく、心にまで深い傷を負ったらしい。言葉を話すことができず、感情表現が乏とぼしいというより、感情の起き伏ふく自体が少ないのかもしれない。髪の毛を切られることだけは、なぜか強く拒きよ否ひする。どこか植物めいた印象さえあった友花も、身振り手振りで受け答えをするようになったし、調子がいいときは他ほかの子供たちとも遊ぶようになった。きっとピノアのおかげだ。

　ピノアは友花の手を引いて、ぱたぱたと歩いてきた。この一年でだいぶ背がのびたピノアは、かなり大人びて見える。話をすると、まだ子供っぽいところもあるけれど、外見だけなら十五歳とはとても思えない。足もすらりと長いので、ピノアが自分のペースで歩くと、友花はついてこられないのだ。だから、友花と一緒のときは、ああして小こ股またでちょこちょこ足を進めるのだろう。

「あんたさ」ピノアは先に友花をうながして座らせてから、彼女とベアトリーチェとの間に腰を下ろした。「いっつもこんなことやってるでしょ。仕事のあとに。疲つかれないの？」

「お前だって、友花が寝ねつけないと、こうやって一緒に散歩をしたりしているだろう」

「ピノアは、あ――」ピノアは顔をしかめて言いなおした。「あたしは、仕事っていってもみんなの手伝いとかしてるだけだし。あんたは母様よりも働いてるでしょ」

「そんなことはない。母様は本当に大きなものを背負われているんだ。わたしだけじゃない。誰だれとも比ひ較かくにならないほど、母様は大変だ」

「あたしはそういうことを言ってるわけじゃないんだけど」ピノアは頬ほおを膨ふくらませた。

　友花は芝しば生ふをじっと見つめている。

「心配してくれてありがとう」ベアトリーチェはピノアに笑いかけた。

「し、心配なんか」ピノアは顔をそむけた。「してないもん。そん

なの。なんであたしが。ただ疲れないのかって訊きいただけでしょ」

「多少疲れても、一晩寝れば、わたしは元気だ」

「体力あるんだね。鍛きたえてるから？　そのために剣けんの練習なんかしてるの？」

「そうだな」ベアトリーチェは少しだけ首を傾かたむけた。「それもある」

「それ以外の理由って何？」

「鍛たん錬れんを怠おこたると、腕うでが鈍にぶってしまう。肝かん心じんなときに使えない剣なんて、意味がないだろう」

「肝心なとき……？」ピノアは眉まゆをひそめて訝いぶかしそうな眼まな差ざしを送ってきた。

「ああ」ベアトリーチェはピノアの視線をしっかりと受け止めた。「戦わずにすむのなら、それに越こしたことはない。でも、戦わなければならないとき、戦うべきときに逃にげだしたくはないんだ」

「そっか」ピノアはうつむいて唇くちびるの端はしを噛かんだ。

　以前、ＳｍＣと手を結んでいた龍州系クラン骨こつ龍りゅうによる襲しゅう撃げきを受けたとき、ピノアと友花もアサイラムにいた。あのような出来事が、またいつか起こらないともかぎらない。そんなことは考えたくもないが、ここはエルデンだ。何があってもおかしくはない。もともとベアトリーチェは、大切なものを守りたくて剣を握にぎったのだ。秩ちつ序じょの番人を退団しても、その気持ちは変わっていない。ただ、大事な人たちを助け、支えるための方法は、剣を振ふる以外にもあることを、今のベアトリーチェは知っている。この身を育はぐくんでくれたアサイラムに戻もどり、育ての母であり師し匠しょうでもあるモリー・リップスだけではない、その他の医術士たち、他のスタッフ、入院している患かん者じゃたち、かつてのベアトリーチェと同じ境きょう遇ぐうにある子供たちと接しているうちに、自分にできることはたくさん、数かぎりなくあることに気づいたのだ。

　そうはいっても、剣でしか守ることのできない、戦わずしては救えない命も、やはりあるだろう。

ベアトリーチェは誓ちかっていた。

わたしは剣を捨てない。

医術式には数多くの流派が存在していて、その大半に不殺の戒かい律りつがあるというが、ベアトリーチェの師匠であるモリー・リップスが学んだリュイー派は、戦場医術士、あるいは医術士傭よう兵へいと呼ばれる戦場稼かせぎの医術士集団で、自衛のための戦せん闘とうは認めている。

モリー・リップスは、母様は、ある夜、わたしに話してくれた。

自分の師匠のことを。

マダム・リュイー。

もしかしたら、母様の祖母かもしれない、叔お母ばかもしれない、ひょっとしたら母親かもしれない、一人の女性のことを。

いつも戦場の最前線に身を置いて、快活に歌い、笑いながら、目の前の怪け我が人をひたすら癒いやしつづけて、自らも傷を負っていながら他の負傷者の手当てを優先し、ついに命を燃えつきさせた一人の医術士のことを。

そうして、母様はわたしに言った。

あなたの生き方はあなたが選びなさい、リーチェ。あなたの人生だもの。わたしがそうしたように、あなたが自分で決めるのよ。あなたにはそれができるわ。

母様。

決めました。

わたしは剣を持った医術士になります。

誰にも負けない、決して屈くつしない、救護剣士に。

「ピノア」

「……何？」ピノアは少し顔を上げた。

「焦あせることはない。今は自分に何ができるかよりも、何がした

いかを考えるんだ」

「何が、したいか……？」

「そうだ。進む方向をまっすぐ見て、ただ一歩一歩、歩いていけばいい」

「あたし、のろのろするのは嫌きらい」

「だったら、急げばいい。何かにつまずいて転んでも、手を差しのべてくれる人はたくさんいる。怖こわがらなくてもいい」

「怖がってなんかないよ」ピノアは挑いどむようにベアトリーチェを睨にらんできた。

「そうか」ベアトリーチェは目を伏ふせて小さなため息をついた。「それは頼たのもしいな。わたしなんか、いつも怯おびえている」

「そうなの……？　べつに、そんなふうには見えないけど」

「痩やせ我が慢まんの成果が出てるみたいだな」

「あんまり無理したら、そのうち母様に叱しかられるんだから」

「ほどほどにしておくよ」

「そのほうがいいんじゃない？」ピノアはちらりと隣となりの友花に目をやった。

　つられてベアトリーチェも友花のほうを見た。

　友花は前まえ屈かがみになって顔をこちらに向け、何かを凝ぎよう視ししていた。

　ベアトリーチェの膝ひざ元もとだ。

　刀ではないだろう。

　チョコレートが入っている焦こげ茶ちや色の小さな箱か。

「これ」ベアトリーチェは箱を持ちあげてみせた。「気になるのか、友花」

　友花は、こくこく、と首を縦に振った。

「それって──」ピノアは目を瞠みはった。「ヌー・ベイルのチョコ？　もしかして、あれじゃないの？　チョコレートの革命。〝熱帯夜ルアの結晶モーナ〟、だっけ……？」

「よく知っているな」

「有名だもん。なかなか買えないんでしょ。予約とかしないと」

「ああ。友だちが──」ベアトリーチェの胸がほんのちょっとだけ疼うずいた。「買ってきてくれたんだ」

「友だちって、マリアローズさん？」

「そうだ」

「ふーん……」ピノアは箱をちらちら見ている。

　友花は視線で食くらいついているといったかんじだ。

　ベアトリーチェは笑った。「よかったら、食べるか？」

「え」ピノアは喜色満面の一歩手前で引き返して、わざとらしい渋じゆう面めんを作った。「い、いいよ。そんな。友花も、ダメだったら。そんなふうに欲しがっちゃ」

「いいさ。一つ食べてみたが、すごくおいしかった。いや、おいしいなんて言葉じゃ足りないな。味だけじゃなくて、香かおりがとにかくものすごいんだ」

「でも、わざわざ買ってきてくれたものなんでしょ。やっぱり、そういうのってあんたが食べたほうが」

「マリアローズはそんなに心の狭せまいやつじゃない。気にするな」

「そう……？」ピノアは身を乗りだしてきた。

　友花も躙にじり寄ってこようとしている。

　ベアトリーチェはマリアローズの顔を思い浮うかべた。もう胸は痛まない。ただあたたかくなるだけだ。たとえわずかな痛みが走っ

たとしても、不快ではない。

　わたしはお前のことが本当に好きだけど、何も望んでないんだ。

　お前にとっても、わたしにとっても、それが一番いい。

　いつかその気になったら、何がお前をそんなに苦しめているのか、教えてほしいけど。

　それが何であったとしても、わたしは絶対に受け止めることができるし、元気づけてあげることくらいは、きっとできるはずだから。

「いいんだ」ベアトリーチェは箱の蓋ふたを開けた。

　そのあと、チョコレートの革命〝熱帯夜ルアの結晶モーナ〟のとてつもなく鮮せん烈れつで、すばらしく芳ほう醇じゅんで、とんでもなく濃のう密みつな香りが、ピノアと友花を一いつ瞬しゅんで虜とりこにしたことは言うまでもない。

Omenage 899 5th revolution 28th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

chapter.II

踊る剣継ぎし者たち

彼らは複雑に入り組んでいるエルデンの下水道を自分たちの家とし、庭として、そこに棲すんでいる。

その存在を知る者は少ない。

大半のエルデン市民は、下水道になど興味も関心もないからだ。

だから当然、下水道に巣くっている猫ねこよりも大きな黒い鼠ねずみのことも知らない。ヒレを備えた水陸両生の脂羽蟲ゴキがいることも知らないだろう。下水の中を高速で泳ぐ棘とげだらけで五つも六つも目があるスプーキィという名の怪かい魚ぎよのことも知らない。下水道を管理、維い持じするために特とく殊しゆな魔ま導どう兵が配備されていることも知らないはずだ。

彼らはすべてを知っている。

溝鼠族ブラウニグ。

下水道の主ぬしたる彼らの風ふう貌ぼうは、一言でいうと異様だ。

どの溝鼠族ブラウニグも暗視鏡を装着してマスクをかぶり、フード付きの外がい套とうで身体からだをすっぽりと覆おおっているので、まず区別はつかない。声を聞かないと、性別すら不明だ。いや、マスクのせいで彼らの声はくぐもっているから、男か女かわからないこともある。

今、秩ちつ序じよの番人二代目総長羅ラ叉サ以下六十八名を先導している溝鼠族ブラウニグは別だ。羅叉も彼のことは知っている。その為人ひととなりをよく理解しているわけではないが、彼が金のためだけではなく、いわば彼なりの義のために手を貸してくれていることは承知している。

溝鼠族ブラウニグのシデオは、不意に足を止めて振ふり向いた。
「あ、あれ、なんだよな……」

「何だ」羅叉は立ちどまって軽く手をあげ、隊士たちに停止の合図を送った。

「ホントに、焔ホムラの仇かたき、とれるんだよな。焔を殺したや

つ、お前ら、やっつけるんだよな。これって、そのためなんだよな」

「そうだ」羅叉はうなずいた。「焔だけではない。我らは多くの同志を、そして父とも仰あおぐ先代を奴やつめに奪うばわれた。あの外げ道どうを、外道に荷か担たんする下げ衆すどもを残らず斬きる。これは復ふく讐しゅうだ。我らの義を貫つらぬくための戦いでもある」

「そ、そうか……」シデオは肩かたを揺ゆらして、シシシ、と笑った。「それなら、いいんだ。焔はいいやつだったからな。ちょっとしか知らねえけど、俺、好きになったやつのことは、死ぬまで忘れないよ。いいやつ、殺したやつは、俺、許さねえんだ」

「焔は喜んでいるだろう」

「そ、そうかな。シシシ。だと、いいね」

「あれは情の厚い男だった」

「う、うん。そうだね。ちょっとだけしか知らねえけど、俺もそう思うよ。あんたも、いいやつだね、死神」

　羅叉は眉まゆを動かしてしまいそうになってこらえた。「案内を頼たのむ、シデオ」

「わかったよ、シシシ」シデオは前に向きなおって歩きだした。

　下水道を通って第十三区の元高層寺院〝絞首刑ハング執行人マン99〟に達する経路については、すでにチェス・ピード率いる七番突とつ撃げき隊を中心に確かく認にんずみだし、内部への進入路も確保できている。そこまで準備をしても、いざ本番となったら溝鼠族ブラウニグの道案内がなければ迷ってしまいかねない。それがエルデンの下水道だ。もちろん、準備段階でもシデオは協力してくれた。相場にいくらか上乗せした謝礼も支し払はらったが、百万や二百万程度の金など惜おしくない。

　シデオの後ろを歩きながら、羅叉は知らぬ間に歯は軋ぎしりをしていた。

　抑おさえねばならぬ。

血を滾たぎらせようとも、激情に押し流されることなく、ただ義のために剣けんを振るうべし。先代の教えだ。

ゆえに俺は悪即そく斬ざんを自らに課してきた。悪を見つけたならば、恨うらみ、憎にくむ前に、素す早ばやくこれを斬きる。感情はいつも剣を曇くもらせ、太た刀ち筋を狂くるわせるものだ。俺は剣になる。一ひと振ふりの剣そのものに。剣は斬るために生みだされる凶きよう器きだ。俺は斬るだろう。何の因果か総長の椅い子すに座らされたが、俺はやはり一振りの剣にすぎぬ。

ヨハン・サンライズ、貴様が俺を使え。

俺はひたすらに斬れ味を磨みがく。どこまでも斬れる剣となる。俺を振りかざして、悪を斬れ。俺は意思を持たぬ。剣として生き、剣として死ねれば、それでいい。そう決意していた。貫くこともできたはずだ。あの外道が冥めい府ふ魔ま道どうから蘇よみがえってきたりしなければ、俺は一振りの剣でいられたのだ。

怖こわくて、怖くて、怖くて、剣を抱だかねば眠ねむることができなかった子供の俺を、熱い腕うでで剣ごと抱きしめて寝ねてくれた。

デニス・サンライズは親のごとき存在だった。野や獣じゆう同然の俺を人間にしてくれた。もとより他ほかに親と呼ぶべき相手などいない。まぎれもなく父だった。太陽だった。空に太陽が昇のぼらねば草木は立ち枯がれ、虫も獣けものも人も倒たおれ伏ふし凍こごえ果てるだろう。太陽を墜おとした巨きよ悪あくは必ず滅めつされるべきだ。

そうなったはずだった。

死したはずの外道め。幽ゆう鬼きめ。今さら地上に彷徨さまよい出いでて、何をか企たくらまんや。貴様が何を目もく論ろんでいようと関係ない。今度こそ息の根を止めてやる。この手で。やはり我が手でしとめるべきなのだ。完全に滅してみせる。

二代目総長羅叉魔き下かの一番総長直属隊、李イ童ドウ晏アン率いる二番親衛隊、ラッド・ワーノン率いる六番突撃隊、チェス・ピード率いる七番突撃隊、以上の四隊は下水道から絞首刑ハング執行人マン99に突とつ入にゆうする。

　副長マシュー・シュナイデル率いる四番副長直属隊通つう称しようマシュー隊、シャット・グレヒャ率いる八番突撃隊、デートニッヒ・ボルボンゾル率いる九番突撃隊、太臺子タイダイシー率いる十番遊撃隊、ジョービー・カラマー率いる十一番遊撃隊、シャルロット・リンデ率いる十二番遊撃隊、以上の六隊は地上だ。絞首刑ハング執行人マン99を取り囲むように配置してあり、時がくれば四方八方から建物を押しつつむ。

　警けい邏ら各隊は通常任務を果たすべくエルデンの各地に散っているが、銀の砦とりでや重要拠きよ点てんの守備にあたっている守護各隊、訓練中の隊士や一線を退いた者たちが所属している後備各隊、ヨハン・サンライズ及および琺瑠フオール副長の直属隊、諜ちよう報ほう活動を主任務とする無名隊をのぞいた銀の軍団ザ・シルバリイの全戦力が今回の作戦には投入されている。もとより、突撃隊、遊撃隊は生きつ粋すいの戦士、義のためならば命を捨てることもいとわない闘とう士し、烈れつ士しぞろいだ。銀の軍団の最精せい鋭えいが全身全ぜん霊れいを捧ささげて先代の仇あだ討うちを果たすつもりだった。

　そう。

　これは復讐だ。

　目的はただ一つ。

　ＳＩＸを抹まつ殺さつする。

　どうやらあの外道は、リヴァイスとかいうブランドを立ちあげ、エルデンに悪徳再生とやらのたわけた旋せん風ぷうを巻き起こそうとしているようだが、そうした動きも頭を叩たたき潰つぶせば終息するだろう。

　標的は絞しぼりに絞る。

　あくまでＳＩＸのみだ。

　他には目もくれず、外道を斬きる。

　その死し骸がいは粉々に砕くだく。

　挽ひき潰して、焼き払はらう。

灰にしてばらまかず、金属の機術溶よう鉱こう炉ろに放ほうりこむことになろう。

さすれば、いかな化物であろうとも、ふたたび蘇ることは叶かなわぬはずだ。

「しかし」羅叉の後ろに影かげのごとく付き従っている〝小しよう羅ら刹せつ〟李童晏が、押し殺したような声を出した。「ヨハン副長はなぜ此こ度たびの作戦に参加されなかったのか」

秩ちつ序じよの番人草創期に、李童晏と同じ熾シキ帝てい国こく出身の李イ鄭嘉ジヨウカという名の剣達者がいた。その再来、小羅刹であると李童晏を称たたえたのは先代だ。李童晏はそれを名めい誉よに思い、背中に羅刹の刺青いれずみを入れ、鎧よろいの右みぎ腕うでと剣には小羅刹の文字を刻んだ。

この男は羅叉に似ている。先代が掲かかげた義に一身を捧げることを、ためらわないのではない。とうに命など捨てている。その細い眼まなこからもれる光は常に研とぎ澄すました刃やいばのようだ。悪を討つための剣は余計なことを喋しやべらない。その李童晏が不平らしきことを口にしているのだ。よほど腹に据すえかねているのだろう。ヨハンにとって、先代は養ち父ちだ。名実ともに父親なのだ。なぜ子が親のために剣を振ふるわぬのか。李童晏は先代を敬愛、否いな、崇すう拝はいしてさえいた。それゆえに理解できないのだろう。

「屯所を空けるわけにはいかん」羅叉は言い足そうとしてやめた。

成なる程ほど、屯所、銀の砦は秩序の番人の拠点であるだけでなく、住まいでもある。いついかなるときでも、その警護をおろそかにすることがあってはならない。

また、ヨハンや琺瑠は、日ごろから無名隊を手足のごとく使って情報収集を行ったり、情報をもとに団の活動計画を立てたり、あるいは団の規律を維い持じすることに心血を注いでいる。琺瑠は女で、容色がすぐれているから目立つが、基本的に二人は団を陰かげから支える役目を自らに課しているのだ。団の中では年長で、重じゆう厚こうでありながら包容力のある人ひと柄がらから人望が厚く、ひそかに「伯お父じ貴き」と呼ばれているマシュー・シュナイデルが表であるとすれば、二人は裏。むろん、担かつがれた御み輿こしの羅叉は、不可能であろうと義の体現者であらねばならない。

　ＳＩＸを討つ、仇討ちをするのであれば、総長である羅叉が手を下さねばならないのだ。

　そうすることで、血の報復は雪せつ辱じよくの物語となり、〝死神〟羅叉の名は高まって、我らの義は燦さん然ぜんと、かつ凄せい絶ぜつに輝かがやき、エルデンに秩序の風が吹ふくだろう。裏方は裏方らしく、舞ぶ台たいの袖そでに控ひかえていればいい。

　ヨハン・サンライズ。

　貴様の考えそうなことだ。

　本当は自らの手でＳＩＸを斬り刻みたくてたまらぬだろうに、あえて俺に譲ゆずるか。

　知っているか、ヨハン。

　俺は貴様のそういうところがとくに嫌きらいだ。

　底意地が悪いふりができるのなら、ひねくれているふりができるのなら、養ち父ちのように笑い、皆みなを奮い立たせ、胸を張って義の旗を掲げ、先頭に立って雄お々おしく剣けんを振るってみせることもできるはずだ。激務の合間に人目を忍しのんで剣の鍛たん錬れんを欠かさぬ貴様は、隊士どもが揶や揄ゆするようななまくらでは決してない。貴様はいつか先代が到とう達たつした場所まで登りつめるつもりなのだろう。人の領域を超こえた、あの高みへ。人知れずそこへ至り、養ち父ちへの供く養ようにでもしようというのか。

　ヨハン、総長には貴様がなるべきだった。

　貴様ならば、俺や李童晏のような凶きよう器きを自在に使いこなせるはずだ。

　俺は貴様を恨うらむ。その器うつわでもないのに、俺をここに座らせた。俺はまるで道化だ。わかっていても、先代が打ち立てた義を守るためには、ひたすら演じるしかない。

　そうか。ヨハン、貴様も同じか。

　貴様は道連れが欲しかったのか。

　ともに踊おどれと……？

　羅叉はかすかに唇くちびるをゆるめた。

　よかろう。

　俺は貴様が心底嫌いだが、腐くされ縁えんだ。俺は先代が遺のこした名めい匠しようダグラス・トゥースの「日輪」を背負い、貴様は「月明」を佩はいている。あの日から俺たちはもう、望むと望まぬとにかかわらず、死ぬまで離はなれることあたわぬ。これも絆きずなだ。

　踊ってやる。

　返り血を撒まき散らして、踊り狂くるってやる。

　貴様も踊れ、ヨハン。

　血ち反へ吐どを吐はいて倒たおれるまで、闇やみの中で踊れ。

　ふと、琺瑠が気の毒だ、と場ば違ちがいなことを考えた。

　釈拿シヤクナが死んで、焔も死んで、先代を失い、俺たちはどこか遠くへきてしまった。

　思えば、ＳＩＸ、すべて貴様の所せ為いだ。

　償つぐなわせてやる。

　否。

　償いなど不要だ。そもそも貴様の罪は決して償えぬ。

　貴様はただ死ね。

　ひたすら滅ほろびろ。

　この地上から、痕こん跡せきすら残さず、悉ことごとく消え去れ。

　それが貴様の宿命さだめと知れ。

Omenage 899 5th revolution 28th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

chapter.12

レセプシヲン

　サンランド無統治王国首都エルデン第十三区、またの名を〝彷徨Ｒえる５魂区Ｗ〟。この地区にひしめいている超高層スカイス建築クレイパーは、魔ま導どう王時代の残ざん滓しと言ってもいい。現在の技術では、たとえ同じ高さの建物を建てることはできても、九百年維持することは不可能か、仮にできたとしても至難だろう。

　第十三区の超高層建築群は、サンランド建国直後にα大陸中の企き業ぎよう体たいがこぞって建設したものだ。その後、やはり大陸中から集まってきた無法者たちに襲しゆう撃げきされ、設備の多くは破は壊かいされて、金目の物は略りやく奪だつしつくされ、大半の企業体は壊かい滅めつした。それでも建物は残り、無法者どもの住居となった。

　超高層建築が高層寺院と、また、第十三区が彷徨さまよえる魂の集つどう場所と呼ばれるようになったのは、人間が神の領域に踏ふみこみ、ときに死すら乗り越こえる禁きん忌きに手を染めて、蘇そ生せい式という技術が生みだされ、それまで宗教家でしかなかった僧そう侶りよ、神官たちの一部が強欲で傲ごう慢まんな商人になってからだ。鼻が利きく商しよう魂こんたくましい聖職者は、毎分毎秒ありとあらゆる理由で人が死ぬエルデンを最大の市場だと考えた。蘇生式には祭さい壇だんという特とく殊しゆな構造体が必要だ。とくに初期の祭壇は非常に大型だった。巨きよ大だいな祭壇を設置するのに最適な建物が、エルデンにはたくさんあった。超高層建築だ。聖職者たちは無法者どもに金を与あたえて立ち退のかせた。場合によっては彼らと結けつ託たくした。もしくは、強制的な手段を用いて追い払はらった。超高層建築は次々と寺院として生まれ変わった。

　高層寺院〝絞首刑ハング執行人マン99〟もその中の一つだった。

　だった。

　過去形だ。今は違ちがう。

　従って、元高層寺院と呼ぶべきだろう。

　この建物を住居として、蘇生式を生業なりわいにしていた糞くそ坊主ぼうずどもはもういない。

彼らは絞首刑ハング執行人マン99を売り渡わたして、どこかへ去った。悪徳再生リヴアイスが披露宴レセプシヲンを催もよおすために買いとったのだ。

絞首刑ハング執行人マン99の外がい壁へきには、黒い布が張りつけられ、あるいは細長い黒い布が巻きつけられて飾かざりつけされている。以前、マリアローズがてっぺんの部屋を占せん拠きよして使っていた高層寺院ＧＭエンパシィとは比べるべくもないけれど、それでも絞首刑ハング執行人マン99の高さは五十メーテルほどもあるだろう。いったいどれだけの布が使われているのか。見当もつかない。とにかく膨ぼう大だいな量だ。

時刻は間もなく十九時だ。

太陽はすでに沈しずんでいる。

空はまだ真っ暗ではないが、そのうち闇色に覆おおいつくされるだろう。

エルデンの星ほし影かげも暗い夜空の下では、無数の投光器でライトアップされた絞首刑ハング執行人マン99が異様な姿をさらしつづけるはずだ。

披露宴レセプシヲンは開場が十九時で、開かい宴えんが二十時ということになっている。

今は数百人の出席者が絞首刑ハング執行人マン99の周りに群がっている状態だ。

絞首刑ハング執行人マン99は凹おう型の建物で、へこんでいる部分に設けられた石段を二十段ばかり上ると、その先に玄げん関かんがある。黒い絨じゆう毯たんが敷しかれた石段の前には黒い服を着た男たちが立ちふさがっていて、たまに通されるのは、いかにも要人といった風ふう体ていの男女ばかりだ。アニーが言うには、披露宴レセプシヲンの告知は招待状と一いつ緒しよに三日前の朝、届いたらしいけれど、これは一般出席者の場合で、特別招待客にはもっと前から知らされていたようだ。開場前の入場が許されるのは、その特別招待客だけ、ということだろう。

「しょれにしても、けっこうな人にん数じゆうね」ユリカは顔をしかめて、ふう、と息を吐いた。「人がたくしゃんいるのはべちゅに

いいけど、匂においがしゅごいわ」

「ああ……」サフィニアも浮うかない顔をしている。「それは、たしかに……わたしも、ちょっと……ありとあらゆる香こう水すいを、ごちゃ混ぜにしたような……」

「鼻・曲がりマス」ピンパーネルは無表情だけれど、上じよう機き嫌げんではなさそうだ。「くさい」

　ちなみに、ユリカもサフィニアもふだんとは違ちがう服を着ている。二人ともアニーにコーディネートしてもらったというか、強ごう引いんに着せられた。

　アニー曰いわく、ユリカのコンセプトは「永と久わに生きる未来少女」で、サフィニアは「他者を蹂じゆう躙りんしてでも固く守られるべき処女性バージニテイ」らしい。なんだかよくわからないが、そう言われると、なんとなくそんなかんじもしないではない。そのへんがアニーの美的センスのなせる業わざなのかもしれない。

　さらに、ユリカの極限クライマツクス九手棍ナインポールは「永遠を司つかさどる輪りん廻ね棒」とやらに、サフィニアの杖つえは「拷ごう問もんのための鞭むちと征せい服ふくを成し遂とげる錫しやく杖じよう」とやらに、それぞれ偽ぎ装そうされている。サフィニアは秘薬や触しよく媒ばいも隠かくし持っているので、万一の場合の備えは万ばん全ぜんだ。

　ピンパーネルも披露宴レセプシヲンにふさわしい――と、ある男が判断した――らしい衣服を着させられている。

　色は黒、黒、黒。ほんのちょっとだけ白と灰色。タイトで、斜ななめのラインを多用した斬ざん新しんなシルエットだ。いつもは束ねている髪かみを垂らして、顔の上半分を覆う黒いマスクをつけている。や、かっこいいよ？　ピンパーネルって、けっこうスタイルいいしね。このへんにいる連中はさすがに業界人ばっかりみたいで、みんなすごい恰かつ好こうしてるから、そこまで目立って目立って仕方ないってほどじゃないし。愛用の雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けん、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザも、どっかにしっかり格納してあるらしいし、いいんだけど、なんかこう、ピンパーネルらしくないっていうか。

「くっさいかぁ？」半魚人はきょろきょろしながら半魚鼻をひくひ

くさせた。「ええ匂いやと思うけどなあ。嗅かいどると、脳がとろぉ～んとしてくるっちゅうか。ゆうても、やっぱきれいなネーチャンの匂いなわけやん？　ぐふふふふふ」

「女の人だけじゃないでしょ。男の人だって香水つけてるし」マリアローズは軽く肩かたをすくめてため息をついた。

「そこは気にせんかったらええわけやんか。脳内補正やで。わしくらい高機能な脳みそ持っとると、そんくらいの芸当はヨッユーなわけや。余よ裕ゆうシャックシャクで勇気リンリーンのパワー全開で力みなぎルンルンッ！　ぐわははははっ！」

「高機能どころか、きみの脳内は常に魚畑状態っぽいよね……」

「海のモンまでガッポガッポ穫とれるっちゅうたら、そらごっつい畑やで！　まさーにッ！　海千ッ！　山千ッ！　ちゃうか！　ナハハハハッ！」

　完全に舞まいあがっていて、わけのわからないことを喚わめきながら遥はるか遠くまで飛んでいってしまいそうな腐くされ半魚も、じつはピンパーネルと似たような恰好をしているのだけれど、こちらはもう、ぜんぜん、まったく似合っていない。似合うはずもない。だいたい人間のレベルに達してないわけだし。人間の服はそもそも分不相応なんだよね。

　マリアローズは隣となりにいる背の高い男を見上げた。こっちは半魚人と違い、黒、黒、ちょっと白、灰色の服がやたらとハマっている。やっぱり、でっかいし。手足も長くて、頭は小さめだし、何を着ても見み映ばえはするんだけど、ふだんとのギャップがありすぎるっていうか。

「む？」トマトクンはマリアローズの視線に気づいて首を傾かしげた。「どうかしたのか」

「や、べつに」マリアローズは首を横に振ふって目をそらした。

　どうかしたわけではないのだけれど、やたらと目立つぶん、マスクで顔を隠しているのがなんだかあやしく見える。あの男は誰だれだ。正体を隠しているのか。有名人なのではないか。そういう視線が突つき刺さりまくっているのに、トマトクンはまるで意に介かいしていないようだ。ようだ、というか、絶対、気にしていない。

考えてみれば、ＺＯＯのトマトクンといったら、その筋ではそれなりに名前が知られている。名前が名前だけに、本当に名前だけは聞き覚えがある、という者も多いかもしれないが、知る人ぞ知る程度の知名度はあるだろう。さすがにあの大たい剣けんは何かに偽装することもできなくて、今回は自宅の倉庫に置いてきたのだけれど、あの無む駄だにド派手な剣を持っていたら、きっと誰かに気づかれるはずだ。

「でも……」ルーシーは雰ふん囲い気きに圧あつ倒とうされているのか、おどおどしている。「ほんとに、きれいな人がたくさんいますね。すごいなぁ、エルデンって。都会なんだなぁ……」

「ルーシーくんも、ちゃぁーんとかぁーわいいよー？」アニーはルーシーの肩を抱だいて頬ほおずりをした。

「あ、そ、そう……ですか？」

「こぉーんなにスカート似合う男の子には、アタシィーもちょっと会ったことないなぁー」

「そ、そんなふうに言ってもらえると……」ルーシーは頬を染めてもじもじしている。

満まん更ざらでもない、といったところか。それどころか、かなり嬉うれしそうだ。いいけどね。

実際、「少年と少女の曖あい昧まいすぎる境界線」がコンセプトだというルーシーの服装はかわいらしい。ぱっと見は女の子みたいだけれど、やっぱりどこか違ちがう。線は細くても、若じやつ干かん丸みに欠けていて、硬かたい印象があるのだ。ただ、成熟していない細身の少女であれば、そういうこともなくはない。少女と見まごうような少年も世の中にはいたりする。どっちともつかない。微び妙みよう。むしろ、絶妙なのか。ある種の性的嗜し好こうの持ち主にはたまらないかもしれない。それはそうだろう。ルーシーの衣服からメイクまで、すべてを選んで施ほどこしたアニー・ポリステルが、そのある種の性的嗜好の持ち主らしいのだから、当然といえば当然だ。

「フッ……」馬ば鹿か一号は前まえ髪がみを指先で払はらおうとしたようだけれど、できなかった。

　それというのも、馬鹿一号はいつもと違う衣装を身にまとっているどころの騒さわぎではない。馬鹿一号はトマトクン以上に、とくにこの業界ではずっと、もっと、遥はるかに有名らしいので、とりあえず黒い服を着ていたら絶対にバレる。違う色の服に身を包んでマスクをつけたとしても、ひょっとしたら髪の毛でバレるかもしれない。そこで馬鹿一号は、深い青のフード付きの外がい套とうと、チュニックと、スカートとズボンの中間みたいなもの、しかもどれもこれも左右非対たい称しようで、なんというか混こん沌とんとしたデザインの衣類を身にまとい、フードをかぶった上に黒くて長い布をぐるぐる巻いて口から上を完全に隠し、目の部分だけに穴をあけて、その布をさらに身体中に巻きつけるという、それってもう変装だよね、てゆうか変態だよね、呆あきれ半分のそんな感想しか出てこないような恰好で、かえって悪目立ちしていた。

「ボクに言わせれば、これだけ人がいるのにもかかわらず、本当に美しいと思える花はたった一輪しか咲さいていない。それこそが残ざん酷こくな真実というものなのかもしれないネ。美が稀き少しよう価値だとするのなら、至高の美は唯ゆい一いつ無二であるはずだろう？　そう、それがキミだ」馬鹿一号はどこからか真っ赤な薔ば薇らを出現させて、こちらに差し向けた。「──マリア。マリア、マリア、マリア。ボクの目にはキミ以外の全存在が色いろ褪あせて見える。キミの背景になった瞬しゆん間かん、すべてはその輪りん郭かくすら失ってしまうのサ」

「それはキミの脳が融ゆう解かいしてるからだよ」

「キミへの愛はボクの胸を、この身を焦こがすだけじゃすまない。ボクの何もかもを溶とかしてしまう。それくらいすさまじい熱量だからネ。そうならざるをえないのサ。当然だヨ、マイスウィーテスト。ボクが運命に導かれて出会ってしまったのは、他ほかならぬキミなんだからネ」

「あー、うざいうざいうざい……」

「ああ！　キミは素す晴ばらしい！　どこまでも、あくまでも！　ボクはキミのために美しいという言葉を超こえる形容詞を生みだすことにした！　いとつくしい……！　どうだろう!?　愛いとおしいと美しいを合成してみたんだヨ！」

「きみは、バホ、みたいなかんじだよね。バカとアホを合成してみたんだけどさ。いま思いついただけだし、だいぶしょぼい言葉に

なっちゃったけど、きみにはお似合いじゃない？」

「キミがボクのために考えてくれたのなら、どんなものだろうと宝石より価値があるに決まっているサ、スウィートハート」

「あっそ。じゃ、今度からきみのことはバホって呼ぶね」

「是ぜ非ひ呼んでくれ！　光栄だヨ！」

「……なんか、そう言われるとむかつく」

「どうしてだい？　バホ。じつに甘かん美びな響ひびきじゃないか。いや、もちろん、言うまでもなく、キミがボクのために、愛ゆえに考案してくれたという事実があり、キミのそのいとつくしい唇くちびるからその言葉がつむがれるからこそ、このうえなく甘美なわけだけどネ」

「あのさ」マリアローズは大きなため息をついて声をひそめた。「──きみのそういうとんでもなく愚ぐ劣れつな振ふる舞まいもわりと有名だったりするんだから、おとなしくしててくれない？　そうでなくたって目立っちゃってるんだからさ」

「それはやむをえないヨ、マリア」バホ野や郎ろうは薔薇を左右に振ってみせた。「なぜなら、稀け有うにして妙たえなる一輪の花がここに咲いているんだからネ」

「はあ？　何だよ、それ。花……？」

「むろん、キミのことだヨ、薔マ薇リのアマロリーアズ」

「や、僕がどうとかじゃなくて、キミとかトマトとかが──」マリアローズはあたりを見まわした。

　あれ？

　何？

　なんで？

　どうしてあっちを見てもこっちを見ても、誰だれか彼かと、てゆうか、誰も彼もと目があって、あって、あいまくるわけ……？

「ひょっとして、気づいていなかったのかい、マリア？」バホ野郎は、フッ、といやらしく笑って首を傾かたむけてみせた。「彼らが見ているのはボクやそこの背高野郎ロングトールじゃないヨ。少なくともボクらはメインじゃない。誰よりも一番注目を浴びているのはキミなのサ」

「……や、それはきっと、今、たまたまで……」

「いやだ。マリアったら」ユリカは目を瞠みはった。「ましゃか、気ぢゅいてなかったの？」

「やっぱり……」サフィニアは苦く笑しようを浮うかべた。「たまに……変に無防備なんですよね……マリアって……」

「そういうところは心配ですよね！」ルーシーは力強くうなずいた。「しっかり守らなきゃ、みたいな！　そんな気分になります！　おこがましいかもしれないですけど！」

「たしかに、おこがましいネ」バホ野郎は凍いてついた刃やいばのごとき視線で容よう赦しやなくルーシーに斬きりつけた。

「ご、ごめんなさい……」ルーシーは顔を青くしてうつむいた。「ちょ、ちょっと、その……生意気でした……」格が違ちがうということなのだろうけれど、それでもごにょごにょ言うあたりは、めげないルーシーらしい。「でも、なんで、同じクランでもない人に怒おこられなきゃ……な、仲間だし、いいじゃないですか、守るくらい。守ろうとするくらい。悪いことでも、変なことでもないと思うんだけどな……」

「まあ」トマトクンはルーシーの頭の上に手を置いて髪かみの毛をぐしゃぐしゃにした。「いまいち自覚がないのは、今に始まったことじゃないからな」

「ちょ、ちょっと！　やめてくださいよう、せっかくアニーさんがセットしてくれたのに、か、髪が……」

「む？」トマトクンは、ヒヒヒ、と似合わない下げ卑びた笑い方をして、ルーシーの頭から手を離はなした。「そいつは悪かった。だが、こう見ると、なんだかしっちゃかめっちゃかな髪型のやつもたくさんいるみたいだし、べつにいいんじゃないか」

「よくないですよ。もお……」ルーシーは髪を撫なでつけながら

ほっぺたを膨ふくらませた。

「……自覚、ないのかな、僕」マリアローズは眉まゆをひそめて胸に手をあてた。

「大だい丈じよう夫ぶやて！」カタリはマリアローズの肩かたをぽんぽん叩たたいた。「わしよりはな！　だいぶあるやろ！」

「それ、慰なぐさめになると思う？」

「思わん」カタリは真顔だった。

「ワタシが気をつけてマス。大丈夫デス」ピンパーネルは口くち許もとに微び笑しようを浮かべていた。

「ありがと」かなり本気で、心の底からお礼を言うことができた。

「イエ」

「待ちたまえヨ！　ボクに無断で勝手にいい雰ふん囲い気きになることは許さない！　だいたい、マリアのことはボクがしっかりと見守っているんだ！　もとより誰にも手出しはさせないサ！」

「ワタシときゅー・一いつ緒しよに住んでマス。心配は無用デス」

「かえって心配だヨ……！」

「アナタと違う。変なこと・しまセン」

「されてたまるものか！　マリアに変なことをしていいのはボクだけだ！」

「や、もちろんきみもだけど、誰にも変なことなんてされたくないから」

「あ！　ぼ、ぼくも──」ルーシーはうっとうしいほど力強く宣言した。「変なことなんかしませんから！　絶対に！　約束しますっ！」

「あたりまえでしょ、そんなの……」

「でもぉー」アニーはマリアローズのほっぺたをつついた。「マリアちゃんに変なことしたくなる気持ちはぁー、わかるかなー？」

「さわるなっ」マリアローズはアニーの指を振り払はらった。

「やだぁー、さわるぅー」アニーは懲こりずに人差し指を繰くりだしてきた。

「しつこいっ」

「おい！　女！　ボクのマリアにふれるな！　死にたいのか！」

「死にたくはないケドぉー、もっとさわりたいよぉー」

「ボクだってさわりたいのに必死に我が慢まんしてるのに……！」

「なんで我慢なんかするのぉー？　さわりたいんなら、さわればいーのにぃー？」

「ムッ！　一理あるネ……！」

「あの、僕の意向を完全に無視して話を進めないでくれる？」

「そ、そうですよ！　マリアさんの気持ちが一番大事じゃないですかっ！」

「ルーシー、いいこと言った！　そのとおりだよ。僕のことなんだからさ。ちゃんと僕に許可とってよね」

「じゃぁあー、もっとさわらしてぇー？」「少しでいいから、どうかキミにふれさせてほしい、マリア！」

「却きやつ下か」

「けーちっ」アニーはすねてしまった。

「残念だヨ……」バホ野や郎ろうは肩を落として、今にもしゃがみこんで地面に沈しずみこんでゆきそうな勢いだ。

「てゆうか、許すわけないでしょ、どう考えても……」マリアローズは深々と息を吐はいて、周囲に目を配った。

　たしかに、性別や年ねん齢れいを問わず、いろいろな人が、しかも大勢がマリアローズを見ている。どうやらそれは事実らしい。今日もアニーのコーディネートではあるのだけれど、当然のことながらいかにも女の子っぽい服は断固として拒きよ否ひしたので、シャ

ツとジャケットにぴったりしたパンツをあわせ、その上に武器を隠かくすためのタイトな巻きスカートをつけているだけだし、肌はだの露ろ出しゆつは少ないし、配色も派手ではないし、ゴテゴテしてもいない、どちらかと言えばすっきりした服だから、そこまで人目を引く恰かつ好こうではないはずだ。

　ということは、髪だろうか。マリアローズの染めているわけでもないのにやたらと真っ赤な髪は、自分で言うのもなんだが、かなり個性的だ。もうしばらくエルデンで暮らしているし、これでもＺＯＯの一員だから、誰だれかに覚えられている可能性はある。それで、ウィッグをつけることにした。普ふ通つうのでいいと言ったのに、アニーが選んだウィッグは薄うすい緑色のウェービーロングという、ありえないものだった。最初は抵てい抗こうしたのだけれど、つけてみたら意外と変ではなかった。おかしくはないと思うが、色が色だ。目立つに決まっている。ユリカもサフィニアもルーシーも華はなやかな装よそおいで身を飾かざっているものだから、つい引きずられてしまった。もっと冷静になるべきだったのだ。かといって、今さらウィッグを外すわけにもゆかない。とにもかくにも、おとなしくしていればなんとか全員で披露宴レセプシヲンに出席できそうだし、我慢するしかないだろう。

　それというのも、彼のおかげだ。

　昼飯時ランチタイムの頭領マスターアジアンを宣伝のための歩アくイ看ド板ルに採用しているブランド棘闇ソーンダークのリードデザイナー〝ジグズレヴ〟。死体コープス、とも渾あだ名なされる男は、間ま違ちがいなくアジアンの後ろに立っているし、存在感がないわけではないのだけれど、凝ぎよう視しする気にはちょっとなれない。

　ジグズレヴの印象を一言でいえば、不ふ吉きつ、だ。

　とにかく痩やせていて、色いろ艶つやの悪い肌には生気らしいものが微み塵じんもなく、薄気味悪いほど黒目がちな両眼はおどろおどろしく濁にごっている。禿はげているわけではないのだが、どこか海草を思わせるぺったりした髪かみの毛はやけに薄い。頭皮が透すけて見える。

　あれだけ黒い衣類を世に送りだしていて、アジアンのおかげもあるのかもしれないけれど、黒といえば棘闇というイメージさえなくもないのに、ジグズレヴが着ている服は白いシャツとジャケット、

それからグレイのパンツ、ベルトとジャケットやパンツの上から装着している拘こう束そく具のようなものもクリーム色で、黒は靴くつだけだ。

　見る者を不安にさせるほど瘦せているし、容よう貌ぼうだけをとってみれば不快感を与あたえかねない、醜しゅう悪あくとすら言えるかもしれないが、さすがにデザイナーだけあって、全体的にはグロテスクでありながら何か魅み力りょくを感じる。少なくとも、只ただ者ものではないと思わせるような見てくれではあるけれど、どうしても目をそむけてしまう。

　なぜだろう。

　考えているうちに、死体、という異名が頭にちらついて離はなれなくなった。

　そうか。

　死体。

　それはたぶん、ジグズレヴへの悪口でも、嘲あざけりでもない。まるで死体のようだという皮相的な喩たとえでもない。実際、ジグズレヴは死の香かおりを漂ただよわせている。ジグズレヴを前にすると、生ある人間たちがもっとも忌いみ嫌きらう死を身近に感じずにはいられないのだ。

　このデザイナーは、もしかしたら死に取り憑つかれているのかもしれない。日がな一日、死について考え、死の瞬しゅん間かんについて思い巡めぐらし、死の未知に恐きょう怖ふし、怯おびえて、死がもたらす完全な闇やみに生きながら囚とらわれているのかもしれない。

　僕らはいつか必ず、どこか遠くにあるその世界へ行かないといけないけれど、そんなことは考えたくない。怖こわいから、寂さびしいから、直視したくない。

　ジグズレヴは、でも、そこにいるだけでそれを突つきつけてくる。だから、僕らはとっさに目をそらしてしまう。

　ジグズレヴが白っぽい服を着ている理由もわかった。黒い服を着る必要がないからだ。彼自身が闇に落ちている。たとえ彼が純白の衣い装しょうを身にまとったとしても同じなのだ。人が彼を見た瞬

闇に感じる色は結局、黒だろう。

　マリアローズはアジアンが棘闇と歩アくイ看ド板ルの契けい約やくを結んでいることを知っていた。ジグズレヴに直接、スカウトされたという話も聞かされたことがあった。偶ぐう然ぜん、運悪く、そんなことを思いだしてしまったので、しょうがなく、やむをえず、しぶしぶ、いやいや、アジアンを呼びつけた。そのへんで名を呼べばだいたい姿を現すので、こういうときはちょっとだけ便利だ。きもいけどさ。かなり。事情を話したら、アジアンはすぐジグズレヴに頼たのんでくれた。ジグズレヴは快かい諾だくしたらしい。快諾。死体には似つかわしくない言葉だ。てゆうか、この近くで待ち合わせして、顔をあわせてから、あの人、まだ一回も喋しゃべってないんだけど。どこ見てるのかさえ、よくわからないし。トマトとカタリとピンパーネルの衣装合わせをしたときは、ぶつぶつ言ってたらしいけど。半魚人の証言だから、あんまりあてにならないし。まあ、いいけどね。どうでも。とはいえ、やっぱりお礼くらいは言いたいんだけど、話しかけても無視されそうな気がして、どうも腰こしが引けちゃって、それだけはほんのちょっと困ってるけどさ。

　そのジグズレヴが急に歩きだした。死体がいきなり動いた。そんなふうにしか見えなくて、寒気がした。

　ジグズレヴだけではなかった。絞首刑ハング執行人マン99の周辺に集つどっている業界関係者やその友人知人たちが一いつ斉せいに、とまではゆかないけれど、少しずつ移動しはじめていた。

　見れば、石段の前に立ちふさがっていた黒服の男たちが、数名で組になって出席者の身体検査をしている。招待状の確かく認にんも行っているようだ。マリアローズは懐かい中ちゆう時計をとりだした。十九時。開場の時間ぴったりだ。

「じゃあ──」アジアンは真しん紅くの薔ば薇らをもてあそびながら、ざっと一同を見まわした。「行こうか、皆様方ledies-an-jentolmen？」

　武器を隠かくし持っていたりもするので、不安がないわけではないけれど、心の準備はできている。びくびくしていても、堂々としていても、結果は変わらない。いや、えてしてどっしり構えていたほうが、余計な厄やつ介かい事を招きよせずにすむものだ。

　マリアローズたちはジグズレヴに従って石段へと向かった。アニーが鼻歌をうたっているのはいいとしても、妙みようにアジアンが上じよう機き嫌げんだ。マスクのせいで表情はわからないし、とくに足どりが軽かろやかなわけでも、ふだんから大おお袈げ裟さ気味な仕し種ぐさがいつにも増して大おお仰ぎようなわけでもない。ただ、なんとなくそんな気がする。理由とかはないんだけどさ。わかるもんじゃない？　そういうのって。言っとくけど、アジアンだから、とかじゃないよ？　──って、誰に言ってんだろ。そもそも、言い訳する必要なんかまったくないし。てゆうか、言い訳じゃないし。

　なんだかちょっと腹が立ってきた。

　マリアローズは前を歩いているアジアンの背中を拳こぶしで突いた。「ねえ」

「ン？」アジアンは顔だけ振ふり向かせた。「何だい、極限愛ラヴ・マツクス？」

「……それ、そういう用法もあるの？」

「フッ。愛は万ばん能のうなのサ」

「寒気が……鳥とり肌はだが……」

「なッ──大だい丈じよう夫ぶかい!?　ボクがあたためてあげようか？　むしろお願いだヨ、どうかあたためさせてくれ！」

「そういうのはいいからさ……」

「えっ！　いいのかい!?　あたためても!?」

「違ちがうだろ！　そうじゃなくて──」マリアローズはため息をついた。「きみはどうするつもりなの？　もし、やつが現れたら」

「心配はいらないヨ」アジアンはそっと笑った。「愛いとしいキミに迷めい惑わくはかけない」

「嘘うそばっかり」

　低くそう呟つぶやいた声はおそらく、アジアンの耳には届いたはずだ。少なくとも、アジアンにだけは。

迷惑かけてほしくないとか、僕はそんなこと思ってるわけじゃないんだけど。

そうじゃなくて、さ。

何もかも自分一人で背し負よいこんで、自分だけでどうにかしようとするのは、ちょっと違うんじゃないの？

僕はきみにこんなこと言えるような立場じゃないけどさ。だから言わないわけだけど。

きみには仲間がいるじゃないか。大切な仲間が。

ぜんぶ話せばいいのに。てゆうか、話したほうがいいんじゃない？　話すべきなんじゃないの？　たぶん、誰だれも望んでないよ。きみが一人で抱かかえこむことなんて、きっと誰も。

変わらないよね。そういうところは。なかなか変われないものなのかな。

石段の前で、ジグズレヴとアニーが黒服に招待状を渡わたして、マリアローズたちはそれぞれ、出版社ＢＭＲの社員や棘闇のスタッフとして用意しておいた偽ぎ名めいを名乗り、名めい簿ぼに署名した。字の読み書きがやや苦手なピンパーネルに、しっかり署名の練習をさせておいてよかった。身体検査は予想していたより簡単なもので、ちょっと拍ひよう子し抜ぬけした。これだと、あからさまに凶きよう器きを持ちこもうとさえしなければ、パスできそうだ。だけど、それって危機管理上、問題あるんじゃないの？　つい余計な心配をしてしまった。余計でもないか。誰かが武器を隠し持って披露宴レセプシヲンに出席し、その誰かが何か凶きよう悪あくなことを企たくらんでいて、とんでもないことをしでかしたら、とばっちりを食う可能性がないとは言いきれない。見たところ、ほとんど仮装パーティーのような趣おもむきを呈ていしているし、有資格者でもないのに潜せん入にゆうしようとしている不届きな招かれざる客が、マリアローズたちだけとはかぎらないだろう。何が起こってもおかしくないということだ。油断していたわけではないけれど、いっそう気を引きしめてかからないといけない。

石段を登りながら、マリアローズはさりげなく周囲に目を配った。

　ジグズレヴを追い越こして先頭に立っているアニーは、すっかり浮うかれてスキップしている。あれは放ほうっておけばいい。

　ジグズレヴは相変わらず動く死体だ。

　アジアンは平静を保っているのか、装よそおっているのか。

　マリアローズのすぐ後ろにいるトマトクンはたぶん、正真正しょう銘めい、平然としている。というか、眠ねむそうだ。

　ユリカとサフィニアはちょっとぴりぴりしている。

　カタリはいつもどおりだ。半魚眼をぎょろぎょろさせ、きょろきょろして、ぴょこぴょこ跳はねまわり、落ちつきというものを欠片かけらも持ちあわせていない。

　最さい後こう尾びのピンパーネルは呼吸するように全周囲を警けい戒かいしているはずだ。

　おおむね全員、正常の範はん囲い内といえるだろう。

　ユリカたちとカタリの間にいるルーシーだけがおかしい。

　まず、歩き方が変だ。歩いているというよりも、左右の足で順々に石段を踏ふみつけているといったかんじで、やけにぎこちない。肩かたに思いっきり力が入っている。表情も硬かたいし、顔は前を向いているのに、ちゃんと前を見ていない。

　石段を登りきって玄げん関かん前にたどりついたところで、マリアローズは足を止めた。

　アジアンがちらりと振り向いたけれど、無視した。

　間もなくルーシーが追いついてきたので、並んでまた歩きはじめた。

「緊きん張ちょうしてる？」

「いえ……」ルーシーは、ふぃっ、と息を吸いこんで、頭をぷるぷる横に振った。「そんなこと、ないです……よ？」

「そうは見えないけどね」

「ですよ、ね……」ルーシーは、ほぉうっ、と奇き妙みような息の吐はき方をした。「できるだけ考えないようにしてたんですけど。考えちゃうと、なんか……」

　マリアローズは微び苦く笑しようを浮かべてみせた。「しょうがないんじゃない？」

「しょうがないって……何が、ですか？」

「無理しなくてもいいよ。きみにとってすごく大事なことなわけだし。普ふ通つうでいられなくても、しょうがないでしょ。誰も責めたりしないよ」

「でも、なんか……かっこわるいじゃないですか。そういうのって」

「かっこよくなりたいんだ」

「できれば──そう、ですね。かっこわるいよりは、いいと思うので。やっぱり」

「そっか。だけど」マリアローズは肩をすくめた。「きみはかっこよくないよ。少なくとも、今はまだ、ね」

「う……」ルーシーは眉まゆを八の字にして口をへの字に曲げた。「……わ、わかってますよ。それくらい、わきまえてますもん。あくまで、希望ですから。夢っていうか。目標で……」

「だから、無理に背せ伸のびなんかして、できないことをできるように見せかけようとしたり、虚きよ勢せいを張ったりしなくていいんだよ。そういうことは、もっと成長して、かっこよくなってからにしたら？」

　ルーシーは洟はなをすすって下を向いた。「……そう、ですね。そうですよね」

「経験も力もある仲間が、きみのそばにはいるんだからさ。せっかくだし、素す直なおに頼たよっちゃえばいいんじゃないかな」

「せやでえっ……！」半魚人がいきなり半魚顔を突つっこんできた。「自分のやれることだけ精せい一いつ杯ぱいドッピャーンッとやってな！　あとはもう、わしらにドッカンドッカーンッちゅう具

合に任せてくれたったらええねん！　ほんだら、そのうちあれや！　周りのこともだんだん見えてきよるからな！」

「きみはずぅーっと視野が狭せまいままだけどね。目は離はなれてるのに」

「大きなお世話やッ……！　たしかに目ぇは離れ気味やけども！　血ぃのせいなんやからしゃあないやんかッ！　──て、誰が魚の血ぃ引いとる魚王子やぁぁぁッ……！」

「寒イ・ノリツッコミ」ピンパーネルが後ろから軽けい蔑べつの眼まな差ざしを半魚人にそそいで、かすかに冷笑した。「悪い見本デス」

「ちゅうことはあれや！　わしはええ反面教師っちゅうわけやな！　ようするに、偉えらいっちゅうことやんけ！　えっへん！」

「物は言いよう……ですね……」サフィニアが振ふり返ってくすりと笑った。

「しょの徹てつ底ていしたプラスしゆ思考はちょっと羨うらやましいわ」ユリカの笑え顔がおは呆あきれ半分だろうと何だろうと可か憐れんだ。「でも、カタリの言うとおりよ、ルーシー。わたしたち、こう見えて、けっこう頼りになるんだから」

「あっ……それはもう！」ルーシーは目を輝かがやかせて拳こぶしを握にぎりしめた。「わかってます！　わかりすぎるほど！　ていうか、結局、頼りっきりで任せっきりのような気もするくらいで！　ぼくは何もしてないっていうか……」次し第だいに声が小さくなっていった。「ぼくのことなのに、何やってるんだろ、みたいに思ったりして……」ついには顔が引きつって肩が落ちた。「なんか、皆みなさんに申し訳なくて、情けなくて……」

　マリアローズはウィッグの髪かみをかきあげた。まあ、そういう気持ちも、わからなくはないけどね。てゆうか、個人的にはかなり理解できるんだけど。

　門もん扉ぴをくぐると、その先は広くて天てん井じようが高いロビーで、大勢の出席者たちが挨あい拶さつを交かわしたり歓かん談だんしたりしていた。

　ロビーは横に長い長方形だ。内装は外装とさして変わらない。細

かい彫ちよう刻こくが施ほどこされた壁かべは黒い布で飾かざり立てられていて、床ゆかには黒い絨じゆう毯たんが敷しかれている。照明は燭しよく台だいを模した無数の半永久灯で、それが壁に据すえつけられ、あるいは天井からぶら下げられて、もしくはそこかしこに設しつらえられたテーブルの上に置いてあった。テーブルには燭台型の半永久灯だけではなく、灰皿と、それから菓か子しやおつまみ的なものが盛られた皿が並べられている。グラスが載のせられたトレイを手に歩きまわっている露ろ出しゆつ度ど高めな女性たちは、給仕係なのだろう。

門扉の正面にある二つの大きなドアは開け放されている。

あの向こうが会場か。

もともとはたぶん、礼拝堂だったはずだ。ここからではよく見えないけれど、もしかしたら、だいたい礼拝堂の先にあることが多い蘇そ生せい式のための部屋、本堂までぶち抜ぬいて、かなり広いスペースをとっているかもしれない。

ルーシーはまだしょぼくれている。

マリアローズはその背中を平手で思いっきり叩たたいてやった。

「──ぁぃたっ……！」

「ぐじぐじしない！　しゃきっとして！　情けないなんて、そんなのあたりまえなんだから。最初から立派で何でもできちゃう人なんか、そうそういないよ。たまにはいるかもしれないけど、それってかなり特とく殊しゆな例なんだからさ」

僕なんて、いまだに情けない思いばっかりしてるんだから。言ってしまいそうになったけれど、ぐっとこらえた。

もしもマリアローズとルーシーが同じような時期にＺＯＯに加盟した新入り同士なら、傷を舐なめあうのもいいだろう。でも、違ちがう。そうではない。こそばゆいというか、据わりが悪いというか、どうにも違い和わ感かんがぬぐえないが、マリアローズは一応、先せん輩ぱいだ。年ねん齢れいだってルーシーより上なのだ。空から威い張ばりはみっともないけれど、多少無理をしてでも、横についていてあげるだけではなくて、前を進んで、後ろ姿を見せてあげないといけない。

　みんなそうやって僕の前を歩いてくれたんだ。

　おかげで僕は、たまに立ちどまったり、回り道をしたり、後あと戻もどりしたり、逃にげだそうとしたりしながら、それでもなんとか、どうにかこうにか、今日まで歩いてくることができた。

　いつかは、なんて、正直、考えてもいなかったけど、用意していようとしていまいと、偶ぐう然ぜんなのか必然か、そのときは突とつ然ぜん、容よう赦しゃなくやってくる。とうとう僕の番が巡めぐってきたんだ。

　上手になんて、できっこない。

　だけど、何もやろうとしないで、投げだすことだけはしない。

　僕一人にできることは、いつだって結局それだけなんだから、とにかくやるだけだ。

　失敗したって、僕は一人じゃない。仲間がいる。本当に頼りになる、心の底から信じられる仲間たちが。

　恐おそれることなんて何もないんだ。

「マリアさん……」ルーシーは赤い眼めをうるうるさせて下した唇くちびるをぎゅうっと噛かんだ。「すみません。ほんとに申し訳ないですけど、お恥はずかしいかぎりなんですけど、あの……お世話になりますっ！　がんばって、立派になるまで……！」

「そ、そう」

　いいけどね。そうしろって言ったのは僕だし。でもさ。なんでいちいち泣くわけ？　や、泣いてはないけど、泣いちゃいそうだよね？　立派になりたいなら、そのへんは強がっといたほうがいいと思うんだけど。男の子なんだしさ。

　トマトクンが振ふり向いてニヤリと笑った。や、ニヤリ、とかしてる場合じゃないよ？　考えてみたら、こういう、なんていうの？　新入りメンバーの心のケアっていうの？　そういうのも、きみがやってもおかしくないっていうか、ある程度はやるべきなんじゃないの、とか、思わなくもないんだけど？　園長マスターなんだし。きみはそのへん大おお雑ざっ把ぱだし、よく言えばおおらかで、それはそれで救われるっていうか、気分的に楽な部分もたしか

にあるんだけどね。足りないところは別の誰だれかが補えばいいわけだし、それが仲間なんだろうから、まあ、いいのかな。

　ロビーでのんびり飲食しながら開かい宴えんの時間を待つ気にはなれなかったので、マリアローズたちはさっさと会場に足を踏ふみ入れた。

　予想どおり、礼拝堂と本堂を繫つなげたとおぼしきだいぶ奥行きのある広い会場は、かなり薄うす暗ぐらい。馬ば鹿か高たかい天井だの壁だのに、ロビーにあったものと同じ燭台を模した半永久灯が設置されているが、この会場を明るくするには数も光量も不足している。おそらく、わざとだろう。会場の真ん中に設えられた長いステージ、ランウェイには無数の半永久灯が備えつけられているようだし、大きな投光器もそこかしこに置いてある。きっと、披露宴レセプシヲンが始まったら、それらの照明器具がランウェイやその奥の丸いステージを華はな々ばなしく照らすのだ。

　ランウェイのすぐそばには豪ごう華かな座席が設けられているけれど、すでに空きはなかった。特別招待客専用なのだろう。テーブルを囲んでソファが置かれた一つ一つの専用席には、無理をしなくても十人以上がゆったり腰こしを落ちつけることができそうなのに、どれもこれも二人か三人、せいぜい四、五人しか座っていない。特別招待客はずいぶん優ゆう遇ぐうされているようだ。

　マリアローズにはまるで関係ない話だが、エルデンにも要人、有力者と見なされている連中がいる。

　有名なところでは、エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕ本部の大Ｇ老Ｅ師Ｍレオナルド・〝パパ〟・デスパレードとか、錬金士Ａ組合ＧエルデンSupport支部の支部長テルマン・エッケナーとか、汎Ｐ大陸Ｃ医術Ｍ士会Ａエルデン支局の支局長ギャス・ド・ジェンジャンとか、第五５区Ｃ商業Ａ振興Ｓ会Ｔ会頭ロベルト・ボッティエッロ、明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・Ｈ□エログローニャ、あとはモリー・リップス・アサイラム代表モリー・リップスも、要人といえば要人だろう。

　モリーは仕事を休んでこんな催もよおし物に参加するような人ではないし、そもそも招待されるとは思えないけれど、エログローニャあたりは専用席のどこかにいるかもしれない。

　かつてＳｍＣと懇こん意いにしながら、秩ちつ序じよの番人とも

繋がっていて、双そう方ほうに情報を流していたというエログローニャがこの披露宴レセプシヲンにやってきていたら、リヴァイスとあの男との関連を裏付ける間接的な証しよう拠この一つになりうる。

まあ、エログローニャはものすごく用心深い女性で、服装や化け粧しようだけではなく、顔や体形まで頻ひん繁ぱんに変えるらしいから、仮にそのへんにいたとしても、知りあいでもないマリアローズにはわからないだろう。一回だけ、遠くから見たことはあるんだけどね。秩序の番人の二代目襲しゆう名めい式で。あれって、いつだっけ。一年以上前、たしか九巡月の終わりころだったかな。なんかもう、遥はるか昔の出来事みたいなかんじがするけど。

専用席以外に座席はなかった。特別招待客以外は立ち見しろ、ということか。

ランウェイの奥にある丸い形をしたステージのそばには、黒い金かな網あみか何かの高い柵さくが設けてあって、近づけないようにしてある。その付近には専用席がない。まだ開場してからさして時間がたっていないせいか、人ひと影かげもまばらだ。

ランウェイはステージから桟さん橋ばしのように迫せりだしている。普ふ通つうのショーが行われるのかどうかはわからないけれど、もしそうなら、モデルたちはまずステージに登場し、そこからランウェイを歩いていって戻もどってくるはずだ。ランウェイの両側には専用席があるので、あまり接近できない。マリアローズたちは柵の真ん前に陣じんどることにした。一いつ般ぱん出席者がモデルをできるだけ近くで見るためには、この場所が最善だろう。

開宴までただじっとしているのも芸がない。マリアローズはピンパーネルやカタリと手分けして会場やロビーを偵てい察さつした。隅すみ々ずみまで調べようとしたのだけれど、要所要所に黒服の見張りが立っていて、なかなか難しかった。

開場から四十分もたつと、会場は一般出席者で一いつ杯ぱいになった。

ルーシーはもうガッチガチだ。

ユリカとサフィニアがルーシーのために飲み物を調達してきた。

　カタリはうろちょろしている。

　いつもどおり落ちついているピンパーネルのおかげで、冷静になることができる。

　トマトクンの身体からだがゆっくりと前後に揺ゆれていた。

　マリアローズは声をかけてみた。「ね」

「む」トマトクンはまばたきをして、こっちを向いた。「寝ねてないぞ」

「……立ったままでも眠ねむれるんだね」

「いや。寝てない。半分だけだ。たぶん、半分くらいは起きてたからな」

「悪いけど、半分なんて言わないで完全に起きててくれる？」

「うむ」

「もう……」マリアローズはアジアンをちらりと見た。

　アジアンは気味が悪いほど静かだ。黙だまってると、妙みように存在感がなかったりするんだよね、こいつって。なんかちょっと──心配になるくらい。や、違ちがうよ？　普通っていうか、人間が人間に対する標準的なレベルっていうか、街を歩いてて、あ、あの人、ふらふらしてるけど、大だい丈じよう夫ぶかな、みたいに思ったりすることって、やっぱりあるでしょ。エルデンだと、親切心が徒あだになっちゃうこともかなり多いから、たいてい何もしないんだけど、そんなふうに思うことくらいはあるわけで。隣りん人じん愛あい的な。愛ってほどじゃないけど。その程度の、ほんのちょっとした心配っていうのかな。うん。それだけだから。

　あの男が姿を現したとしても、本当に何もしないつもりなのかな。

　アジアンだけの問題じゃない。

　僕はどうだろう。

「ふぅっ」

「きゃっ！」

　突とつ然ぜん、後ろから耳に息を吹ふきかけられた。マリアローズは仰ぎよう天てんして振ふり返った。アニー・ポリステルの仕し業わざだった。

「な、な、な、何するんだよ、いきなり」

「きゃっ、だって。マぁーリアちゃんってば、かぁーわいぃー」

「死期を早めたいの？　それなら、喜んで手伝うけど？」

「そういうプレイもアリかもー？」

「きみとはどういうプレイもしないから。てゆうか、誰だれともしないけどさ」

「一つ質問していい？」

「相手の話を聞かない人と会話するのは慣れてるけどね。うちにもそういうのが約一匹ぴきいたりするし」

「アナタたちはぁー、ルーシーくんのお父さんを捜さがしてるんだよねー？」

「そうだけど」

「それでぇー、見つけたら、どぉーするつもりなの？」アニーはぐっと顔を近づけてきて声をひそめた。「あえて訊きかなかったケド、なんで武器なんか持ちこんだの？　あなたたちにとってぇー、この披露宴レセプシヲンってどぉーんなパーティーになる予定なのぉ……？」

「それは」マリアローズはアニーの耳みみ許もとに唇くちびるを寄せて囁ささやいた。「きみは知らないほうがいいよ、アニー」

「けーち」

「大丈夫」マリアローズはアニーに、というよりも、自分自身に対してうなずいた。「何もするつもりはないから。とりあえず、ここではね。僕らは確かく認にんしたいだけなんだ。武器はあくまで護身用だよ。何が起こってもいいように、ね」

「何か起こりそぉー？」

「さあ……」マリアローズは唇の片かた端はしをつりあげて、軽く肩かたをすくめてみせた。「何も起こらなきゃいいね」

　額面どおりに受けとれば、披露宴レセプシヲンはブランド設立についての発表会だ。おそらく、リヴァイスのコンセプトが何らかの形で示され、衣服などの製品がお披ひ露ろ目めされる。音楽、舞ぶ踏とうなどのパフォーマンスも派手に行われるかもしれない。

　普通に考えれば、マリアローズたちが何かしないかぎり、何も起こらないだろう。

　そして、マリアローズたちは何もしない。その予定だ。

　あの男が出てくるのかどうか、この目で確かめる。自分の父親なのかどうか、ルーシーに判断してもらう。マリアローズたちの目的はそれだけだ。

　余計なことはしない。その必要がなければ。

　マリアローズたちはあくまで不測の事態に備えているだけだ。何かあったときに、ただびっくりするだけで、なすすべがない、どうしようもない、というのでは困る。この街では、いついかなるときも用心を怠おこたってはならない。最悪の場合を想定して、対処できるようにしておく必要がある。悪いことが起こらないとは断言できないからだ。

　何しろ、マリアローズたちはあの男を知っている。

　エルデンにも良心というものがあるとしたら、その象しよう徴ちようは秩ちつ序じよの番人の先代総長〝太たい陽よう鬼き〟デニス・サンライズと、モリー・リップスだった。

　あの男はデニス・サンライズを罠わなに掛かけて惨ざん殺さつした。モリーも一度は命を奪うばわれた。

　アジアンを従わせるために、親友のクラニィを殺した。

　あの男は何でもやる。

　どんなことでも。

だけれど、いったい何をしようとしていたのか。

あえて、悪、という言葉を使おう。悪事を重ね、悪行を繰くり返して、あの男は何を成し遂とげようとしていたのか。

マリアローズ一人ではない。みんなで晩ご飯を一いつ緒しよに食べながら考えたのだ。

たとえば、昔の残忍公みたいに、エルデンを制圧しようとしたのだろうか。そのへんが無難なところかもしれないけれど、ＳｍＣがそうした目的のたぐいを打ちだしていたという話は聞いたことがない。勢力を拡大させようとしていて、実際、組織の規模が大きくなっていったことは間ま違ちがいないが、手にした力で、あの男は何をしようとしていたのか。

マリアローズたちよりずっと以前からあの男を知っているというトマトクンが、例の雑誌を指さして、これじゃないのか、と言った。

悪徳再生リヴアイス。

あの外げ道どうは昔から、他ひ人とに嫌いやがられること、憎にくまれること、恨うらまれること、そんなことばかり、いや、そんなことしかしなかったからな。それがやつの習性なんじゃないのか、と。

もし、そうだとしたら。

この街に悪徳を再生させる、つまり、悪事、悪行自体があの男の目的なのだとしたら。

披露宴レセプシヲンは本当にただのブランド設立についての発表会なのだろうか。

あの男が出てきて、自分は戻もどってきた、と高らかに宣言するだけでも、単なる発表会では終わらないはずだ。

それどころか、もっと別の趣しゆ向こうが凝こらしてあったとしたら……？

ありえない、とは言いきれない。

　身体検査の甘さが、さらにマリアローズを不安にさせている。

　あれではまるで、何か事を起こしてくれ、と言わんばかりだ。やりたいなら、その気があるのなら、やってみろ。どんどんやれ。挑ちよう発はつされているようにさえ感じられる。考えすぎだろうか。そうかもしれない。そうであってほしい。

　あの男が姿を現さなければいい。

　アジアンがこういうことで嘘うそをつくとは思えない。あの男はリヴァイスの黒ビルにいたのだろう。リヴァイスとは何らかの関係がある。かといって、すなわち「リヴァイス＝あの男」とは言えない。そうでなければいい。

　ルーシーの勘かん違ちがいだといい。

　雑誌のモデルは、刺青いれずみの位置など疑問点はあるものの、やはりあの男かもしれない。ただ、ルーシーの父親ではない。よく似ているだけの別人だ。その可能性はある。ゼロではない。

「マリア」

　いつの間にかユリカが隣となりにいた。サフィニアもいる。

　二人は何も言わなかった。視線を交かわせば、考えていることはだいたいわかる。

　相も変わらず気を揉もんでいるマリアローズを、ユリカとサフィニアは元気づけようとしてくれているのだ。自分たちがいるから大だい丈じよう夫ぶだ、と。二人がいてくれれば、実際なんとかなるだろう。心強いなんてものじゃない。

　ルーシーは下を向いたり顔を上げたりしている。呼吸が浅い。

　ピンパーネルはどこまでも平静だ。

　半魚人も回遊をやめた。

　トマトクンがそばにいてくれれば、たとえマリアローズが判断を誤っても、きっとどうにかしてくれる。

　アジアンはステージのほうに身体からだを向けたまま動かない。

やっぱり、何か心中深く期するところがあるのか。それとも、拗すねているのか。

　ジグズレヴは立っている死体だ。

　アニーは撮さつ影えい機きの準備をしている。

　目の前が真っ白になって、会場のそこかしこから小さな悲鳴や歓かん声せいがあがった。

　マリアローズは息をのんだ。照明か。投光器だ。すべての投光器から一いつ斉せいにすさまじい光が放たれた。それは一いつ瞬しゅんだった。光はすぐに消えた。その落差がひどかった。燭しょく台だい型の半永久灯は点灯したままだが、真っ暗になったように感じた。マリアローズはまばたきをした。その直後だった。鼓こ膜まくが震ふるえた。腹にずしんと響ひびいた。音。爆ばく発はつ？　火花だ。ランウェイや壁かべから噴ふきだした。火花だけではない。光っている。きらきらした紙かみ吹雪ふぶきか。オウッ！　ワオッ！　誰だれかが叫さけんだ。そして、拍はく手しゅ。投光器がまた光を放った。今度は真っ白ではない。色とりどりだ。光の渦うずがランウェイとステージを照らした。出てきた。ぞろぞろと。ステージに現れたのは極ごく彩さい色しきの衣服に身を包んだ楽隊だった。打楽器。管楽器。弦げん楽器。歌手。やたらとテンポが速くて、騒そう々ぞうしい。斬ざん新しんなのに、旋せん律りつにはどこか馴な染じみがある。心を揺ゆさぶられるといっても、感動するわけではない。なんというか、とにかくテンションが上がる。この音の力は強ごう引いんだ。無理やり引っぱりあげられる。マリアローズはあたりを見まわした。ユリカは顔をしかめて耳をふさいでいる。サフィニアは呆ぼう然ぜんとしているようだ。トマトクンやピンパーネル、アジアン、ジグズレヴの様子は変わらないけれど、カタリは今にも魚踊おどりしはじめそうな勢いで身体を上下させている。アニーは撮影を開始していた。Ｙｅａｈ！　すぐ近くで叫び声がした。ルーシーだった。他の一いつ般ぱん出席者たちも、半分くらいは控ひかえめに盛りあがり、あとの半分くらいはほとんど熱ねつ狂きょうしている。専用席の特別招待客の中にも、立ちあがって手を叩たたいている者が大勢いた。投光器から放たれる光は、めまぐるしく色や光量を変える。その具合がまた、楽隊の演奏とぴったりあっているのだ。すごい。てゆうか、これ。この音。楽器の音も、歌声も、四方八方から聞こえる。なんか、前にもこういうことがあったような。考えれば思いだせそうだけれど、音の洪こう水ずいが思考を邪じゃ魔まする。押し流される。アメェェェェェン

ジィィィスレェェェブロォォォエンダァァァァァァ。ルディィィィソォォォプレスプリエンダァァァァァァァァ。歌。共通語じゃない。どこの言葉だろう。わからない。レェェェェェェェェス
レェェェフェェェェェェアレェェェェェェデェェェェェェェ。女の歌声。ラァァァァァァァァドゥゥゥゥゥグスレェェェェェプリエンダァァァァァァァァ。男の歌声。管楽器が、弦楽器が叫ぶ。泣きわめく。打楽器がリズムを刻む。切り刻む。正気を保つことさえ簡単じゃない。音と光と身体が一体になったような感覚。違う。単なる錯さつ覚かくだ。マリアローズは耳の穴に指をつっこんで、ああああああああああ、と大声を出した。聞こえない。聞こえない。何も聞こえない。聞いてない。聞かない。聞いてたまるか。よし。大丈夫。勝った──と思った瞬間、光と闇やみが交こう互ごに襲おそいかかってきた。投光器軍団がタイミングをそろえて純白の強きよう烈れつな光を明めい滅めつさせたのだ。目がチカチカした。心臓が止まって動きだして止まってまた動きだした。記き憶おくがパパパッと飛んで戻ってきた。そんなわけないのに。不意打ちだった。また爆発？　違う。すべての楽器が同時に最大音量を弾はじけさせたのだ。歌声がそれに合流した。歌？　そんなものじゃない。これはもうただの叫び声だ。男女が絶ぜつ叫きようした。リイイイイイイイイイイイイイィィィィィィィィィィィィィヴァアアアアァァァァァァァァァァァァァァァァァイスッッッッ……！

　投光器と楽隊が沈ちん黙もくした。

　刹せつ那なの静せい寂じやくは完全に近い空白をもたらした。

　また光と音があふれだした。それが合図だった。

　丸いステージに次々と背が高くて細身の男女が飛びだしてきた。

　始まった。

　ショーだ。

　てゆうか、見るのはこれが初めてなんだけどね。聞いたことだけはあるけど。カタリから。あの半魚人ってば、生意気にも人間用の服が好きで、くわしかったりもするし。こういうものなんだ。
ショーって。モデルの人たち、でかっ。細っ。顔立ちは、単純な美男美女というよりも、それぞれ特とく徴ちようがはっきりしていて、いろいろな意味で印象的だ。きれい、というよりも、男女問わず、かっこいい。歩き方、表情、仕し種ぐさ、どれをとっても、見

せるために工く夫ふうが凝こらされている。黒を基調にした、いかにも悪い連中が好みそうな、どこか暴力的な匂においがするデザインの服は、マリアローズの好みにはまったくあわないけれど、彼らが着れば何でも素す敵てきに見える。そういう仕事をしている人たちなのだから、当然といえば当然なのだろう。それにしても、本当にすごい。

　ついつい見とれてしまった。

　はっと我に返って、自分に気合いを入れた。ダメじゃないか。遊びにきたんじゃないんだから。ショーを楽しむのが目的じゃないんだ。ただのショーじゃないかもしれないんだし。このまま何事もなく終われば、それが一番いいけれど、そんなわけがない。そうだ。そんなわけがないんだ。何があっても即そく座ざに対処できるように、そう思っておいたほうがいい。

　マリアローズは一度、全身に力をこめて、息を止めた。

　一気に力を抜ぬきながら息を吐はきだすと、頭がすっきりした。

　光と音は止やまない。

　ショーは進む。

　マリアローズはモデルの顔に注目することにした。見覚えのある者はいないか。さりげなくあの男が紛まぎれこんでいるなんてことは、さすがになさそうだけれど、予断は禁物だ。デニス・サンライズが陥おちいった罠わなを思いだせ。直接その場面を目にしたわけではないが、ＳｍＣと秩ちつ序じよの番人が戦った一号区会戦で、デニスはあの男に一いつ騎き討うちを挑いどんだ。あの男は受けて立とうとした。そう見せかけて、デニスを引きつけた。あまりにも単純すぎる仕掛けだった。だからかえって意表を突つかれたのかもしれない。大の大人が、エルデンに名だたる太陽鬼が、まさか落とし穴に嵌はまるなんて。あらかじめ深く掘ほられて隠かくされていた穴に落ちて、その中に設置されていた無数の尖とがった金属の棒に串くし刺ざしにされ、惨みじめに、あまりに呆あつ気けなく、デニス・サンライズはその輝かがやかしい生しよう涯がいに幕を下ろしたのだ。

　ひやりとした。

　この披露宴レセプシヲン自体が、あの落とし穴と同じような罠だったりして。

　すぐに頭を横に振ふった。

　それはたぶん、ない。あの罠には明確な相手がいた。ＳｍＣの天敵、秩序の番人の総長という標的が。

　仮に、あの男がリヴァイスの黒幕だとする。でも、あくまで黒幕だ。あの男はまだ表おもて舞ぶ台たいに出てきていない。罠にかけないといけないような敵はいないはずだ。それとも、マリアローズが知らないだけか。何か動機があって、この披露宴レセプシヲンには、あの男の標的が招かれ、出席しているのかもしれない。

　ひやり、ではない。

　ぞくっとした。

　僕、そういえば、殺したんだよね。やつの手下。死霊術士ネクロマンサー。ボルフェンゲーテとかいったっけ。あのとき、めっちゃ怒おこってたよね。てゆうか、僕はそのあとやられたんだけどさ。おなかに──そう、腕うでを突っこまれて。貫つらぬかれて。今までけっこういろんな目に遭あってきたけど、あれはかなり痛かったほうかな。痛いっていうか、怖こわかった。ピンパーネルもジェイの片割れを殺やったし。トマトはやつを斬きり刻んだし。

　考えてみたら、ＺＯＯ僕らが協力しなかったら、秩序の番人がＳｍＣを壊かい滅めつさせるのって、微び妙みように難しかったんじゃ？　てゆうか、無理だったかも……？

　てことは──、

　あれ？

　もしかして、僕たちが一番恨うらまれててもおかしくない？

　じつは、やつの標的は他ほかの誰だれでもなくて、ＺＯＯだったりして……？

　うん。

　それはない、かな。ないと思うけどね。たぶん。

　だって、僕らは無理やりこの披露宴レセプシヨンにもぐりこんだわけだし。言ってみれば、招かれざる客なわけで。

　もしこれが壮そう大だいな罠だとしても、標的は僕らじゃなくて、他にいる。

　どうしてか、その考えがマリアローズの頭から離はなれなくなった。

　急に演奏の音量が低くなった。

　投光器が白い光を明めい滅めつさせた。

　何だろう。

　胸が苦しい。

　胃のあたりが重くて、たまらない。

　ＦＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……

　この音は。

　声？

　違ちがう。

　息だ。

　演奏は途と絶だえていないのに、会場は奇き妙みように静かだ。

　ランウェイを歩いていたモデルたちは、中ちゆう途と半はん端ぱな体勢で静止している。おそらく、そういう手て筈はずになっていたのだろう。

『あ。あ。あー。アァァァァァァァァァァァァァ。アァァァ。アァァァァァァァァァ』

　今度は声だ。

　四方八方から聞こえてくる。楽隊の演奏や歌声と同じだ。

『テスッ、テスッ。テスッ。クハッ！　エッホン。どうやら大だい丈じよう夫ぶみたいだねえ』

「……お父さん」ルーシーが呟つぶやいた。「お父さんの声だ……」

『どうだい皆みなの衆？　我々リヴァァァーイスの披露宴レセプシヲン、楽しんでいただいてるかい？　いいよ。返事なんかいらない。ここからでもだいたいわかる。それなりに楽しんでくれてるようだねえ。だがァ～？　足りないものがある。そうだろう？　いったい何が足りないのか。そんなことはちゃぁ～んとわかってるさ。それは──』

　演奏の音量が少し上がり、投光器から放たれる光が色しき彩さいをとりもどして、モデルたちが動きだした。

『それはァ──』

　さらに音量が上がった。

　モデルたちの足どりが不自然に速まってゆく。

　色とりどりの光が狂くるったように踊おどった。

『それはァァァァァ……！』

　打楽器が一いつ斉せいに打ち鳴らされ、音が消えて、光は失うせ、モデルたちも止まった。

『俺だ。そうだろう、ファッキンレディースアンドジェントルメン？』

　ＹＥＳ！　ＹＥＳ……！

　モデルたちだ。そして歌手たちが連呼した。

『アイムホォォォォォォォォォォォォーム！　帰ってきたよ！　悪徳再生リヴアイスのために！　このエルデンにィィィィ！　ファッキ

ンラヴリィシティーにィィィィ！　俺はァァァァ！　帰ってきちまったのさァァァァァァッッッ……！』

　再開された楽隊の演奏は、力強さを遥はるかに超こえた凶きよう暴ぼう性に満ちあふれていた。引き裂さいて叩たたきのめすような、それはもはや音による暴力以外の何ものでもなかった。投光器から放たれる光が会場の中を縦じゆう横おう無む尽じんに駆かけめぐった。モデルたちは脱だつ衣いして、その場で身をくねらせながらさかんに飛び跳はねた。歌手たちは歌わなかった。あれは歌なんかでは絶対にない。彼らは、彼女らは、呼んでいるのだ。声をかぎりにその名を叫さけんでいる。シィーックス！　シィィィーックス！　シイイィィィーックス！　マリアローズは唇くちびるを湿しめらせた。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　右手が勝手に隠かくし持っている剣けんの柄つかにのびていた。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　くるのか。ＳＩＸ！　とうとう、やっぱり、出てくるのか。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　そうだ。出てくる。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　どこだ。ＳＩＸ！　モデルたちと同じように、ステージに姿を現すのだろうか。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　それとも、違う場所から？　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　トマトクンが、アジアンが、ピンパーネルが、三人ほぼ同時に振ふり向いた。ＳＩＸ！

　マリアローズはためらわずに三人の視線の行方ゆくえを目で追った。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　ランウェイだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　その真ん中あたりだ。ＳＩＸ！

　白い光が降りそそいでいる。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　天てん井じようからのスポットライトだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　光があたっている部分の床ゆかに何か仕し掛かけがあって、バーンと開いたようだ。ＳＩＸ！

　ランウェイの真ん中に穴があいたのだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　その穴の中から何かが迫せりあがってきた。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　最初、それは指だった。ＳＩＸ！

　指一本だった。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　天に向かって突つきだされた右手の人差し指のようだった。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　指は手の一部だった。ＳＩＸ！

　手は腕うでの一部であって、その先には肩かたがあった。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　肩だけではもちろんなく、その生物は人の形をしていた。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　やつは高々と突きあげた右手の人差し指で天を指していた。ＳＩＸ！

　マリアローズたちがいる場所からは後ろ姿しか見えない。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　左手には何か持っているようだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　やつは帰ってきた。ＳＩＸ！

　そう、帰ってきたのだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　帰ってきたやつは、黄色の稲いな妻ずま模様が悪あく趣しゅ味みな黒いボディスーツで首から足までを覆おおっている。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　その両手首のあたりからすだれのように何本もの長い物体が垂れさがっていて、それがまた、何とも言えず奇妙で禍まが々まがしい。ＳＩＸ！

　あのときと同じ恰かつ好こうだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　泉セン里リ決戦で身にまとっていた装しよう束ぞくをあえて着ていることに、何の意味もないとはとうてい思えない。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

　とにかく、やつは帰ってきた。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

ＳＩＸ！

このエルデンに帰ってきたのだ。ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

やつが！

ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

ＳＩＸが！

ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！

あのＳＩＸが……！

ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ！　ＳＩＸ……！

「お父さん……！　お父さんだ！　お父さん……！」ルーシーの叫び声は楽隊の演奏とＳＩＸの名を呼ぶ声に掻かき消された。マリアローズはアジアンを見た。アジアンはマスクをつけているので、視線の行方ゆくえはわからないけれど、たぶんＳＩＸを凝ぎよう視ししている。動く気配はない。今のところは。でも、アジアンだ。その気になれば、目にもとまらぬ速さでＳＩＸに肉にく薄はくすることができるだろう。トマトクンはゆっくりと肩や首を回している。まるでわきあがる殺意を散らそうとしているかのようだ。カタリはただただ驚おどろいて半魚眼を見開いている。ピンパーネルは不動だ。アニーは何か叫びながら撮さつ影えい機を操あやつっている。ジグズレヴは相変わらず立ったまま死んでいるみたいだけれど、それでもＳＩＸのほうを向いていた。

不意にルーシーが駆けだそうとした。「お父さん……！」すかさずユリカとサフィニアがルーシーを押しとどめて、マリアローズも二人に手を貸した。「──ルーシー……！」「放して！　放してください！　お父さんが！　ぼくのお父さんが……！」「待ちなしゃい、ルーシー！　いま行っても！」「……そうです……！」「放して！　放せ！　放せったら！　ぼくのお父さんなんだ！　やっとお父さんに会えたんだ……！」「気持ちはわかるけど、落ちつけって言ってるんだよ！」「落ちつけるわけないじゃないですか……！」

ルーシーは激しく身をよじって、マリアローズたちの腕を力ずくで引きはがした。逃にげられても押しのけられても突き放されても、三人がかりでなんとか押さえつけようとしているのだけれど、ダメだ。すごい力だ。いったいどうやったのか。ぜんぜんわからなかった。「──お父さん……！」

「きゃっ！」「……はっ……！」「くっ……！」

　ルーシーは変な身体からだの使い方をして、マリアローズたち三人を一気に突き飛ばした。

　しまった。

　やられた。

　行ってしまう。

　まずい。

　めんどくさいことに──、

　ならなかった。

　何者かがマリアローズたちの間をすっと駆かけ抜ぬけていって、後ろからルーシーの襟えり首くびをつかまえた。

「──ぐげっ！」首が絞しまる恰好になったルーシーは当然、止まった。

　見事にルーシーを捕ほ獲かくしてくれたのはピンパーネルだった。ピンパーネルはまたたく間にルーシーを羽は交がい締じめにした。

　ルーシーは足をバタバタさせながら、喉のどよ張り裂さけろとばかりに叫さけんだ。「──お父さあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん……！」

　その声が届いたのか、どうか。

　ＳＩＸが身体をひねって、顔をこちらに向けた。

　白い。奇き妙みようなほど白くてなめらかなのに、まったく羨う

らやましくない、なんだか無機的な、気味の悪い肌はだだ。肩かたに届く黒くろ髪かみも、同じように毛もう髪はつというよりも人工的な繊せん維いめいている。



　大きく左右に裂けた薄うすい唇くちびるは、笑えみをたたえているようにも見えるけれど、おぞましさしか感じない。

　その両眼に宿る鬼おに火びのような輝かがやきは、どこまでも禍まが々まがしく、邪じや悪あくで、汚けがらわしい。

　蛇へびをくさすつもりはないが、やつの顔がん貌ぼうはどこか蛇を思わせる。その蛇は猛もう毒どくを持っていて、人なんてたちどころに殺してしまう。簡単に息の根を止めて、丸のみにしてしまうのだ。

　ＳＩＸだ。

　間ま違ちがいない。

　そう思うのに、何だろう。この違い和わ感かんは。

　すぐに気づいた。アジアンが言っていたとおりだ。

　若返った。

　帰ってきたＳＩＸは、マリアローズが知っているＳＩＸよりも、身体つきや顔がほっそりしている。やつの年ねん齢れいなんて知らないけれど、あのころは十代とか二は十た歳ちくらいには見えなかった。今のＳＩＸはどうだろう。上背はあるものの、二十歳だと言われれば、そうなのかな、と納なつ得とくできなくもない。

「……お父……さん……？」ルーシーは暴れるのをやめた。

　ＳＩＸは両眼を細めた。

　ルーシーの姿を見て、何か思うところがあったのか。何か感じていたのか。わからない。正直、ＳＩＸの目にルーシーが映っていたのかどうかも定かではなかった。

　ＳＩＸの名を連呼する声と演奏に交じって、ひい、とか、わあ、とか、きゃあ、といった悲鳴が響ひびき渡わたった。ステージのほうだ。マリアローズはそっちを見た。モデルだ。男性もいれば、女性もいる。ステージは両りよう脇わきが袖そでになっていて、その奥には楽屋があるのだろう。モデルたちは袖から飛びだしてきた。服を着ている者もいれば、半はん裸らの者も、全裸の者もいる。恰かつ好こうからして、モデルではない、他のスタッフも混じっているようだ。これも予定された演出なのか。おそらく、違ちがう。彼らは逃げてきたのだ。表情が、走り方が、やけに必死だ。逃げて？　何から？　どうして……？　ステージには楽隊がいる。演奏

が乱れた。飛び跳はねながらＳＩＸの名を叫んでいたランウェイのモデルたちも、次々と動きを止めた。客の間にも動どう揺ようが走った。マリアローズは目を剝むいた。そりゃ驚くって。驚かずにはいられないって。

　モデルだのスタッフだのにつづいて、銀色の甲かつ冑ちゆうを身にまとった者たちがステージの袖から出てきたのだ。つづいて……？

　そうじゃない。

　彼らだ。

　彼らこそ、モデルやスタッフたちがステージに飛びだしてきた原因だ。

　モデルやスタッフたちは、たぶん追い立てられたのだ。

　誰だれかが叫んだ。一人ではない。何人もが、大勢が、口々に叫んだ。「ば、ば、番人──」「番人だ……！」「銀の軍団ザ・シルバリイ！」「秩ちつ序じよの番人だ！」「番人が！」「番人だ！」「死神……！」「死神だ……！」「──死神がいるぞ……！」

　マリアローズは隠かくし持っていた剣けんを抜きかけた。ダメだ。

　どうしよう。

　判断がつかない。

　トマトクンを見た。

　それと同時か、その前に、トマトクンは声を張りあげた。

「固まれ！　俺の周りに……！」

　指示を聞いた途と端たん、身体が勝手に動いた。マリアローズたちは素す早ばやくトマトクンのそばに集まった。ルーシーを羽交い締めにしたまま運んできたピンパーネルには、ご苦労さま、と言うしかない。アニーは呆ぼう然ぜんとしている。ジグズレヴは依い然ぜんとして死体だ。楽隊は楽器を放ほうり投げ、モデルたちはもう半はん狂きよう乱らんで、ランウェイからどんどん飛び下りた。番

人たちが剣を振ふりまわして、彼らを追い散らしているのだ。番人の先頭には、たしかにあの男がいる。他の番人と違い、彼は兜かぶとをかぶっていない。黒髪。傷きず跡あとのある顔。太い眉まゆ。鎧よろいの形も異なっていて、盾たても持っていないから、一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。

　恐きよう怖ふを、あるいは畏い敬けいを、もしくは怨おん念ねんをこめて、人は彼を、死神、と呼ぶ。

　その手に握にぎられている大おお振ぶりのモトロール刀、名刀ダグラス・トゥースが鍛きたえた「日輪」は、かつて太陽鬼の愛刀だった。

　まさか、秩序の番人の一団が、しかも、二代目総長の羅ラ叉サに率いられて、この披露宴レセプシヲンに乱入してくるなんて。

　想像だにしていなかった。

　ものすごくびっくりしたけれど、彼らがここにいる理由は明白すぎるほど明白だ。

　仇あだ討うちだ。

　それ以外にない。

「ＳＩＸ……！」羅叉はランウェイの途と中ちゆうで足を止め、日輪の切っ先を怨おん敵てきに向けた。「一度で足りなくば、百ひやく万まん遍べん殺してやる……！」

『クフハッ』ＳＩＸの笑い声は四方八方から聞こえた。

　ＳＩＸは羅叉に向きなおった。

　そのときにはもう、羅叉は駆かけだしていた。

　披露宴レセプシヲンの出席者たちは、完全にパニックに陥おちいっているか、ぽかんとしているか、無む駄だに大おお騒さわぎしている。特別も一いつ般ぱんもクソもへったくれもない。めちゃくちゃだ。

　はっとした。あれ……？

　いない。あいつが。

　アジアン。

　どこに……？

　てゆうか、それどころじゃない。羅叉がＳＩＸに肉にく薄はくしていた。怒ど濤とうの勢いだ。直線的すぎるけれど、あんなふうに迫せまってこられたら、なかなか逃にげられるものではない。普ふ通つうならそうだ。ＳＩＸは違った。

　跳とんだ。

　ランウェイから飛び下りて、専用席のテーブルの上に着地するなり右みぎ腕うでを振りあげると、ボディスーツのすだれのような部分がやつの右手から右みぎ肘ひじあたりまでに巻きついた。その右手はドリルと化した。左手には何か短い棒のようなものを持っている。

『総長自らお祝いに駆けつけてくれるとは光栄だねえ……！』

「ほざくな……！」羅叉はＳＩＸを追ってランウェイからテーブルめがけて跳んだ。ＳＩＸもじっとしていなかった。逃げた。後ろへ。『一邪じや魔まアアァァッ！』たまたまそこにいた一般出席者を蹴け飛とばして、羅叉がさらに猛もう追ついしてくるのを見てとると、今度は受けて立つことにしたらしい。ＳＩＸは右手のドリルで羅叉の日輪をガッキィィィィンと弾はじいた。ギャシャアァァァンと払はらって、ギュウゥゥゥゥゥゥンと反はん撃げきに転じたが、羅叉にあっさりかわされた。『ウヒャハァッ！　片手じゃあねえ……！』ＳＩＸは左手に持っていた物体を放り投げながら、思いっきり斜ななめ後ろに跳ちよう躍やくした。『ゴッ！』『キィィィィィィィィィィィン……！』耳が割れそうだ。ひどい音がした。ＳＩＸが左腕を振りまわすと、追いかけてきた羅叉にすだれが襲おそいかかった。羅叉は日輪ですだれを打ち返した。すだれは近くの一般出席者を千切りにした。血が、肉が、骨が、乱れ飛んで、撒まき散らされた。羅叉はかまわずＳＩＸに突つっこんでいった。ＳＩＸは右手のドリルで羅叉の打ちこみをギャンガンギィンゴォン撥はね返しながら、ときおり左手のすだれを繰くりだした。通じなかった。羅叉はぜんぶ防いだ。あるいは、よけた。もしくは受け流した。なんて身のこなし、なんて剣けん捌さばきだ。力強いだけではない。柔じゆう軟なんさもあって、何より精せい緻ち

だ。ＳＩＸは飛んだり跳はねたり回ったり、とにかく変へん幻げん自じ在ざいの動きで羅叉を翻ほん弄ろうしようとしているのだろう。でも、羅叉はぴったりＳＩＸについてゆく。まったく動じずに、身体からだは激しく動きまわっているという印象だ。並なみ大たい抵ていではない。あのＳＩＸがほとんど防戦一方だ。そうはいっても、ＳＩＸは身軽だし、すだれも危険だったりするので、迂う闊かつには近づけない。他の番人たちは「どけ！」だの「死にたいか！」だの「下がれ！」だのと叫さけびながら、客連中やらモデルやらを会場の端はしのほうへと追い立てて、思うぞんぶん羅叉に剣を振るわせようとしているようだ。

「むう……」トマトクンはマスクを脱ぬいでそのへんに放った。「妙みようだな」

「妙って？」マリアローズもウィッグを外した。

「弱い」トマトクンは片方の眉を大おお仰ぎようにつりあげた。「いくらなんでも、弱すぎる」

　それだ。

　見ていて、どうも釈しやく然ぜんとしないものがあったのだ。なんかおかしい、とマリアローズも思っていた。死神の異名を持つ羅叉はたしかに強い。だいぶ腕を上げたかもしれない。そうだとしても、ＳＩＸがあんなに苦戦するわけがない。かつてトマトクンにやられたとはいえ、あのときのＳＩＸの戦いぶりは完全に人間離ばなれしていた。異常だった。今は、まあ、マリアローズの技量ではとうていかなわない、まるで勝負にならないだろうけれど、人間の域にとどまっている。好むと好まざるとにかかわらずいろいろな経験をしてきたマリアローズに言わせれば、普通に強い、というレベルだ。

　可能性は二つある。

　一つは、ＳＩＸが弱くなった。

　もう一つは、わざと弱く見せている。

　ＳＩＸのことだから、後者だろう。

　きっと何か企たくらんでいるのだ。

　マリアローズはルーシーの様子をうかがった。ルーシーはまだピンパーネルに羽は交がい締じめにされている。目をいっぱいに瞠みはって、口を開けたり閉じたりしながら、全身を小刻みに震ふるわせて、自分が何を見ているのか、見せられているのかわからない、把は握あくできない、理解できない、頭が働いてくれない、といったかんじだ。マリアローズはユリカ、サフィニアを見た。二人はルーシーを一いち瞥べつして、かすかに顔をしかめた。考えていることはたぶん、一いつ緒しょだ。父親を捜さがしにエルデンくんだりまできて、ようやく会えたと思ったら、こんな再会になっちゃうなんて。気の毒だけどさ。こっちだって複雑だよ。半分くらい覚かく悟ごはしてたけどね。やっぱり、ほんとに、ＳＩＸの息むす子こだったんだ。あーもう、なんだってＺＯＯうちはいつもいつも……！

　ＳＩＸはさんざん、といっても、時間にしたらたいしたことはないのだけれど、あちこち逃げまわったあげく、無人のランウェイへと舞まい戻もどった。

　羅叉もＳＩＸのあとを追ってランウェイに跳び乗った。

　ＳＩＸと羅叉との距きょ離りは、せいぜい五メーテルといったところだ。

　ランウェイの左右には、番人たちが剣けんと盾たてを構えて列を作っている。

　羅叉は右足を一歩引いて身体を右斜め前に向け、日輪を右脇わきに持っていってその切っ先を後ろに下げた。

　あれは、陽ひの構え、というやつか。

「逃げられんぞ、ＳＩＸ」

「そいつはどうかねえ……？」ＳＩＸは腰こしを落としてあとずさりした。

「貴様は逃げられん」羅叉は唇くちびるをゆがめた。「決して逃がさん」

　笑えみともつかない死神の笑みだ。

　会場の出入り口、二つのドアが一いつ斉せいに開いた。ドアは今

の今まで閉とざされていたのだ。どうやら、客に紛まぎれてＳＩＸが逃げてしまわないように、数名の番人がいち早く封ふう鎖さしていたらしい。そのドアを開け放ったのも番人だった。ロビーからだ。ステージの袖そでから現れた番人たちとは別部隊なのだろう。大勢の番人が会場の中へと傾なだれこんできた。

　ステージのほうにも、十人ほどの番人がいる。

　ＳＩＸは包囲された。

「悪、必、滅めつ」羅刹は噛かみあわせた歯の合間から恐おそろしい声を絞しぼりだした。「我らが父の仇かたきだ。貴様は滅びねばならん」

「ヒャハッ……」ＳＩＸは首を横に振ふって、何か言おうとしたのだろう。

　口をつぐんで、振り向いた。

　そこに、ＳＩＸの視線の先に、あいつはいた。

　いきなりいなくなって、どこに隠かくれていたのか。

　てゆうか、いつの間に。

　なんでそんな場所に。

「フッ」

　アジアンは指先で前まえ髪がみを払はらった。

　本当に、いつの間に──、

　着き替がえまでして。

　もしかして、あの仮装の下にいつもの服を着ていたのだろうか。暑くなかったのかな。や、まあ、あいつはあんまり暑いとか寒いとか、そういうの感じないっぽいけど。汗あせもほとんどかかないみたいだし。

　そんなの、どうでもいいんだけどさ。

　それどころじゃないっていうか。

「ＳＩＸ。キミが何を目もく論ろんでいるのか、ボクは知らないけどネ。お遊びは終わりだヨ。死神クンの言うとおりサ」アジアンは凍いてついた薄うす青あお色の目を細めて、ＳＩＸに人差し指を突つきつけた。「──キミは滅びるべきだ。キミにはそれ以外の運命など用意されていない。どのみち誰だれかがキミを滅めつするのならば、このボクの手で引導を渡わたそう」

「クハァッ……！」ＳＩＸは気味の悪い笑い方をして、何か言おうとしたのだろう。

　それより早く、硬かたいものが弾はじけるような、破は裂れつするような、ものすごい音がした。

　羅叉の左足が、とてつもない力でランウェイの床ゆかを踏ふみつけたのだ。

「アジアン……！　貴様……！」

「え？」アジアンは自分を指さした。「──ボク……？」

「シュナイデル副長！　ただちにアジアンを殺とれ！　昼飯時ランチタイムもまた、斬きるべき悪！　我が団の敵だ……！」

「御ぎよ意い！」ドアのほうにいる番人が野太い声で即そく座ざに応じた。「太臺子タイダイシー、シャルロット！　私につづけ……！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」アジアンは後ろを見て、前を向いた。「ボクには、キミたちとやりあう気なんて……だいたい、そんなことをしている場合じゃないだろう⁉」

「黙だまれ！」羅叉はバホ野や郎ろうを一いつ喝かつした。「義は悪を見み逃のがさん！　ＳＩＸは俺が斬る……！」

「結局、それか！　肝きもっ玉たまが小さいネ！」

「……お前たちィィィィ」ＳＩＸは左ひだり腕うでを振ってすだれを左手のドリルにした。「いつまで主役の俺を無視してごちゃごちゃやってるつもりだアアアアァァァァァァ……⁉」

「もう終わった……！」羅叉は駆かけだした。「貴様の命運も今ここで尽つきる……！」

「上等だアアァァァァァァァ……！」ＳＩＸは高く高く跳ちよう躍やくした。「ライトニンッ！　スパアアアアアァァァァクッ！　Ｓ．Ｉ．Ｘピィィィィィィィィィィィィィンン……！」

　あれは。

　あの技わざは。

　番人たちが押しよせてきたもので、尻尾しつぽを巻いて逃にげだすしかなかったバホ野郎のことなんてかまっていられなかった。

　ＳＩＸは空中で回転しはじめた。両手のドリルが一体化した。大ドリルになった。ＳＩＸはぐるぐる回りながら羅叉めがけて急降下していった。ドリルアタックだ。泉セン里リ決戦で目もく撃げきした。ＳＩＸの必殺技だ。何が必殺技だ。半魚人でもあるまいし。ふざけている。人を小こ馬ば鹿かにしているとしか思えないけれど、あんな芸当、真ま似ねしたくてもできない。すごいといえばすごい。ついに本気を出したのか。むしろ、本ほん性しようを現したのか。「──キイイィィィィィィィィィエエエェェェェラアアアアァァァァァァアアアアアァァァァァァァ……！」

「くだらん……！」

　羅叉は、だが、冷静だった。

　そう。

　落ちついて見れば、何か変だった。

　羅叉はひょいと身をかわした。

　ドリルと化したＳＩＸは、羅叉のすぐ脇を通り抜ぬけてランウェイの床に突っこんだ。

　床がドワッシャアアアアァァァァンと派手にぶっ壊こわれた。

　壊れただけだった。

「違う」トマトクンが呻うめくように呟つぶやいた。

　たしかに違ちがう。違いすぎる。

　あれは泉セン里リにある五重塔ごじゆうのとう、鳳ほう凰おうの間を探たん索さくしている最中だった。上の階から天てん井じようをぶち破ってドリルＳＩＸが降ってきた。ドリルＳＩＸはトマトクンもろとも一階まで一気に落下したのだ。すさまじい威い力りよくだった。しかも、あれはただのドリルだった。そのあとにＳＩＸがトマトクンとの一いつ騎き討うちで披ひ露ろうしたライトニング・スパーク・ＳＩＸピンは、どういう仕し掛かけなのか、どんな仕組みになっているのか謎なぞだけれど、身体中からバチバチ細かい稲いな妻ずまを放出して、さらに天然物の雷かみなりを浴び、その雷らい撃げきを自らの力に変えて──なんてことが可能だとはどうしても思えないのだが、とにかくそうやって放った超ちよう弩ど級きゆうのドリル技だった。

　あれは違う。

　ただのドリルにしても、しょぼい。しょぼすぎる。

　ＳＩＸは壊れたランウェイから跳とびあがって羅叉に襲おそいかかった。「グワハァァッ！」右手のドリルがギュインと唸うなりをあげた。「──ニヤハァァッ！」左手のドリルがジュキュンと叫さけんだ。羅叉はそれらをことごとく、簡単に弾はじいてしまった。マリアローズはほとんど呆ぼう然ぜんとしていた。あれがＳＩＸ？　あれが？　あのドリルが？　あれが全力？　復活して、外見が若返って、貧ひん弱じやくになった？　それとも、あれもやっぱり策略？　てゆうか、僕たち、黙っていいの？　何もしなくて？　でも、何をすれば？　止める？　なんで？　ルーシーの父親だろうと、ＳＩＸはＳＩＸだ。ＳＩＸと秩ちつ序じよの番人がいたら、どっちの肩かたを持つか。決まっている。番人だ。いまＳＩＸと羅叉の間に割って入ったりしたら、ＳＩＸを助けることにもなりかねない。そんなことはできない。かといって、羅叉に手を貸す必要もなさそうだ。

「ケェイッ！」ＳＩＸは右ドリルを突つきだした。

　羅叉は軽々とよけた。

「リャアハッ！」ＳＩＸの左ドリルが怪音を発した。

　かすりもしなかった。

「ヒィィィエイッ……！」ＳＩＸは右ドリルから左ドリルと見せか

けて、もう一度右のドリルを繰くりだした。「──ドュゥゥゥアッ！」

　羅叉はその右ドリルに日輪を叩たたきつけた。「憤フンッ……！」

「ギャバッ……！」右ドリルは切断されることこそなかったが、表層が弾はじけ飛んだ。

　羅叉はこの好機を見逃さなかった。いきなり攻こう勢せいに転じた。「──破ハ！　破ッ！　羅ラ！　羅ァ！　羅ァッ！　羅ァァッ……！」

　日輪は踊おどるようにＳＩＸを攻せめたてた。それは途と方ほうもなく苛か烈れつで、一分の隙すきもない、猛もう風ふうに煽あおられた烈れつ火かのごとき舞まいだった。だいぶ距きょ離りがあるのに、熱気がこっちまで伝わってきそうだった。その熱を至近距離で浴びせられて、ＳＩＸは見る間にたじたじとなった。

「──ナアッ!?」「破ッ！」

「ニイィッ!?」「羅ァッ！」

「ドオッ！」「破ァッ！」

「ゲェェッ!?」「憤ッ！」

「ピャアアアァァァァァッ……!?」

　ＳＩＸは自分の左手を見た。

　そこにあるべきものがなかった。

　左ドリルだ。

　羅叉の日輪がドリルごとＳＩＸの左手を斬きり落としたのだ。

「て、てンめエエエエエエェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ……！」ＳＩＸは右手のドリルをほどいてすだれに戻もどした。「ぶっち殺してやるウウウウウウウウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッ……！」

　マリアローズは息をのんだ。

　ＳＩＸは踏ふみこみながら右手を振ふりおろして、羅叉をすだれの餌え食じきにしようとした。

　羅叉はＳＩＸより速かった。

　間かん一いつ髪ぱつではなかった。

　だいぶ速かった。

　羅叉は低い姿勢でＳＩＸの右脇わきを駆かけ抜けた。

　ＳＩＸの三メーテル後方で止まった。

　羅叉が右手一本で握にぎっている日輪の切っ先は右斜ななめ上に、遥はるか彼方かなたに向けられている。

「ワァーオ……」ＳＩＸは、ククク、と笑って自分の胸に右手をあてた。「ワァーオ、ワァーオ、ワァーオ……」

　その右腰こしから左肩にかけて、一本のまっすぐな赤い線が走っている。

　ＳＩＸはその線に指を這はわせた。指の腹についた赤い液体を見て、もう一度、ワァーオ、と呟つぶやき、それからまた、ククク、と笑った。

「……やァーって……くれたなァァァ、死神……秩序の番人、二代目……総長……」

　声を出すごとに、ＳＩＸの身体からだは少しずつずれていった。

「こいつはァァ……素す敵てきだ……まったく、いい……気分だねえ……ウァハハハ……」

　言葉とは裏腹に気の抜ぬけた笑い声を立てながら、ＳＩＸは振り向いた。

　羅叉も首だけ振り返らせた。

　二人の目があったのは、一秒か、二秒か。

せいぜいそんなところだろう。

「バァァァァァァァァァァ――――――――――――――――カ」

「なっ――」

羅叉は絶句した。

ＳＩＸは完全にまっぷたつになって崩くずれ落ちた。

「お……お父さんっ……！」ルーシーがピンパーネルの腕うでを振りほどいて走っていった。

ルーシーの火事場の馬ば鹿か力ぢからがすごかったのか。それとも、ピンパーネルがつい放してしまったのか。だとしたら、軽けい率そつな行こう為いだということになってしまうかもしれない。あの男は――あのＳＩＸという生き物は、マリアローズが知っているかぎり、あの程度で息絶えることはない。首を斬られても平然としていたくらいなのだ。

「トマト……！」マリアローズは叫さけびながら駆けだした。

「うむ。全員こい！」打てば響ひびくようなトマトクンの指示だった。

マリアローズはランウェイの手前でルーシーをつかまえた。「ルーシー……！」袖そでをつかんだのだが、引きずられた。見た目はかわいいけれど、そんなに丈じよう夫ぶな服ではない。肩かた口ぐちのところで袖がちぎれた。「――あっ……！」ルーシーの上着は片方だけノースリーブになってしまった。マリアローズはめげずに追いかけようとした。ダメだ。届かない。離はなされる。速い。でも、速さなら誰だれにも負けないピンパーネルがいる。ピンパーネルは疾しつ風ぷうのごとくルーシーに迫せまって、追いすがった。追いすがろうとしたのだ。「な――ぇっ……!?」

嘘うそ。

信じられない。

すり抜けた。

ルーシーはしゃがんでピンパーネルの手をよけた。

　いや、違ちがう。

　よけようとしてしゃがんだわけでは、たぶんない。

　ルーシーは四つん這ばいになったのだ。そうして両手で床ゆかを叩き、両足で蹴けりつけて、跳とびあがった。

　ちょっと啞あ然ぜんとしてしまった。

　何だよ、あの身のこなし。獣けものじゃないんだから。

　ルーシーはランウェイに跳び乗った。すぐにピンパーネルが、そのあとにトマトクン、カタリ、マリアローズ、ユリカ、サフィニアの順でつづいた。ルーシーは極きよく端たんな前ぜん傾けい姿勢で、足をぐるぐる回転させるようにして走っている。あんな走り方で、あんなにも速いなんて。それでもやっぱり、ピンパーネルにはかなわない。ＳＩＸや羅叉がいるあたりまで七、八メーテルといったところだった。ピンパーネルはぐっと速度を上げた。今度はつかまえようとはしなかった。足あし許もとだ。後ろから足あし払ばらいをかけた。「──Ｄａ□Ａｈ……！」ルーシーは見事につんのめった。ものすごい勢いだったのに、受け身をとるどころかでんぐり返しを打って、すぐさま立ちあがろうとした。そこにトマトクンが追いついてルーシーの襟えり首くびをつかみ、ひょいと持ちあげて腰に腕を回した。

「は、放して！　放してくださいよう……！」

　ルーシーがいくらじたばたしても、トマトクンはびくともしない。

　マリアローズはトマトクンの斜め後ろで足を止め、隠かくしてある剣けんの柄つかに手をかけた。

　ピンパーネルが右みぎ隣どなりにいる。

　カタリは左隣だ。

　ユリカは極限クライマックス九手棍ナインポールの石いし突づきで床を強く叩たたいて、偽ぎ装そうのための飾かざりを外した。

　サフィニアの杖つえは「拷ごう問もんのための鞭むちと征せい服ふくを成し遂とげる錫しやく杖じよう」のままだけれど、機能的に

はとくに問題ないだろう。

　ＳＩＸは倒たおれたままだ。

　羅叉はトマトクンを一いち瞥べつしてから音もなくＳＩＸに近づいていって、ゆっくりと日輪を振ふりあげた。「どうすれば貴様が滅ほろびるか。試ためす時間はたっぷりある」

「……ク──ヘェッ……」ＳＩＸは血ち反へ吐どを吐はいた。「……そいつは、どうかねえ……」

　羅叉は眉まゆをひそめて日輪を握にぎる手に力をこめた。

　マリアローズは首を横に振った。「……そんなわけ、ない」

「ああ」トマトクンは唸うなるような声を出した。

「え……？」ルーシーは振り返ってマリアローズを見た。「何が、ですか……？」

「ちゃうな」カタリはため息をつきながら首を横に振った。「そいつはちゃうで」

「何だと……？」羅叉はギリリと奥歯を噛かみしめた。

「そうだネ」バホ野や郎ろうが腕うで組ぐみをして顎あごをつまみ、フム、とうなずいた。「じつはボクも何か変だと思っていたのサ」

　めずらしく、くそ真ま面じ目めな顔をして。

　羅叉のすぐ隣で。

「てゆうか──」マリアローズは二の句が継つげなかった。

　どうして？

　いつから、なんで、そこにいるの？

　バカだから……？

　当然といえば当然だけれど、そう思ったのはマリアローズだけではないようだ。

「貴様」羅叉は問答無用とばかりに日輪を鋭するどく振るった。「一性しよう懲こりもなく……！」

　バホ野郎はすかさず飛びのいて斬ざん撃げきから逃のがれた。「気が短いネ！　今すぐ性しよう根ねを叩きなおせとは言わないが、ボクにかかずらっている場合じゃないことがわからないのかい!?」

「黙だまれ！　貴様などに──」

「ゴ……ファハッ……！」ＳＩＸが笑った。

「お父さん……！」ルーシーが大暴れして、ついにトマトクンの腕を振りほどいた──わけではないだろう。

　トマトクンはルーシーを放してやったのだ。

　もう危険はない。トマトクンはそう判断したということだ。

　ルーシーはＳＩＸにすがりついた。「お父さん……！」

「……アァァ……？」ＳＩＸはルーシーに視線を向けた。「……ハハァ……そうか……クフハハァ……お前……ケヘェ、ハァ……」

「どういうことだ……？」羅叉は眉をつりあげてあたりを見まわした。

　会場は水を打ったように静まりかえっている。

　客たちも、番人たちも、誰一人として身動き一つせず、しわぶきの音すら聞こえない。

　皆みな、息をすることさえ忘れているかのようだ。

「キヒハァ……」ＳＩＸは血ち塗まみれの舌を突つきだして左右に動かしてみせた。「だから……バカだと……いうんだよ……」

「まさか──」羅叉は息をのんだ。

「ようやくわかったらしいネ、死神クン」バホ野郎は顎をしゃくってＳＩＸを示した。「そういうことサ。そいつは違ちがう。ＳＩＸじゃない。別人──いや、ＳＩＸだけに、ここはむしろ、別物、とい

うべきかな？」

「だが……」羅叉は瞬しゆん間かん、目を泳がせた。

　その視線がたどりついた先には、トマトクンがいた。

「こんなことを話すのもけったくそが悪いんだがな」トマトクンはため息をついた。「あの腐くされ外げ道どうはもっとしぶとい。見ろ。そいつはもう、死にかけてる」

「ン……ク、ク、ク……ヘハァ……」ＳＩＸは━いや、ＳＩＸモドキは、白目を剝むきかけていた。「……お、とお……さん……お、れ……いう、とおり、に……」

「……お父……さん……？」ルーシーはＳＩＸモドキの両りよう頰ほおを震ふるえる手で挟はさんだ。「ちょっと、待って……お父さんって……」

「……お、とお、さん……」

　ＳＩＸモドキの目は、もうたぶん、どこも、何も見ていない。見えていないだろう。

　目だけではない。

　おそらく、すでにＳＩＸモドキは、ほとんど何も感じてない。

「……ほめ……て……おれ……の……こと……お……とぉ……さ………………」

　吐きだされた最さい期ごの息は短かった。

「し━」

　ルーシーはひきつけでも起こしたように、ひっ、ひっ、と息を吸いこんだ。

　それから、がっくりと肩かたを落とした。

「……し、死んじゃった……」

　ユリカがＳＩＸモドキのそばにしゃがんで、脈をとりながら傷の状態をざっと見た。「医い術じゆちゆ式ではどうしようもないわ」

「父親……だと？」羅叉の顔は青ざめていた。「──何が……どうなっている」

「嵌はめられたんだよ」マリアローズはぽろっともらしてしまってから、後こう悔かいした。

　だって、羅叉だけじゃなくて、番人たちが全員、一いつ斉せいに睨にらむんだもん。けっこう殺気立ってるし。怖こわいんですけど。

　言っとくけど、僕のせいじゃないからね？　あたりまえだけどさ。

　秩ちつ序じよの番人はきっと、リヴァイスにＳＩＸが関係していることをつきとめていたのだろう。それで、披露宴レセプシヨンのことを知り、ＳＩＸが出てくるだろうと予想したか、もしかしたら確証をえていたのかもしれない。総長が先頭に立ってこれだけの部隊を動かしたのだから、何らかの情報はつかんでいたはずだ。目的はもちろん、ＳＩＸをしとめることだったに違いない。でも、考えてみると、おかしいことだらけだ。

　まず、客に対する身体検査がずいぶん甘かった。会場周辺の警備も、人数だけはそれなりに配置されていたけれど、物々しいという雰ふん囲い気きではなかった。

　さらに、秩序の番人が会場に突とつ入にゆうしてきてから、応戦したのはＳＩＸモドキだけだった。他ほかには誰だれも、誰一人として、番人たちと剣けんを交えようとしなかった。

　アジアンがユリカの隣となりに片かた膝ひざをついて、ＳＩＸモドキのボディスーツを脱ぬがせた。上半身だ。胸の真ん中にそれはあった。

　６の刺青いれずみだ。

「……アルトラモードのモデルは、そいつだったんだ」マリアローズは眉まゆをひそめて首をひねった。「じゃあ、ＳＩＸは最初から──や、違うね」

「そう。違うヨ、マリア」アジアンはこちらに顔を向けてうなずいた。「この男は最初からＳＩＸの影かげ武む者しやとして動いていたんだ。ボクが黒ビルで会った左肩に６の刻印がある本物のＳＩＸ

は、別にちゃんといるのサ」

「俺たちは……」羅叉は歯を食いしばって、全身の震えをなんとか抑おさえようとしているようだった。「謀たばかられたのか……？　何のために……？」

「羅叉」トマトクンは会場を見まわした。「ヨハンはきてるのか」

「いや」羅叉は虚きょを衝つかれたようにわずかに目を瞠みはった。「相手が相手だけに精せい鋭えいを率ひきいてきたが、ここには──奴やつは屯とん所しよに」

　なぜか、ふぬけの殻から、というピンパーネルの言葉がマリアローズの頭をよぎった。

　正確には、ルーシーが指し摘てきしたように、もぬけの殻だ。

　もぬけの殻──、

　ＳＩＸは影武者だった。リヴァイス側には戦せん闘とう要員らしき者が配置されていなかったようだ。ほとんどもぬけの殻みたいなものではないか。ひょっとして、そもそもこの披露宴レセプシヲンは、秩序の番人をおびき出すための罠わなでしかなかったのか。何のために？

　飛ひ躍やくしすぎだろうか。明確な証しよう拠こがあるわけではないし、単なる思いつきでしかない、と言われたら、返す言葉がない。でも、トマトクンはなぜ、ヨハン・サンライズのことを羅叉に尋たずねたのか。我らが園長マスターには独特の嗅きゆう覚かくが備わっている。それに、勘かんもいい。もしかすると、トマトクンもマリアローズと同じことを考えているのではないか。

「そうか」アジアンは急に立ちあがって羅叉に向きなおった。「キミらが復ふく讐しゆうしたがっているのだとしたら、ＳＩＸも一いつ緒しよだ」

「何……？」

「ＳＩＸもまた、雪せつ辱じよくを果たそうとしている。そうだとしても、おかしくはないだろう？」

「戯ざれ言ごとを」羅叉は目をぎらぎら光らせて日輪を手て許もと

に引きよせた。

「象しよう徴ちよう……」

　誰だよ、口を挟んだの。バホ野や郎ろうと死神なんて、勝手にやりあわせとけばいいんだよ。どうせ、二人とも好きなんだから。戦うのとか戦うのとか戦うのとか。何だかんだ言って、結局、そういう手合いなんだからさ。

　まあ、つい呟つぶやいちゃったのは、他の誰でもなくて、僕なんだけどね。

「秩序の番人の象徴は？」

「それは──」羅叉は目を伏ふせた。「先代が打ち立てた義だ」

「言葉の意味から説明しなきゃダメ？」

　こういう口の利きき方するから、余計な波風が立っちゃうんだよね。わかってるんだけど。

　マリアローズはため息をついてみせた。「象徴っていうのは、形のあるモノのことを言うんだよ。もっとはっきりしてる、誰の目にも明らかな──」

「形……」羅叉は日輪に目をやって、顔を上げて嚇かつと目を見開いた。「屯所か」

　番人たちが、屯所、と呼び習わしている銀の砦とりでは、その名のとおりエルデンという街の中に築かれた堅けん固ごな砦だ。砦という名前がついているだけの大きな建物なら、探せば他にもあるかもしれないけれど、銀の砦は本当に、見るからに立派な砦といったたたずまいなのだ。

　エルデン広しといえども、砦を所有しているクランは秩序の番人だけだ。

　ちなみに、王立銀行の中に堂々と本ほん拠きよ地ちを構えているクランは我らがＺＯＯだけだろうが、やっぱり格が違ちがう。

　そう。秩序の番人が砦持ちだという事実には、格が違う、とエルデン市民に思わせるだけのインパクトがある。人数が多いだけでは

ない。全員が銀色に輝かがやく純血のピユアブラッド司祭プリーストの装備で身を包んでいるだけではない。統制がとれているだけではない。この混こん沌とんとした街に秩序を打ち立てようとしている銀の軍団の番人たちは、なんとあの大きな砦に住んでいるのだ。

「シュナイデル副長！」羅叉は日輪を鞘さやに収めながら声を張りあげた。「我らはこれより至急屯所に帰き還かんする！　リンデ隊長！　貴様は昼飯時ランチタイムの頭領マスターを狩かれ……！」

「御ぎよ意い！」太い声で即そく座ざにそう応じた番人は、兜かぶとのせいで顔がわからないけれど、シュナイデル副長だろう。

「かしこまりました！」こちらは女の声だ。「十二番遊ゆう撃げき隊、わたくしにつづきなさい！　怨おん敵てき、虐殺人形カーネイジドールの息の根を止めるのです！　義のために……！」

「義のために！」「義のために！」「義のために！」「義のために！」「義のために……！」

　女性用のプロヴィデンスＧＤＳを身にまとい、羽根付きの兜をかぶっているシャルロット・リンデのことは知っている。ＺＯＯと彼女が率いる十二番遊撃隊とは、泉里決戦のときに行動をともにしたからだ。

　その十二番遊撃隊の標的は、どうやらバホ野郎らしい。

「ここまで分からず屋だとはネ！　やむをえない……！」バホ野郎は目にもとまらぬ速さで羅叉から離はなれると、自分の指に口づけをした。「──マリア！　キミへの愛だけここに置いて、ひとまずボクは去るとするヨ……！」

　そうして手をこっちに向けて、ふうっ、と息を吹ふいてみせたのは、何？　つまり、あれ？　投げキッスってやつ？

　ふーん。

　フツーにきもいね。てゆうか、かなり、ものっすごくきもいんですけど……？

　マリアローズはぴゅーっと飛んできた目には見えない投げキッスを手で払はらった。「何も置いてかなくていいから、さっさと消えて？」

「フフッ。相変わらず照れ屋さんだネ？　そこがまたいとくるしいヨ！　ちなみにいとくるしいは、狂くるおしいほど愛いとおしくてたまらない、という意味なのサ！」

「もうメザキモいから早くどっか行って？　ちなみに、猛もう烈れつにきもくて目め障ざわりって意味ね」

「虐殺人形カーネイジドールッ！　覚かく悟ご……！」

「ムッ……！」もうメザキモいバホ野郎はシャルロットが繰くりだしたモトロール刀をひらりとよけた。「悪くない太た刀ち筋だが、ボクを斬きるには一万年早いヨ……！」

「お黙だまりなさい！」

「じゃあ、お言葉に甘えて、黙って逃にげるとしよう！」

　本気で逃げるアジアンに追いつこうとしたら、ピンパーネル級クラスの身体能力が必要だろう。アジアンはシャルロットと十二番遊撃隊の隊士たちをみるみるうちに引き離した。ステージのほうへと向かっている。マシュー・シュナイデル副長の指示で、他の番人たちは会場の出入り口方面へと移動しつつあるから、そっちのほうは手て薄うすだ。羅叉の一隊はステージの奥にあるとおぼしき楽屋のほうから侵しん入にゅうしてきたので、出ることも当然できるだろう。アジアンのことだから、まずつかまることはないはずだ。
ちょっとだけほっとした。

　嘘うそ、嘘、嘘。ほっとなんかしてないよ？　関係ないし。勝手にどこまでも逃げて逃げまくっていなくなっちゃえってかんじだし。

　マリアローズは頭を振ふった。

　どうでもいいんだよ、そんなこと。今は。

「トマト」

「ああ……」トマトクンは顎あごを引くようにうなずいて目を伏せた。

　マリアローズはユリカ、サフィニア、そしてピンパーネル、カタリと素す早ばやく顔を見あわせた。みんな大なり小なり、やれや

れ、という表情をしている。や、サフィニアだけは違って、ものすごく気き遣づかわしげだけどね。

　直接的であろうと間接的であろうと、それが仲間のためなら、トマトクンは少しも躊ちゆう躇ちよしない。ところが、自分のために仲間を動かすとなると、かなり慎しん重ちようだ。

　園長マスターとしてのトマトクンには、もちろん欠点もある。ほとんどは目をつぶることができる程度の短所だけれど、正直、これだけはどうにかしてほしい。だってトマト、たしかにきみは僕らの園長マスターだけどさ。同時に、一人の仲間であるんだから。きみはいつも平然と仲間のために、仲間が大切にしてる何かのために身をなげうってくれるけど、それは僕らだって一いつ緒しよなんだから。そうしたいって、僕らだって思ってるんだから。

「デニス・サンライズは」マリアローズはトマトクンの背中を握にぎり拳こぶしで叩たたいた。「トマトの大事な友だちだったんでしょ。ヨハン・サンライズはその養子で、昔から知ってるんだよね」

「そうだ」トマトクンは息を吐はいた。「──よく遊んでやった。あいつは覚えてないと言ってたがな」

「心配なんじゃないの？」

「あいつはもう餓が鬼きじゃないぞ」

「行きまショウ」

　意表を突つかれた。

　視線の一いつ斉せい射しや撃げきを受けて、ピンパーネルも少しだけ顔をこわばらせた。

「せやで」カタリはトマトクンの肩かたをバンッと叩いた。「ここは行っとかなあかんやろ！」

「しょうと決まったら、急いしよぎましょう！」ユリカは棍こんの石いし突づきで床ゆかを打った。

「そ、そう……ですね……」サフィニアはちょっとずつ、ちょっとずつトマトクンに近づこうとしている。「ぜ、善は急げ……と、い

いますし……」

　じれったい。サフィニアが強ごう引いんに身体からだをくっつけても、トマトクンはべつにいやがらないだろう。いっそのこと、サフィニアをトマトクンのほうへ突き飛ばしてやろうか。

　やめておいた。仮にそんなことをしても、トマトクンは普ふ通つうにサフィニアを受け止めて、でも、おそらくそれだけだ。それじゃあきっと、あんまり意味がないんだよね。よくわかんないけどさ。そのあたり。僕にはね。

「すまん」トマトクンは片方の眉まゆと唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。「お前たちの言うとおりだ。ヨハンのことは正直、気になる。それに、な──」

　黄玉トパーズの瞳ひとみが横に動いた。

　ルーシーはまだＳＩＸモドキの顔を両手で挟はさむようにして、ひたすら凝ぎよう視ししている。

　どう声をかけていいものやら、見当もつかないけれど、放ほうってはおけない。ルーシーもＺＯＯの一員だ。仲間なのだ。たとえルーシーの父親が何者だろうと、それは変わらない。

　ただ、当の本人はどう思っているのか。

　何も考えていないかもしれない。少なくとも、今は考えられないだろう。

　マリアローズはユリカと目で合図しあって、二人で両りよう脇わきからルーシーの肩を抱だいた。

「ルーシー」

「──え……」ルーシーはマリアローズを見て、赤い眼めをまばたかせた。「あ……マリア、さん……ユリカ姉様……」

「大だい丈じよう夫ぶ？　──な、わけないよね」

「いえ……」ルーシーはＳＩＸモドキの顔から手を離はなして、赤く濡ぬれそぼった指や掌てのひらに目を落とした。「どう……なのかな……わからないです、ぼく……何が、どうなってるのか……」

「しょうがないわ。でも──」ユリカはルーシーの頭を撫なでた。「わたしたちがいるから。あなたは一人じゃないのよ。しょれだけは忘わしゆれないで、ルーシー」

「はい……」ルーシーは涙なみだぐんだけれど、歯を食いしばって、泣かなかった。「はい、ユリカ姉様。ぼく、平気です。ただ、びっくりしてて……」

「無理もないよ」マリアローズはルーシーの背中をさすってあげた。「僕らだって、かなり驚おどろいてるし」

「この人」ルーシーはしきりに唇を噛かんだり舐なめたりした。「──お父さんって。お父さんの、言うとおりに、とか。おれのこと、褒ほめて、お父さん──って……その、お父さんって、もしかして……」

　マリアローズはユリカと一いつ瞬しゆん、目と目を見み交かわした。

　二人でルーシーをぎゅっと抱いてあげた。

　そうしないと、今にも壊こわれてしまう。

「ぼくの、お父さん……？」ルーシーは切れ切れの、でも、深い、深いため息をついて、ＳＩＸモドキの頬ほおに指を這はわせた。「だとしたら、この人は……ぼくの、お兄ちゃん……？」

Omenage 899 5th revolution 28th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

chapter.13

抱いておけばよかった

状じよう況きようは把は握あくしている。

動どう揺ようはもはやない。

皆かい無むだ。

落ちついている。

おれは冷静だ。

銀のシルバリイ・砦ホールド主しゆ塔とう四階の副長用執しつ務む室で報しらせを受け、即そく座ざに最終防衛線を主塔一階に設定して、正門及および防ぼう壁へき上、第二支塔、第三支塔の守備をただちに放ほう棄きするように命令を下した。正門にもっとも近い第一主塔を当面の防衛拠きよ点てんとして、一番正門から遠い第四主塔の地下納骨堂には下水道へと通じる隠かくし通路があるので、これは退路として確保しておかねばならない。正門はほとんど一瞬で突とつ破ぱされてしまったようで、すでに敵は砦内に侵しん入にゆうしていたから、あの判断は誤っていなかったと思う。

各支塔はすべて主塔に繫つながっているが、第二支塔と第三支塔と主塔との通路は封ふう鎖さ させた。ヨハンは琺瑠フオールとともに主塔一階の大講堂へと移動して、ここで指揮をとることにした。「義の灯台」とも称しようされる主塔は、その頂に夜間も煌こう々こうとあたりを照らす大半永久灯を備える秩ちつ序じよの番人の象しよう徴ちようだが、上階にとどまるのは下策だ。下から順に占せん拠きよされていったら、逃にげ場がなくなる。百人の番人がいたとして、そのうちの九十九人は信念と楽観を武器に己おのれが斃たおれるまで勇ましく戦えばいいが、残りの一人、ヨハン・サンライズだけは常に最悪の状況を想定して行動しなければならない。否いな。これは想定などではない。実際に起こっている、進行している現実でしかない。

悲観せずともいい。

その必要がない。

現状は最悪だ。

嵌はめられた。

　おれたちは、否、おれは一いつ杯ぱい食わされたのだ。

　間ま違ちがいない。

　リヴァイスの披露宴レセプシヲンは罠わなだった。

　ＳＩＸがエルデンの各所に姿を現した。それも、頻ひん繁ぱんに。顔こそ出していなかったが、雑誌にまでその身をさらした。あれはすべて餌えさだったのだ。

　まんまとその餌を食った。おれは愚おろかな獲え物ものだった。

「──報告……！」大講堂に血ち塗まみれの隊士が駆かけこんできて兜かぶとの面めん頬ぽおを上げた。「報告いたします！　第一主塔の防衛線は、すでに限界に達しつつあります……！」

「琺瑠副長は！」すぐさま訊きき返したヨハンの声は、多少なりともうわずっていなかっただろうか。

「ハッ！　まだ踏ふみとどまっておられます！」

「誰だれか、琺瑠副長以下、第一主塔の防衛についている者たちを呼び戻もどしに行け！」

「それでは、私が……！」血塗れの隊士がとって返そうとした。

「ベルクト・ファイアーノン！　君はいい！　少し休め！」

「あ……」血塗れの隊士は、ヨハンに名前を呼ばれたのがよほど意外だったのか、振ふり向いて目をまん丸くした。「いえ、ですが……」

「アシャー隊長補！　ファイアーノンは負傷している！　手当てを受けさせろ！」

「了りよう解かいでぇっす、副長ーっ！」

　三番副長直属隊、通つう称しようヨハン隊の隊長補を務めているコンラッド・アシャーは、やわらかそうな明るい色の巻き毛を揺ゆらしながらベルクト・ファイアーノンに駆けよってゆこうとした。

「お待ちください！」

　それを制する者がいた。

　二十七番無名隊の隊長、お下げのアーニャ・クルチバだった。
「負傷者の処置は我々が！　残念ながら、この状況下では他ほかにお役に立てることがありませんので！」

　無名隊、とりわけ琺瑠の麾き下かにある者たちは、情報収集やその分ぶん析せきに特化していて、概がいして戦せん闘とう能力が高いとは言えない。それでも、己を最大限に活いかす知ち恵えと判断力さえあれば、邪じゃ魔まになるどころか、分をわきまえぬ猪いのしし武む者しゃよりもよほど有用だ。

「よし」ヨハンはうなずいた。「クルチバ隊長、戦傷者の扱あつかいは以後、君に一任する」

「どうもありがとうございます、ヨハンさま……！」クルチバは灰色の目を輝かがやかせ、小こ躍おどりして喜んだ。

　まだ十九歳のはずだが、容姿が幼いので、そんな仕し種ぐさをすると余計に子供じみて見える。年ねん齢れいのわりに冷静沈ちん着ちゃくで、その頭脳は稀け有うなほど切れ味鋭するどく、外見の特とく徴ちょうを有効活用して狡こう猾かつな諜ちょう報ほうを行ってみせるなど度胸も満点の、将来を嘱しょく望ぼうされている琺瑠の秘蔵っ子。それがヨハンの頭の中に入っているアーニャ・クルチバの人物評だが、どうもおかしい。

　ヨハンは右手の中指で眼鏡めがねのブリッジを押しあげた。
「……さま、だと？」

「お、お任せください、副長！」クルチバは慌あわてて身をひるがえし、二十七番無名隊の隊士たちを引き連れてファイアーノンに突とつ進しんしていった。

　十四番守護隊隊士ベルクト・ファイアーノン。出身はラフレシア第三帝てい国こく。年齢は二十三歳。両親はすでに亡なく、妹が一人いて、クァラナドで働いている。その性質は、一言でいえば善良。剣けんの腕うでは並だが、義と仲間のためならば自らの身を盾たてとすることを厭いとわず、秩序を重んじて上位者の命令には決して背そむかない。どんな仕事であろうとも嫌いやな顔一つせずに、しかも率そつ先せんしてこなす生き真ま面じ目めな男だ。

隊士のことは、古参から新参まで一人の例外もなく、名前や顔、簡単な履り歴れき程度は承知している。ヨハンは副長として、その必要があれば、彼らに死ねと命じねばならないのだ。たとえ一つの義に殉じゆんずる同志であり、そのときがくれば自身も死する覚かく悟ごであるとはいえ、その者の生きてきた軌き跡せきを微み塵じんも知らずに命を捨てよとは口が裂さけても言えない。

ファイアーノンは手傷を負っている。それも、あの血の失い方からすると、軽傷ではない。あれでは満足に剣を振るうことあたわぬ。彼の性格を考えれば、そうであっても身体からだが動くかぎり戦い、戦って、戦い果てるつもりだろう。

そうはさせぬ。

自己満足で無む駄だ死じにされてたまるものか。

その血は最後の一滴まで義のために流せ。それがいま叶かなわぬのならば、這はいつくばってでも生きながらえよ。

死ぬな。

一人として、義の礎いしずえにならず犬死にすることは、このおれが許さぬ。

ファイアーノンにつづいて、浅からぬ傷を負った者たちが続々と大講堂に転がりこんできた。クルチバは麾下の隊士たちを素す早ばやく差配して、彼らを座らせたり、鎧よろいを脱ぬがせて寝ねかせたりしている。

第一支し塔とうへの伝令には、三番副長直属隊から、アシャー隊長補によって選ばれた二名の隊士が向かった。

主塔の一階は真ん中の大講堂がその大半を占しめ、外への出入り口と階段のあるホール、それから廊ろう下かとが、これを取り囲んでいる。

ホールをふくめれば大講堂の外側を一周している形の廊下からは各支塔への通路がのびているが、障しよう壁へきを下ろして分断することのできる仕し掛かけがあり、すでに第二支塔、第三支塔と主塔とは分断されている。現在は第一支塔と大講堂、第四支塔が一列に繋つながっている恰かつ好こうだ。

第一支塔が落ちるとなれば、あとは大講堂で極力粘ねばって、その間にファイアーノンのような負傷者を第四支塔まで後退させるしかない。ここでなんとか敵を食い止めて、彼らを地下納骨堂の隠かくし通路から外へ逃にがすのだ。

否いな。

大講堂では広すぎる。防衛には適さない。敵の数は不明だが、間ま違ちがいなくこちらより多いだろう。狭せまい場所で壁かべを作るべきだ。

壁は最小限の人数でいい。

できるだけ多くの戦力を羅叉たちに合流させるのだ。

大講堂に降りてすぐ、琺瑠が第一支塔の防衛線で陣じん頭とう指揮をとると言いだして、ヨハンはこれを認めた。副長は同格だ。ヨハンが止めたところで、琺瑠は聞かなかっただろう。それに、後方で二人の副長が雁がん首くびを揃そろえていても仕方ない。一人は最前線にいるべきだ。琺瑠は隊士たちに人気がある。琺瑠がそばにいれば奮い立つ者も少なくないはずだ。あれはあれでよかった。琺瑠もおれも間違ってはいない。にもかかわらず、おれは悔くいている。

「アシャー隊長補！」

「はーいっ！」

「我が隊はこれより、撤てつ退たいしてくるであろう琺瑠副長らを掩えん護ごしにゆく！」

「諒りよう解かいでーっす！」

間延びした口調が気にくわないが、嫌いや味みを言われようと叱しつ責せきされようと一向にめげない無む頓とん着ちやくさと、天てん真しん爛らん漫まん、天性の陽気、そして忠実さはえがたい資質だ。五百名を超こえる隊士の中でも、ヨハン・サンライズの下で平然と、それどころか楽しげに立ち働くことができるのは、コンラッド・アシャーくらいのものだろう。

「クルエルフォート隊長！」

「ハッ！」

　ヨハン直属の二十五番無名隊を率いるハインツ・クルエルフォートは、濁にごったエメラルドグリーンの瞳ひとみをぬらぬらと輝かがやかせてヨハンに駆かけよってきた。ヨハンはだしぬけにクルエルフォートの肩かたまで届く癖くせの強い銀ぎん髪ぱつを引っつかんだ。

「──ふっ……!?」クルエルフォートはさすがに仰ぎよう天てんしたようで、端たん整せいなのにどこか醜しゆう悪あくな顔をゆがめた。「副長……？」

「この髪かみを切れ」ヨハンはクルエルフォートを引きよせて、その耳みみ許もとで囁ささやいた。「ずっと目め障ざわりだった」

「……は？」

「今後は琺瑠副長のよき手足となることだ。私よりはよほど仕え甲が斐いがあるだろう。彼女は優ゆう秀しゆうだし、部下思いだ」

「副長、それならば我が無名隊も」

「君らでは捨て石にもならぬ」ヨハンはクルエルフォートの髪から手を離はなした。「三番隊以外は皆みな、退かせる。君の隊は退路を確保し、至急総長に連れん絡らくを」

「……そうですか」クルエルフォートは唇くちびるの片かた端はしをつりあげて肩をすくめてみせた。「諒解いたしました。ですが、あなた以外の手足になる気はありませんよ。誰だれに仕えるかは私が決める。それが私の生き方です」

「莫ば迦かめ」ヨハンはクルエルフォートに背を向けた。「いやしくも我が団の一員であるのならば、ただ義のために生きよ」

　クルエルフォートは何も言わずに二十五番無名隊を率いて第四支塔へと向かった。これで今、大講堂にいるのは、負傷者たちと二十七番無名隊、後備隊が一つ、あとはヨハンの三番隊だ。

　ヨハンは一度、深呼吸をして、腰こしに提さげた名めい匠しようダグラス・トゥースが鍛きたえたる「月明」の柄つかにそっと手をかけた。

　我が心は曇くもりなき鏡のごとく、流れず静かにとどまる水のように、どこまでも平静だ。

「クルチバ隊長！」

「は、はい！」少し離れた場所で負傷者に付き添そっていたクルチバが、弾はじかれたようにこちらを向いた。

「琺瑠副長が戻もどり次し第だい、総員で第四支し塔とうを経由して撤退せよ！」

「……えっ!?」クルチバは一いつ瞬しゅん、目を剝むいたが、唇を嚙かんでうなずいた。「──かしこまりました！　我が二十七番無名隊は総力をあげて負傷者の撤退を支し援えんします！」

　やはり頭のいい娘むすめだ。賢かしこい女は嫌きらいではない。

「遺い漏ろうなきよう頼たのむ」ヨハンは眼鏡めがねを外した。

　いくらか迷ったが、クルチバがいるほうへ向かって放ほうった。

　眼鏡は床ゆかに落ちた。

　すかさずクルチバと隊長補のカロリーナ・シェルベリが眼鏡に飛びついていった。

　ふだんならば、怒ど鳴なりつけるところだが、まあ、よかろう。

　ヨハンは振ふり返ってアシャーに笑いかけた。「行くぞ、コンラッド」

「は──れっ……？」コンラッド・アシャーは一瞬、ぽかんと口を開けたが、すぐに笑い返してきた。「はいはーいっ！　どかーんと行っちゃいましょう、ヨハンっち！」

「……その呼び方はよせ」

「ですよねー。調子に乗っちゃいました！　ごめんなさいっ、ヨハン副長！」

「わかればいい」

　ヨハンはコンラッドら三番隊の十三名を従えて大講堂を飛びだし

た。

　第一支塔の防衛隊は、すでに第一支塔と大講堂を結ぶ通路まで退いていた。幅はば六メーテル、高さ四・五メーテルの通路で隊士たちが団子になっている。その向こうにいるだろう敵の姿も見えないほどの密集具合だ。それでも味方はじりじりと後退している。おそらく、自分たちの意思で退たい却きやくしようとしているのではない。そんな余よ裕ゆうもなく、敵の圧力をなんとか受け止めて、支えようとしているのだが、押されているのだ。

　ヨハンは駆けながら後列の隊士たちに向けて叫さけんだ。「後方にいる者！　急ぎ下がれ！　大講堂へ……！」

　冷血副長の命令に従わぬ者はめずらしい。ヨハンが下す厳げん罰ばつは隊士の間で、意趣返し、とも呼ばれている。逆らえば何をされるかわかったものではない。隊士たちは皆、そう思っているはずだ。それでいい。組織がまとまるためには、鬼おにが一人、どうしても必要なのだ。さもなくば、いかに団結していても、ふとした弾はずみで箍たがが緩ゆるむ。秩ちつ序じよの番人は、いついかなるときも鉄の規律を維い持じしなければならない。

　今も、後列の隊士たちはただちに反応した。十五人程度の隊士がどっと後退して、できた隙すき間まにヨハンらが突とつ入にゅうした。三番隊は一列縦隊で隊士たちをかきわけながら前進した。「――下がれ！　下がれ……！」「怪け我が人に手を貸してやれ！」「ここはいい！　我々に任せろ！　大だい丈じよう夫ぶだ！」「下がれ、退け……！」

　隊列の後ろから崩くずれるように後退しはじめたことで、全体的に腰が引ける恰かつ好こうになって、じりじりどころかぐんぐん押されだした。ぎりぎりのところで均きん衡こうを保っていたのだ。ちょっとしたことでこうなる。やむをえない。予想していた。それでもやるしかなかった。このままではじり貧ひんだ。最大限の戦力を羅叉に合流させるという目的を達することはできない。

「珐瑠！　珐瑠副長……！」ヨハンは声を張りあげた。

　前方に珐瑠の兜かぶとが見えたような気がしたのだ。

　あのあたりは最前列だ。珐瑠め、無茶を。女とはいえ、剣けんの腕うでは並なみ大たい抵ていではないが、〝女夜や叉しや〟と称し

ようされた妹の釈拿シヤクナほど非ひ凡ぼんなわけではない。愛用している鍛か冶じ士アラン・ガーランドの幅はば広ひろ曲刀「ナァガ」は、剣身の先のほうが重くなっており、異様な斬ざん撃げきの速度と破は壊かい力が生みだされる。むろん、そのぶん扱あつかいは難しい。琺瑠はうまく使ってみせるが、そんな変わり種を得物に選ばざるをえないのも、真っ向勝負では男の筋力にかなわないからだ。琺瑠、もういい。もういいから。

　あと少しだ。十メーテルもない。

　八メーテル、いや、七メーテルくらいか。

　君は前を向いて、休むことなく剣を振りまわしている。

　わずか七メーテルがやけに遠い。

　いくらなんでも固まりすぎだ。これでは身動きもとれなかろう。下がろうにも下がれない。先にコンラッドが伝令のために送った三番隊の二人も、ここで立ち往生していた。

「副長……！　これじゃあ……！」コンラッドが前の隊士を押しのけながら叫んだ。

「私は前に出る……！」ヨハンは右側の壁かべを見た。

「でも、どうやって⁉」

「行く手が闇やみに閉とざされているのならば、己おのれが光となって照らせばいい……！」

　このエルデンに義の旗を掲かかげ、不可能を可能にしてみせた養ち父ちの、それが教えだ。

　不可能と嘆なげくことなかれ。ただひたすら可能と信じ、心身を鍛え抜ぬけ。

　荒あれ野にも険山にも道は必ずある。

　見えぬ目を啓ひらき、鋼はがねの手足で切り開くのだ。

「──ヨハン・サンライズ、参る……！」

　ヨハンは右側の壁めがけて激突する勢いで駆かけた。跳とびあがって、壁を蹴けった。蹴った。蹴った。蹴りつけ、壁を大地として奔はしった。七メーテルは決して遠くなどなかった。すぐだった。ヨハンは最後の一歩で敵の真っ直ただ中なかへと飛びこんだ。報告どおりだった。敵の中に人ではないものが多数、混じっている。人間よりも大おお柄がらで、肌はだは赤や青。体毛も同系統の色で、顔がん貌ぼうは凹おう凸とつが激しく、いかにも凶きよう暴ぼうそうだ。鬼人オーガに似ているが、体格は人間に近い。隙間だらけの黒っぽい服を着て、棘とげ付きの大きな剣を持ち、左ひだり肩かたから左腕に可動式らしいやはり棘付きの盾たてを装着している。見た目の印象でいえば、人間と鬼人の中間だ。まさか混血、半鬼人ハーフオーガなのか。

　一匹ぴきの半鬼人がヨハンを見上げた。その頭頂部に吸いこまれたヨハンの月明はたやすく眉み間けんまで達した。ヨハンは床ゆかに降り立たずにその半鬼人を蹴け倒たおしながら月明を引き抜き、今度こそ着地するなり横の半鬼人の首を斬きり飛ばした。頭部を失った半鬼人の胸を蹴飛ばしてその後ろにいる敵どもを怯ひるませ、思わずあとずさった半鬼人の懐ふところに飛びこんで喉のど頸くびに月明を突つき立てた。抜いて、その右みぎ隣どなりの半鬼人の左眼球を剣先で貫つらぬき、左隣の半鬼人の右眼球を一突きした。飛びかかってきた半鬼人の膝ひざを蹴り砕くだいて、別の半鬼人の首を刎はねた。

　剣の鍛たん錬れんは呼吸を意のままに行うことから始める。三分吸いつづけ、三分止めて、三分吐はきつづけることができれば、己おのが身体からだの隅すみ々ずみまで自身の精神で制せい御ぎよしうるであろう。その練れん磨まは剣を握にぎらずとも、執しつ務むしながらでもできる。片時も剣を忘れぬことが肝かん要ようだ。

　ヨハンは息をするように敵を把は握あくして剣を振ふるう。我が耳じ目もくは敵を逃のがさぬ。我が月明は手指同然なり。斬る。斬る。斬る。突く。突く。突く。斬。斬。斬。突。突。突。通路の床はまたたく間に累るい々るいたる死し屍しで覆おおわれた。今や我が剣の届く範はん囲いに敵はいない。怖おじ気づいたか。半鬼人どもはヨハンから五メーテルほど距きよ離りをとって、棘付きの盾を構えている。

「……ヨハン」

「君は下がれ、琺瑠」ヨハンは振り返らなかった。

　最前列で奮ふん闘とうしていた琺瑠が無傷であるはずもない。汚けがらわしい外げ道どうどもの血だけがその鎧よろい兜かぶとを染めているわけではなかった。どの程度の手傷を負っているのか。確かめたい欲求はあるが、見るべきではない。琺瑠。君がとても、とても傷ついていたら、おれは平静を保っていられぬ。おれは怒いかりに我を忘れ、太た刀ち筋は乱れて、君を逃にがすことも難しくなるだろう。ヨハンは念じた。我が心は曇くもりなき鏡のように、流れず静かにとどまる水のごとし。おれは義に殉じゆんずる。ただ義のみが我が心にあれば、くじけることも、崩れることも、砕くだけることもない。

「下がれ、琺瑠副長。ここは私が引き受ける」

「……総員、後退しなさい」しぼりだしたような琺瑠の声だった。「急いで！　後退！　ただちに後退しなさい……！」



　それでいい。琺瑠。君は判断を違たがえない。なぜなら、君は聡そう明めいだからだ。君にはおれの考えていることがわかるだろうし、それが今この状じよう況きようでは最善だということも理解しているだろう。正しければ、何があろうと、万ばん難なんを排はいしてそれを為なすべきだ。君も同意してくれるだろう。だから、おれは君を愛しているのだ。

　隊士たちが撤てつ退たいしてゆく。

　ヨハンは月明の切っ先を敵に突きつけて微び動どうだにしなかった。

　琺瑠。

　去りゆく君は最後に振り向いただろうか。

　否いな。

　君は振り返らなかっただろう。

　そうあってほしい。

「副長ーっ！」コンラッドがヨハンの隣まで進みでてきた。「ヨハン隊、最後まできっちりお供しまーっす！」

「なれば」ヨハンは口くち許もとをゆるめた。「私とともにここで死ね」

「喜んで！」何がおかしいのか、コンラッドは愉ゆ快かいそうに笑った。

「義のために！」この声は三番隊隊士ダン・ジョイコットだ。

「義のために！」同隊隊士アーラン・ブリモッツ。

「義のために！」同じくエミリオ・アンドレーロ。

「義のために！」バデェイ・ナサオ。

「義のために！」オットー・グレアンディア。

「義のために！」チャド・スペンサー。

「我らが副長のために！」ラフレシア第三帝てい国こくカレーナ自治州出身のパンツェッタ・〝赤毛のレッドヘアード〟・エルランディーノは、いつもコンラッドと一いつ緒しよに騒さわいでいる明朗闊かつ達たつな男だ。

　一同どっと笑って、ジョイコット、ブリモッツ、アンドレーロ、ナサオ、グレアンディア、スペンサーが相次いで、副長のために、

と言いなおした。

「副長のために……！」声の大きいドーソン・サッティアーが叫さけんだ。

「副長のために！」ジョン・バッソー。

「副長のために！」フェルナンド・ダルタニアン。

「副長のために！」イアン・カーツ。

「副長のために！」莱ライ慶ケイ。

「副長のために！」ジェフリー・タオ。

「我らが副長のために……！」ユキシ・庚コウは入団三巡じゆん月で後備隊から三番隊に抜ばつ擢てきしたばかりの若者で、剣けんの冴さえは天才的だが謙けん虚きよにして素す直なおなので、皆みなにかわいがられている。

「そろいもそろって愚おろか者ばかりだ、君らは」ヨハンはかすかに笑い、その笑えみを隠かくそうとしなかった己おのれを内心で嗤わらった。「──その莫ば迦かどもを選えり抜ぬいて我が手足としたのは私か。度し難がたいな、我ながら」

　ヨハン・サンライズ以下、十六名。

　秩ちつ序じよの番人三番副長直属隊、通つう称しようヨハン隊は通路に肉と鋼はがねの壁かべを作った。

　敵は盾たてを構えたまま動かない。

　仮かり初そめの静せい寂じやくは今こそ破られるべきだ。

　我が意志で。

　この刃やいばで。

　雄お叫たけびで。

「突とつ撃げき……！」

「応っー！」「応ッ！」「応！」「応……！」「応！」「応ッ！」

「応……！」「応ー！」「応ッ！」「応！」「応っ！」「応ッ！」「応！」「応！」「応っ……！」

　もはやヨハンは、同志たちの姿を見ることもその声に耳を傾かたむけることも他の手段でその動向をうかがうこともしなかった。必要ない。ここは死地だ。終着点だ。彼らは恐おそれなど感じていないだろう。その身が打ち砕くだかれようとも頓とん着ちやくしないだろう。誰だれかに何か言われるまでもない。彼らは斃たおれるまで、立ちあがることができなくなるまで、ただひたすら義のために戦うだろう。だからヨハンは己の戦いに集中した。敵にまっすぐ突つっこんでゆき、盾と盾の合間に月明をすべりこませ、その向こうの半鬼人の喉のどを抉えぐり、怯ひるませて肩かた当あてで棘とげをはねのけながら盾と盾の間へと押し入り、半鬼人と、半鬼人と、半鬼人を立てつづけに斬きって、突いて、斬った。敵は仲間が倒たおれると、必ずその隙すき間まを埋うめるようにして別の敵が進みでてきた。彼らには端はなから剣と剣とで斬り結ぶつもりなどないようだった。そのような指示が出ているのかもしれないし、そもそもこの密集状態において半鬼人の持つ大おお仰ぎような武器は有効ではない。彼らはとにかく盾と身体からだとで三番隊を押し返そうとしているようだった。そうはさせじとヨハンは敵の列に穴をあけてそこに入りこみ、なんとかして押し広げようとした。

　月明よ、養ち父ちよ。どうかおれに力を貸してほしいとは申さぬ。あなたがいてくれたことで、それだけで、十分おれの力になっている。あなたは死してなお、太陽のごとく我が頭上に輝かがやいている。その光が褪あせることは決してない。褪せさせてたまるものか。そのために我が団は不ふ滅めつでなければ……！

　盾。盾。盾。盾、盾、盾。敵は身を寄せあって盾と盾とをほとんど密着させた。猪口ちよこオざいな。ヨハンは一気に詰つめよって盾の縁へりに左手をかけた。半鬼人ハーフオーガはぎょっとしたようだった。思いきり盾を引っぱり、できた空くう隙げきから半鬼人の口こう腔こう内に月明を突っこんだ。半鬼人は何を思ったか口を閉じようとした。ダグラス・トゥースの名刀だ。月明を嚙かみ砕くだけるわけがない。ヨハンは半鬼人の口から月明を引き抜きながら、降ってきた棘付きの剣を紙かみ一ひと重えでかわした。同時に盾ごと半鬼人を引き倒したので、一人分の空間ができあがった。すかさず飛びこみつつ、右の半鬼人の首に月明を叩たたきこみ、左の半鬼人の横っ面つらに肘ひじ打ちを見み舞まった。すぐ前の半鬼人が盾を前面に出して体当たりしてきた。

よけられぬ。

狭せまい。身動きがとれぬ。嗚あ呼あ──、

ここが境界だ。

おれはとどまるのか、超こえるのか。向こう側へとゆけるのか。

ゆけるか、ゆけないか、可能か、不可能か、ではない。

おれはゆくのか。

養ち父ちがいた場所だ。

決してたどりつけぬだろうと心折れかけたことは千万回。

それでもおれは進むのだと千万回、己を叱しつ咤たした。

さあ、ゆこう。

今こそゆこう。

おれは人の領域を超える。

見えぬものを見、聞こえぬものを聞き、いと高き壁を飛び越こえ、斬れぬものを斬る。

ヨハンの肉体は自らの意思ではなく何か大いなるものによって動かされた。ヨハンはそれを奇き妙みようとは思わず、何らの違い和わ感かんも覚えなかった。その境目を超えた途と端たん、この身は空気同然で重みも抵てい抗こうも感じない。ヨハンはただ何げなく腕うでを振ふりまわすように月明を振った。柄つかを握にぎる両手には羽う毛もうをつかむほどの手て応ごたえもなかった。空間自体が割れるような、ねじ切れるような音がした。月明が描えがいた軌き跡せきは雪白色をした圧力変化の波となった。その波は半鬼人ハーフオーガどもの盾を容易に引き裂さいて、盾に身を隠していた半鬼人どもをたやすく斬り裂いた。ヨハンは素早く二歩下がって、月明を下段に構えた。

「──破天一流天技〝残ざん空くう〟」

いまだ養ち父ちには遠く、遥はるか遠く及およばぬ。当然だ。

　それでも、ほんの少しだけ近づくことはできただろうか。

　ヨハンはちらりと振り返った。エミリオ・アンドレーロとジョン・バッソーが床ゆかに倒れ伏ふしている。アーラン・ブリモッツ、イアン・カーツも傷が深そうだ。他は軽傷だが、無傷の者はほとんどいない。

「副長！　みんな、まだまだ元気ですよーっ！」コンラッドがからからと笑ってみせた。

「ちょっと疲つかれてぶっ倒れてるやつもいますが、何、そのうちまた起きあがりますって」パンツェッタ・〝赤毛のレツドヘアード〟・エルランディーノも負けじと笑い声をあげた。

「ッシャーッ！」奇き声せいを発して自分に気合いを入れたのは若いユキシ・庚コウだろう。

「君らに言われるまでもない」ヨハンはそっと息を吐はいた。「どのみち我ら残らず屍しかばねと成り果てるまで、この先には一人も通さぬ。一歩もゆかせぬ」

　敵がふたたび動きだした。

　急に身体が重くなった。

　おれはあと何度、あの境界を超えて向こう側へとゆけるだろう。際限なく、と言いたいところだが、才乏とぼしく、練足りぬ身だ。二度。せいぜい、三度か。

　ままよ。

　時を稼かせぐことができれば、それでいい。

　ヨハンは足を進めようとした。

　敵が止まった。

「￡бγΘд￥жζφψψψψψ……！」

　共通語ではない。どうも人間の言葉ではなさそうだ。

　そいつは半鬼人どもをかきわけ、押しのけ、蹴け飛とばし、突き

倒しながら進みでてきた。

　肌はだ赤く、毛もう髪はつは緋ひ色いろで、意外なほど美しい青の瞳ひとみには獰どう猛もうな狂きよう気きとともに、狡こう猾かつそうな知性の輝きが宿っている。隙すき間まだらけの黒い装そう甲こう服は醜しゆう悪あくきわまりないが、胸むな板いたや尻しりの厚みは見事だ。手足も太いが、太すぎることはない。引き締しまるべきところは引き締まっていて、剛ごう力りきのみに偏かたよらず、柔じゆう軟なん性と敏びん捷しようさを兼かね備えた肉体だということが見てとれる。剣けんと盾たては他の半鬼人と同様だ。むしろ、他の半鬼人どもが彼に倣ならっているか、従っているのだろう。

「我ガ名ワ、ゴザブロ」多少ぎこちないが、聞きとれる範はん囲いの共通語だった。「──人ト鬼人オーガノ狭はざ間まニ生マレシ、がっぞノ族長ナリ」

「そのゴザブロとやらが私に何の用だね」

「一いつ騎き討うチヲ、所しよ望もうイタス」

「ほう」ヨハンは表情を変えなかった。「受けて立とう」

「副長ーっ！」コンラッド・アシャーは、いきなり大声で他ひ人とを呼んで何を言うのかと思ったら、声せい援えんを送ってよこした。「がんばってーっ……！」

　まったく調子が狂くるう。

　ヨハンはため息をつきかけて、こらえた。「皆みなを下がらせろ、コンラッド」

「諒りよう解かいでーっす！」

「さて──」ヨハンはゴザブロに神経を集中させた。「かかってきたまえ」

「ＨＡＨＡＨＡＡＡＡ……！」ゴザブロの顔つきが豹ひよう変へんした。「イイ度胸ダナァァ！　吠ほエ面づらカカセテヤルゼ……！」

　人と鬼人オーガの狭間に生まれしガッゾ族。そのような生き物が

いるという話は耳にしたことがある。やはり、半鬼人か。他の半鬼人どもは鬼人の獣じゆう性せいを強く感じる容よう貌ぼうだが、族長だというゴザブロの印象は違ちがった。肌の色さえどうにかすれば、人間に見えないこともないだろう。このエルデンには、ゴザブロよりも獣けものじみた人間がごろごろしている。最初はそう思った。

　今は違う。鬼人など問題にならない。その顔貌も、身のこなしも、餓うえに餓えた野獣そのものだ。

　ゴザブロは飛んできた。体感的には突とつ進しんと斬ざん撃げきが同時だった。受けることはできない。下がっても逃にげられまい。否いな。実際には考えている余よ裕ゆうなどなかった。ヨハンの身体からだは勝手に動いていた。横へ。旋せん回かいするように、左へ。ゴザブロはまるで初めからそうするつもりだったかのように、ヨハンの目の前を通りすぎていった。

　腹の底がつめたくなった。

　おれとしたことが。

「ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

「──わっ……！」

「コンラァァーッド……！」

　ゴザブロはヨハンの後ろに控ひかえていた三番隊に猛然と襲おそいかかった。標的にされたのはコンラッドだ。コンラッドはとっさに剣を振ってゴザブロの棘とげ付き剣を防ごうとしたが、弾はじかれてしまった。それどころか、吹ふっ飛ばされた。やられたのか。わからない。ヨハンの身体はまたしてもひとりでに動いた。あの境界を超こえ、そういう手て筈はずになっていたのかドオゥッと押しよせてこようとした半鬼人どもめがけて残空を放った。半鬼人どもはその一撃で怯ひるみ、あとずさりさえした。ということは、今の動きはおそらく、予定されていたものではない。つい動いてしまった。たぶん、そういうことだろう。

「ゴザブロ……！」ヨハンは叫さけびながら踵きびすを返して駆かけた。ゴザブロは振ふり向くなり棘付き剣を繰くりだしてきた。

「ＳＨ……！」「□□ッ……！」ヨハンは棘付き剣を月明で突いた。切っ先の一点のみに集中させたヨハンの全膂りよ力りよくは、ゴザブロの怪かい力りきで振るわれた棘付き剣を撥はね返した。「ＭＵＯ……！」「よくも……！」ヨハンは体勢を崩くずしたゴザブロに斬きりかかった。ゴザブロは盾でかろうじて弾いた。まだだ。ヨハンは二段突きをお見み舞まいしてゴザブロの盾を砕くだいた。ゴザブロはよろめいた。「──ＮＡＨ……！」「勁ケイッ……！」ヨハンはさらに攻せめた。攻めたてた。ゴザブロは下がった。横に跳とんだ。月明をかわそうとして、かわしきれず、いくつもの傷を負った。とはいえ、どれも浅い。人間ではないのだから当然といえば当然だが、その身体能力は人間離ばなれしている。

　もっと。

　もっとだ。

　捨て身の覚かく悟ごで必殺の一撃を放たねば、やつをしとめることはできまい。

　身み震ぶるいがした。

　ヨハンはこれまでより足一つぶん深く踏ふみこんだ。「──憤フンッ……！」

　月明がゴザブロの胸を斬り裂さいた。

　まだ足りぬのか。否。

　違う。

「〝狂乱マドネス〟ッッッッッッッッッ……！」

　ゴザブロは目の色を変えた。比ひ喩ゆではない。青かった眼まなこが、実際に異なる色しき彩さいを帯びた。赤みがかって、紫むらさき色いろに近くなっている。

「ＩＲＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　くる。速い。感覚的には今までの倍。それくらいに感じられる勢いだ。ゴザブロの棘付き剣が、右から左から上から、ボォンブォン

ボォンブォン矢や継つぎ早ばやに襲いかかってきた。ものすごい速さだが、見える。目で見ているだけではない。すべての感覚でとらえている。棘付き剣は床ゆかを、あるいは壁かべをザムザム斬り砕いた。ヨハンにはかすりもしない。無む駄だだ。貴様ではおれを殺とれぬ。

「破天一流──」

　ヨハンはすっと後退して、己おのが胸に月明の柄つか頭がしらを突き立てるような構えをとった。

　この身は空くうとなる。

　天空の威い力りよくよ、月明に宿れ。

「〝七しち星せい〟」

　ヨハンは突進しながら月明を突きだした。

　一ツ星はゴザブロの左ひだり肩かたに墜おちた。「──ＤＡ……！」

　二ツ星は右肩に。「ＫＡＨ……！」

　三ツ星はこめかみをかすめた。「ＳＨ……！」

　四ツ星は右胸に穴を穿うがった。「ＧＯＨ……！」

　五ツ星は左腕うでを貫つらぬいた。「ＧＹＡ……！」

　六ツ星は右腿ももを抉えぐった。「ＨＡ……！」

　七ツ星は土手っ腹に突き刺さった。「──ＢＯＨＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ……！」

　ヨハンはゴザブロの腹部から月明を引き抜ぬくなり、その素そっ首くびを叩たたっ斬ろうとした。

　手が止まった。

　吸いよせられるように左上へと視線を向けた。

　男が一人、そこにいた。天てん井じようと壁に足を突っぱって身

体を支えている。不自然な体勢だが、無理をしているようには見えない。ヨハンの胸は波立たなかった。

　灰色の髪かみ。同色の目。鷲わし鼻ばな。薄うすい唇くちびる。まるで似合わぬ、やたらと派手な服を身にまとい、何本もの釘ネイルをその手に持っている。ジェイ。一別以来だ。ヨハンは瞑めい目もくした。

「破天一流──」

　この身が空くうとなれば、我が心もまた空となる。

　空となれば自在なり。

　迷いはない。恐おそれもない。

「〝無む明みようの見切り〟」

　ヨハンは無念無想でただ身体からだが動くに任せた。

　月明は縦じゆう横おう無む尽じんに振るわれて、次々とジェイの釘ネイルを叩き落とした。

　何ほどのこともない。

　ヨハンはゆっくりと目を開け、青眼に構えた。

　ジェイが壁を伝ってすぐそこに降りたった。「ゴザブロ、下がれ」

「──シ、シカシ……」ゴザブロはまだ立っているが、見るからに満身創そう痍いだ。

「貴様がくたばったら、誰だれが我が主マイ・ロードのために野や蛮ばんなガッゾをとりまとめる。下がれ」

「ウヌゥ……」ゴザブロは呻うめきながらあとずさった。

　ジェイは袖そで口ぐちから出した二本の長い釘ネイルを両手に握にぎり、唇の端はしをゆがめた。「ヨハン・サンライズ。亡なきデニス・サンライズとは比べるべくもない不ふ肖しようの養子むすこだと思っていたがね。どうしてどうして、なかなかやるようだ」

「先代の名を軽々しく口にしないでもらおう」

「故人を偲しのんではいけないかね」ジェイはわざとらしく肩かたをすくめてみせた。

「真っ向勝負ではかなわぬと踏んだか」

「何だと……？」

「口こう舌ぜつをふるって私を乱さねば勝てる気がしないのだろう」

「貴様」ジェイはわずかに顔を引きつらせた。

「それは正しい。ジェイ、君に勝ち目はない。私にはわかる」

「上から物を言うなよ、青二才が」

「上も下もない。君はずいぶん揺ゆらいでいる。何かあったのかね」

「二度と減らず口をたたけんようにしてやる」

「随ずい意いに」

「貴様は死ね」ジェイは一いつ切さいの表情を消して、かすかに腰こしを落とした。

　ヨハンは瞑目しようとした。

「ＳＴＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＰ……！」

　あれほど寂せき然ぜんと凪ないでいた胸がざわついた。

　この声。

　ああ——、

　この声は。

　何度も何度も思いだした。否いな。思いだすまでもなかった。脳のう裏りにはっきりと焼きついている。目をつぶるとあの姿がまざ

まざと浮うかんできて、叫さけびだし、暴れまわりたくなる日々が長くつづいた。夢に見て、目が覚めることもある。

　縦七メーテル、横七メーテルほどの穴だった。

　深さ十メーテル以上の落とし穴だった。

　その底に尖とがった金属の棒がびっしりと並べられ、養父はその中にいた。

　やや前のめりの姿勢だった。

　何本もの棒にその身を貫かれていた。

　腕。肩けん甲こう骨こつのあたり。背の真ん中。腰。尻しり。太腿。膝ひざ。脹ふくら脛はぎ。養父の後頭部からも、尖った棒が突つきだしていた。

　養父はそんなふうにして一いつ瞬しゅんで息絶えた。

　誉ほまれ高い太陽鬼のあまりに無残すぎる最さい期ごを、やつが嗤わらった。

　あの嘲ちよう笑しようが頭にこびりついて離はなれない。

　□□Ｋｕ……。

　Ｈｙａａ……Ｈｙａａ……Ｈｙａａａ……。

　Ｋｕｕｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……ゲラゲラゲラゲラゲラレゲラゲラゲレラゲラ！

　やつがその汚けがらわしい口から吐はいた一言一句まで、正確に覚えている。忘れられるはずがなかった。

　こいつは傑けつ作さくだ！

　やつはそうほざいたのだ。

　超ちよう大大大大大傑作だよ！　デニィィィス！　このバァァ――カ！　一いつ騎き討うちだって？　俺がそんなメンドクセエことをしなきゃならない義理がどこに？　ナァ――イよ。そんなものはどこを探したってナァ――イ！　ありゃしねえ！　ホンン

ンットウにお前は救いようのないお気楽天然馬ば鹿か髭ひげ野や郎ろうだねえ！　ＧＹａａａｈ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａａａｈ……！

　あの声だ。

「どけＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥいッ！」

　間ま違ちがいない。

「どけどけどけＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥッ……！」

　ＳＩＸ。

「このド偉えらＡＡＡＡＡＡい我わが輩はいの前からどきやがれってんだよ、コナクソども……！」

　やつの声だ。

「邪じや魔まだ邪魔邪魔赤パジャマ青パジャマ黄パジャマＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ……！　超すげえッ！　我輩！　早口言葉ＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ！　ＶＥＲＹすんなァーり言えちまったＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！　Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ｈｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　半鬼人ハーフオーガどもが大おお慌あわてで通路の左右に寄った。仲間を突き飛ばそうが、ぎゅうぎゅう詰づめになろうが、おかまいなしだった。彼らは明らかに怯おびえていた。急いで言うとおりにしなければ、確実に自らの身に危険が及およぶ。全員が全員、そう思っているようだ。

　通路の真ん中に道ができた。

　ＳＩＸはその道を悠ゆう然ぜんと歩いてきた。

　黒を基調に、青と赤の紋もん様ようを配したボディスーツを着ている。その手首から、肘ひじから、肩かた口ぐちから、胸から、腰から、腿ももと腰の付け根から、膝から垂れさがっている無数の細い紐ひもは何だろう。おそらくただの飾かざりではない。武器のたぐいなのか。

　陶とう磁じ器きのように、あるいは、蠟ろうのように薄うす気味が悪いほど白い顔だ。裂さけ目のような唇くちびるは笑えみを浮かべているが、不ふ吉きつでしかなかった。禍まが々まがしい双そう眼がんは爛らん々らんと輝かがやいて、その光はときおり不ふ穏おんに、小刻みに揺れながらも、決して消えることはない。常にそこにあって、邪じや悪あくな意思をあたりに振ふりまき、毒さんとしているのだ。

　たしかに、若返ったような印象を受ける。

　外見年ねん齢れいなどあてにはなるまいが、あのころが三十歳かそこらだったとしたら、今は二は十た歳ち前後といったところだろう。

　もう一つ、大きな変化があった。腕だ。ボディスーツの右袖そでがだらりと下がっている。

　どうやら、右の肩口から先が失われているようだ。

　いずれにしても、ＳＩＸ以外の何ものでもない。

　だとするなら、やつの後ろにぞろぞろとついてくる、あのものどもはいったい何なのか。

「……莫ば迦かな……」瞬しゆん間かん、気が遠くなりかけて、ヨハンは低く呻うめいた。

　一人、二人、三人……六人、七人、八人──ぜんぶで、九人。

　よくよく見れば、身長や横よこ幅はばなどに多少ばらつきがある。身につけているボディスーツは先頭のＳＩＸが着ているそれと似ているが、無数の紐はついていない。そうはいっても、先頭のＳＩＸがジェイの横で足を止め、その後ろにずらずらと連中が並ぶと、眩暈めまいがした。

　九人とも、そっくりだ。

　ＳＩＸとほとんど同じ顔をしている。

　何だ、これは。どういうことだ。

　これでは、まるで──、

　ＳＩＸが十人いるかのようではないか。

「ヨオオオオオォォォォォォハアアアアァァァァァァァァァァァン」先頭のＳＩＸが、ウフフッ、と奇き妙みように女じみた笑い方をした。「ヨハン・サンラアアアアァァァァァイズ。糞クソつまらねえ顔しやがって、特とく徴ちようらしいものがねえから、覚えにくいったらないよ。だがァァァ？　顔以外はそんなこともないのかもしれないねえ？　ガッゾ族の若き英えい雄ゆうゴザブロを手玉にとって、この──」ＳＩＸは左ひだり腕うでででジェイを抱だきよせた。「我輩の忠実な犬、オバカ・盆ボン暗クラァーノ・〝ハチ公〞・ジェェェェェイをもケッチョンケチョンにしちまおうとしてただろう？　ヨハァァァン、お前にはそれができたんだねえ？　そうだろう、ヨハァァァン……？」

「我が主マイ・ロード！　俺は──」ジェイはすかさず抗こう弁べんしようとしたが、ウッと声をつまらせた。

「黙だまれよ、ジェェェェイ？　この能なしクズ野や郎ろうが」ＳＩＸの左手はジェイの左肩を強く、骨がミシミシ軋きしむ音がするほど、かなり強くつかんでいる。「お前だって本当はわかってるだろう？　いくらお前が誰だれにも顧かえりみられることのない村で一番不細工な洗せん濯たく娘むすめより無能でも、それくらいのことはわかるはずだよ？　ヨハァァァンは絶好調！　なァーんか知らねえが、壁かべを破っちまってる！　今ならどォーんなボール球がきてもホームランさ。敬遠球だってビーンボールだっておかまいなしだ。人生にはねえ。たまァーにそういうときがあるんだよ。長ァァーく生きてる我輩にはわかる。ゾーンに入った──とでも言やあいいのかねえ。よく言うだろう？　人間はァァァ。その能力の十ッパー？　二十ッパー？　細かいことはどうでもいいか、とにかァァーく！　ほんの何割かしか発揮してねえんだとさ。それが、何かの拍ひよう子しで百パー出ちまう。フルだよ、フルッ！　フルパゥワァー状態のやつは、まあ、どんな雑ざ魚こでも手に負えねえ。今のヨハァァァンがまさにッ！　それなんだよ？」

「……ＳＩＸ」

　ヨハンは深く呼吸をした。

　意識してゆっくりと吸いこみ、大きく吐はきださなければならぬほど、いつの間にか息が浅くなっていたのだ。

　まずい。

　おれは今、乱れに乱れている。

「ＳＩＸ……！」

「お前の呼び声はじつに情熱的だねえ、ヨハァァァン。我わが輩はいの股こ間かんにそびえる悪魔の塔デビルズタワーに響ひびくよ、ビンビンビンッとねえ。Ｋｅ□ＨｙａＨａＨａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈ」ＳＩＸはジェイを後ろのほうへ突つき飛ばした。

　ＳＩＸの後ろに並んでいるＳＩＸたちが、それを見み越こしていたように左右に分かれた。ジェイはＳＩＸたちの合間に倒たおれこんで、自じ慢まんの釘ネイルを床ゆかに落とした。すぐに起きあがりはしたが、釘ネイルを拾うこともなく、主人に目をやることもなく、うつむいてこちらに背を向けた。

　飼い主に打ち捨てられ、在りし日の寵ちよう愛あいをあきらめた犬のようだった。遠ざかってゆくジェイの後ろ姿に憐あわれみを覚えることはさすがになかったが、くすくす笑ったり愉ゆ快かいげに目を細めたりしているＳＩＸどもは、いったい何なのか。

　落ちつけ。

　冷静になれ。

　正面に目をすえつつ、広い、広い範はん囲いを見ろ。

　ここにいながら遠くにいるようにして、己おのれと周囲を把は握あくしろ。

「ヨハァァァァァァァァァン」ＳＩＸは首を右に傾かたむけて左目を見開いた。「いいねえ。お前は存外よさそうだ。我輩、お前のことがすっかり欲しくなっちまったよ。まったくノーマークだっただけに嬉うれしい誤算だねえ。掘ほり出し物ってやつさ。掘り出し物を朝から晩まで掘りまくるってのも、なかなか乙おつかもしれないねえ……？」

　鳥とり肌はだが立った。途と方ほうもなく不愉快で、とてつもなく頭にきたが、憤いきどおっている自分自身に愕がく然ぜんとした。この未熟者が。軽けい率そつすぎる。これではＳＩＸの思う壺つぼだ。ヨハンはあえて瞑めい目もくした。養ち父ちの死に様が浮

うかんで、心臓が弾はじけそうになった。慌あわてて目を開けた。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ、ＳＩＸ、ＳＩＸ。ＳＩＸめ。ＳＩＸめ。ＳＩＸめ……！

「貴様を殺す」

「ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ顔だよ、ヨハァァァン」ＳＩＸは奇妙に赤い舌で唇くちびるをチロチロ舐なめた。「ふだんはツッコミどころがなくってさっぱりおもしろくないお前のフェイスが、憎ぞう悪おにゆがんだ途と端たん、やたらとセクスィーになるねえ。屈くつ辱じよくに彩いろどられたお前はどんなにか愛らしいだろう？　我輩、つい想像しちまって激しく先走っちまいそうだよ。Ｋｉ□Hｙｙｙ」

　駄だ目めだ。抑おさえろ。あふれだす。流されそうだ。つかまれ。何に？　不可能だ。おれはおれ以外にすがるものがない。琺瑠。君の顔が思い浮かんでも、君に向かって手を差しのばすことなどできない臆おく病びようなおれだ。おれはもう、おれを止められぬ。

　ＳＩＸ。ＳＩＸ。ＳＩＸ。正直に言おう。本音を明かせば、おれは願っていた。貴様が生きていればいいと。おれの前に姿を現せばいいと。そうしたら、おれがこの手で殺す。絶対に殺す。八つ裂ざきにする。死んでも、死んでも、殺しつづける。この命が果てるまで、一万回、百万回、千万回、それ以上、いつまでも貴様を殺しつづける。それがおれの望みだった。

「死ね」ヨハンは上段に構えた。「──ＳＩＸッッッッッ……！　貴様は死ね……！」

　ヨハン・サンライズは何かひどく濁にごった奔ほん流りゆうのごときものと化した。ＳＩＸだ。ＳＩＸしか目に入らない。ＳＩＸめがけて突とつ進しんし、ＳＩＸに月明を叩たたきこんで、ＳＩＸを斬きり刻んで、ＳＩＸを殺す。ＳＩＸは顎あごを上げて胸を広げるような仕し種ぐさをした。こい、と言っているのだ。言われるまでもない。

　──ヨハン。

　声がした。

どこかで。

遠くで。

否いな。

近くで。

養ち父ちの声だった。

あれはいつのことか。養父はあぐらをかいて片かた膝ひざを立てていた。ごく稀まれに、他人の目がないとき、養父はそのような座り方をすることがあった。たとえば、ヨハンと二人きりの折に。そんなときの養父は、厳しくも際限なくやさしい目でヨハンを見た。

──己おのが為ために生きてはならぬぞ、ヨハン。我を捨てて他ひ人との為に生きよ。

それが養父の口くち癖ぐせだった。

総長として、ではない、養父として、養子むすこへの教えだった。

ヨハンは濁だく流りゅうと化した我が身を全力で急停止させた。

ＳＩＸが眉まゆをひそめた。「──アァァァ～ン……？」

危あやうく術中に陥おちいるところだった。否。すでにこの身は罠わなの只ただ中なかにいる。今さらではあるが、時は十分に稼かせいだ。この期ごに及およんでは、一人でも二人でも生きながらえさせるべきだろう。それが最優先だ。ヨハンは叫さけんだ。「──三番隊、退け……！　必ず逃にげ延びよ！　私もあとで行く……！」

「シィーックスナインズッッ！」ＳＩＸが左ひだり腕うでを振ふった。「雑ざ魚こどもを始末しろ……！」

やはりそのつもりだったか。ヨハンを引きつけて、後ろのＳＩＸどもに三番隊を襲おそわせる。三番隊はヨハンの命令がなければ絶対に下がることはない。シックスナインズ、というのか。連中の実力次し第だいという面もあるが、三番隊はすでに大半が負傷している。もしかしたら、なすすべなく壊かい滅めつさせられてしまうかもしれない。自身の怒いかりに、怨おん念ねんにとらわれて、かわ

いい部下どもを無む駄だに死なせるところだった。たやすくは逃げられまいが、生きのびられる可能性も絶無ではないはずだ。

　逃げろ。

　なんとしても逃げのびて、生きろ。

　生きてくれ。

　ヨハンは強くそう念じながら、振り向くゆとりはなかった。シックスナインズがヨハンの両りよう脇わきを駆かけ抜ぬけてゆく。連中に斬りつけることもできなかった。

　正面にＳＩＸがいるからだ。ただいるだけではない。向かってくる。

　守勢に回るわけにはゆかない。相手はＳＩＸだ。シックスナインズ。あのＳＩＸどもは何なのか。影かげ武む者しや集団か。いい。そんなことは。

　我を捨てて他ひ人との為に。そうだ。

　そうすることで、この身は空くうとなり、我が心もまた空となって、さすれば自在となる。

　ヨハンは無心に駆けた。先手をとる。その意識もなかった。自おのずと月明が真一文字に突つきだされた。

「――セクスィー忍にん法ぽう……」ＳＩＸはニヤリと笑った。「ＳＨＡＤＯＷ　ＲＵＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮヌッ……！」

　月明は狙ねらいあやまたずＳＩＸを貫つらぬいた。

　否。

　違ちがう。

　これはＳＩＸではない。

　残像だ。

　ヨハンは月明を引かずにそのまま右へ振った。手て応ごたえが

あった。何かを弾はじいた。そのあとだった。それが何かを知った。ＳＩＸだった。やつの左手だ。その手首から垂れさがっている紐ひも状の物体だった。紐、なのか。硬かたかった。月明でも斬れなかった。ヨハンは踏ふみとどまって前に出た。腰こしが引けかけていたのだ。

　揺ゆらぐな。怯ひるむな。恐おそれるな。

「征セイッ……！」

　裂れつ帛ぱくの気合いとともに、巻くように月明を繰くりだした。

　無心とは程ほど遠とおかった。

「チッチッチッ」ＳＩＸは舌を鳴らしながら身をよじって月明をかわした。「どうした、ヨハァァァン。平常心、平常シィィィン。Ｇｕ□Ｈｉｈｙａｈａ……！」「□□頼ライッ！」ヨハンは憑つかれたように月明を振るった。「拝ハイッ！　抵テイッ！　弥ヤァッ……！」「甘い甘い甘ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ……！」ＳＩＸはひらひらと舞まう落ち葉のごとくとらえがたい。あたらぬ。一向に。肩かたに、肘ひじに、膝ひざに力が入りそうになる。抜け。抜くのだ。声など出さなくていい。自身と月明と周囲の空気、床ゆか、すべてを一いつにせよ。

　次第次第に澄すんでくる。

　視界が。

　感覚が。

　透とう明めいになってゆく。

　ふたたび目の前に境界が現れた。

　超こえてゆけ。

　軽い。

　何もかもが。

　おれはこんなにも自由だ。

「それだＡＡＡＡＡＡＡ！　ヨハァァァァン……！」ＳＩＸが忌いまわしい妖よう眼がんを不ふ穏おんに輝かがやかせた。「行くぞォァ！　ＳＩＸ様Ｓのエスペ・シャリィＥ□なＸレ・イテッドＸアァァーツッッ……！」

　ヨハンはかまわずＳＩＸに肉にく薄はくしようとした。何の気負いもなかった。ＳＩＸが月明に斬きり裂さかれるのは必定だった。ヨハンの中にはそのイメージがはっきりとあった。ヨハン・サンライズの肉体と月明はその事実を構成する部分でしかなかった。ＳＩＸもまた同じだった。そのはずだったのだ。

　ＳＩＸは左手を前に突きだした。

　例の無数の紐が、身体からだ中にぶらさがっていた紐状の物体が、ヤマアラシの棘とげのごとく一いつ斉せいに逆立った。

「Ｓ．Ｉ．Ｘトオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォム……」

　回った。

　ＳＩＸが回転しだした。

　それだけではない。その総身からバチバチ火花が、否いな、細かい雷らい光こうが飛び散っている。

　ＳＩＸは稲いな妻ずまを撒まき散らす小旋せん風ぷうと化した。

「──〝雷電祭りサンダーフエスタ〟ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨッッッッッッ……！」

「破天一流天技──」

　ヨハンは臆おくしなかった。

　これがおれのすべてだ。

　全身全ぜん霊れいを捧ささげてＳＩＸを討うつ。

「〝残空〟……！」

　月明が描えがいた軌き跡せきは圧力変化の波となり、ＳＩＸ旋風

めがけて突き進んでいった。

斬れる。

残空で斬れぬものなどない。

圧力変化の波はＳＩＸ旋風に吸いこまれていった。

嘘うそだ。

巻きこまれて、消えた。

否。

現実だ。

ああ──、

全身から力が抜ぬけた。

否。

もう残っていないのだ。

ヨハンは崩くずれ落ちて床に片膝をついた。

駄だ目めだ。

まだあきらめるな。

何があろうと、やつに屈くつすることだけはあってはならない。

ヨハンは立ちあがった。

ＳＩＸ旋風が目の前に迫せまっていた。

月明が重い。重すぎる。

歯を食いしばった。打ちかかろうとした。意識が飛んだ。

意識だけではなかった。

飛ばされた。ＳＩＸ旋風に。すさまじい熱と衝しよう撃げきを感

じた。弾はじき飛ばされたのだ。

　身体のあちこちを打った。

　どこに？　どこが……？

　わからぬ。暗い。否。目を開けろ。見える。ぼんやりと。見下ろされている。ＳＩＸ。

　手首を踏ふまれた。右手首だ。踏みにじられた。

　月明の柄つかを握にぎっていられなくなり、離はなしてしまった。

「ヨハァァァンンンン……」ＳＩＸは舌なめずりをした。「ヨハァァァン・サァァーンライズUUUUUUUUUU。なかなか美味だったよ。お前の技わざＡＡＡＡＡＡＡＡ。超ちよう絶ぜつ技ＹＹＹＹＹＹＹＹＹ。残念ながらパゥワァーアップした我わが輩はいには通じなかったけどねえ。お笑い天然髭ひげ野や郎ろうよりだいぶ若いのに、よくぞここまで高めたものさ。褒ほめてつかわそう。それでも我輩にはちィーっとも効かなかったがねえ。ンフゥ~。所しよ詮せん、格が違ちがうってことだよ、ヨハァァァン。少ォーしだけ楽しませてはもらったがねえ。いやァァ……？　そいつはチト違うねえ。お楽しみはこれからさ。そうだろう、ヨハァァァン……？」

　何をする気だ。訊きけなかった。唇くちびるが、舌が思うように動かない。己おのれがまだ呼吸していることさえ不思議なほどだ。待ち受けている運命について想像を巡めぐらすこともできない。ひどく億おつ劫くうだ。自害。そんな言葉が頭をかすめた。そうだ。そうすべきなのだろう。可能ならば。

　ＳＩＸが屈かがみこんでヨハンの顎あごを左手の指でつまみ、顔を近づけてきた。「言っとくが、無む駄だだよ、ヨハァァァン。くだらねえことは考えないことさ。たとえば舌を嚙かみ切ったって、人間ってやつはそんな簡単にはくたばらない。我輩には医術士のワイフだっているしねえ。すぐに治させるから余計だよ。ヨハァァァン。お前は死ねないんだ。生きるんだよ。生きていてもらわなきゃあ困る。だってお前が生きてないと、我輩が楽しめないだろう……？」

　ヨハンは笑おうとした。

　できなかった。

　ほんの少し顔面が引きつっただけだった。

　おれは生きる。

　そうか。

　生かされるのか。

　ＳＩＸの親指がヨハンの口の中に侵しん入にゅうしてきて、舌をなぶった。「胸がァ。胸がＡＡＡＡＡ。胸が躍おどるよ、ヨハァァァン。どんなふうにお前をかわいがってやろうかねえ。お前はどんな声で泣き叫さけぶのかなＡＡＡＡ？　きっといい声で鳴くんだろうねえ。楽しみだよ、ヨハァァァン。Ｋｕ□Ｋｕｕｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……Ｈｙａａ□Ｈｙａａ□Ｈｙａａａ……！」



そうか。

そういうことか。

なれば、おれは生きよう。

　どれほどの痛みにも、いかなる辱はずかしめにも、決して屈くつ服ぷくせず、絶望することなく、おれは生きよう。

　それがおれの戦いだ。

　最後の戦いだ。

　琺瑠。

　君を一度、この腕うでで抱だけばよかった。

Omenage 899 5th revolution 28th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

chapter.14

蛆虫に告ぐ

第十三区から第五区を斜ななめに突つっ切って環かん状じよう通どおりに出たら、左回りで南東へ向かった。

もうすぐ第四区だ。

銀の砦とりでは環状通に面してそびえ立っている。

その頂に大半永久灯を備えている主しゆ塔とう「義の灯台」の威い容ようはここからでも見えて、今のところ、とくに変わった様子はないようだ。

外観は。

中で何か起こっていたとしても、まだちょっと距きよ離りがあるし、ここからではわかりっこない。何事もなければいいのだけれど、望み薄うすだろう。あのＳＩＸが絡からんでいるのだ。悪いことが起こらないはずがない。少なくとも、覚かく悟ごはしておくべきだ。何があっても驚おどろかないで、冷静に対処する。判断を間ま違ちがえない。そのためには、最悪のケースを想像して、心構えをしておく必要がある。

マリアローズたちＺＯＯの七人は、秩ちつ序じよの番人の後ろにつけている。絞首刑ハング執行人マン99での作戦に参加した番人の数は百五十人を超こえていたようだ。ここにくるまでの間に、警けい邏ら中だったらしい番人の一隊が加わった。あわせて二百人近くの鎧よろい兜かぶとに身を包んだ番人の集団が休むことなく駆かけていたら、道行く者たちは当然、何だ何だと騒さわぎだすに決まっている。何のつもりか知らないけれど、中には追いかけてくる者もいた。はっきり言って、邪じや魔まだ。でも、かまっていられない。

あと三百メーテルくらいだろう。

銀の砦はもうすぐそこだ。

「──伝令……！　伝令……！」

不意に前のほうからそんな叫び声が聞こえてきて、番人たちがほぼ一いつ斉せいに足を止めた。もちろん、マリアローズたちも立ちどまった。番人たちは騒そう然ぜんとなった。「──何だ？」「お

い、あの声……」「あれ、クルエルフォートじゃないのか」「無名隊の？」「なんだって」「どういうことだ……？」「まさか……」

　音に聞こえた銀の軍団の戦士たちも、不安を隠かくしきれないといった様子だ。

　マリアローズはトマトクンの外がい套とうをぎゅっとつかんで引っぱった。

「見える？」

　トマトクンは背せ伸のびをして低く唸うなった。「むう。前に行くか」

「よっしゃ」カタリが魚走りを始めた。

　トマトクンも大おお股またで歩きだした。番人たちの隊列を迂う回かいして最前列に出るつもりだろう。マリアローズとユリカ、サフィニアとピンパーネルも、まだうつろな目をしているルーシーを連れてカタリとトマトクンを追った。なんだか、不思議なくらい現実感がない。足が地に着いてない、みたいな感覚だ。目の前にわかりやすい形で危機が迫せまっているわけじゃなくて、自分に関係ないわけじゃないんだけど、その関係し具合が微び妙みようっていったら微妙っていうか。こういう中ちゆう途と半はん端ぱな気持ちでいるのが一番よくない。

　マリアローズは、ふうっ、と強く息を吐はきだした。

　番人たちの先頭は死神羅ラ叉サだった。その前に、一人の番人がひざまずいている。癖くせのある銀色の髪かみがけっこう長くて、番人らしくない。見覚えがある。以前、ヨハン・サンライズと一いつ緒しよに動物園事務所を訪おとずれた。名前は何だったか。そう。クルエルフォート。ハインツ・クルエルフォートだ。

　羅叉がトマトクンに顔を向けた。「屯とん所しよが攻せめられた」

　そっけないと言ってもいいような、抑よく揚ようのない声で、簡潔すぎる言葉だった。

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげた。「もう落ちたのか」

「いいえ」クルエルフォートが顔を上げた。「副長が残っておいでです」

「ヨハンだな」

「はい。左様です、トマト殿どの」

「琺瑠フオール副長は」羅叉の声は相変わらず平板だった。

「お退きになったものと思われます。ヨハン副長の命により、私は総長にご報告申しあげるために先発しましたので、しかとはわかりかねますが」

「さらに情報を集め、俺に逐ちく次じ報告せよ、クルエルフォート隊長」

「諒りよう解かいしました、総長」クルエルフォートは素す早ばやく立ちあがるなり、すぐそこの路地に駆けこんでいった。

　クルエルフォートと入れ替かわる恰かつ好こうで、別の番人がその路地から飛びだしてきた。いや、入れ替わったとは言えないか。

　一人や二人ではない。番人たちはあとからあとから出てきた。なかには仲間に肩かたを貸してもらっている者や、何人かに持ちあげられていたり、引きずられてきたりする者もいた。

　負傷しているのだ。

　見るからにかなり傷が深い番人もいる。瀕ひん死しの者さえいそうだ。

「治ち療りようしゅるわ」ユリカが一人の負傷者に駆けよっていった。

「一人では手が足らん」羅叉はそばに控ひかえていたシュナイデル副長に目をやった。

　見るからに実直そうなシュナイデルは即そく座ざにうなずいた。「六番、七番、八番突とつ撃げき隊！　負傷者をアサイラムへ運べ！　急げよ！」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」

「応！」「応……！」

　いったん指図を受けると、よく訓練されている番人たちの行動はきわめて迅じん速そくだ。ここまで統とう率そつがとれているクランは他ほかにないだろう。

「運ぶ前にわたしに診みしぇて！」ユリカの対処能力も並なみ大たい抵ていではない。「危ない人はわたしがここで応急処置しゅるわ！　はい！　あなたは大だい丈じよう夫ぶ！　あなたも！　しょっちの人！　ここへ！　しょれから、あなたも！　いい!?　見かけだけで判断しないで！　しょこまで血が出ていないように思えても、内ない臓じよう出しゆつ血けちゆしている場合があるわ！」

「死者は高層寺院へ連れてゆけ！」シュナイデルは次々と指示を飛ばしている。「隊長、隊長補は各隊を掌しよう握あくしつつ、私に被ひ害がい状じよう況きようを報告！　太臺子タイダイシー！　カラマー！　屯所から退たい却きやくしてくる者たちの逃とう走そう経路を把は握あくし、必要であれば同志たちの掩えん護ごを！」

「承知！」「ハッ……！」

「サフィニア！　カタリ！　ルーシー！」トマトクンが吼ほえた。「三人はここでユリカを手伝ってやれ！　マリア、ピンプは俺と一緒にこい！」

「……はい！」「おっしゃ！」「──あ、は、はいっ……！」

「了りよう解かい！」「はイ」

　マリアローズはピンパーネルと肩を並べて、先に走りだしたトマトクンの背中を追った。路地だ。トマトクンはクルエルフォートが駆かけ戻もどっていった路地に入ってゆく。すごい。むっとする。血の匂においだ。力つきて環かん状じよう通どおりまでたどりつくことができず、道みち端ばたに座りこんでいる者、倒たおれている者の姿も目につく。若い番人が多いようだ。たしか、秩ちつ序じよの番人には後備隊という隊があって、年長者や、訓練中の新参者が配属されている。一線級の番人たちよりも力が劣おとる彼らにとって、かなり厳しい戦いだった。そういうことだろう。

　マリアローズはちらりと振ふり返った。大きな足音を響ひびかせてついてくる番人たちは、シュナイデルに逃走経路の把握を命じら

れた隊の者たちか。トマトクンは速い。速すぎる。マリアローズが全力疾しつ走そうしても徐じよ々じよに距きよ離りが開いてゆく。歩ほ幅はばが違ちがいすぎるって。ピンパーネルはマリアローズにあわせてくれている。マリアローズはピンパーネルに目で合図した。僕はいいから。ピンパーネルは顎あごを引くようにうなずいた。一気に加速して、間もなくトマトクンに追いついた。僕も、だけど、あんまり離はなされないようにしないと。僕についてこいって、トマトは言った。平静じゃないことを自覚してる。だから、抑おさえ役がそばにいたほうがいいという判断だろう。僕はあてにされてる。期待に応こたえないと。そんなふうに意気込んでるわけじゃない。期待には当然、応える。僕には足りないところばかりで、正直、いやになるけど、それでも仲間を支えてあげられないわけじゃない。僕みたいな半はん端ぱ者にもできることはある。どんなときだって、何もできないってことはない。ただ誰だれかが近くにいてくれるだけで、心強い。そういうことだってある。

僕はそうなんだけど、トマトはどうなんだろう。

やっぱり、あるのかな。

心細い、とか。誰かにそばにいてほしい、とか。

想像がつかない。

ずっと昔、一人きりだったころのトマトは、どんなふうに、何を考えて、何のために歩いてたんだろう。

Diealot Maxpain

大量のデイ死の上にオロ立つ者ツト・大マいクなスるぺ痛イみン。

重苦しくて、悲しくて、痛ましいその名を、きみはきっと、たった一人で背負っていた。

知りたいよ。でも、知らなくてもいい。

僕らがいるから、きみはもう一人じゃないし、仮にいつかまた、誰かがきみをその名で呼ぶときがきても、僕らはちゃんとわかってるから。

何があっても、僕らにとって、きみはトマトクンで、ＺＯＯの園

長マスターだから。

　たとえ日がな一日、寝ねてばっかりでも、ね。

　だけど、気のせいかな。

　眠ねむっている時間が、前よりも長い。

　だんだん長くなってきている。

　調子が悪そうな日もたまにある。

　気のせいだとは思うけど。

「む……!?」トマトクンが足を止めた。

　ピンパーネルも立ちどまった。

　マリアローズは二人に追いついたところで止まった。

　路地は暗い。よく見えないけれど、前方にいる番人の立ち姿には覚えがあった。女だ。すらりと背が高くて、髪かみが長い。黒髪か。

　マリアローズたちはゆっくりと女に近づいていった。

　やっぱりだ。知っている。

　女は振り返って、別の番人に声をかけた。

「ドーソン・サッティアー！　三番隊ね!?　あなたがたで最後……!?」

「ハッ！」サッティアーというのが名前なのだろう、返事をした大おお柄がらな番人に担かつがれている番人は意識がないのか、それとも死んでいるのか、ぴくりともしない。「屯とん所しよをあとにしたのは、我々が最後です！」

「三番隊の指揮は!?」

「自分が！」サッティアーは顔を横に向けて、担いでいる番人を示してみせた。「アシャー隊長補はこのとおり傷が深く、気を失われておりますので！」

「じゃあ、ヨハンは……！」

「副長は──」

「なぜ残してきたの⁉」

「それは……副長のご命令で」

「なんてこと……」女はよろめきそうになって、なんとかこらえたようだ。「自分、一人だけで……ヨハン、何を考えて──」

「琺瑠副長！」サッティアーのそばにいた別の番人が、女を、秩序の番人副長琺瑠の腕うでをつかんだ。

　そうしなければ、琺瑠は走りだしていただろう。

　その番人は、マリアローズほど鮮あざやかな色ではないものの、赤い髪をしていた。

「放しなさい、〝赤毛のレツドヘアード〟・エルランディーノ……！」琺瑠は身をよじった。「──お願いだから、放して！」

「そんなこと言ったって、琺瑠副長、あなた、俺の手を振りほどくこともできないような有様じゃないですか！」

「わたしは……」琺瑠は今にも崩くずれ落ちてしまいそうだった。「そんな……ヨハン……」

「大だい丈じよう夫ぶですって」エルランディーノはわざとらしく笑ってみせた。「ああ見えて俺らの大将はしぶとい御お方かたです。皆みなのために我が身を犠ぎ牲せいにするなんて、大将の柄がらじゃありませんし」

　琺瑠は力なく首を左右に振った。「……違うわ。ヨハンはそういう人よ。あの人の下についていて、そんなこともわからないの……？　いつだって、自分のことは二の次、三の次で……三番隊は、誰も残らなかったというの……？　一人も……？　ヨハンは一人で……？　たった一人だけで……？　そんなのって……」

「も、申し訳ありません……」エルランディーノは琺瑠の腕から手を離はなして、肩かたを落とした。

　三番隊。若い番号だ。マリアローズの記き憶おくでは、一番が総長直属隊で、二番が親衛隊、三番、四番、五番が副長直属隊のはずだ。話を聞いているかぎりでは、三番はヨハン・サンライズの直属隊らしい。三番隊はしんがりを務めたのだろう。最後にはヨハンが一人だけ居残って、部下を逃にがした。そういうことなのか。

　彼らを責めるのは、でも、ちょっと酷こくかもしれない。

　三番隊とおぼしき番人は、サッティアーと、彼に担がれている番人、それにエルランディーノ、あとはもう一人、細身で若そうな番人の、あわせて四人しかいない。秩ちつ序じよの番人は一隊十五人から十八人編制が普ふ通つうのはずだ。彼らは三分の二以上の戦力を失ったことになる。三番隊はほぼ壊かい滅めつしたのだ。

　琺瑠はおぼつかない足どりで道に面した建物に歩みよっていって、外がい壁へきに背をもたれさせた。立っているのがつらいのか。近づいてゆくごとにはっきりしてきた。やはり琺瑠も負傷している。それも、決して浅い傷ではない。琺瑠が歩いたあとに血の足跡が残っているくらいだ。ひどい。とんでもない量の出血だ。放ほうっておいたら失血死してしまうかもしれない。

　マリアローズは琺瑠に駆かけよった。「──琺瑠……さん？」

「……あなたは……」琺瑠は目を見開いた。

　いわゆる東部美女を絵に描かいたようなその端たん整せいな顔が、一いつ瞬しゆんでくしゃくしゃになった。

　とても見ていられない。琺瑠だって、まじまじと見られたくはないだろう。

　マリアローズはうつむいた。「大丈夫ですか──って、大丈夫なわけないですよね」

「……そうね……いいえ。そんなことはないわ。平気よ、これくらい」

「あっちにユリカがいるんで、手当てしてもらわないと」

「本当に、大丈夫だから」

「や、そうは見えないし」

「わたしは……だって──」琺瑠が息を吸いこむ音はひどく震ふるえていた。「……まだ、わたしには、やることが……」

「ないぞ」

　斜ななめ後ろからぬっと腕がのびてきた。

　トマトクンは軽々と琺瑠を抱かかえあげてしまった。「こんな状態のやつに、やるべきことなんてない。今のお前には何もできん。まずＺＯＯうちのユリカに治ち療りようしてもらうことだ」

「──あ……ちょっ……と」琺瑠は暴れようにも身体からだに力が入らないといった様子だ。「お、下ろして……」

「ダメだ」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげた。「怪け我が人は全員治して、態勢を立てなおさんとな。話はそれからだ」

「話……って」

「奪うばわれたら、取り返せばいい」トマトクンはかすかな笑みを浮うかべてみせた。「俺たちが手を貸してやる。デニスとの義理もあるしな」

　琺瑠はトマトクンの顔を見上げて、ぽかんとしている。秩序の番人の美しくも勇ましい副長は、女性にしてはだいぶ背が高いほうだけれど、百九十サンチあるトマトクンに抱だかれていると、そんなふうには見えない。

　わりと絵になる二人だ。

　なんて言ったら、サフィニアがめちゃくちゃ怒りそうだけど。

　てゆうか、もしかして、トマト、そのまま琺瑠さんを連れてくつもり？　それはちょっと、やばいんじゃない？　サフィニアが見たら、怒るどころじゃなくて、発はつ狂きようしちゃうかもしれないよ……？　まあ、重傷者だし、そんなこと言ってる場合じゃないんだけどね。

　本当に、くだらないことを考えている場合ではない。

　マリアローズはピンパーネルとうなずきあった。

　ようするに、くるべきときがきた、ということだろう。

　泉センリ決戦で、トマトクンはＳＩＸの身体をバラバラにして、サフィニアに焼き払はらわせようとした。一歩遅おそかった。ジェイがＳＩＸの左ひだり腕うでをかっさらっていった。僕らはしくじったんだ。

　あのときから、いつかこうなることは決まっていた。

　今度こそきっちり決着をつけないといけない。

　ルーシーの顔がマリアローズの脳のう裏りをよぎった。

　ため息が出た。

　ピンパーネルがそっと肩を叩たたいてくれた。

　そうだね。

　そうだ。

　解決しないといけない問題はいろいろありそうだけれど、僕は一人じゃないし、きっとなんとかなる。

　絶対、どうにかしないといけない。

「あの腐くされ外げ道どうめ」

　トマトクンはなぜかまだ笑え顔がおだ。

　黄玉トパーズの瞳ひとみが爛らん々らんと輝かがやいている。

　笑い顔なのに、楽しそうにはまったく見えなかった。

「何度始末しても蛆うじ虫むしみたいに湧わいてくる。いいさ。殺しても死なんのなら、生き地じ獄ごくを味わわせてやるまでだ」

epilogue

目を閉じろ、耳をふさげ、心を閉とざせ、と自分自身に命じた。何も感じない。何も。闇やみの中にいる。暗い、真っ暗な、泥でい濘ねいのような闇の中に。それか、ここは石いし壁かべの中だ。自分はとうに死んで、壁の中に塗ぬりこめられた。つめたい石壁の中にいる。指一本動かせない。それはそうだ。死んでいるのだから。この身は死体だ。何も感じない。この痛みは気のせいだ。

おかしい。

気のせいなんて。

死んでいるはずなのに。

やめろ。

やめて。

お願いだから、やめて。

「祈いのれ」

祈るから、やめて。

「祈るんだよ」

祈るから。

「もっと祈るんだ」

いくらでも祈るから。

「許さないよ」

そんな。

「許すわけがないじゃないか」

やめて。

「何だ。泣いているじゃないか」

　泣いてなんか、ない。

「きれいな涙なみだだねえ」

　泣いてなんか。

「叫さけんだっていいんだよ？」

　叫ぶものか。

「やめてくださいと懇こん願がんしてみたらどうだい？」

　冗じよう談だんじゃない。

「愛を感じるよ」

　汚けがらわしい。

「愛を」

　死ね。

「誰だれが何と言おうとねえ。これは愛なんだよ」

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

　死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

死ね。

「美しい瞳ひとみだよ」

そうしてやつは眼球をねぶった。

やめろ。

やめて。

どうか。

やめて。

やめてください。

これ以上、奪うばわないで。

「いいや。奪うよ。それが本物の愛だからさ」

わたしは死体だ。

すでに死んでいる。

何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。

この痛みはどこからくるのか。

引き裂さかれる。

助けて。

誰か。

もう、いや。

こんなの、耐たえられない。

「──っ……！」

飛び起きて、愛刀を探した。鞘さやを払はらおうとして、思いとどまった。違ちがう。違う。違う。あれは夢だ。これは現実だ。愛刀を抱だいて、自分に言い聞かせた。ここは部屋だ。アサイラムの、自分の部屋だ。大だい丈じよう夫ぶだ。大丈夫。何も悪いことは起こっていない。うなずいて、うなずいて、うなずきながら、口を大きく開けて、息をゆっくり吸って、吐はいて、吸いこんで、吐きだした。だんだん呼吸が落ちついてきた。口を閉じると、歯が鳴った。まだ震ふるえている。汗あせが。ひどい汗だ。大丈夫。大丈夫。何度も、何度も唱えた。大丈夫。大丈夫。大丈夫。久しぶりだ。あの夢。悪夢。久々に見た。だから、驚おどろいた。それだけだ。大丈夫。大丈夫。大丈夫。もう整理がついている。乗り越こえたはずだ。平気だ。泣くな。泣いちゃだめだ。泣いたってどうにもならない。力を抜ぬく。全身だ。脱だつ力りよくする。それから、一気に力を入れる。ぐっと。思いきり。また抜く。力を入れる。大丈夫。大丈夫。大丈夫。この身体からだは自分の思いどおりに動く。自分のものだ。あれは夢だ。夢だけれど、実際にあったことだ。それがどうした。過去だ。終わったことだ。失ったものはとりもどせない。違う。そうじゃない。いや、違わない。失った。奪われた。それは事実だ。でも、進むことはできる。そうだ。それが大事なことだ。

壁かべ掛かけ時計を見ると、二時だった。ベアトリーチェは愛刀を置いて寝しん台だいから下り、夜着を脱ぬいで動きやすい服を身につけた。どうせすぐには寝ねつけない。黙だまっていると、余計なことを考えてしまいそうだ。こんなときは、いっそ身体を動かしたほうがいい。ベアトリーチェはふたたび愛刀を手にとった。

部屋をあとにして、中庭に出た。

夜空は晴れているが、第六区には二十四時間稼か働どうしている王立塵じん芥かい処理施し設せつを中心としたラビッシュバレーがあって、空気がきれいだとは言いがたい。アサイラムが主導して、街路に植樹したり、緑地帯を作るなどの活動を進めているものの、屑くず街がいとも呼ばれるこの地区は、貧しい人々が追いやられ、身を寄せあって暮らしている汚れた街だ。

そんな場所だからこそ、アサイラムの存在意義がある。

今はまだ、目を凝こらさなければ瞬またたく星もよく見えないが、立ちこめる煙えん霧むを振ふり払うことなどできはしないと、最初からあきらめるべきではない。まず前に踏ふみだす勇気を持つことだ。無む謀ぼうな愚おろか者よと嗤わらう人々のことは捨て置けばいい。この道は彼らのためのものではない。彼らには彼らの道があるだろう。ただまっすぐ自分の道を歩いてゆけばいいのだ。

ベアトリーチェは愛刀を芝しば生ふの上に置いて、柔じゅう軟なん体操を始めた。

医術式の手ほどきを受けてから、身体の各部を詳しよう細さいに、全体を大まかに把は握あくして、バランスよく使いこなすことができるようになってきた。内視系医術式の応用で、意識を集中させれば、全身が透すきとおるような感覚をえることもできるが、そこまでしなくても、この肉体は自分のものだという、しっかりした実感が常にある。おかげで余分なことをしなくなった。柔軟体操一つとっても、どうすれば効果的に行うことができるか、自分自身の身体に尋たずねれば、即そく座ざに答えが返ってくる。以前ほど訓練に時間を割さくことができないので、一時は筋力の低下を心配したが、闇やみ雲くもに鍛きたえた筋肉のすべてが役に立つわけではないことを知った。

秩ちつ序じよの番人にいたころよりは筋肉量が減って、脂し肪ぼうが増えたが、当時より速く動ける自信がベアトリーチェにはあるし、剣けんも上達したと思う。実戦経験を積むことができないので、勘かんはだいぶ鈍にぶっているだろうから、いざというとき、注意すべき点はそこだ。それでも、迷わず、揺ゆらがず、自分を強く持つことさえできれば、ある程度までは対応できるだろう。その先に進むための道筋も、すでに見えている。

ベアトリーチェは芝生の上に正座して瞑めい目もくし、腹式呼吸をした。

まだ習いかじっただけの医術式をこんなふうに使うことに対して、母様はどう思われるだろうか。

いや。わたしが決めたことだ。母様はきっと認めてくださる。

少し練習しよう。

　ベアトリーチェは愛刀を持って、ゆっくりと立ちあがった。

　鞘に収めたまま青眼に構えた。

　ああ──、

　視みえる。

　ここだ。それから、ここ。あとは、ここか。

　この方法を思いついて、初めて試ためしたとき、ずっと探し求めていたものをついに見つけたような、そんな歓かん喜きと感激に全身が震えた。

　さあ、やろう。探し物はそこにある。



　ベアトリーチェはつたない医術式の業わざでその部分を刺し激げきしようとした。

　乱れた。

　物音だ。声も聞こえる。

　ベアトリーチェはただちに駆かけだした。たぶん、正門のほうだ。

　すぐに息が上がった。

　心臓が暴れている。

　胸が痛いほどだ。

　なぜかあの悪夢が脳のう裏りをよぎって、足がすくみそうになった。

　頭かぶりを振って、走った。

　怯ひるむことがあっても、消えない傷があっても、わたしは退ひかない。絶対に立ち向かう。母様が、大切な友だちが、どんなにつらい目に遭あっても、やがて笑え顔がおをとりもどすアサイラムの子供たちが、いつだってわたしに勇気をくれる。わたしは負けない。たとえこの先に何が待ち受けていようとも、わたしはわたしに負けたりしない。

『薔薇のマリア　12．夜に乱雲花々乱れ』了

あとがき

僕ぼくにとっては奇き跡せきのようなお話です。

何のことかといいますと、この『薔ば薇らのマリア』です。

もちろん、このお話を書きはじめたときから、長い物語になるだろうと思っていましたし、大まかな流れは決めていましたが、正直、どれくらいつづけることができるのか、さっぱりわかりませんでした。最後まで書き切りたいという気持ちはありましたが、自信があったわけでもありません。また、五年近くやってきて、その間に状じよう況きようも変わってきました。これで十八冊目の『薔薇のマリア』ということになりますけれど、いろいろな面を考えあわせて冷静に見ると、よくぞここまで保もった、という感想を抱いだかざるをえません。

今以もつて『薔薇のマリア』を書かせていただいている、ということに、僕はとても感謝しています。

これもひとえに、本書を手にとってくださっている皆みなさんのおかげです。

本当に、皆さんに支えられることで、ふらつきながらも、なんとか歩くことができているシリーズだと思います。

仕事として小説を書かせていただくようになって、最初は『薔薇のマリア』だけでしたが、最近では他のお話を皆さんにお届けできる機会にも恵めぐまれています。宣伝になってしまいますが、九月の間にも、本書『薔薇のマリア12』から始まって、一いち迅じん社しや文庫『ヴァンパイアノイズム』、ＭＦ文庫Ｊ『いつも心に剣を③』、そして、「ザ・スニーカー」にて連れん載さい中で、ありがたいことに好評をいただいております『ばけてろ』というお話の第一巻が、満まんを持じして（？）、十月一日にいよいよ発売される予定です。

それもこれも、ここまでどうにかこうにか『薔薇のマリア』を書きつづけることができたからなのだと思います。

先行きが約束されているわけではありませんし、いつもぎりぎりで、巻を重ねるごとに情報量は増大する一方ですし、一行一行の重みがどんどん増してゆくのですが、その大変さが僕にとっては大きな宝物です。

できることなら、最後の最後までこの大変さを味わいつくしたいと思っています。

可能か不可能か。

この際、それは考えないことにしました。

ただ書くだけです。

結局、僕にできるのは、書いて、書いて、書きまくる。それだけなのですから、つべこべ言わずにひたすら書くしかないのです。

そのことに気づかせてくれたのもまた、『薔薇のマリア』でした。

これからも後あと先さきを考えずに突つっ走ってゆくことになると思いますが、この粗そ忽こつ者ものが力つきるまでおつきあいいただければ幸いです。

その産物ともいうべき十三巻は、二〇一〇年のなるべく早い時期にお届けできるように、構想を練っている最中です。次はけっこう大変なことになるはずなので、じっくり取り組ませていただくつもりです。そうでなくても、『薔薇のマリア』は他の小説と比べて倍ばいくらい時間がかかるのですが、できあがったときの達成感と、そのあと襲おそってくる虚きょ脱だつ感も格かく別べつなのです。

それでは、紙数が尽つきましたので、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へ、限界突とつ破ぱの感謝と愛をこめつつ、筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

追つい伸しん　『純じゆん潔けつブルースプリング』という本が角川書店から発売されていると思います。角川学園小説大賞で特別賞をいただいた作品に手を加えたものです。大きな本で、ちょっと値段が高いかもしれませんが、とにかくおもしろいお話を書きたい、という気持ちで書きあげた思い入れのある作品です。よろしければ、手にとってみてください。（２０１３年10月現在、『純潔ブルースプリング』は電子書籍化はされておりません）

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

12．夜よるに乱らん雲うん花はな々ばな乱みだれ

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア 12．夜に乱雲花々乱れ』平成21年9月1日初版発行

平成21年11月20日再版発行